

# 東北学院大学 教養学部論集

第 172 号

2015 年 12 月

## 【論 文】

- 参加型 HRM システムが企業業績に及ぼす影響 …………… 小 林 裕 …… 1
- ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 1) …………… 吉 用 宣 二 …… 25
- 生成文法？ 認知文法？ それとも…？ …………… 高 橋 直 彦 …… 75

## 【研究ノート】

どうすれば英語が身につくのか

——英語を学習する高校生向けの話—— …………… 渡 部 友 子 …… 95

熱作用によるナイロンロープの切断機構について …………… 高 橋 光 一 …… 109

## 【翻 訳】

ロバート・マートン著 ラザースフェルドと一緒に仕事をして

…………… 久 慈 利 武 訳 …… 131

東北学院大学学術研究会

目次

〔論文〕

- 参加型 HRM システムが企業業績に及ぼす影響…………… 小林 裕…………… 1
- ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 1) …… 吉用 宣二…………… 25
- 生成文法？ 認知文法？ それとも…？ …… 高橋 直彦…………… 75

〔研究ノート〕

- どうすれば英語が身につくのか  
——英語を学習する高校生向けの話—— …… 渡部 友子…………… 95
- 熱作用によるナイロンロープの切断機構について…………… 高橋 光一…………… 109

〔翻訳〕

- ロバート・マートン著 ラザースフェルドと一緒に仕事をして  
…………… 久慈 利武 訳…………… 131

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページからも読むことができます。  
<<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/committee.html>>にて公開中です。  
東北学院大学 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>> から、  
研究・産学連携→学術誌→学術研究会（紀要、論集）へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

- |     |     |              |
|-----|-----|--------------|
| 小 林 | 裕   | （本学教養学部 教授）  |
| 吉 用 | 宣 二 | （本学教養学部 教授）  |
| 高 橋 | 直 彦 | （本学教養学部 准教授） |
| 渡 部 | 友 子 | （本学教養学部 准教授） |
| 高 橋 | 光 一 | （本学 名誉教授）    |
| 久 慈 | 利 武 | （本学 名誉教授）    |

## 【論 文】

# 参加型 HRM システムが企業業績に及ぼす影響<sup>1,2</sup>

小 林 裕

### 1. はじめに

東日本大震災から4年半、日本経済は全体として回復基調に見えるものの、東北地方では原発事故の処理など多くの課題が山積し、本格的な復興はこれからという状況である。このような厳しい逆境のなか、企業が業績を維持・回復させ、自らを存続させるには何が必要か、企業において被害・ストレス体験から自分自身で治癒し回復する力（レジリエンス）とは何か、が問われている。

企業の存続や業績に影響する1つの要因が、人的資源管理（Human Resources Management：HRM）である。HRM論とりわけ戦略的HRM論（Strategic Human Resources Management：SHRM）では、企業戦略とHRM施策との適合（垂直的適合）およびHRM施策同士の適合（水平的適合）が企業業績を高めるという基本的な立場を共有している（Allen & Wright, 2007）。つまり、従業員の技能と行動が企業の戦略的必要性と適合すると労働力が競争優位の源泉となり、また個々のHRM施策が相互に補完し合う形で組み立てられると各HRM施策の効果が相乗的に強化され、各施策の発するメッセージの間の競合や混乱が回避できる、という考え方である。

垂直的・水平的という2つの適合をどのくらい重視するかによって、コンティンジェンシーアプローチ、形態的アプローチ、普遍的アプローチなど様々なモデルが設定されているが、どちらの適合もさほど重視しないのが普遍的アプローチである（Delery and Doty, 1996）。これは、企業業績を高める最善の施策群が存在し、それらは企業がどのような戦略をとったとしても効果を発揮し、また施策が個別に採用されてもそれなりの効果をもたらすというもので、「高業績労働施策（high-performance work systems：HPWS）」、「ベスト・プラクティス」アプローチとも呼ばれる。

HPWSないし「ベスト・プラクティス」として様々な施策が提案されているが、それら

<sup>1</sup> 調査にご協力いただきました企業の人事担当者の皆様に厚く御礼申し上げます。

<sup>2</sup> 本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C：研究課題番号26380520）による助成を受けた。また、本研究は、東北学院大学大学院人間情報学研究科研究倫理審査委員会の承認を得た上で実施され、その一部は、経営行動科学学会第18回年次大会（愛知大学）にて発表された。

の施策に共通するのは広い意味で従業員の参加を促す働きを持つという点である。例えば、Pfeffer (1998) は、雇用保障、厳格な採用選考、自己管理チームと権限委譲、高い成功報酬、幅広い社員教育、待遇の平等化、業績情報の共有という 7 つの人材重視の施策が、従業員の参加を通じて企業業績を高めるという。また、加藤 (2004) は、HPWS を従業員参加型の HRM 施策群と定義し、従業員代表制度 (労使協議制度、職場懇談会など)、直接参加制度 (自主管理チーム、QC サークルなど)、従業員の資本参加制度 (利潤分配制度、従業員持株制度、集団能率給、ストックオプションなど)、の 3 種の参加制度から構成されると述べている。

「ハイ・インボルブメント (high-involvement)」モデル (Lawler, 1986 など) も従業員参加型の HRM 施策群が企業業績を高めると主張している。階層化された権限によって従業員を服従させ良質な労働力を得ようとするコントロールアプローチとは対照的に、「ハイ・インボルブメント」モデルは、企業組織内の下位のメンバーまで幅広く資源 (報酬、知識、権限、情報) を提供することによって従業員の参加意識を高め、自発的な労働意欲の強い良質な労働力を得ようとする。報酬に関する施策としては、企業全体または下位集団の業績とリンクさせた給与、技能の獲得に応じて支払われる手当など、知識に関する施策としては、技能や能力を習得させるための教育訓練制度、権限に関する施策としては、申告制度、自主管理労働チーム、従業員委員会など、情報に関する施策としては、業績や技術に関する情報の提供などが考えられる。

「ハイ・インボルブメント」モデルに関する実証的研究も蓄積されており、このモデルに基づく施策群が企業業績を高めるという結果が示されている (Lawler et al., 1998, 2001; Bae and Lawler, 2000; Vandenberg et al., 1999; 小林, 2001; 櫻井・余合, 2011)。例えば、Vandenberg ら (1999) は、北米にある生命保険会社 49 社 3,570 人の従業員を対象に調査を行い、得られたデータに基づいて因果分析を行った結果、「ハイ・インボルブメント」な施策群が従業員の動機づけ、組織コミットメント、満足感などの向上を通して企業業績に影響をもたらすとともに、従業員の態度を媒介せず直接的に企業業績に影響することも明らかにしている。

しかし、「ハイ・インボルブメント」モデルにはいくつかの未解決の問題がある。その一つが、モデルの文化・社会的な普遍性である。つまり、このモデルの有効性は、企業の置かれた社会的・文化的環境にどの程度依存するか、という問題である。Lawler (1992) は、その有効性が民主主義と人権尊重の価値を持った社会であれば欧米社会に限定されないとする一方で、欧米社会で最善のアプローチと日本社会に適合的な経営スタイルとは異なるとも述べている。

日本企業では参加的ないし合意志向の意思決定がなされ (Clark, 1979; Ouchi, 1981; 加護野他, 1983; 石田, 1985; Lincoln & Kalleberg, 1990 など)、戦後の日本企業に導入され発展

した参加型雇用制度が現代の HPWS のモデルになっている（加藤，2004，2012）という見方からすれば、「ハイ・インボルブメント」モデルは日本社会や日本企業に適合的であるとも考えられる。他方，日本型雇用は真の参加制度とは異なるという見方（Heller, 1998；Cole, 1982）や日本の労働者の事実上の参加度は低いという国際比較データ（IDE, 1993）も報告されている。実際に日本企業を対象とした調査でも「ハイ・インボルブメント」モデルの有効性を支持する結果（櫻井・余合，2011）がある一方，部分的な支持に止まっている結果も報告されている（小林，2001）。以上の点からすると，「ハイ・インボルブメント」モデルの文化・社会的な普遍性ととりわけ日本企業との適合性についてはさらに検討の余地がある。

「ハイ・インボルブメント」モデルをめぐるもうひとつの問題は，その有効性の実証方法に関わっている。つまり，多くの研究が，「ハイ・インボルブメント」な HRM 施策と企業業績の正の相関関係を見出しているものの，因果関係が明確になるような調査デザインが採用されていない，ということである。上記の Vandenberg ら（1999）の研究では「ハイ・インボルブメント」な施策と企業業績の因果関係モデルが検証されているが，データそのものは 1 時点の調査で収集されている。HRM 施策と企業業績の間の因果関係の問題は，「ハイ・インボルブメント」モデルだけでなく，HRM 施策と企業業績の関係を検討した SHRM 論に基づく実証研究に共通しており，その分野での実証研究のレビューによれば，ほとんどの研究において因果順序の検証が行われていないという（Wright et al., 2005）。

HRM 施策と企業業績の相関関係が生じる可能性としては，企業業績が施策に影響するという「逆の因果関係」仮説，相関関係が調査回答者の認知的バイアスや原因帰属パターンから生じるという「暗黙の理論」仮説，第三の変数が疑似相関を生じさせているという「表面的」関係仮説なども考えられる（Wright & Gardner, 2003；Wright, et al., 2005；小林，2014）。従って，これらの可能性を検証するためには，少なくとも複数の時点，複数の調査対象者・情報源からのデータ収集が必要である。

そこで，本研究では，「ハイ・インボルブメント」施策の日本企業での有効性を検証するため，2014 年から 15 年にかけて東北地方の企業に対して質問紙調査を実施した。そこでは，まず東日本大震災の被害とそこから復興状況を確認した上で，「ハイ・インボルブメント」施策の導入状況と企業業績について人事担当者から回答を求め，得られたデータに基づいて「ハイ・インボルブメント」施策と企業業績の関係を分析した。さらに，「ハイ・インボルブメント」施策と企業業績の因果関係をより明確に検証するため，2000 年に実施した調査のデータを用いて，同一企業の HRM 施策と企業業績の 2 時点での関係を検討する，いわゆる交差遅れ分析を行った。

## 2. 調査の方法

### 1) 調査 1 (T1)

(1) 対象企業と手続き：対象は、1999年版の『東商信用録 東北版』に掲載された東北地方（宮城、山形、岩手の3県）に事業所を持つ正社員100人以上の企業964社であった。各企業の人事担当者宛に質問紙を2000年2月に郵送し、3月末までに回収されたもののうち、210通を有効とした（有効回収率21.8%）。有効回答企業の業種は、製造業33.3%、卸小売業26.2%、サービス業14.3%などであった。有効回答企業のプロフィール（平均値）は、資本金366百万円、2000年2月現在の正規従業員数233.7人、年間の離職者数（定年を除く；1998年）14.8人、労働組合に加入している従業員の割合25.3%であった。企業の財務指標は、2000年版の『東商信用録 東北版』に記載された1年間の売上高、税引後利益（原則として2000年3月の決算）を用いた。有効回答企業の売上高の平均は22,111百万円、利益の平均は189百万円であった。

(2) 質問紙：会社の概要（業種、設立年、資本金、売上高と経常利益の過去5年間の伸び、企業環境、現在と5年前の正規従業員数、女子比率、平均年令、労組加入者比率、定年退職を除く離職者の数）、HRMポリシー（8項目）、報酬施策（11項目）、教育訓練施策（6項目）、権限委譲施策（7項目）、情報共有施策（5項目）についてたずねた。HRMポリシーについては、日本的なHRMシステムが「長期的雇用と内部化された技能の形成」と「技能形成に基づく評価」という2つの原理に基づくという前提に立って、それらを代表すると考えられる項目（Morishima, 1996に準拠）を選んだ。報酬施策、教育訓練施策、権限委譲施策、情報共有施策は、「ハイ・インボルブメント」モデル（Lawler et al., 1995）に基づき、各々報酬、知識、権限、情報の4つの領域に対応する参加的施策をとりあげた。なお、HRMポリシーについては、項目ごとに該当する程度を7段階で、報酬施策以下の4領域の施策の導入状況については、各施策の適用対象となる従業員の割合（%）を7段階で回答してもらった。

### 2) 調査 2 (T2)

(1) 対象企業と手続き：対象は、(株)東京商工リサーチの企業データベース（2014年11月現在）に収録された東北地方（宮城、山形、岩手の3県）の従業員数上位912企業で、このうち調査1の回答企業は154社（倒産等で調査困難な企業を除く）であった。各企業の人事担当者宛にアンケートを2014年11月および2015年1月に郵送し、2015年2月末までに回収されたもののうち、243通を有効とした（有効回収率26.6%）。このうち調査1の回答企業は50社であった。有効回答企業の業種は、卸小売業24.3%、製造業20.5%、サービス

業および建設業がそれぞれ 13.0% などであった。有効回答企業のプロフィール（平均値）は、資本金 360 百万円、2014 年 11 月現在の正規従業員数 246.6 人、離職者数（定年を除く；2013 年度）10.4 人、労働組合のある企業は 35.7% であった。企業の財務指標は、質問紙への回答に基づき、2013 年度の売上高、税引後利益を用いた。有効回答企業の売上高の平均は 11,661 百万円、利益の平均は 216 百万円であった。

(2) 質問紙：会社の概要（業種、2010 年度と 2013 年度の売上高と純利益、2014 年 11 月現在の正規および非正規従業員数、2013 年度の定年退職を除く離職者数、労働組合の有無）、震災被害の有無、被害の種類、震災前後の事業活動・従業員数・HRM 施策の変化、HRM の今後の課題、日本的 HRM ポリシー、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策についてたずねた（詳細は別紙資料参照）。このうち日本的 HRM ポリシー、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策についての項目は、調査 1 と同じであったが、一部表現を変え、項目の追加を行った。なお、調査 1、2 を通じて、質問紙のなかでは、HRM 施策を人事制度という表現に換えている。

### 3) データの分析方法

まず、調査 2 のうち、震災前後の事業活動・従業員数・HRM 施策の変化に関する質問は、回答企業全体 243 社について各選択肢への回答比率を算出した。次に、調査 1、2 の対象企業のうち、正規従業員 100 人以上の企業それぞれ 172 社、188 社について、質問紙の HRM ポリシーの 8 項目、4 つの HRM 施策領域の合計 29 項目への回答頻度 (%) および 7 段階の回答を 1～7 に点数化した値（得点）を比較した。また、調査 2 の回答企業のうち正規従業員 100 人以上の企業について、4 つの HRM 施策領域毎に行った因子分析で得られたそれぞれの第 1 因子の得点に基づいてクラスタ分析を行い、クラスタ間の因子得点および業績指標を比較した。業績指標としては、従業員 1 人当りの売上高（以下、売上高/人）、売上高利益率（税引き後利益÷売上高）、離職率（離職者数÷従業員数）を用いた。さらに、HRM 施策全体の参加度を示す合成変数を作成し、2 回の調査に回答した企業 50 社のうち従業員 100 人以上の企業 32 社のデータに基づいて、調査 1、2 の HRM 参加度と業績指標との相関係数を算出した。

## 3. 結果と考察

### 1) 震災からの復興状況と HRM 施策の変化

調査 2 の回答企業全体 243 社のうち、東日本大震災で被害を受けたと回答した企業の割合



は、85%であった(図1)。被害の種類(複数回答可)では、「機械・設備破壊」や「建物の全壊・半壊」が多く、「風評被害」が最も少なかった(図2)。震災前後の事業活動の変化については、「減少後回復」や「増加傾向」が多かった(図3)。正規従業員数は「やや増えた」

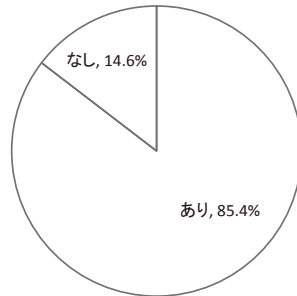


図1. 震災被害の有無

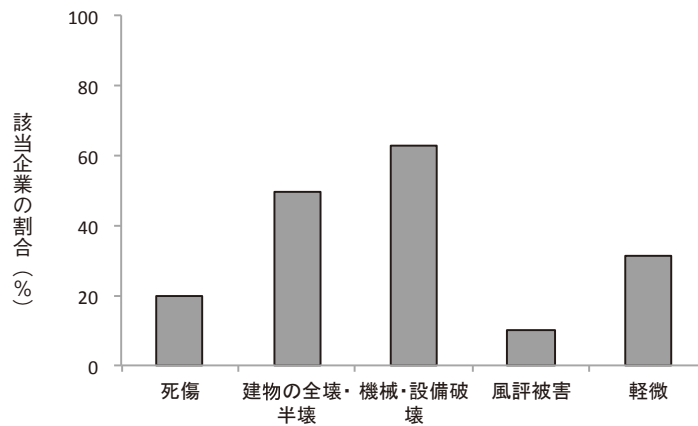


図2. 被害の種類(複数選択)

注) 被害のあった企業 (n=193) を100とする割合

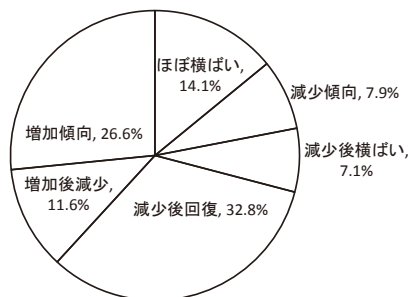


図3. 震災前後の事業活動の変化

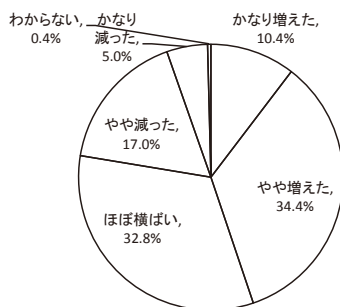


図 4-1. 震災前後の従業員数の変化：正規従業員

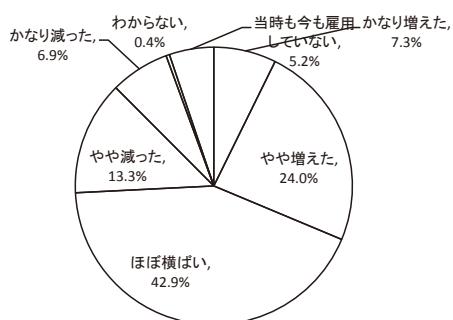


図 4-2. 震災前後の従業員数の変化：非正規従業員

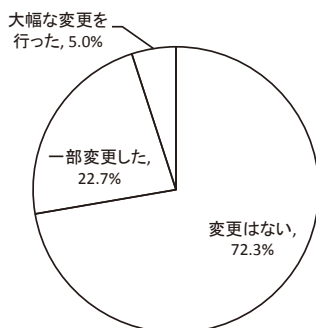


図 5. 震災前後の HRM 施策の変化

や「ほぼ横ばい」が、非正規従業員数は「ほぼ横ばい」が多かった（図 4）。震災前後での HRM 施策の変化については、「変更はない」が多く、「大幅な変更を行った」のはわずかであった（図 5）。自由記述の回答によれば、変更の内容は、評価における役割・能力・業績の重視、定年延長、非正規従業員の正規職員への登用、復職再雇用制度、被災地への派遣制度などであった。

以上の結果から、震災で多くの企業が主に物的な被害を受けたが、その後3年半が経過した時点では事業活動や従業員数は震災前の水準に戻ったところが多いことが確認された。また、多くの企業でHRM施策は震災前後で変化していないが、変化させたところでは、雇用の維持・安定に向けた制度の導入・変更を行っていることがわかった。

## 2) HRM ポリシーの変化

調査1, 2の回答企業のうち、正規従業員100人以上の企業それぞれ172社, 188社について、日本企業の伝統的な人事管理の方針を示す8項目に関する回答を集計したところ、自分の企業にあてはまる(「全くそのとおり」「ほぼそのとおり」「どちらかといえばそのとおり」の合計)と回答した企業が多いのは、調査1, 2とも「定年まで正規従業員をできるだけ辞めさせない方針である」, 「従業員の評価にあたっては、年功より業績を重視する」, 少ないのは「従業員のキャリアはグループ別(学歴など)に管理している」であった(図6)。また、調査1, 2で差が大きかったのは、定年までの雇用保障, 仕事内容ベースの給与(給与体系は、年齢や家計よりも仕事内容に基づく), 非正規雇用の増加(「非正規従業員を増やしている」)であった。ただし、2回の調査に回答した企業50社のうち従業員100人以上の企業32社について、7段階の回答を1~7に点数化して平均値を比較したところ(対応のあるt検定)、有意差が見られたのは定年までの雇用保障のみであった( $t=4.64, p<.05$ )。

以上の結果から、2000年から約15年の間に、東北地方の企業においては、雇用保障の方

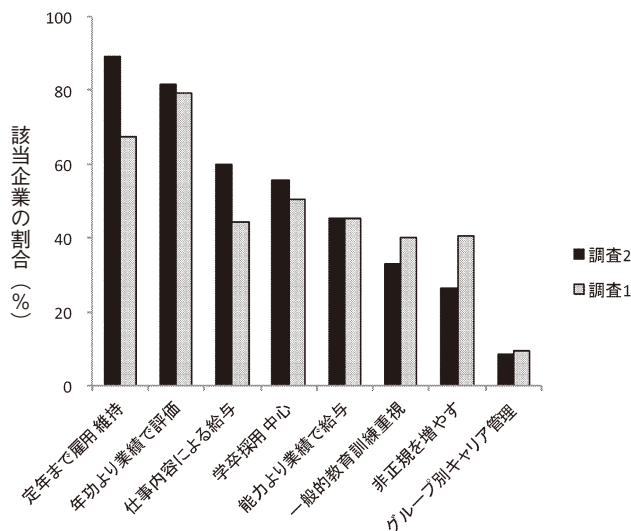


図6. HRM ポリシー：2時点での比較

針がより強まる一方で、評価・報酬での年功志向が低下していることがわかった。つまり、日本的な HRM ポリシーの 2 次元のうちの「長期的雇用と内部化された技能の形成」の強化の方向が示され、日本的傾向への回帰が見られた。日本企業における長期雇用の傾向については 1990 年代以降弱体化しているという報告（加藤，2009；濱秋他，2011）がある一方で、2000 年代後半から終身雇用を肯定する企業が増え始めているという報告（岡本ほか，2009）もある。本調査の結果は後者の方向と一致するが、長期的雇用の傾向を支持するこれらの結果は人事担当者の回答に基づくものであり、労働移動データに基づくと前者のような結果になる可能性がある。また、雇用保障の方針の強化は、震災被害を受けた企業が対象に多く含まれる今回の調査の場合、上記 1) の HRM 施策の震災前後の変化についての結果のとおり、震災被害経験に基づく、または震災への対応として生じた限定的な反応として考えることもできる。

### 3) 「ハイ・インボルブメント」HRM 施策の導入状況の変化：2 時点の比較

調査 1, 2 の回答企業のうち、正規従業員 100 人以上の企業について、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策の導入状況を 2 時点で比較したところ、各施策の適用対象となる従業員の割合が過半数（7つの選択肢のうち「全員」「ほぼ全員」「大部分」）と回答した企業の割合は、教育訓練施策、情報共有施策では大きな差が見られなかったものの、報酬施策では、利潤分配制度、業績給、成果分配制度が、権限委譲施策では提案制度、意見調査が、調査 1 より調査 2 で多かった（図 7）。ただし、2 回の調査に回答した企業 50 社のうち従業員 100 人以上の企業 32 社について、7 段階の回答を 1～7 に点数化して平均値を比較したところ（対応のある t 検定）、有意差が見られたのは報酬施策の利潤分配制度のみであった（ $t=2.17$ ,  $p<.05$ ）。

以上の結果からすると、ここ約 15 年の間に東北地方の企業にも少しずつであるが参加型施策の導入が進んでいると見ることができるであろう。ただし、同一企業への 2 回の調査の比較結果も併せて考えると、2 時点での導入状況の違いには業種構成の違いが影響している可能性も考えられる。

### 4) 「ハイ・インボルブメント」HRM 施策と企業業績の関係：調査 2 の結果

調査 2 の回答企業のうち正規従業員 100 人以上の企業について、4 つの HRM 施策領域毎に測定項目（報酬施策 11 項目、教育訓練施策 6 項目、権限委譲施策 7 項目、情報共有施策 5 項目）の因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。その結果、報酬施策のみ 2 因子、それ以外は 1 因子が抽出された。そこで、それぞれの第 1 因子の得点に基づいてクラ

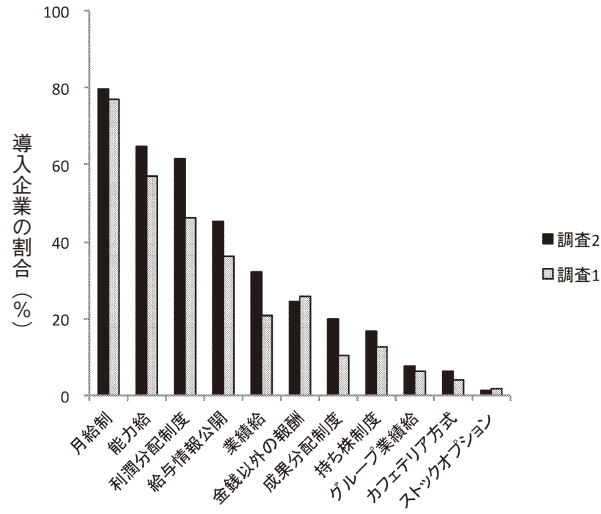


図7-1. 報酬施策の導入状況：2時点での比較

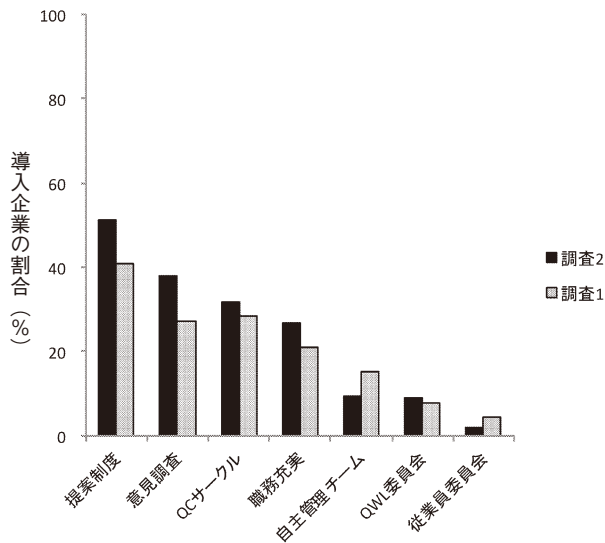


図7-2. 権限委譲施策の導入状況：2時点での比較

スタ分析（Ward法）を行ったところ、回答企業は4クラスタに分類された（図8）。つまり、HRMシステムは、「ハイ・インボルブメント」HRM施策のうち4領域すべての利用度の高い「高参加型」、報酬施策以外高い「知識・権限・情報型」、教育訓練・権限委譲施策の利用度の高い「知識・権限型」、全てにおいて利用度の低い「低参加型」、の4タイプに分けることができる。

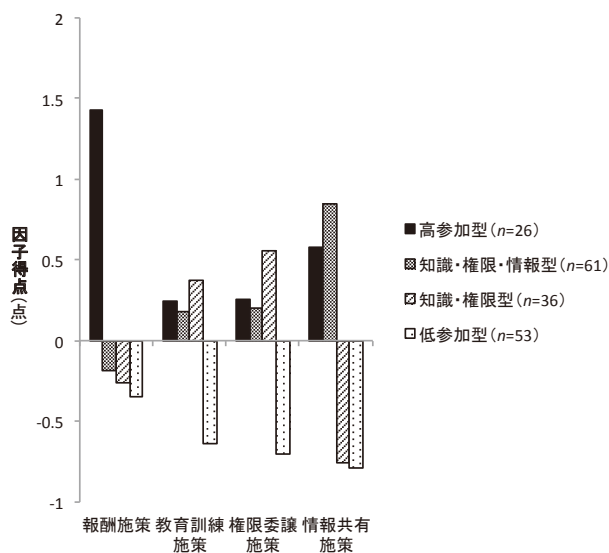


図 8. HRM タイプのクラスタ分析

注) ( ) 内の数字は企業数。一元配置分散分析の結果、4つの施策（因子得点）全てでクラスタ間に有意差あり ( $p < .01$ )。多重比較の結果、報酬施策では高参加型とその他3クラスタとの間、教育訓練施策と権限委譲施策では低参加型とその他3クラスタの間、情報共有施策では高参加型および知識・権限・情報型とそれ以外の2クラスタの間で有意差あり ( $p < .05$ )。

次に、クラスタ間での業績の違いを検討するため、3つの業績指標について一元配置分散分析を行ったところ、売上高利益率を除く2つの指標で有意差が見られた(図9)。まず、離職率 ( $F=2.8, p < .05$ ) では、多重比較の結果、知識・権限・情報型が低参加型よりも有意に低いことがわかった ( $p < .05$ )。また、従業員1人当たりの売上高 ( $F=3.3, p < .05$ ) では、高参加型が知識・権限型よりも売上高が有意に多かった ( $p < .05$ )。

以上の結果、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策の4領域の導入の程度でHRMのタイプが分類可能であることが確認され、HRMのタイプによって企業業績が異なることも見出された。また、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策が幅広く導入されているタイプの方が高業績であることが明らかになり、日本企業ないし日本という社会的・文化的背景のもとでも「ハイ・インボルブメント」モデルが有効であることが示唆された。

ただし、この結果についてはいくつか留意すべき点がある。一つは、最も「ハイ・インボルブメント」施策を幅広く取り入れた高参加型が最も業績が高いとは限らず、低参加型が最も低いとは限らないことである。施策間の相互補完性と内的整合性の重要性を強調する「ハイ・インボルブメント」モデルの考え方 (Lawler, 1986) からすると、この結果は十分説明できない。

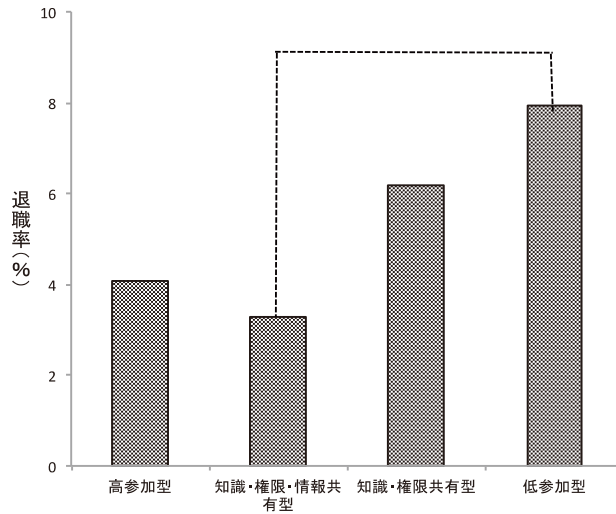


図 9-1. HRM タイプ別の業績：離職率

注) 点線の間のみ有意差あり ( $p < .05$ )

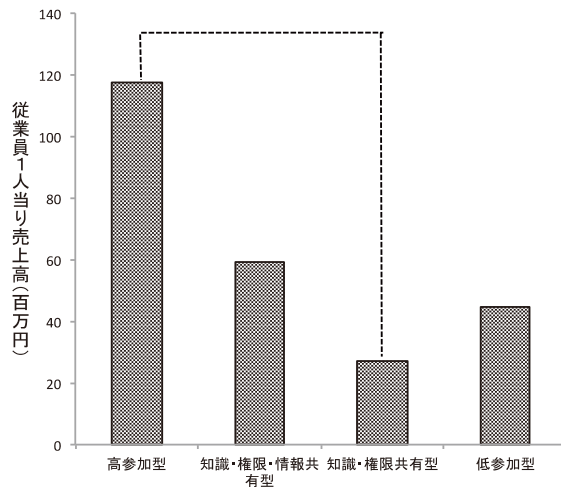


図 9-2. HRM タイプ別の業績：従業員 1 人当たり売上高

注) 点線の間のみ有意差あり ( $p < .05$ )

2 点目は、売上高利益率のように HRM システムによって違いの見られない業績指標があるということである。離職率や従業員 1 人当たり売上高が従業員の態度・行動が反映されやすい指標であるのに対して、売上高利益率は従業員以外の要因やプロセスが関与している可能性が高いことが考えられるが、いずれにしても、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策の有効性は様々な視点から見る必要性があり、かつどの視点から見るかによって評価が異なる

ることに留意すべきである。

3点目は、前述のとおり、HRM システムによって企業業績に違いがあっても、両者の間に一方向的な因果関係があるとは言えないということである。つまり、「ハイ・インボルブメント」HRM 施策を導入することによって、従業員の態度・行動・能力が向上し、その結果業績が高まると考えることもできるが、業績のよい企業は従業員に配慮した HRM 施策をとることができるという「逆の因果関係」も考えられる。つまり、財務的余裕があれば、それを HRM 施策に投資することができる。HRM 施策への投資が業績を高めるという経営者の信念に基づいて新しい施策が導入されることもあるが、企業収益を巡るステークホルダー間の交渉の結果収益の一部が賃金や訓練などの参加の機会を通じて従業員に再分配されることもある。逆に言えば、業績が下がるとそのような施策への投資が控えられ、施策の維持が困難になるとも言える。その場合、企業業績の低下への反応として HRM システムが変化したという見方 (Argyris, 1957; Morishima, 1995) になるが、企業業績のフィードバックが組織学習として HRM 自身のより積極的、プロアクティブな変化を促したという見方も可能である (小林, 2007)。

##### 5) 「ハイ・インボルブメント」HRM 施策と企業業績の関係：交差遅れ分析

HRM 施策と企業業績の因果関係をより明確に検証するために、同一企業について HRM 施策と企業業績を 2 つの異なる時点で測定しそれらの間の関係を検討する、いわゆる交差遅れ分析を行った。その際、HRM 施策の指標として、4 つの HRM 施策領域毎に行った因子分析で第 1 因子の負荷量の大きかった合計 19 項目の平均点で HRM の参加度を示す合成変数 (T1:  $\alpha=.90$ ; T2:  $\alpha=.88$ ) を作成した。次に、2 回の調査両方に回答した企業 50 社のうち従業員 100 人以上の 32 社について、2 時点での HRM 施策の参加度 (以下、HRM 参加度) と企業業績の相関係数を算出した。業績指標の分布に偏りがあるため、スピアマンの順位相関を求めたところ、調査 1 (T1) の業績 (離職率) と調査 2 (T2) の HRM 参加度との間にのみ有意な負の相関 ( $r=-.46, p<.05$ ) が見られた。さらに、業績指標を対数変換した上で積率相関係数を算出したところ、離職率 (T1) と HRM 参加度 (T2)、売上高/人 (T1) と HRM 参加度 (T2) の間に有意傾向レベル ( $p<.10$ ) の相関が見られた (表 1)。なお、業績指標間では売上高/人 (T1) と売上高利益率 (T2) の間に有意な相関が見られた ( $p<.05$ )。

また、HRM 参加度と業績指標の 2 時点両方に関係を持つ可能性のある 5 つの属性変数との相関を確認したところ、従業員数や業種が第三の変数となる可能性があった。そこで、これら 5 つの変数の影響を除いた残差で相関を算出したところ、売上高/人 (T1) と HRM 参加度 (T2) に有意傾向レベル ( $p<.10$ ) の相関が見られ、売上高/人 (T1) と売上高利益率 (T2)



表1. 変数間の相関 (N=32)

変数	平均	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1 HRM参加度 (T1)	3.4	.9	-												
2 HRM参加度 (T2)	3.4	.9	.11	-											
3 離職率 (T1)	6.4	.1	-.25	-.34 <sup>†</sup>	-										
4 離職率 (T2)	4.0	.1	.08	-.38*	.13	-									
5 売上高/人 (T1)	64.1	139.7	-.14	.36 <sup>†</sup>	-.28	.01	-								
6 売上高/人 (T2)	46.2	38.3	-.06	-.20	.25	.03	-.12	-							
7 売上高利益率 (T1)	1.7	.0	.20	-.02	-.09	-.01	-.41*	-.08	-						
8 売上高利益率 (T2)	2.6	.1	-.16	.14	-.30	-.02	.53**	.18	-.05	-					
9 従業員数 (T1)	276.2	324.4	.52**	.34 <sup>†</sup>	-.28	-.27	.02	.18	.35 <sup>†</sup>	.03	-				
10 資本金 (T1)	35.9	75.8	.40*	.27	-.27	-.19	.56**	-.01	.05	.29	.44*	-			
11 業種 (T1)	.1	.3	-.14	-.36 <sup>†</sup>	.36 <sup>†</sup>	.55**	.06	.11	-.01	-.07	-.34 <sup>†</sup>	-.10	-		
12 労働組合の有無 (T1)	.3	.5	.11	.10	-.31	-.16	.35 <sup>†</sup>	.10	-.14	.33	.23	.19	-.21	-	
13 操業年数 (T1)	69.2	24.6	-.11	.24	-.38 <sup>†</sup>	-.09	.27	-.06	.11	.17	.24	.15	.13	.14	-

<sup>†</sup>  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

注) T1: 2000年, T2: 2014-15年。離職率, 売上高/人, 売上高利益率, 従業員数, 資本金, 操業年数は自然対数変換値で積率相関係数を算出。業種 (製造=1, その他=0), 労働組合の有無 (有=1, 無=0) はダミー変数。

に有意な相関 ( $p < .05$ ) が見られた。

以上の結果は、約 15 年という長期的な時間の幅で見た場合、HRM 施策から業績への影響が見られないことを意味する。二時点間の HRM 参加度と業績指標の間には有意な相関が一部見られたが、T1 の HRM 参加度と T2 の業績の間ではなく、T1 の業績と T2 の HRM 参加度の間であった。このことは、HRM 施策から業績への影響ではなく、むしろ業績から HRM 施策への影響つまり逆の因果関係の可能性の方が高いことを示唆する。また、二時点間の関係のうちの一部は第三の変数による疑似相関の可能性がある。それらの点からすると、HRM 施策と業績の間に相関が見られたとしても、HRM 施策から業績への一方向的な因果関係以外の可能性を十分検討する必要があることが示唆される。

#### 4. 総合的考察

本研究では、参加型 HRM の一種である「ハイ・インボルブメント」モデルに基づく HRM が企業業績にどのような影響をもたらすかを実証的に検討した。その結果、両者間には正の関係が見られ、その点では日本企業においても「ハイ・インボルブメント」モデルが有効である可能性が示唆された。しかし、交差遅れ分析によれば、長期的にみた場合、その関係は「ハイ・インボルブメント」な HRM が企業業績に影響するという因果関係より、逆の因果関係の可能性の方が高いことがわかった。

逆の因果関係があるとすれば、それは日本企業における HRM についての考え方や人事機能を担う部門の役割と関係があるかもしれない。つまり、企業の戦略と HRM 施策の適合や HRM 施策同士の適切な組み合わせによって、言い換えれば人的資源に投資することによって計画的に企業業績を高めようとする SHRM の考え方よりも企業の業績や現状に応じて事後的に HRM 施策を変えていく、いわゆる人事管理が日本企業において一般的である可能性を示唆している。

しかし、「ハイ・インボルブメント」な HRM 施策と企業業績の関係をめぐると上記の結果を一般化する前に、本研究の限界を指摘しなければならない。一つは、調査サンプルの偏りおよび特に交差遅れ分析におけるサンプル数の少なさである。対象企業は、東北 3 県に限定されているだけでなく、稀有の震災を経験し多くの企業が被害を受けている。さらに言えば、今回の対象となった企業は、そのような逆境に置かれながら生き残った組織であるということである。特に交差遅れ分析の対象となった企業は約 15 年間存続することができたと考えると、今回の結果には選択バイアスが影響している可能性がある。調査 1 の回答企業のうち倒産等で 41 社が調査 2 の対象から除かれているので、それらの企業がどのような HRM 施

策をとっていたかを検討することで施策の影響を検討することも考えられる。

また、対象企業のほとんどが中小企業であることも指摘しなければならない。日本企業に占める中小企業の割合を考えれば、規模（従業員 100 人以上）以外の条件を設けずに一定地域の全企業を対象とした今回の調査の結果として当然と言えるが、日本型雇用の方針や参加型 HRM 施策が製造業の大企業により典型的に現れるとすれば、企業規模の点で今回得られた結果の一般性には限定が必要である。また、中小企業の場合もともと様々な制度の導入割合が大企業より少ないため、それを代替する別の要素（社長や経営陣の個別的判断など）が存在する可能性がある（脇坂, 2014）。その点からすると、組織風土やリーダーシップなど制度化されていない組織内過程における従業員参加的傾向をすくい上げるきめ細かな調査が求められる。

本研究、特に交差遅れ分析におけるもう一つの限界は、2 回の調査の時間間隔の長さ（約 15 年）である。縦断的データ収集においてどのくらいの時間の幅をとるのが適切かは調査方法の問題であるが、制度が業績に影響を及ぼすプロセスと変化の生じやすさについての理論的問題でもある。制度が業績に影響をもたらすまでに時間的なラグがあり、制度の成熟や深化には時間がかかる（加藤, 2001, 2004）とすれば、数年では影響が検出できない可能性もあるが、逆に長い時間のなかで制度の陳腐化や形骸化が生じ、影響が低下したり消滅する可能性もある。制度が業績に影響するとすれば、何が媒介するか、どれくらいの時間がかかるかという影響プロセスのモデルが求められている。そして、HRM 施策と企業業績の間を従業員の態度・行動・能力が媒介するという考え方に立つ行動アプローチでは、さらに個人と組織という少なくとも二つのレベルでの影響プロセスを理論化する必要がある（小林, 2014）。以上のように、HRM 施策と業績の間の因果関係の方向と時間の問題は、因果プロセスの説明という SHRM 論における別の大きな課題と結びついており、さらなる理論的・経験的検討が求められている。

## 引用文献

- Allen, M.R. and Wright, P. (2007). Strategic management and HRM. In P. Boxall, J. Purcell, and P. Wright. (eds.) *The Oxford handbook of human resource management*. Oxford: Oxford U.P., pp. 88-107.
- Argyris, C. (1957). *Personality and organization*. New York: Harper & Row. (伊吹山太郎・中山実訳 (1970). 組織とパーソナリティ: システムと個人との葛藤 日本能率協会)
- Bae, J. and Lawler, J.J. (2000). Organizational and HRM strategies in Korea: Impact on firm performance in an emerging economy. *Academy of Management Journal*, **43**, 502-517.
- Clark, R. (1979). *The Japanese company*. U.K.: Yale U.P. (端信行訳 (1981). ザ・ジャパニーズ・カンパニー ダイアモンド社)

- Cole, R.E. (1982). Diffusion of participatory work structure in Japan, Sweden and the United States : A comparative study of American & Japanese industry. In P. Goodman (ed.) *Change in organizations*. San Francisco : Jossey-Bass, pp. 166-225.
- Delery, J.E. and Doty, D.H. (1996). Modes of theorizing in strategic human resource management : Tests of universalistic, contingency, and configurational performance predictions. *Academy of Management Journal*, **39**, 802-835.
- 濱秋純哉・堀 雅博・前田佐恵子・村田啓子 (2011). 低成長と日本的雇用慣行 : 年功賃金と終身雇用の補完性を巡って 日本労働研究雑誌, **54**, 26-37.
- Heller, F., Pusic, E., Strauss, G., and Wilpert, B. (1998). *Organizational participation : Myth and reality*. N.Y. : Oxford U.P.
- Industrial democracy in Europe (IDE) International Research Group (1993). *Industrial democracy in Europe revisited*. Oxford : Oxford U.P.
- 石田英夫 (1985). 日本企業の国際人事管理 日本労働協会
- 加護野忠男・野中郁次郎・榊原清則・奥村昭博 (1983). 日米企業の経営比較 日本経済新聞社
- 加藤隆夫 (2004). 従業員代表制の経営参加度とその決定要因 : 計量分析 日本労働研究雑誌, **46**, 4-18.
- 加藤隆夫 (2009). 「失われた十年」と日本的雇用制度 労働調査, **9**, 1-2.
- 加藤隆夫 (2012). 書評 小池和男著『高品質日本の起源 : 発言する職場はこうして生まれた』 日本労働研究雑誌, **54**, 83-86.
- 小林 裕 (2001). 人的資源管理システムにおける成果主義的報酬施策の役割—「ハイ・インボルブメント」モデルの実証的検討— 組織科学, **34**, 53-66.
- 小林 裕 (2007). 人的資源管理システムが企業業績に及ぼす影響 (4)—サイバネティックモデルの理論的検討— 産業・組織心理学会第 23 回大会発表論文集, 123-126.
- 小林 裕 (2014). 戦略的人的資源管理論の現状と課題 東北学院大学教養学部論集, **167**, 63-75.
- Lawler, E.E. III. (1986). *High-involvement management : Participating strategies for improving organizational performance*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lawler, E.E. III. (1992). *The ultimate advantage : Creating the high-involvement organization*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lawler, E.E. III, Mohrman, S.A., and Ledford, G.E. Jr. (1995). *Creating high performance organizations : Practices and results of employee involvement and TQC in Fortune 1000 Companies*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lawler, E.E. III., with Mohrman, S.A., Ledford, G.E., Jr. (1998). *Strategies for High Performance Organizations-The Ceo Report : Employee Involvement, TQM, and Reengineering Programs in Fortune 1000 Corporations*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lawler, E.E. III., Mohrman, S.A., Benson, G. (2001). *Organizing for High Performance : Employee involvement, TQM, and reengineering and knowledge management in the Fortune 1000 — The CEO report —*. San Francisco, CA. : Jossey-Bass.
- Lincoln, J.R. & Kalleberg, A.L. (1990). *Culture, control, and commitment : A study of work organization and work attitudes in the United States and Japan*. Cambridge, MA. : Cambridge U.P.
- Morishima, M. (1995). Embedding HRM in a social context. *British Journal of Industrial Relations*, **33**, 617-640.
- Morishima, M. (1996). Evolution of White-Collar HRM in Japan. In D. Lewin, B.E. Kaufman and D. Sockell (eds.), *Advances in Industrial and Labor Relations*, Vol. **7**, Greenwich, CT. : JAI Press, pp. 145-176.
- 岡本大輔・古川靖洋・佐藤 和・安 國煥・山田敏之 (2009). 続・総合経営力指標 コーポレートガバナンス・マネジメント全般と企業業績 2008 三田商学研究, **52**, 77-98.

- Ouchi, W.G. (1981). *Theory Z: How American business can meet the Japanese challenge*. Reading, Mass.: Addison-Wesley Pub. (徳山二郎監訳 (1981). セオリー Z: 日本に学び, 日本を超える CBS・ソニー出版)
- Pfeffer, J. (1998). *The human equation: Building profits by putting people first*. Boston: Harvard Business School Press. (佐藤洋一監訳 (1998). 人材を生かす企業: 経営者はなぜ社員を大事にしないのか? トッパン)
- 櫻井笑子・余合 淳 (2011). ハイインボルブメント型 HRM が組織パフォーマンスに与える影響: 求職者が認知するレピュテーション視点の統合 経営行動科学学会年次大会発表論文集, **14**, 406-411.
- Vandenberg, R.J., Richardson, H.A. and Eastman, L.J. (1999). The impact of high involvement work processes on organizational effectiveness: A second-order latent variable approach. *Group & Organization Management*, **24**, 300-339.
- 脇坂 明 (2014). 中小企業に人事制度は必要か 日本労働研究雑誌, **56**, 73-81.
- Wright, P.M. & Gardner, T.M. (2003). The Human Resource-Firm Performance Relationship: Methodological and Theoretical Challenges. In D.W. Holman, D. Toby, C.W. Clegg, P. Sparrow, and A. Howard (eds.) *The new workplace: a guide to the human impact of modern working practices*. Chichester: Wiley, pp. 311-328.
- Wright, P.M., Gardner, T.M., Moynihan, L.M., and Allen, M.R. (2005). The relationship between HR practices and firm performance: Examining causal order. *Personnel Psychology*, **58**, 409-446.

資料：調査2で使用した質問紙



### 「企業の人的資源管理と業績」

－ アンケート調査へのご協力をお願い －

東日本大震災から3年半が過ぎ、日本経済は全体として回復基調に見えますが、東北地方では原発事故の処理など多くの課題が山積し、本格的な復興はこれからという状況です。

さて、このような厳しい逆境のなか、企業が業績を維持・回復させ、自らを存続させるには何が必要でしょうか。近年、被害やストレス体験から自分自身で治癒し回復する力（レジリエンス）が注目されていますが、これは個人だけでなく、企業についても言えると考えられます。

そこで、本研究室では企業の自己回復力に影響する要因として人的資源管理に注目し、どのような人的資源管理施策が企業の自己回復力を高めるかを明らかにするため、アンケート調査を企画いたしました（研究内容の詳細は裏面をご覧ください）。

この調査は、東北地方3県（宮城、岩手、山形）に本社を置く企業のうち、前回調査（2000年実施）でご回答いただいた企業を含む従業員数上位1000社を対象にしています。回答はすべてコンピュータでデータ処理し、得られた結果は学術研究にのみ用います。個別の企業名は一切公表しません。企業秘密は厳守し、研究上の必要性がなくなった時点で個別企業が特定できるデータを消去します。また、ご回答いただきました企業には、結果がまとまり次第ご報告いたします。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、下記の〔記入のし方〕をご確認の上、ご回答くださいますようお願い申し上げます。

2014年11月15日

東北学院大学教養学部 心理学研究室

教授（組織心理学・人的資源管理論） 小林 裕



#### 〔記入のし方〕

- 1、記入者：人事担当者もしくは労務管理全般について理解している方。
- 2、記入の立場：この調査は企業を単位として行います。そこで、本社事業所だけでなく、支店、出張所、工場などを含めた企業全体についてお答えください。
- 3、回答の時点：2014年11月15日現在でお答えください。
- 4、回答の方法：各設問につき該当する箇所を○で囲むか、数字等をご記入ください。
- 5、回収締切日：2014年11月30日までに同封の返信用封筒にてご返送ください。
- 6、問い合わせ先：
  - (1)アンケートの送付・回収について： (株) 支社 tel. fax. 担当：
  - (2)調査の内容について：〒981-3193 仙台市泉区天神沢2-1-1 tel. 022-773-3514 fax. 022-375-1709 email: utan@mail.tohoku-gakuin.ac.jp 小林 宛

研究内容について

1、テーマ

企業の人的資源管理と業績-交差遅れモデルによる因果関係の分析-

2、研究の概要

研究の目的は、人的資源管理（HRM）施策が企業業績に及ぼす影響を実証的に検証することです。これまでの多くの研究は一時点での調査によって HRM 施策と企業業績の相関関係を見いだしていますが、因果関係は十分検討されていません。

そこで、本研究では同一企業に対する 2 時点での調査データによる交差遅れ分析によって因果関係の検証を行います。調査方法は、東北地方の企業約 1000 社に対して実施された 1 回目の調査（2000 年実施）とほぼ同じで、質問紙をお送りし、人事担当の方にご回答いただいた後、ご返送いただくものです。質問内容は、主に企業の HRM 施策と企業業績に関するもので、時間のずれを伴って測定された両者の相関を比較することによって、因果関係をより明確に検証します（図 1）。また、前回の調査にご回答いただいた約 200 社を含め、今回の調査のご回答企業全体を対象として、2014 年時点での HRM 施策と企業業績の相関関係も分析します。

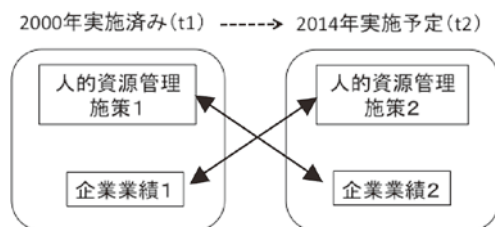


図1 調査の概要：企業調査

また、その後、調査にご協力いただいた企業において、従業員の態度調査を実施することによって、HRM 施策が従業員の態度を通じて企業業績に影響するという媒介プロセスの検証も併せて行うことも予定しています（図 2）。



図2 調査の概要：従業員調査

3、結果の公表について

この研究は日本学術振興会から科学研究費の助成を受けており、結果は国立情報学研究所のデータベース「KAKEN」(<http://kaken.nii.ac.jp/>) で公表されます。

I 東日本大震災の影響

1. 貴社の事業所で東日本大震災(以下「震災」)による被害(人的・物的・風評を含めて)を受けましたか
  1. 受けなかった
  2. 受けた

↓

1-2. どのような被害がありましたか (○はいくつでも)

  1. 従業員が死傷した事業所があった
  2. 建物が全壊・半壊した事業所があった
  3. 機械・設備が全部または一部破壊された事業所があった
  4. 「風評被害」により大幅な売り上げ減少があった
  5. 被害は総じて軽微なものにとどまった
2. 震災後貴社全体の事業活動はどのように変化しましたか (○は1つ)
  1. ほぼ横ばい    2. 減少傾向    3. 減少後横ばい
  4. 減少後回復    5. 増加後減少    6. 増加傾向
3. 貴社全体の従業員について、現在の人数と震災前(2011年2月)と比較した増減を教えてください。正規、非正規別に1つだけ○をつけてください。

	かなり増えた	やや増えた	ほぼ横ばい	やや減った	かなり減った	わからない	当ても今も雇用していない
1. 正規従業員 (いわゆる「正社員」) . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
2. 非正規従業員 (パート、嘱託、派遣、請負など) . . . . .	1	2	3	4	5	6	7

II 人事管理の基本的な考え方

貴社の現在の人事管理の基本的な考え方についておたずねします。以下の文章は貴社にどの程度あてはまりますか。(例)にならって、当てはまるところに1つだけ○をつけてください。

	全く違う	かなり違う	やや違う	どちらでもない	やや当たる	ほぼ当たる	全くそのとおり
(例) 会社経営において人事管理はもっとも重要な課題である . . . . .	1	2	3	4	5	<b>6</b>	7
1) 正規従業員の評価にあたっては、年功より業績を重視する . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
2) 正規従業員の採用は新規学卒が中心である . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
3) 定年まで正規従業員をできるだけ辞めさせない方針である . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
4) 正規従業員の社内でのキャリア (配置換えや昇進) は、個人別ではなくグループ別 (学歴など) に管理している . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
5) 正規従業員の給与の決定にあたっては、能力よりも業績を重視する . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
6) 非正規従業員 (パート、派遣など) を増やしている . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
7) 給与表 (体系) は、正規従業員の年齢や家計よりも仕事内容に基づいてつくっている . . . . .	1	2	3	4	5	6	7
8) 従業員には、自社独自の能力訓練というより、一般的な能力訓練を行っている . . . . .	1	2	3	4	5	6	7



### III 人事制度

企業によって様々な人事制度が用いられています。貴社では、次のような制度をどの範囲の正規従業員に実施していますか。全員を対象にしていますか、それとも対象者がいない(制度がない)でしょうか。各々の制度について、当てはまるところに1つだけ○をつけてください。

#### 1. 給与・報酬の制度

下記の制度の対象となる正規従業員の範囲をお答えください

	い な い	ご く 一 部	一 部	半 数 く ら い	大 部 分	ほ ぼ 全 員	全 員
1) 月給制	1	2	3	4	5	6	7
2) 能力給（職能給、技能給、資格給など）	1	2	3	4	5	6	7
3) 業績給（成果給・能率給・歩合給など）	1	2	3	4	5	6	7
4) グループ単位での業績給 （チーム、職場などの業績に連動した給与）	1	2	3	4	5	6	7
5) 利潤分配制度 （企業の利潤に連動したボーナスなど）	1	2	3	4	5	6	7
6) 成果分配制度 （工場、部門レベルでの生産性向上に連動したボーナスなど）	1	2	3	4	5	6	7
7) 業績に対する金銭以外の報酬（表彰、贈り物、旅行など）	1	2	3	4	5	6	7
8) 従業員持ち株制度 （従業員に自社株を持たせる制度）	1	2	3	4	5	6	7
9) カフェテリア方式の福利厚生 （従業員の希望に応じてメニューが選べる制度）	1	2	3	4	5	6	7
10) 給与情報の公開 （給与制度、昇給額などの情報提供）	1	2	3	4	5	6	7
11) ストックオプション制度 （従業員にあらかじめ決められた価格での自社株購入権を与える制度）	1	2	3	4	5	6	7

#### 2. 教育・訓練の制度

下記の能力について教育訓練の対象となる正規従業員の範囲をお答えください

	い な い	ご く 一 部	一 部	半 数 く ら い	大 部 分	ほ ぼ 全 員	全 員
1) 集団での意思決定・問題解決の能力	1	2	3	4	5	6	7
2) リーダーシップ能力	1	2	3	4	5	6	7
3) 事業（会計、財務など）を理解する能力	1	2	3	4	5	6	7
4) 品質・統計分析の能力	1	2	3	4	5	6	7
5) チームづくりの能力	1	2	3	4	5	6	7
6) 作業能力・事務能力	1	2	3	4	5	6	7

### 3. 業務改善・効率化の制度

下記の制度に参加している正規従業員の範囲をお答えください

	い な い	こ く 一 部	一 部	半 数 く ら い	大 部 分	ほ ぼ 全 員	全 員
1) 提案制度・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(業務改善のための意見や提案を従業員から聞く公式の制度)							
2) 意見調査・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(業務改善を目的として従業員の意見を聴き、結果を知らせる制度)							
3) 職務充実・職務再設計・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(業務で使う技能の幅を広げる、業務のやり方を任せる、業務のまとまりを持たせる、周囲への影響力を高める、などの業務改善)							
4) QCサークルやその他の小集団活動・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(業務上の問題を改善するため定期的に集まる自主的グループ活動)							
5) 労使QWL委員会・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(賃金交渉等の一般的な労使交渉ではなく、業績の改善や労働の質向上のための労使の話し合いの場)							
6) 自主管理チーム・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(製品やサービス全体に責任を持ち、業務の分担や方法を自分達で決めるグループ)							
7) 政策や戦略に関する従業員委員会・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
(会社の経営方針や戦略に意見・アドバイスをする経営者以外のメンバーを含む委員会)							

### 4. 情報共有の制度

下記の情報について、社内報（パンフレット、新聞、ビデオ）などによって情報提供している正規従業員の範囲をお答えください

	い な い	こ く 一 部	一 部	半 数 く ら い	大 部 分	ほ ぼ 全 員	全 員
1) 企業全体の業績（生産高、売上高など）・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
2) 部門（工場、支店、部など）の業績・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
3) 導入予定の新しい技術（装置、システム、作業手順など）の事前情報・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
4) 事業計画／目標（年、月単位）・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7
5) 競争相手との業績比較・・・・・・・・	1	2	3	4	5	6	7

### IV 人事管理の変化と今後の課題

1. 貴社の人事制度は震災以降変化しましたか（○は1つ）

1. 変更はない
2. 一部変更した
3. 大幅な変更を行った

↓

1-2, 変更の主な内容は何でしょうか。自由にお書きください。

2. 貴社の今後の人事管理の課題についておたずねします。当てはまるものすべてに○をつけてください。

1. 新規学卒者の定期採用
2. 非正社員、外部人材（派遣・請負など）の活用
3. 仕事の成果や結果により、従業員の処遇や評価に差をつけること
4. 従業員全体の能力向上を目的とした教育訓練の実施
5. 一部の従業員を対象とした、選別的な教育訓練の実施
6. 従業員が仕事と育児・介護を両立できるための環境を整備すること
7. 従業員の精神衛生（メンタルヘルス）への配慮
8. 法定の障害者雇用率（2%）の達成
9. 労働組合や従業員代表と経営トップとのコミュニケーション
10. 経営目標や経営理念の社員への伝達
11. その他（）

V 貴社の概要

1. 業種：最もあてはまる番号に1つだけ○をつけてください。

- |   |               |          |           |               |
|---|---------------|----------|-----------|---------------|
| 1. 農林漁業                                       | 2. 鉱業         | 3. 建設業   | 4. 食品製造   | 5. 繊維・紙・パルプ製造 |
| 6. 化学・ゴム・ガラス製造                                | 7. 鉄鋼・非鉄・金属製造 | 8. 機械製造  |           |               |
| 9. 電気・ガス・熱供給・水道業                              | 10. 情報通信業     | 11. 運輸業  |           |               |
| 12. 卸売・小売業                                    | 13. 金融・保険業    | 14. 不動産業 | 15. サービス業 |               |
| 16. その他（ <span style="float: right;">）</span> |               |          |           |               |

2. 売上高

2010年度	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">十億</td> <td style="text-align: center;">百万</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	十億	百万	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	円
十億	百万																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
2013年度	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">十億</td> <td style="text-align: center;">百万</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	十億	百万	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	円
十億	百万																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								

3. 純利益（損益は△をつけてください）

2010年度	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">十億</td> <td style="text-align: center;">百万</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	十億	百万	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	円
十億	百万																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
2013年度	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">十億</td> <td style="text-align: center;">百万</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	十億	百万	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	円
十億	百万																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								
□	□																								

4. 従業員数（2014年11月現在）

1. 正規従業員（いわゆる「正社員」）	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">千</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	千	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	人
千														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
2. 非正規従業員（パート、嘱託、派遣、請負などの合計数）	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">千</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	千	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	人
千														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
5. 2013年度1年間の正規従業員の退職者数（定年退職を除く）	約	<table border="1" style="border-collapse: collapse; width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">□</td> </tr> </table>	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	人
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														
□														

6. 労働組合の有無

1. あり
2. なし

以上で質問は終わりました。ご協力ありがとうございました。結果がまとまり次第、報告書をお送りしますので、必要事項をご記入ください。

住所：〒  
 .....  
 会社名：  
 .....  
 部署名・担当者名：  
 .....  
 電話：  
 .....

## 【論 文】

# ルートヴィヒ・ホール『覚書』を読む 思索と表現 1)

吉 用 宣 二

## 思索

ルートヴィヒ・ホール（1904-1980）の『覚書』Die Notizenは、1933から1936年にオランダで「最大の精神的な荒野」（S.5）の中で書かれた。それはホールの死の年に、一卷の本としては初めて Suhrkamp Taschenbuch 1000 として現れたが、おおよそ 1,800 の「断章」から成っている。それは 1930, 40 年代の黙示録的な時代における一人の精神の記録である。本稿は、それを読む試みであるが、アフォーリズムの統一のない集合に見える『覚書』を私は、思索と表現に分けて考えることにした。しかし、思索とその表現が緊密に結びついているところにホールの特質がある。あるいは思索をどのように言語的に表現するかがホールの主要な関心事だった。思索は、その強度に対抗できる形で表現されなければならない。十全に表現されていない思考は、思考ではない。小説を書いていたホールにとって、表現は最も重要な要件である。思考をどう表現するかが、思考を検証させるという形で、ホールは思考し、表現した。表現と思考がやすりのように互いを磨いたのである。本来それらを分割することはできないのだが、本稿では比重の大小という意味で、「思索」と「表現」の二項目を設定し、『覚書』を読むことにした。

### 1 遺産としての知恵

ホールの思索は、哲学の分野に属しているものではない。彼が表現する考えは、生の「知恵」である。その「知恵」は自然科学の知とは異なる。「アルキメデスの原理は、いわば次の日から、どの平均的な知性によっても確かめられることができた」。知識は伝達されることができる。一方、知恵において「われわれの最後の業績は、同じ高さに再び到達することの中にある。というのは、知恵、— 全般的な眺望、全体的なものに対する予感の高さ— は伝達されることができないからだ」。「知恵の事柄においてはただ、一つのすでにあっ

たものに再び到達することが問題である」。そしてホールは「知恵」を「可能な限り最高の全体予感、あるいは、人間の知識の最良の利用」と言う。「ここで〈利用〉が〈実践的なもの〉を意味していないことはおのずと明らかである。(それは知恵ではなく、技術だろう)。そうではなく、全体予感と親和したもの、通常の実践的なものよりも、はるかにより高い意味で実践的なもの。科学的な認識を可能な限り最高に満たすこと *Durchdringung*。というのは、科学的な認識だけでは価値がない、それは満たされていることを欲する。何でもって満たすのか。君の生でもって。君の意識でもってか。君の意識の生でもって。 - 意識からやってきて、意識の方へ行こうと努める生、意識の多くを持っている生でもって<sup>1)</sup>。

知恵は、「生でもって、生の意識でもって満たされる」価値である。それは伝達されない、保存されない。「われわれが生の中から死の中に何も一緒に持っていくことができないことを誰もが知っている。しかし誰が同様に偉大な真理、われわれが何かある価値から何も生の中に持ち込まなかったということを知っていようか。ある人が一緒に持っていくことのできたすべては、諸条件であった。価値を、もし彼が何かの価値を持ちたいと望んだのなら、彼は時間から時間に、分から分に産み出さねばならなかった。／というのは、価値は保存されることができないからだ。これがまさにすべての変革の意味である。保存されえない価値を何度も現存するようにさせること。君は燃えている。炎が価値だ」(I/45)。

過去の価値を現在に伝達すること、「今の生で、今の意識で満たすこと」、それはホールの「思想」である。「前日の、すでに自然の中に沈み込んでしまったものごとを思い出そうとする規律のある試みの際に、奇蹟が人の前に立ち上がる。そこには、伝達が歩いたところに、光の痕跡の知覚がある。記憶は個々の人間で終わったり始まったりするのではなく、何世代を通じて遡って伸びているからである。 - そして突然われわれはこの道の途上でいわゆる直観そのものの本質についての解明を獲得する」(II/40)。過去の思索=価値は書かれたものの中にある。「どれほど言葉が貴重なものごとであるか忘れられてはならない、いつか種のように開花する貴重なものごとであるか。それらは、 - 人はそれらを物質のように保存できる - 記憶の中に保存されて - 最大のアクションまで自分の時を待つ、何年も後に力の中に輝かしく目覚めながら」(II/34)。それを見つけ出すことは「引用」の方法によるが、現在の生で満たすことは「引用」を越えて行く。

「遺産。偉大な男たちの指示に従って生きることは容易ではない。人は文章に従って生きることができる。その危険は、無意味性である。他の方向は、次のことである、文が変えられ、広げられなければならない、だからその文面によって拘束されるのではなく、あの思考

<sup>1)</sup> 「47 到達可能なものと到達不可能なものについて」。In: Hohl, Ludwig: Nuancen und Details. Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1990, S.86ff.

方法の全体から新しい文を形成することをあえてするということの知。その危険は、まったく別のものが生まれるということである。／良き道、正しい継承の道はどこにあるのか。それはただ重いものの中のみ見出される。－ それはただ、人が似たように体験すること、あの男の文の中に表明されないものを再発見することによってのみ可能である。－ 人が総体からこれらの文を再び形成することができ、それでもって、同じ苦勞をして、相応する新しい文を形成することができることによって。－ いったい前者の文は作用していないのか。もちろん、作用している。しかしただ、人が自分の力で一つの大きな近さに達したならば。その時、火花がこちらに飛ぶ」(II/203)。

過去の文を読み、その思索を辿り、さらに継続すること、それがホールの引用の方法である。そしてその経過を、思索に拮抗する強度でもって表現することをホールは試みた<sup>2)</sup>。

## 2 私はどうのように語るか

人類の記憶の中に価値を見出し、それを生で満たす＝解釈し、文で表現すること、それが『覚書』の内容である。『覚書』を読むことは、ホールの方法によればその思索を継続しそれを自分の言葉で表現する(生で満たす)ことである。だが、私はたちまち、困難の前に立たされる。ジャンルを規定することは、解釈の入り口であるが、これら多数の「断章」はいったい何か。ホールは序文で述べる。「しかし作品は人がその統一性を把握する前に、正しく把握されることはできない。これはアフォリズム集ではない」(S.5f.)。しかし「全体に一つの構造を与える」(S.5)という意味の「統一性」を多数の「断章」から見出すことは困難である。メランコリーの克服という概念によって、ホールの物語形式から反省的形式への文体の変化を論じた Sabine Haupt は、『覚書』の「統一性」に懐疑的である。「ホールによって求められた〈統一性〉においては統一的な、個々のものを一定の原理に従って秩序つけられた構造の中へ典型的に割り当てることは別のことが問題となっている」<sup>3)</sup>。しかし、解釈と

<sup>2)</sup> 「IX/1 精神的な発見の新しさ」の中で、ホールは様々な引用をしている。「しかし私はアイデアに関して、新しいか古いかについて気にとめない！」(ヴァレリー)。「先祖からゆずり受けたものは、それを真にわが物とするには、自分の力で手に入れなければならぬ」(『ファウスト』)。「すべての賢明なことはすでに考えられた、人はただそれを新たに考えることを試みなければならない」(ゲーテ『箴言と反省』)。「最近の時代のもっともオリジナルな著者たちは、彼らが新しいものを産み出すからオリジナルなのではなく、同じものごとを、まるでそれらが以前には決して言われなかったかのように、言うことができるがゆえにオリジナルなのだ」(ゲーテ『箴言と反省』)。「しかし彼が論じる素材が新しくないとしても、その配列が新しいのである。昔の言葉を使うからといって人々に非難される作家のことを、私は敬愛したいと思う。あたかも同じ思想が異なった配列によって別の言説体を形作らないように、かつまた、同じ言葉の数々は、異なった配列によって別の思想を形成するように」(パスカル『パンセ』)。

<sup>3)</sup> Haupt, Sabine : „Schwer wie ein weißer Stein“. Bern (Peter Lang) 1997, S.208.

は何かについて「統一的」な言説を形成することであるので、Hauptも、その文体を「思考散文 Denkprosa」<sup>4)</sup>と定義することによって解釈の「統一性」を与えている。

私は「統一性」を考えるために、その反対概念である「個別性」を設定したい。ホールの最初の「思考散文」的な作品は『ニュアンスと細部』(1939)である。『覚書』では何よりも「個別性」が論じられる。「輝きは細部から突然現れる、そして全体を創る」(II/176)。「この人は個別なものにこだわり、全体を変える」(I/23)。「人が個別なものを来たるべきものの、全体的なものの前段階と見なすならば、人は失われている。人は個別なものに完全に向かわねばならない。それが過ぎ去るとすぐにそのままにしておかねばならない」(XI/11)。Paul Goodは哲学の立場から述べる、「私を一番魅了するのは、ホールの著作が、創造者の例に関して、差異の権利、個別なもの、固有のもの、異なったもの、ニュアンス、細部の権利を代表していることである」<sup>5)</sup>。Goodは、『覚書』の中のスピノザの『エチカ』からの「我々は個物をより多く認識するに従ってそれだけ多く神を認識する」(IX/21)を例として挙げている。その個別性の表現に、それぞれが独立した命題であるアフォリズムは適合した形式である。しかし、スピノザが短い命題を幾何学的に構築する方法を作り上げたように、アフォリズムはその短さによって、その断絶性を克服しようとする志向を産み出す。個別性を結び付ける「統一性」へと思考が移動する。哲学体系のように統一性があらかじめ設定されているのではなく、個別性の海の中に、次第に一つの航路が形成されてくる。「流れが断片の中を通っていくならば、断片はまさにもう断片ではない。その時、法が再びある。すべてが依存している法が」(VII/146)。

ホールは伝説に包まれた人間であった。(スイスの記録映画作家 Alexander J. Seiler は1982年に記録映画『ルートヴィヒ・ホール。断片の中の一つのフィルム』を作った)。彼はジュネーヴの労働者地区の中の地下室に住んでいた(1954-1975年)。その地下室には多数の紙片が洗濯ロープに洗濯ばさみで留められていた。この洗濯ロープ方法を Stadler は「紙片経済」<sup>6)</sup>と呼び、その思考のための合理性を分析している。それらの紙片は加筆され、削除され、別の紙片と重ねられ、順序を変えられる。ホールは時間的経過順の最初の原稿を訂正し、加筆し、新たに構成した。その構成的「統一性」は何よりも章の構成に示される。12の「章」(「労働について」、「到達可能なものと不可能なもの」、「語る、しゃべる、沈黙する」、「読者」、「芸術」、「書くこと」、「雑録 *Varia*」、「薬剤師」、「文学」、「夢」、「死について」、「形象」)は

<sup>4)</sup> Haupt : Ebd., S.215.

<sup>5)</sup> Good, Paul : *Einzelnes eigenes Leben zur Erkenntnis bringen, das ergibt allemal Kunst.* In : Ludwig Hohl (1904-1980). *Akten der Pariser Kolloquiums.* Bern (Peter Lang) 1994, S.101.

<sup>6)</sup> Stadler, Ulrich : „Die Notizen“ oder Von der unerreichbaren Vollendung einer Sammlung. *Versuch einer Gattungsbestimmung.* In : *text + kritik* 161 Ludwig Hohl. München (edition text + kritik) 2004, S.43.

異なるカテゴリーである。第7章に「雑録」があり、さらに「雑録」に対する付録（「自伝的なもの」）が続く。「夢」の章は、ホール自身の夢の記録である。童話、寓話、ボードレールの『パリの憂鬱』のような街頭スケッチ、多数の引用がある。「統一性」を語るのはますます困難となる。「体系的な哲学論文が問題となるのではなく、互いに緩やかに配分された、部分的には相互に矛盾しているテキストたちの集合」と Haupt は言う<sup>7)</sup>。だが Stadler は「『覚書』が置く（統一性の）要求をもっと真剣に取る」<sup>8)</sup>ことを提案する。『覚書』の第一巻（1944年）の Arnim Mohler による書評、「人は個別なものそれ自体を取ってはならない。作品は関連の中で読まれなければならない」（VIII/7）。「統一性」は遑って言及されている。ホールは『覚書』の断章群を書き上げ、それを読み、その時間的な距離からその統一的なものを考えた。ホールがしたこと、統一性を読み取ることを『覚書』は読者から要求している。ホールは本を、その本が作り出す読者として読んだ。そしてホールは作品によって読者を作り出し、その読者はホールのように「統一性」を作り出すだろう。人間が生から「豊かである」ことを要請されているように、読者も同様に要請されているという自己言及的な構造からホールの散文の力は来ている。「世界の一つのスケッチのもう一つのスケッチ。断片的なものの確定的なもの。／一人の人間が君に書いてくる、これは手紙ではない、そうではなくいくつかの覚書、抜粋である、関連なしに並べられたものである、と。／しかし受取人である君はそれを手紙として把握する。距離があるところではすぐに、それは一つの手紙である。死はとりわけ、一つの生の結果に対する距離を与える」（XI/16）。

### 3 精神史

ホールは多数の断章を結び付ける流れを作ろうとした。その流れは精神の運動が描く軌跡である。ホールにおいて、精神の活動が問題となっている、それゆえに『覚書』は「精神的労働者」にとっての一つの羅針盤となるのである。しかし精神とは何か。ホールは概念を形成し、その概念を用いて探究する哲学者ではない。精神の概念を読者は様々な文から作り出すことを要請されている。前述した価値、知恵の主体として規定される精神だが、「精神」についてのホールの表現を読むことで、私たちはホールの世界に導かれるのである。

精神は力学的な用語で語られる。「一人の人間の精神の強さは不安の状態の中で測られる。（…）精神的に強い人間はまさに最高の危険の中で、できるだけ早く理性にその避難所を探し求める、彼は理解力によってとりわけ救いを探し求める！」（II/17）。精神はまた量である。

<sup>7)</sup> Haupt : Ebd., S.228.

<sup>8)</sup> Stadler : Ebd., S.49.



「〈一つの世界〉を自分の中に持っている人たち（創造的な人間たち）、彼らは位階あるいは段階に従えば、より高いところにいるのではない、そうではなくより大きな量なのだ」(XII/21)。

精神はそれ自体としてあるのではなく、世界を通してのみ現実的な形を取る。「科学が発見することが多ければ多いほど、人は強い精神と弱い精神の相違をいっそう明瞭に以下の細部において見ることができる。つまり弱い精神は、すぐに終わる。強い精神にとっては、視線は世界の無限性にますます多く向けられる」(XII/56)。世界の中で精神は、肯定する力である。「市民は人間を否定的なものに関して測定する - 悪い特性を持っていない人は、良い - 精神的に働く人は肯定的なものに関して測定し、言う。良き特性を持っていない人は、悪い」(II/191)。「精神にとって世界は常に若い。精神の本質は、いつも朝を考えることができるということの中にある - だから永遠の朝を。(…) (来たるべきものへ向かうことが繰り返されるので、その線は一定不変なままである。われわれの中に不変性が生まれる、とりわけ最高のものの不変性が、つまり精神の線が)」(XII/66)。「精神的な意志 - 探求意志 - はあまりに大きく、あまりに内在的である。それは彼らに最高の享樂の中、彼らが企てるすべての中にまで同伴する。その意志は彼らすべてよりもっと強力である。すべての問いの外に置かれているその意志は月のように一緒に移動する。(…) そしてそのように彼は上昇し上昇した、そしてついに彼は見た。／彼は世界を見た。 - そして彼は見た、すべてが欺瞞で、空虚であるわけではないこと、無駄ではない格闘や行動が存在していること、そこから殻が突然衣類のように落下する行為や生が存在することを。そしてそこに - - 一つの意味 *SINN* が、一人の人間が、一人の最高の人間が、愛が立っている」(XI/41)。1930年代に世界を、人間を肯定することは容易なことではない。貧困、悲惨、不安、戦争が世界を覆い始めていた。そして精神とは、その悲惨を承認するのではなく、それにも拘わらず人間、生と世界を肯定する力の謂いである。そしてそれが精神の力なのだ。

精神は自律的な運動として考えられている。精神は世界を巡り、そして回帰する。「人間は、再び自然となるために、最初に自然との断絶を見なければならぬ」(II/140)。「私もまた、世界はむしろ善(肯定的)であると信じる。(…) 生は本質的に苦悩であるから。どのように、すべての状況において、精神がものごとから別れるか見ることで、それが幸福である」(XII/13)。

精神は反省的な知である。「人間の偉大さ - 人間が持っている希望、偉大さへの道 - は、人間の矮小性の認識、人間の相対性、つまり人間の周囲の計り知れない夜の中の関連の認識の中にある。夜の支配の中にはない、全体的なもの支配の中にはない、そうではなく、彼自身の線の引き方の清潔さの中に、彼の歯車装置の明晰さの中にある。一つの小さな時計のように人間はサハラは無機的なカオスの真ん中にある。彼の機能することの明

晰さと正確さの中に、彼の偉大さがある。彼の小さな円を照明することの中に。しかしペンがペンとして仕えようとすれば、その時ペンは爆弾以上のものとなるだろう」(II/104)。

精神のさまざまな属性（それは精神の「個別実行」である）。精神が「受肉」され、精神的人間となる。精神は具体的な現象を通して現れる。「私は謎をまったく愛していない。私は謎を否定しない」(II/289)とホールは言う。ヘーゲルのように「現実的なものは合理的である」。どんな非合理的なことも、その隠された合理性を持っている。「人間の理性は、真剣さの前で霧散する子供遊びではない。そうではなく真剣な事柄である。一つのものを除いて、つまり世界を除いてすべてよりももっと強力な、最も真剣な事柄である」(II/130)。「偉大な知性、何らかの才能と結び付けられ、意志でもって応用されたそれは、常に業績と発見に導く。偉大な知性は稀である。才能は頻繁にある。両者が意志でもって応用されることはもっとも稀なことだ」(II/80)。そのすべての働きが精神である。

「認識はわれわれを救う」(XII/16)。ホールの多くの文は定義ではなく、「要請」,「命令」である。精神の活動を命令している。「知の種類。問題となっているのは、巨大に多くを知ることではない、そうではなく正しい時間に正しいことを知ることである。大変多くを同時に知るといふことは、図書館の事柄である、人間は歩きまわる図書館ではない。／どの瞬間も最高のものを与える準備をしている。人はただそれを受け取ることができなければならない。この受け取ることができるということ - それが最高の知なのだ」(II/200)。

精神は具体的には認識という姿をとるが、それをホールは鏡のメタファーで語る。「鏡。生きている木々を直接測定することは困難である。人はそれらをその影において容易に測る。多くの極度に重要なものごとをわれわれはまず鏡の中に認識する、例えばわれわれ自身を化学反応において、あるいは人間を彼の行為において認識する。現在の共同体運動の鏡は、それが関係を持っている過去の時代である」(VII/113)。

認識に関しては「見る」の比喩で語られる。「見る *sehen* / *see*」は「理解する」と同義であるが、ホールは例えば、「見る」を表層的にとらえる。「ものごとへの二つの関係が存在している。I 存在あるいは理解(同一化すること)。II 見ること。それらは一緒に現れない。重要なことは、IIは、Iが存在する限り、在ることはできないということだ。例えば、〈私は空を見る〉。ただ、私が空の本質を放棄することによって、空間に次ぐ空間を放棄することによって、ただ私が同一化されていない、理解によって満たされていないならば、私は〈空〉を見ることのできる(青いなど)。／私は一つの惑星を、私とその惑星の理解(同一化)によって貫かれていない限り、ただ見ることのできる。同様に私自身を」(XII/22)。ホールはそれを次のようにパラフレーズする。「いつでも何度でも、私がかつて(数年前に)月について聞いたことが、私の心に浮かぶ、何度も私はそれを書きあげようとした、そしてついに私は

それを書きあげなければならない。そしてそれがそうこうするうちにもう真でなくなっていると、それは今なお、真である以上に真である。われわれは月の風景を、われわれ自身の地球のある地域よりももっと正確に知っている」(XII/23)。ホールにとって認識の内容に劣らず、その表現が重要である。だから、言葉遊び的に、「もし眺めること *schauen* と身震いすること *erschauern* が語源的に関連しているのなら、素晴らしいだろう」(XII/45)。あるいはメタファーによって、「光の強さ - 日光よりも明るいのはただ眼だけである」(XII/47)。

「見る」は最も日常的な認識の一つだが、おそらくそれゆえに人は「見て」いないのだ。観察について。「私が小さな都市の森の中を歩いているとき、私が出会うこれらの人々。彼らが、彼らの上方で体操をしているリスを見ないということ、彼らのでっぴり肥った歩みから草の中に素早く逃げる小さなネズミに気づかないということ。彼らが内的なものを見ないということ」(VIII/12)。「すべてを観察によって。すでに一つの事柄を考えている人は、ほとんどそれに対する視線を必要としない。 - ただ決定的な視線を」(XII/76)。

過去の認識は視覚的な比喩によって表される。「金メッキする遠方。 - 道路を放浪する。様々な不足が私にそうさせたのだ、手段もなく、人間との交際もなく。それらが今日起こったように昨日起こった重い妨害、生産の持続的な喪失を検討しながら。 - それに対して古代人たちの理想像を掲げながら（古代人たちはいつも完全な生産の中に、囲まれ、促進されていた！）、私は突然、一つの予言的な観念の中でのように、またどの顔の中にも、どの形象の中にも、ものごとは、それらが非本質的なもの（中断させるもの、荒涼としたもの、否定するもの）を立ち去らせ、ただ特別なものを再現するように、互いに近寄ってくることを思い出す。そしてそれが私に、私の放浪の中でも同じ放浪を見ることを可能にする」(XII/11)。「遠方の中のごぶ状に隆起した地面は磨かれた板の滑らかさを獲得した。〈以前 …〉。以前とは一つの理想状態だった。 - しかしただ、君がもっと鋭くそちらを見ないので。実際には当時、永遠の上昇と下降、苦境からかろうじて救われることが永遠に回帰する状態があった」(XII/143)。

Seher（見る人）は「預言者」のことである。「すでにやや長い間、〈半分盲目〉という言葉がとても気に入っていた。預言者は常に自明なことに半ば盲目だった。（窓とメガネの社会の中で望遠鏡と顕微鏡は盲目とみなされる）」(II/310)。「私は、なぜ私が盲目の人をそんなに高く評価するのか、見つけ出すためにそんなに長い年月を必要とした。私が見ることをそんなに高く評価していたからだ。盲目性は見ることを高める」(VII/119)。

価値は語られることではなく、実行されることを求める。認識は行為へ移行しなければならない。その移行の橋渡しをするのが「空想」である。それをホールは次のように定義する。

「空想は、遠い（別の）状況を正しく想像する能力である」（XII/57）。「空想は最も強力な精神的な能力である。世界との精神の戦いの中で、この巨人の戦い、バルザックの戦いの中で勝利のための手段は、もしそれが空想でなければ、いったい何であろうか。－しかしすべてのもののために力が必要とされる。ここでその力の形式は何か。それは、その中で精神が勝利するだろう、精神的な正しさが可視的になるだろうそのような別の、未来の状況を絶えず、何度も、想像する能力である。とても明瞭に、とても激しく、そうしてこの想像が今の空気の希薄な空間を克服し、圧力の相違を廃棄するほどに、われわれに、持続し続けるために（われわれの理念の中で）、建て続けるために（というのは、建て続けることを止めることは、放棄することであろうから）一つの国 *LAND* を与えるほどに。しかし、眼に見えないものの中で建て続けること、非現実化 *Unrealisation* の中で建て続けることは途方もなく難しい。口でもってばかりではなく、精神でもって言うことができること、そしてそれゆえに絵を描き続けることができることは。－働き続けるための一つの国。というのは、われわれは一つの国を持たねばならない。／そのようにコロンブスは彼の航海に出ていった。彼は何も見なかった。空想だけが彼を大陸に導いた。想像された国を地上の国に導いた。／そしてさらに、空想の意義は他の人たちとの関係の形成のためにとっても大きい。／だから重要なのは、人が最も鋭く思いつきと空想を分けることである」（XII/81）。あるいは、「空想。彼は遠方に対して力を持っていた。それゆえしかしまだ、近さが不利なときには、彼は遠くの良きものによって自分を救うことができた」（VII/70）。

精神は力の用語法で語られた。ホールの断章は行動への命令となる。「空想は、一つの贅沢ではなく、人間の〈救済〉のために、生のために、最も重要な道具の一つである」（IX/20）。「空想が存在する保証を持つように、空想は、この行為へと導かねばならない、あるいはこの行為以上のものでなければならない。（もっと多くの行為を！）。これはすべての真の芸術における場合である」（XII/82）。

これまで、精神の内在的な側面を見てきた。「空想」は精神の世界への橋渡しの役割を持つ。そして精神は「結び付ける」。「血が結び付けるということは一つの狂気の考えである。結び付けるのは血ではなく、精神である」（XII/51）。「どの偉大な精神も常に一つの統合である、しかしその精神はそれを知らない、その精神は分析的なものを強調する。というのは、その精神は向こうに導くから、それゆえに必然的に統合的である。橋のように。しかし橋はそれを知らない、橋は〈そこへ！〉と言い、向こうに導く」（XII/128）。「証明するとはただ、一つのものをもっと多くのものたちと（正しい！）結合にもたらすことである」（II/179）。これは、ホールが書き上げられた「覚書」群を「結び付ける」ことに苦心したことを示している。彼はそれにおおよそ10年を費やした。そして同時に、私が本稿で試みていることも、

私による「結び付ける」ことである。それが同時に「解釈」となるように。

ホールは、理性、認識、知、空想などを統合する力とし精神を考えている。そしてその精神は行為する、世界に出ていく、そしてその都度の抵抗、摩擦の中で精神は試練を与えられ、鍛えられる。それは終わりのない活動である。「行動することが最高のものではなく、認識が最高のものであるので、行動することは正しいことである。というのは、それだけが中断されることのない認識を供給するから。／ものごとが正しい瞬間に、行動することから認識することへ、認識することから行動することへ移行することが救うのである。そして人が70年間賢明であったならば、彼は71年目も、そうであるために、賢明にならねばならない。健康は無である、しかし健康への努力は高い輝きを与える。すべての天分はただ、怠惰への意志を減少させることの中にある。／私は大抵の人間たちの改善できないことに慣れ始めている。それゆえに学ぶことは学ばれたことより以上のものである」(II/264)。

精神は行動する。世界の中に入っていく。しかし、「世界がほとんど精神によって、人間の活動によって変えられないことをわれわれは正確に知っている。しかし精神を通して起こる変化がどんなに小さいものであれ、われわれは、その中に生全体があること、その中にだけ価値があることを知っている」(II/122)。世界、「変えることのできない諸条件は、基礎である、それらの上のみ君は最高のことを為すことができ、為さねばならない」(VIII/25)。「良き精神と悪しき精神について。しかし別の種類の精神にとって事実こそはまさに幸福を形成する。彼らの理念をますます豊かに勢いよく伸びさせる栄養土である、永遠に父と母であり、彼らの理念を無数に拡張する。一方は現実のどの発展も恐れ、負かそうとし、他方はそれを歓迎し、すべての人に共同作業を要請する」(II/235)。精神は一人一人の人間によって担われる。「一つの並はずれた精神の強さは、同じカテゴリーの困窮に悩んでいる他者(…)の立場に自分を置くことに属している」(XII/18)。それは精神のコミュニケーションである。「人間は、彼にコミュニケーション能力があるに比例して生きている。(…)だから救済は、その根本において、人間とのコミュニケーションの中にある」(II/50)。コミュニケーションによって、「精神的な高さは私のものと君のもの間をもう区別できない。人は自分自身の出来事を世界の出来事と同一視する、世界の出来事を彼自身のそれと同一視する」(XII/98)。「君が変わるならば、世界も変わる」(II/137)。そしてその精神が現実の歴史・世界の中で活動するその軌跡が、「精神史」である。「唯一の - 人間の伝記」(XII/52)。私は「精神史」という「統一性」を『覚書』に読み取り、それを記述しているのである。

#### 4 私という始まり

精神の歩みの始まりはどこにあるのだろうか。精神を受肉した存在が精神的労働者であるが、自分を「精神的労働者」と規定するのは「誰」か。ホールにおいては、それは「私」である。『覚書』がどのように始められたのかホールは言及していないが、小説を書きながら、彼はモンテニューがしたように本を読み、考えたことを記録した。30歳のころホールは人生と格闘しながら、いわば自分を鍛え、励ますようにしてこれらの言葉を書いた。その内面性が「私」である。始まりには「私」がいる。

それは記述した「個性」の概念と呼応している。ホールが本を読む場合、「私に外部から出会うものの中で、私の精神とある強い関係に立っていたものを際立たせることだけが重要であった」(IXの序文)。しかしそもそも、人は精神の活動をどう始めるのか。「ただどこかで始めることが重要である、始まりのところで始めることではない、いかなる始まりも存在しないのだから」(II/108)。始まりは小さな事柄でよい。「最高の知恵の中に回帰し、その知恵の主要部分を形成している契機」、それは「最小のもの、その意義の知である、眼に見えない始まりの知、見たところまったく価値のないものごとの知である。それらのものごとは合わさって一つの力を形成し、世界に対する力を獲得する」(II/246)。あるいは、「最初の行為は、(相対的に)盲目的であっても良い。後にその中で光が上昇する。最初の行為(それは相対的に盲目である)の中に見出された、光の火花はそれを通して光へと上昇する。それは見ることである、この見ることが一つのより大きな行為を産み出す …」(XII/17)。「人間の力の実現の場所は個々人のもとにある、万有のもとにはない」(II/174)。ホールは優れたアルピニストだった(ギムナジウム時に「登山日記」を書いている)。とりわけ精神の活動は登山の比喩で語られる。「認識は頂上である、しかしその道はどのようであろうか。アルピニストの平地の向こうにこの上なく素晴らしいものとして頂上がのぞいている、しかし彼の唯一の思案は道に向けられている。生の頂上まで登ろうとする者の道は何であるか。正しいことを為せ。／もっとも多く正しいことを含んでいる行為はどのようなものか。君が若いならば、多くが君に提供される。－だから、その中に君が正しいものを見る一つの行為をつかめ。その中における正しいことは大きくなる、そして君をもっと正しいものへ導く灯となる」(I/48)。ホールはそうのように始めたのだ。ホールには迷いはなかった。「私は、最も深い根底において、誰もが、彼ができることについて確信していると仮定している。－もっと正確に言えば、彼の最も内的な確信の中で、彼ができることについて一つの正確な知があると仮定している。この深い根底はとてつねにわづかの人の表面に押し寄せてくる。また人は自分自身に関してあらゆる種類のいたづらをする。バルザックにおいてはその根底

はほとぼり出てきた、そして彼は自分自身について真理を言った、「私は現在の社会全体を頭の中に持っている」 - 「私は天才になろうとしている」。ゲーテやヘッベルも自分を知っていた」(XII/129)。ホールの場合は、「しかし、ある人が作家であることの真の基準は、すべてにもかかわらず、ただこれである、人が自分自身の中に、表現するという打ち破ることのできない激しさを持っていること」(IX/61)。

しかし「私」の内面的な決定が社会と一致することはない。ホールはギムナジウムを放校された。「おおよそ私の 17 歳の時、それでもって私が当時既にとくに学校やあらゆる教師に対して用意していた、重い鎧の装備のゆえに。私は一度もその鎧の装備を脱ぐことはできなかった。そのような鎧の装備が外から調達され、単にあてがわれたのではなく、自分の実体によって形成されているときに一そう脱ぐことができなかった」(II/260)。ホールは自分を排除する社会を所与の条件として認めるが、批判を止めることはない。そこから『覚書』全体の強い論争的な調子が出て来る。それは力のメタファーで語られる。「考えることはとりわけ勇氣である。 - 18 歳で（おおよそ）私は考えることの中で一つの強い始まりをした。それから中断の年が来た、とりわけ私がただ、ひよっとしたら別の人たちは彼らの説、彼らの確信でもって正しいことがありうるのではないかと考えたから。私には、他の人たちの確信を無視する大胆さが欠けていた。しかしそれだけが考えるということである。／確信を伴ってではなく、他の人たちの確信に反対してでもなく書くこと、それらを完全に無視すること、たとえそれらが千回も強調されても - そしてそれでも書くこと。／私は、他の人たちの発言、証言を無視すると言ったのではない、そうではなく確信を。／数年の中断の後で、一つの主として神秘的な思考が来た。その神秘的な思考はとりわけ、人格を強固にする目的を持っていた。それから再び一種の間隔が続いた。その間隔の中でゆっくりと思考が上昇してきた。その思考は持続の保証を自分の中に持っていた。それは 1934 年に初めて一つの完全な高さに達した。それは神秘的な思考ではなく、*世界*を考えることであった。多方面にわたる思考、ますます大きくなる対象の総計を捕える思考。ますます多くを要求する思考、ダイナミックな、世界と一緒に進んでいく思考、学ぶことを要求する思考、無限に *ad infinitum* 考えること - 要するに、現実的な、持続する思考」(VII/166)。

ホールは、自分を排除する世界はいったい何であるかと考え始める。ホールの思索はホール個人の「私」の存在からしか考えられない。「一つの素晴らしい表現、〈私は私のもとにいる〉(“être chez soi” 〈自分の家にいる〉)」(VII/64)。「独立的になること。国家や家族に完全に何も求めないこと（社会的な証明、地位）、そしてそれ以上であるもの、そもそも人間たちの意見に何も求めないこと、そして最も困難なことであるが、ときどきはまた一番近い人の意見にも。／私は在る *Ich Bin* と生の語りは言う。〈私はなる *Ich werde*〉と話す生はない。

〈私はいつも居合わせていない - いつもただ突進し続ける - 存在しているもののそばを過ぎて - ある外的な目的の方へ〉。もっと実践的に、〈具体的に〉語ること。世界(国家、家族、他の人たちの意見)は、私が一つの良い考えをよく書きあげるか、話すか、あるいはただ考えているのかどうか、私に問わない、そうではなく、私が聖別された形の文書(小説、ノヴェレ)を分厚く呈示可能にしたかを問うのである。〈出して見せる〉と彼らは言う。最高のもを人は出して見せることはできない」(VII/143)。

「固有性」は、「私」を補う概念である。「〈私を誰も打ち負かすことはできない〉。そのようにある人は話すことができた。彼は付け加えた、〈人は私に苦痛だけを加えることができる〉。それはどういうことか。どの肯定的な力も打ち負かされない。〈肯定的な力〉とはどういうものか、力は常に肯定的ではないか。／どの力も肯定的である。君がしかし多くの個別の力から成っているならば、すなわちすべて他のところに属している力、君が属していない力から成っているならば、君は肯定的ではない(…)。肯定的な力ではない。君は、不幸な出来事の中で力に同行する忠実さを持たないだろう。力は君のものではないので。それらの力はただ苦悩している。君はしかし、君自身をそれらの力から離したので、すべてのものを欠いている。君は死につつある。／そのように〈肯定的な力〉は正確に見て、〈固有の力〉である。君が自分がそうであると称しているものごと(力)ではなく、それと君が同一であるところのものごとである。というのは、人はおそらく自分はものごとであると称することができるのだが、ものごとはまた力である」(XI/39)。「君が肯定的に - 自分の生ではなく - 生きることができないところで、君はすでに否定的に生きている、他の人たちの生を生きている。私によって使用された言葉、私の言葉ではないその言葉が、すでに剽窃であるように。〈私の言葉〉、それは私によって責任を負われたという意味である」(I/8)。「私」が考えることを、「私固有の力で」「私の言葉で」表現する。それがホルの『覚書』である。そうして「君が現にあるところのものすべてに、君はいつかなるだろう」(XII/152)。

ギムナジウム時代の『青春日記』<sup>9)</sup>にはバルザックのような天才志向、強烈な自我の観念が見られるが、『覚書』の中で「自我」は所与の条件としての客観世界との関係に中にある。「自由は、人が必然的なものに同意しているところにある。天才とは、ちょうど必然的になったものを、必然的として認識する存在である。天才から善の概念は導き出されている。天才が果たすものは善である。認識は、前代未聞に異質なものを自然なものの中に運び込む」(II/139)。「私」が問題になれば、同様に「他者」が姿を現す。「生は決して〈私はなる〉と言わない、そうではなく私は在る ICH BIN と言う。／その時、労働者は、みすぼらしく死んで

<sup>9)</sup> Vgl. Hohl, Ludwig: Jugendtagebuch. 1. Auflage, Frankfurt am Main (Suhrlamp) 1998.



いく者は？。あるいはむしろ労働者たちは？。彼らもまた存在している。そしてまさに、彼らが現実的に在るものの、彼らの意識が目覚めさせられなければならない。そして彼らもまた言うだろう、〈私は在る、そして私が在るので、君もまた在るべきだ〉、つまり一つの変えられた条件」(II/64)。「作品を受け取る人たちは他者たち」である(II/146)。「人はさらにまた他の人々を考える必要はない。良き(正しい)思考は自動的に他の人々へ導く。人は自分の中にも、他者たちの中にも生きていない、そうではなく彼の生産の中に生きている。人が一度でも自分を見ることができれば、人はまた他の人々を見る」(II/269)。

「そして最後に私は今なお一つのことを信じている。世界を。世界はすべての人格の中で最も偉大なものである」(I/38)<sup>10)</sup>。

## 5 実践

ホールにとって生きることは、世界の中における精神の労働である。「人間の価値、つまり人間が価値を欲するということが。価値を欲することは、働くことと同一である。(…)労働は運動である、しかしわれわれの運動である。回転している、現実的な水車の輪は、働いている。というのは、回転することは彼の運動であり、彼の完全な可能性であるから」(I/3)。「〈人間は豊かであるという義務を持っている〉という言葉に。時間を悪しく過ごすことは、不器用者の事柄である。もっと高いところに立っている人にとっては各々のどの時も完全に過ごすことが問題となっている。 - 各々の時間の種類の中で完全に」(II/144)。

ホールは、生の意味は何かと問わない。その問いは意味が与えられていることを前提としている。そうではなく、精神は、人間が生の意味を作り出すと考える。自分の生から価値を産み出せない人の生は価値がない。そして、価値を産み出そうとする人にとって「生は短い」。「人間はただ短い時間だけ生きる。われわれが時期を逃さずにわれわれの人生の長さについて知るならば、すべてはとても変えられたものとなるだろう。／人生のリアルな持続時間はどちらだろうか。それは、君がどれほど頻繁に、どれほど以前から君の生を短いと考えているかによる。／われわれが行動することはすべて、それが価値を持つとすれば、われわれの人生の長さの観点から行動されなければならない。／そしてそのような行為 - 外的な力ではなく、内的な力が君を強いる固有の行為 - それは生を与える唯一のもの、救うことができる唯一のものである。／そのような行為を私は働くことと名づける。／正しい道は、

<sup>10)</sup> カフカは言う、「お前と世界との決闘に際しては、世界に介添えせよ」(フランツ・カフカ(吉田仙太郎訳): 夢・アフォリズム・詩。(平凡社)1996, 170 p.)。「私」性に最高の価値を与えることは、「世界」を同様に評価することと同義である。

われわれに可能である完全な活動の展開である。もっとも完全な活動の。つまりわれわれの能力（われわれの諸条件）に関して、そして他の人たち（われわれと同様に他の人たち）への作用に関して測定されたもっとも完全な活動の道」(I/1)<sup>11)</sup>。

ホールが言うのは単純なことだ。「君の個別のものごとをなせ」。「ゆっくりと、君の可能性の、君の力の尺度に従って、一つ一つ。君の生は変えられている。／彼、歴史の英雄が跳躍をしようとするのではない、多くの瞬間 - 彼が並べた個別の実行 - が彼をそこに運んだ。彼はこの瞬間に、先行している堅実な実行の何かある瞬間における以上にすべきことを持っていなかった。（それは私が別の個所で言ったことと一致する。つまり、倫理学を書くことは、スピノザにとっては、スピノザがいたところでは、容易だった）。／強大な革命家の一人が決定的な瞬間に見出したと言われている言葉を思い出すならば、つまり〈ここに私は立っている、私はそれとは異なったことをできない〉。／おお親愛なる友、人間よ、生はしかしそんなに困難ではない」(I/20)。ランボーなら言うだろう、「弱かろうが、強かろうが、とにかくおまえはそこにいる、それが力なのだ」<sup>12)</sup>。

ホールを理解するときに困るのは、彼が言うことはあまりに通俗的に聞こえることだ。彼が歴史との遺産として受ける価値は、世俗的に言い古された事柄である。彼はそこにこびりついた汚れを削り取り、原初の輝きを再興しようとしている。それは言語表現の仕事である。

<sup>11)</sup> 「労働は常に一つの内的なものである、そして労働は常に一つの外部に向けられていなければならない。外部に向けられていない活動は、労働ではない。内的な出来事でない活動は、労働ではない」。「一つの行為の内的なものを決定しているものについて、行為の完全な必然性」(『ニュアンスと細部』II/11)。

前述の「個性」の概念が「労働」(精神の働き)に適応されると次のようになる。「人間の働くこと、世界を変える作用は三つの段階で遂行される。それらは、1 大きな理念。2 (その大きな理念に適合する) 個別観念。別の言い方をすれば、大きな理念の応用、それらのもっと小さな理念、個別的なものの理念への解消。3 (個別観念に適合する) 個別実行。／大抵の人間たちはこの三つの段階の第一にとどまったままである。大きな理念のもとに、あるいはそれに向かい合って一種の展望点の上にとどまっている」(I/18)。建築の比喩で語ると、「一つの並はずれた建物の建築の中に大きな行為を調べてみよう。／君は一つの建物の素晴らしい理念を持っている。君はその大きな理念を個別理念に移し替える。その段階はそのようだ、壁はそのようだ、屋根は、敷居はそのようだ。／その時、君は実行する、敷居、壁、ドア、すべてを、個別性があらかじめ描いたように。それは第三の段階である。この実行は、純粋に小さな行為たち、無数の、骨の折れる、通常行為の中に本質を持っている」(I/19)。

「大きな理念」についてホールはフロイトを例として語る。「大きな理念と良き考え フロイト。それに対して人がフロイトと意見が一致なくても、それはしかし、彼が一つの大きな理念を持った男であるので、いつもただ彼によって表現されたものただ一部に触れるだけである。つまり一つの良き理念は第一に、遠くまで輝く松明である、それは照らし出す、その場所に反対の領域でさえ照らし出す。／彼はそれをもう必要としていない。人は彼から逃れられない。たとえ人が彼にとってもっとも敵対的な人間であり、彼の前で山のもっとも辺鄙な峡谷の中に隠れるにしても - 天からの、あの光の反射はいつか中にまで点火するだろう」(II/73)。「永遠の強さとは、人間が徐々にすべて(すでに起こってしまった、計り知れないこと、火の獲得から精神分析まで)に、潜在のすべての妨害を通して、到達したということだ」(II/224)。フロイトは『夢判断』を書いたとき、それが社会でどんなに否定されようとも、精神分析の理念(無意識の発見)について揺るぎない確信を持ったに違いない。しかしフロイトの場合も、数知れぬ「個別実行」(臨床、観察、考察など)がその大きな理念を築き上げたのである。

<sup>12)</sup> ランボー(宇佐美育訳): 地獄の季節。ランボー全詩集。(ちくま文庫) 2003年。

私が引用を多用するのは、その表現の作業は価値の力を取り戻すことと同義であるので、その表現の「ニュアンスと細部」を具体的に見るためである。「大きな理念、個別理念、個別実行」の考えは、「私が紙の上に書いたのではなく、石を打って刻んだであろう文である」(I/24)。

ホールは万人に説教しているのではない。そうではなく自分に、あるいはどこかにいるに違いない精神的労働者に語っている。ホールが語るのは、労働の個々の歩みである。「アキレスとあの昔の戦士たちの鎧が輝いている。－それは何百年を通して輝いている。近くではそれは埃と汗で暗くなっている。／どの個別な一歩も、一つの抵抗を壊すことである。どの壊すことも苦痛を作る」(I/25)。個別実行をホールは登山の比喻で語る。「高山から。私は、いかなる高山の登攀においても、喜びを持ってその一歩をしたことがない、と言う。個々の一歩は全く単純に厭なものである。同様に私は、例えば書く際に私をそこに座らせること、(私を再び座らせること!)、筆をつかむこと、要するに個別なことが厭ではなかつたろうということ思い出さない。／人が希望することのできる唯一のことは、個々の歩みが全体によってとても完全に保たれていて、それらが無意識のように起こることである。／そして高山登攀の個々の歩みがなぜ、全体のことに対立して厭になるのか、それについては私にはいかなる疑問もない。全体は新しい、歩みは古い。－ただ新しいこと、変化させるもの、生産的なものだけが人間を喜ばせるのである。ただ生だけが生を喜ばせる。(死は生を喜ばせない)－一つの新しい全体をわれわれは一部分は古い建築石でもって、この場合、歩みでもって作る」(I/26)。

あるいは「道」のメタファー。「世界は道路から成っているが、その道路のごくわずかだけが通行されたばかりである。君の周囲のすべての掴むことのできない空間は、君がそのようなものとして認識することができない道路から成っている。人間は道路を建設する必要がない。／一つの道路を認識する勇気を持つこと、それが業績である」(I/36)。「一つの精神的な場の力は、とりわけそこに導く道の長さから成長する。／最大の抵抗の男、それからしかし後の時間に最大の決心をすることができる男、この男は、その時、集められた認識のゆえに(彼が自分の中で克服した抵抗によって)おおよそ無敵である」(II/131)。

精神は抵抗をいわば必要としているので、疲労、停滞は必然的に現れる。ホールはそのようなとき、「休息すること、何も考えないように努力すること」をした。「それはいつも、私がハリネズミの森と名づけた、その都市の森の中で起こった。しかし今日、私は月の森へ行った。－決定的な体験だった。見通すことのできない結果を持った内的な体験。とっくに準備されていた認識が結晶化し、完全な明晰さになった。私は、今度は、すべての似たような場合に起こったことを探求した、私は熟考した。それは、精神を、家に残したままにして

置いた対象とは全く別の対象に向けることであった、一つの別の活動だった。そして家に残されている仕事に再び向かう、新しい能力。そして、／この認識はしかし、われわれが、休息によってではなく、生産することによって、成長するということであった。(あるいは休息ではなく、生産が強くなる)。／休息は殺す。眠りとは何か。それは例えば、それによって精神が元気を回復する、精神の休息であるか。違う、それではなく、別の、もっと強いものでさえある生産に向かうことである。この新しい活動によって精神に新しい源泉が開かれ、それから精神は(目覚めるとき)人が言うように、〈休養して〉、そしてそれはだから、実際にはまさに、休息によってではなく、一つの別の激しい活動によって元気を回復して、以前の活動に戻ることができるのだ。予期せぬ方向から精神は新しい力を持つてくる。休息は存在しない。休息はただ死である。／(…)木も、動物も、人間も精神も、休息の中に生きることができない、生は決してある高さの上で耐えていること、不動のままとどまることはできない、生は常にただ生産であり、上昇である。そしてそれからいつか死が来るのだ。／自然は、古人が教えたように、休息と運動に従事しているのではなく、そうではなくただ運動に従事しているのである」(VII/20「月の森とハリネズミの森」)。「人は働くことを止めてはならない。潜在的な期間のあいだ持続的な練習を続けてこなかった者は、変化した条件の中に自分を見出すのに時間を必要とする」(I/12)。準備は麻痺させる。「人は待つてはならないということ、つまり、どの活動も一つの完全な活動でなければならない、準備であってはならず、その瞬間を満たし、自分自身の中にとどまっていなければならないということ」(XII/80)。

労働が順調に進めば、それには何も言うことはない。しかし精神は容易な課題に向かわないので、いわば不可避な苦難に対する方法をホールは模索する。その模索自体が、『覚書』の内容となるのだ。「方法。ものごとの中に自分を入れること。泳ぐことをわれわれにとってその一つのイメージにしよう！。急激な動きもぶつかることもなく行動すること。怒って周囲を殴ること、特に陸の近くでのそれは何の役にも立たない。すぐに始めるのがベターである、たとえゆっくりであっても。要素が運ぶ、それが主要なことである。良き泳ぎ手を作るのは、力ではない、そうではなく要素への信頼である、すでに身体的になった信頼である。(もっとも信頼に満ちて要素の中に身を置くことのできる人は、最良の泳ぎ手である。わずかの力で魚は矢のように突進する)」(I/10)。

さらに「事柄 Sache」の方法。「勝利のテクニク。勝利の最善のテクニクは、勝利のテクニクを持たないこと、一つの事柄を、専念してこの事柄に奉仕するテクニクを持つことにある。／勝利のために戦っているすべての人たちに、遅かれ早かれ一度は疲れが襲う。この瞬間から利点は決定的に、事柄のために戦っている他の人たちの側に向かう。なぜなら

ば彼ら自身が疲れていようが、いまいが、事柄は倦むことなく存続するからである。――一方で、ただ約束されていた目標であった勝利は人々の力と気持ちに依存している」(II/284)。ホールにとってその「事柄」は思索を言語によって表現することである。その事柄があったからこそ、ホールは貧困や苦境を乗り越えることができたのである<sup>13)</sup>。

「そして最初の試みが次の地帯での困難と危険化をもたらしたならば、それはすべての新しい事柄の宿命である」(VII/144)。だから困難は恐れる必要はない。「もし私がとても勤勉であるならば、私にとって何も危険ではない」(I/5)。勤勉、努力、忍耐、ホールの述べる価値は昔から言われてきたものだ。それを彼は精神の「遺産」と考え、「相続する」。自分の言葉で述べる。「*忍耐*。世界はわれわれを長い時期を通じて試験する、1点1点。それゆえにゲーテは、最高のこと、あるいは最高の事柄の一つは*忍耐*であると述べたのだ。一本のまったく長い線の中でわれわれの最良のものの応用。そのような応用によって人は世界に引けを取らない！。ジッドにおいて人はこの忍耐の最高評価を見出す。(1922年、〈私は、もっとも美しい才能よりも一つの頑固な忍耐をよりおおく賞賛していないのかどうか知らない〉)。／そのような〈忍耐〉が何であるかを私は、もちろん20歳では理解しなかつただろう、ほとんど予感もしなかつただろう。私はまた、ほんのわずかな若者だけがそれを理解することができると思う。ゲーテは言う、〈信仰、愛、希望はかつて静かな打ち解けた時間にそれらの自然の中に一つの具象的な衝動を感じた。それらは一緒に励み、一つの愛らしい形成物、より高い意味におけるパンドラを、忍耐を創造した〉」(V/24)。「ゲーテの忠告は、強い意志でこらえて決断せよ」(II/102)。

努力について。「*努力の秘密*。私の力はますますわきにそれて出て行く、私は私の力をいつも計画に即したものの外に持つ。外部に。常に別の場所に。ただ、それを可能な限り生産的に待ちかまえて捕まえることを許す状況を、形式、基盤を持つことは困難である。しかし大きな労働、努力はすべてを克服する。それがまさに、その努力の秘密なのである、その努力がまったく計算されないことを引き起こすことが。――誰もそれがどこへ導くのか前もって知らないということ、それが、誰も考えていない場所に実りをもたらすということが」(VII/145)。「人間が、彼らがいいつも努力していると称している、その四分の一ほど努力しているならば、世界はどんなに他のようであるだろうか。／それを私は見た。人々は努力しない、むしろ彼らは努力しないように努力している。彼らは何かの仕方疲れている」(VIII/5)。登山の比喩によって。「〈絶えず努め励むものを …〉。／あの最初の人間の努力の神秘的な

<sup>13)</sup> 「リヒテンベルクは正しい、困難さは、実際には、ものごとにとって異質な概念である。〈困難さという言葉は、精神の一人の人間にとって、実在するものとして考えられてはならない。それを止めよ〉。  
――精神の人間はまさにものごとのもとにいるのである」(XII/107)。

本質について。その努力は、青春が思うようなまっすぐな道ではない。その実り（道の目的地）は見つけられない。到達することが問題となっている頂上をわれわれは見るのではなく、われわれを道に誘うべく掲げられた旗を見る、せいぜいのところ、何の意味もない一つの頂上の前の峯を見るだけだ。－ その時、途上にわれわれは宝石を見出す － あるいはわれわれはますます真なる頂上を見る。つまりわれわれの本来の目的地はその道である。／もっとも偉大な人々はもっとも偉大な、道に精通した人である」（II/36）。

ホールはこれらの「価値」を「私」のため、いや精神自体のための方法として述べている。いかに精神活動を促進するかが問題なのであって、共同体のためとか、人々のためではない。しかし精神は生身の人間の中に宿る、精神の媒体は人間であるので、その「精神的労働者」のために方法が考えられているのである。だからホールの場合、哲学のような認識のモデルを作るのではなく、認識者（精神的労働者）の生のテクニク、心構えが問題となる。例えば、勇気。「思考は一つの勇気である、それから一つの不遜である。／問題は、思考が論理的であるかどうかではない、そうではなく、思考がその場所にいるかどうかである」（II/236）。

勇気とは孤立を恐れないことである。「台座。どの偉大な芸術家もこの二つを探している、つまり自分を孤立させること（孤立できること）と食料を供給することの同型性である。真の芸術は常に最大量である」（II/275）。「書かれなければならないだろう、ぞっとするような不快さの手紙、生を（外的な生活）を可能にするものであり、私が数え上げる必要がない、他の似たような企て。世俗的な性格のすべてのこれらの用事を私はいつも押しつける。私が例えば一つの作品の一部を為すことができるとき。〈君は最初にこの要件をするべきではないのか、... 後でもっと良く芸術に専念できるように〉。なぜ人は、後に〈邪魔されずに〉芸術に向かうために、この不快なことを最初に片づけることができないのか。この不快なものからはヒュドラのように頭が次から次と生えてくるからだ。世界を卓越して排除することができない人は、芸術の能力がない。／芸術は現実的に第一の、唯一最高の命令者であろうと欲する、（ただ生理学的な限界を除外して。この限界はまさに命令者ではなく、限界である、人は、それを明瞭にするために、死のことを考えよ）。芸術はいかなる他の条件のもとでも君と結び付きをしない。そうではなく芸術が働きかけることができる場所で、君はそれに作用する空間を提供しなければならない。最初の瞬間に、どの瞬間にでも。饗宴に行く途中で一時間ある個所に立ち止まるソクラテスのイメージは、すべての芸術家にとってもイメージである」（XII/121）。「創造的なものへの接近の秘密は、(...) 閉じこもることができるということである」（II/258）。

ホールはこれを30代に書いている。彼の事柄は文学であるが、同時に文学に取り組むこ

とについて思考し、反省している。ホールはいわばその事柄を巡り自分と対話し、それを記録する。だからホールの文の見出しは多くが、動詞の不定詞、自分に宛てられた要請、命令である。パスカルの『パンセ』、リヒテンベルクの『控え帖 *Sudelbücher*』も同様に日記として始まった。ホールは「手紙」の比喻を用いるが、その第一の宛先は自分である。それを常に念頭に置かないと、ホールの主張は通俗的な教訓になりかねない。ホールが『覚書』はアフォリズムではないと言うのはそのためである。ホールはいわば自分を精神のオルガノン(道具)にしようとしているが、それは日常のどの瞬間にでも課せられる要請である。

## 6 日常における精神

「自分に規律を教えることのできない人間は決して精神的な業績にまで至らない。彼の固有な業績を可能にする諸力の規律化」(II/194)。精神活動を最も促進する日常・環境はどういうものだろうか。「人間は誰も同時に幾つかの場所で働くことはできない。反発するためには人はある抵抗する地面を持たねばならない。われわれの運動の一つが、変化させるもの、創造的 - それが労働というものである - であるならば、われわれの日常の他の運動は機械的に起こらねばならない、それらが労働を可能にする基礎を形成するように。われわれがわれわれの力を統一させ、一つの個所に導くことが、重要である。そのことはまさに、われわれの通常の日常的な処理が機械的に起こることを意味している。(カント、セザンヌ)。花火はすべての方向にシューと音を立てて飛ぶ、大砲は明確で、静かである」(I/17)。「私が自分のために定めた二つの格言。例外なく、いかなる結果も午前中に到達されなくても、朝早く起きることを維持すること。強い強調を持って身体運動を維持すること。／両者は、私の状態にいる一人の人間を脅かす、主要な危険に向けられている。弛緩することである。偉大な才能は偉大な意志なしには存在しない」(VII/141)。

ホールの文体と生のスタイルからは、地下室に住んだことが示すように、夜が連想されるのだが、彼は朝(陽光)の人間である。ドイツロマン派の夜ではなく、ヴァレリーの地中海の光が志向される。「夜の静けさは理念を促進する、しかし少なくとも私においては、それは朝か午前中のそのような確実な理念ではない、疑いを引き起こす理念である、そして人はそれらに対してはるかに注意深くあらねばならない」(VII/154)。「酒宴の歌 - 夜と昼の正しい混合を達成することは、単純ではない。( - 完全な昼は形成を許さない、完全な夜はすべてを消してしまう)」(VII/27)。

精神は物質的に多くを求めない。「外的な生活条件。精神的な労働者は外的な諸条件の平等を望むだろうか。彼は彼の要求において、彼が必要とするもの、他者が必要とするものに

よって規定されるだろう。もし彼が生きそして生産することができるならば、ある人がヨットを所有していて、ケーニヒ湖のほとりに城を建てさせても、それは彼にとってどうでもいいことだ。逆にしかし、彼が、一人の労働者がそれでもってひょっとしたら生きることができるであろうものでもって生きることも生産することもできないならば、彼はもっと多くを要求するだろう」(II/155)。

精神と外見。「時おり人は奇異の念とともに、一人の素晴らしい、精神化された、世俗的でない人物に、一つの粗野な、武骨な、世俗的な側面を知覚した、その側面はすこしも全体のそんなにも繊細な形成物の建築に相応していなかった。そして人は、まさにこの武骨な、世俗的なものこそ、その人物全体を維持しているものであることを見逃したのだ。／極端なもの、一つの純粹に精神的な体験が単独で持続を持つということは不可能である。だから一人の人間がその極端なものもにいるならば、彼は持続を持たない。それは最も明瞭にランボーに見られる」(II/322)。身体の外見も精神とは関係がない。「*身体的障害*。私が猫背、びっこ、小人などであるにしても、それは私にはそんなに意味を持たないだろう。それは一つの所有物を少なく持っていることを意味するだろう。人はこの基礎において適応するだろう。盲目であることでさえ。しかし一つのことを私は我慢しなかっただろう、私が1メートル80以上だろうことである」(VII/120)。

天候と精神。「美しい天候はなるほど君を高い業績に導くだろう。天候がであって、君がではない。－しかしただ、君がどの天候においても君の力を投入した後で」(II/219)。「最も美しい天候、それは雷雨」(VII/63)。

亡命。1922年、20歳の時にホールはパリに行った。1937年にスイスに帰国後、ジュネーヴに住み、ドイツ語圏スイスにはほとんど行かなかった。精神の意味で彼は常に亡命していた。「ある王国のもっと偉大な人たちは常に他のところから来た人たちだ。バルザックの『Z.マルカス』。人は最大の力を、その起源の領域から向きを変えることによって獲得する－亡命によって」(II/27)。亡命は旅ではない。「最大の精神力のためにいかなる旅も必要ではない。(カント、プルート、ソクラテス)」(XII/29)。精神の故郷について、「人間たちが、彼らがただ一つの故郷を持っていることを理解するならば。それは労働である、しかし良き労働、真の労働である」(II/199)。

精神の活動において常に、個々の一步一步が問題となる。そしてそれは辛く、困難な、しかも単調な歩みであるので、常に忘れられる。ホールはだから何度もそれを想起させる。「問題は、人が健康であるか、病気であるかではない、そうではなく、人が彼の健康あるいは病気でもってどのように、何をするのかということである」(II/4)。「どの活動も正当なものでなければならぬ。それは厳密な法則である。そしてその活動がそうではないということの



中に、大きな、唯一本物の不幸がある」(VII/22)。

ホールは精神の活動をシシュフォスの神話で語る。「どの程度いったい強制的に一つの正当な活動が実現不可能にされることができるのか、だから外的な状況によって実現不可能にされることができるのかという問いに対して、人はいったい何を答えるべきだろうか／(…)君は妨げられている。よろしい。それは君に意識される、君の怒りが目覚め、君はそれに対して戦う(妨害に対して)。君はもはや妨げられていない。正当な活動を妨げる状況に対する君の戦いはすでに一つの正当な活動である。／というのは、精神は以下のこと以外の何であろうか。常に何か別のもの、精神の活動方向を持続的に変えること以外の何であろうか。言葉で言い表せないものに従って、生を高める目的のために。デープリーンの一つの比喩。それは、私が精神について、戦いについて、真の活動(個々人の、人類の)について語ろうと試みるとき、何度でも思い浮かぶのである。／デープリーンはあの石を転がすこと、それが何度でも転がり落ちるその同じ山の上に何度でも石を転がして上げることで喩える。その男はその石を何度でも転がして上に運ばねばならなかった、それが彼の生であった、そしてそれは生である。その比喩はしかし、最大の高さから見られている。その石は生である、精神的な生である。〈永遠の生〉。維持することが重要である生。その石は例えば外的な結果を意味していない。外的なものは達成される。すべての外的なものは変化する。われわれが欲すること、もっとも考えられないことを人間は時とともにすることができる。人間の自然、計画や思考を人はまたとても変えるだろう、人は彼の能力と知を途方もなく変えるだろう／ただ一つのことを人は決して変えることはできないだろう、と私は思う、人は、人間が休息することができるということに到達することは決してないだろう」(VII/23)。

これまでのことは、精神労働者に向けて語られている。しかし世界はおおむね精神労働をしない「怠惰な」他者たちの集まりである。その怠惰は個人的な欠点ではなく、近代市民社会の現象である。物質的生産の効率化が図られ、一方で精神の価値はほとんど考慮されない。その中で精神の活動はシシュフォスの不条理な姿を帯びるのである。精神はだから、精神の活動を否定する現象を批判し、戦う。「ただ一つの不幸が存在する、人が何もすることを持っていないこと、あるいは誤ったことをするように強いられることである。行使している人の能力を高めないどの活動も誤りである」(II/ 52)。精神の活動の不在は不幸である。「無活動の人間は怒るか、病気にならなければならない」(I/34)。

精神の働きは、非精神的な現象においてもっとも際立って現れる。作家のアドルフ・ムッシュグは言う、「ホールの文は牢獄を爆破することができる。しかしその牢獄が愛しい習慣、苦勞して組み立てられた人格であるならば、彼の文はまた痛みを作る」<sup>14)</sup>。ホールは精神の活動

<sup>14)</sup> Mushug, Adolf: Ludwig Hohl. Schreiben als Forschung. In: Ludwig Hohl. Frankfurt am Main

を阻害する様相を批判するが、それは同時に、近代市民社会のモラル批判となる。そしてモラルの批判のためにアフォリズムの形式は伝統として用いられてきた（フランスのモラリスト／人性観察家、カール・クラウス）。ホールは、市民階級の俗物として「マイアー氏」（あるいは「薬剤師」）の人物を造形した。マイアー氏、「彼は自分の下に堅固な地面を持っていると断言する男」（I/14）である<sup>15)</sup>。

怠惰はプロテスタンティズムの道徳からしても悪徳であるが、ホールの述べるのは精神の怠惰である。「われわれの認識はそんなに後からのものであるのですべての苦悩が生まれる。怠惰は唯一の原-悪である。われわれのすべての悪の種である」（11/23）。「人間たちはただ恐ろしく怠惰なのである。そこで彼らは一分間考えるよりもむしろ、一時間祈りに行く、彼らはそんなに怠惰なのだ」（II/128）。「ペシミストとは何か。悪しき人間である」（II/84）。ペシミストは悲観を無活動の口実にするからだ。

退屈。「喜びについて。私がここで知っているすべての人々は、何と途方もなく退屈なのであろうか。すべての人間に与えられているように、彼らに与えられているわずかの時間を。なぜ彼らにとって心配は高さへの一つの段階にならないのか。私は私の人生の中で一つのことをきっと学んだ、それを私は生まれてきたとき知らなかった、つまり、人間は途方もなく退屈であるということ。私は、人間たちがそんなに愚鈍なので、ただそれだけで、世界から逃亡する人を想像できるだろう」（XII/104）。「一人の人間を見て私に浮かんでくる、最も頻繁な考え、〈どのようにそれは生きるのか〉」（VIII/11）<sup>16)</sup>。

非精神の批判は「神」の批判においてもっとも鮮明になる。ホールの父は牧師なので、それは「父」の支配への抵抗としても読める。ホールにとって神は、人間の精神の弱さ（怠惰）が作り出すイドラである。「神について。人は、人類に成功した素晴らしい発明について語るならば、この発明を大抵忘れた、神を」（II/113）。「神はとりわけ人間の行動しないことの一つの産物である。／受動性の中で人は意志、行動と自由裁量を一つの大胆な理念として万有のどこかに分裂させる。行動し、操縦し、自由に裁量する一つのものが存在することができるように。一つの輝かしくも大胆なイメージが。憧れがそれを作り出し、保つ。〈神は操縦する〉は、人間自身が、人間にとって操縦可能であろうものを操縦しないことから由来している。人間は、自分の尊厳を守るために、この小さな文を形成し、言う。／彼らが生涯にわたり否定しているすべてのものは、それから最後に、丸太のように太く〈神〉という観

(suhkamp taschenbuch materialien. st 2007) 1981, S.132.

<sup>15)</sup> 「マイアー氏」、「薬剤師」については「表現」のところで論争のレトリックとして論じる。

<sup>16)</sup> ホールはこれらを市民社会の現象として批判している。精神のエリートのうぬぼれからではない。「現実的に活動している人はうぬぼれることはできない。うぬぼれは、活動が十分でないとき、誤りを示し始めているとき、はじめて現れる」（I/31）。「真の活動は傲慢から自分を守る」（II/267）。

念につながりあわされる。そしてその観念の上に丸太がざわざわと音を立てて降りてくる」(XII/132)。ホールの「神」批判はどれも、表現が面白い。「一つの神の家を通りすぎながら。そこに彼らはそれを置いた。一つの巨大な石の建物。 - - のための。無のための。ただこれを理解した人、つまりそのすべての豪華さとより高い真剣さの印を持ったその巨大な石の建物が、存在していないもののためにそこに立っているということを理解した人は、最大の世界変革のために成熟している」(II/166)。「神は存在しないことは私にとって完全に明らかである。しかし世界は存在する、それはすでに十分に驚くべきことである」(XII/35)。「私が一人の神について聞いた最も賢明なことは、彼が人間の姿に変装して歩きまわるとのことだ」(XII/63)。「神の友、世界の敵！」(XII/90)。

ホールは制度としての教会を批判するが、信仰（精神の一つの活動として）を否定しているわけではない。「信仰と知。信仰と完全な知の主観的な価値は、正確に同じである。相違はただ、外部世界への関係の中に示される。完全な知とは、可視的な道的手段で一つの個所に達したということである。だから他のものごとが続き、自分をそちらの方へ導くことができる。人はそれらに道を示すことができる。信じるとは、夜の道で同じ個所に達したということである。人はだから他のものごとをそちらの方に指示することはできない、叫び、身振りと約束（だからここにあるものごととは別のものごと）によるのでなければ。そしてそれは、すでにとても近くにあるそのようなものごとだけに作用するのである」(II/292)。

ニーチェは神を大仰な身振りで否定した（「アンチキリスト」、「神は死んだ」）。ホールは「神」を持たずにはいられない人間の弱さを批判する。「神という要件において奇妙なことは、神の存在を真剣に肯定する人たち、それを真剣に否定する人たちが、互いにとても良く理解し合うということである」(XII/62)。「これらの夕べの中の一つにおいて、祈っている子供と明る窓。〈私がそこで無駄に使われるエネルギーの半分を自由に使えるならば〉。／もし人間たちが、15分間祈る代わりに、5分でも自分自身について良く考えるために使用すれば、それはどうであろうか。ゆっくりとますます多く、練習する、自分をそして他の人たちを見る練習をすれば？」(VII/51)。

神は存在しないが、教会はあり、聖職者もいる。「世界は素早く腐る、そして君が君の中で休むことなく産出しなければ、君は貧しい。もう一度。ずっと以前から救われていた人たちだけは信用するな」(II/116)。

道徳。「道徳は人間を彼の義務から解放するためにある。／以前、彼はすべての彼の歩みの責任を負わねばならなかった、それらを意味と一致させなければならなかった、 - 今彼はそれらをただ提供された型と一致させる必要があるだけだ、機械的に調整する必要があるだけだ。そして彼はすべての罪からの無罪を言い渡されている。 - しかしまた世界発

展からも」(II/283)。「しかし道徳はこの職業の中にあれ。良いこととより良いことの間で選ぶことが問題となっている。そこに生がある。しかしより良いことは、君の最高の結果があるところから、理解されなければならない」(II/320)。

法律。「つまり法律は良き人々に報酬を与えるために、不正な人を罰するためにあるという狂気の中に。それらがただある種の秩序の保持のためだけにあることを知る代わりに」(II/324)。

精神は風景をどう考えるか。精神の活動を促進する風景はあるか。ホールは、オランダ、ハーグで『覚書』を書いた。「オランダ。砂の地面と粘土の空気」(VII/106)。「風景 - 私は、山岳が現実的に精神にとってそんなに有益であるのかどうか自問しはじめる。衝動が存在している。 - しかしこの上昇するもの、遮断するもの。… 最善の天候は促すような天候ではなく、中立化する天候である。空っぽだが、まだ反対派を形成していないそれ、これが精神にその純粹さを残す。精神を硬化や過剰上昇に駆り立てない。理念はすべてをしなければならない、そして自分のもとにとどまる - その結果、理念は、人が後にそこから自然を取り去るとき、虚弱ではなく、リアルである。／もし風景(風景の質、肯定的なもの)が精神にとってとても有利であるならば、偉大な精神のそんなに多くが悪い風景の中に滞在したことは、驚くべきことだろう。オランダのそれよりももっと空っぽの風景は存在しているか。スピノザはいつもここにいた。パリ周辺の風景は、はるかに良いというわけではないが、パリには他のどの都市におけるよりもっと多く偉大な精神が生きていた。／肯定的な風景はどこにあるのか。地中海の海岸、アルプス、 - アルプスはまだ誰にも意義を与えなかった。しかしニーチェはひょっとしたらアルプスによって、それが避けて通ることができなかったよりも、数年早く狂気になった。／山岳、空に向けられたしかめっ面! - / われわれの精神の誕生もまた、そのような空に向かって突き出ている形成物である、きらめく歯である。一つの静かに何も言わない風景は今、それらにおける突き出ているもの、薄いもの、虚弱なものを高めない、それらの毒を高めない、しかしそれらをおそらくそれらの堅固さの強化へと駆り立てる(それらが空をもっと強力に脅かすことができるように)。／素晴らしい自然の、精神的労働への影響はこれであると、思う、つまり、誤りが忍び込む、そして人は誤りを許す。／人は高山を、精神的な飲み物のように、任意の分量で、作用させることができるべきだろう。(人が望むならば、止めることができるべきだろう)。 / - しかし朝、ニーチェがジルス-マリアで目覚めたとき、そのぞっとするような、輝く、突き出ている山岳はすでに再びそこにある。 - - 何も彼の夢の、熱に浮かされた、しかめっ面のような形成物を冷さない ... / それに対して誰かが荒野の中で目覚めるならば、彼の硬くそびえている精神的形成物、彼の夢の形成物は溶けようとする - そして溶けるだろう、あ

るいはもっと堅くハンマーで加工されなければならない。／－そして常に新しい、内的な必然性がそれをますます堅く接合する補助を与える、それが抵抗するように。(荒野に抵抗したものは、時に対しても抵抗するだろう)。スピノザの作品はそのように建てられていないか」(XI/123)。『覚書』は「最大の荒野」の中で書かれた。ホールは精神のために荒野を求めた。彼の部屋が修道院的な空間となったように<sup>17)</sup>。

## 7 苦悩と死

ホールは精神が現実遭遇する様々な局面における精神の活動の軌跡を描写している。それは摩擦によって起こる火花のようである。精神は抵抗がなければ、何の痕跡も残さない。抵抗がなければ、そもそも精神は活動しない。だから『覚書』は苦悩や死という大きな限界に対する対処の方法を巡る思索となる。最大の危険は、市民社会の通俗的なモラルや過酷な外的条件ではない。精神は今までそしてこれからもそのような条件に曝されてきた。精神にとって所与は常に反精神的なものである。そうではなく、「最大の精神的な荒野の中で」とは内面的な危機である。あるいは時代の危機は個人の内面の中で生きられるので、個人と世界の状況は互いに媒介されている。『覚書』は、ヒトラーが政権を取った1933年から始まっている。ホールは当時オランダにいたが、世界は暗い谷間にあった。ホールは世界の危機を自分の精神の中で苦悩したので、『覚書』はその時代の一つの精神の証言、精神史となったのである。それは、「危機があればそこには生ずるのだ 救う力も また」(ヘルダーリン、『パトモス』)まで苦悩され、考えられた。

どの事柄も、その論理に従って限界まで考え抜かれ、生きられなければならない。「不幸だけではまだ不幸全体ではない。問題は、人がどのようにそれを耐えるかである。人がそれを悪しき形で耐えるときはじめて、それは完全な不幸になる。／幸福だけではまだ完全な幸福ではない」(II/333)。良く耐えるとは、精神の活動を促進するように、否定的な状況のベクトルを転換することである。「この単純な非生産的な存在にとって苦悩はたつ一つの損失を意味している。この人間は、苦悩が決して一つの損失を意味する必要がないことを理解しなかったのだ。－彼は苦悩を物質的に把握している、決定されており、不変で、一個の

<sup>17)</sup> 他に、いくつかの精神のレッスン。「腕を伸ばしきったとき、人は力を持たない」(II/69)。「カール・クラウスのもっとも重要な文は次のようである、〈良き見解は価値がない、誰がそれを持っているかが重要である〉」(II/56)。「ある重さを持ち上げる際に。もし君が力を尽くすならば、その結果は条件に依存している。しかしもし君がそれをしないならば、君に依存している」(II/196)。「私は地上に友人を必要としている。空の中にはない。空の中に私はいずれにせよ十分持っている」(VII/167)。「絶えず重いものから、軽いものの方へ、－生き生きとしたものの方へ身を転じることは難しい」(VII/142)。

石の塊に似ているものとして。むしろ苦悩は獲得あるいは喪失のための一つのチャンスであることを理解しなかった。他の言い方をすれば、苦悩が問題となっているのではなく、われわれがそこから何を作り出すかが問題となっている。それを洞察しない者、苦悩自体が問題となっていると思っている者にとっては、以下のことが妥当する、彼はすでに一方に、喪失に決定したのだ」(II/169)。

人が生から何を要求するかではなく、人は生から何を要求されているか。苦痛からも精神は何かを引き出すことができる。「多くの、恐らくは大抵の人間たちは身体的な苦痛を一つの異物として、絶対的なものとして考察している、彼らは、苦痛がそもそも人との関係において存続すること、人が調整することができること、人が話しに加わらねばならないことを知らない」(XII/44)。「苦痛を覚悟しているということ、苦痛から逃げたり、苦痛と戦ったりしないということ、そうではなく苦痛を受け入れること - 苦痛を考えること。人が苦痛を完全に受け入れ、考えることによって、人が苦痛と同一化するに従って、人はふたたびもっと強力になる」(II/95)。人は苦痛や苦悩のイメージに苦しめられている。そのイメージから自由になり、あるがままに見よ。「人は苦悩を取る去ることはできない(全体において)、しかし苦悩に関して苦悩することは許されない」(XII/94)。

精神活動の不調は、別の精神活動によって乗り越えられた。苦悩も同様である。「苦悩。〈彼の苦悩と彼はただ一人である〉。正確に考えると人は彼の苦悩とただ一人でなければならない。 - 完全に苦悩する人は、必然的に完全に一人である。ただ幾人かの人だけが、苦悩を追い払う一つの強力な手段を持っている。もっと強い逆流によって除去すること。／人が〈分かち合われた苦悩〉と名づけるものは、決して〈分かち合われた苦悩〉ではない、そうではなく、一つの喜び(それは一致から来る)によって減少された苦悩である。／苦悩における関与は人が一部を引き上げるということではない。そうではなく、もっと大きなものによって苦悩を克服する(減少させる)ことである。／というのは、喜び、それは - 分かち合えられる。それは奇妙であり、一つの重要な確認がそのことに起源を取ることができる。それはそこから明らかにする、苦悩と喜びは反対物(反対物は似ている)ではなく、異なった本性のものであると」(II/157)。この苦悩のナルシズムはカフカにとっても妥当すると思う。

苦悩の克服の一つの方法。「最大の苦悩は常にひそかな苦悩である。苦悩の克服への、いづれにせよ破壊への道は、第一に自分の前での公表である。／今しかしほとんどの苦悩も、人がそれを明瞭に見るとすぐに、多くの他の人たちもすでに持っている苦悩であることが明らかになるので、それはもっと高い程度に減らされる、その苦悩の可視性がそれにとってもっと大きくなり、もっと高い程度で、人自身の前で闇の中から外に出る可能性を獲得すること

によって。／その道？。(というのは、常に道の問題、個別における道、一番近い道の問題が存在するからだ。… 苦悩を受け入れること、完全に引き受けること。というのは、人がそれに抗して戦う限り、一片の否定がそこにはある。そして完全な肯定がない限り、苦悩は暗闇から外に出ることはできない。一片が秘密のままである、だから作用し続けている)」(II/167)。

しかし苦悩は続く。「いったいこれらの苦悩の海は最高の結果によって正当化されているのか。 - おそらくそうではない。一つの道が頂上によって正当化されないように」(II/331)。精神がある限り、苦悩は続く。「人間は努力をする限り、迷うものだ」(『ファウスト』)。それにもかかわらず、歩き続けること、それが精神の力である。

貧困はホール伝説のauraである。彼の母は製紙工場の所有者の娘で、父はスイスで最初に自家用車を所有した牧師であった。その両親とはホールは1920年代にパリで最後会って以来、絶縁状態にあった。ホールは彼の著作によってはほとんど収入がなかったので、主として家(仲介的な役にあった母方の叔父)からの援助で生活していたが、ペン、インクや紙が買えない時期もあった。しかし貧困は精神的労働者の常態である。「すべての精神的労働者は常に掛けて働く」(XII/67)。「なぜ、人類の最大の教師がいつも失業しているのか」(XII/67)。「金銭の苦境(困窮によってゆだねられていること)の中で魂の尊厳を維持することは、並はずれた力が属している。芸術家はそれができる」(II/163)。

ホールの方法は認識である。彼は貧困を自然現象のように観察する。「お金の欠乏について / 生産は他のものとともに生まれるのではない。生産は君たち自身の状況の中から建築されてあれ! … しかしどのように人は、常に持続している自分自身の状況をまだ認識できるのか。人間が自分をただ行為によって認識できる、つまり他のものごとへ作用することによって認識できるように、一つの状況は、他のものごととの境界によってその表現(化学の意味で)に到達できる。 - そして一つの状況が自分自身の認識なしには生産的になることができないということは明白である。／決してその状況にいなかった人にとっては、お金がない状況を想像することは、この上なく難しいだろう。／この事柄において最も嫌なことは、もっとも頻繁に見過ごされた。自分自身がこの手段喪失の状況に、だが短い間だけいるととても多くの人々は、この状況をその持続的作用において想像できない。 - この状況の作用はつまり持続によって甚だしく変わるのである。／ただ短く続く苦境は、たとえそれが繰り返されても、自由意志で引き受けられた苦境の何かを持っている、その苦境は、周知のようにすべての心理的な作用と同様に真の作用を欠いている」(II/259)。

ホールはほとんど自分については語らないが、『覚書』を書いていたときのオランダ時代の日常の記録がある。「日々の年代記 … 一つのそんなに長く続く恐怖の時。ぞっとする

ようなむしばむ咳のL, 日を追ってガスがない, 私の空間には光がない, 石油ランプ。(そしてもし私が, それを書いたとき, 同じ状態がさらに10カ月も続くことになったのを知っていたら!)。食べるものは何もないのも同然だ。飲み物もない。破壊された衣服, 寒さ, 窒息させる家, そして外出することの不可能性。私の作品に取りかかる代わりに, ぞっとする手紙で日や週をこき使う必然性(それらの手紙はそれから役に立たなかった), 家の解約の持続的な脅威。誰とも話すことが可能ではないこと。郵便はない。一枚の食糧配給券。そして遠方から, まったく間接的に, 2か月前に一つの知らせが到着した, 私が近い関係を維持してきた二人の友人が二人ともドイツに閉じ込められているという知らせが」(VII/158)。

状況は認識されれば, 何らかの道が見えてくる。「別の日々の年代記。／解決は, 私が苦勞すること, 私が破産するまで働くことである。ゲーテの言葉に従えば, <どのような種類のものであれ, 無条件の活動は, 結局, 破産させる>。／人間の栄養の本質は人間の生産性の中にある。／すべての生活は一つで, みんな同じだ。(一つの完全に働く読書であり, ただほとんどいつもゲーテ)。私の生活は, 独房の生活にもっと近い。人がある場においてどれほどわずかしかなければ必要としないか, 一人の人間が何によって養われるか。一人の囚われの男は私をすぐに理解するだろう。／私は今, 有意義に - 自分の本質の完全な肯定とともに - 企てられているものを生産性として把握する。歩くこと, 話すこと, 似たようなものごとと<働くこと>の間に私にとってはいかなる隔たりも存在していない」(VII/159)<sup>18)</sup>。

「飢え」。ホールは, 否定的な状況を肯定に転化させる。「人は, 人に欠けているものの認識から飢えを作る。／この飢えは創造的である, それは刺激し, 建てる。この飢えは, 私たちに, そこへ私たちが通常は行かなかったであろうものごとへの道を導く。飢えは一つのとても眩しがらせる意義を作るので, われわれは高い程度に, われわれの力をそこに指揮する。そしてわれわれは, われわれの(有機的な, 初期の)困難にもかかわらず, われわれの中の独裁的な命令の結果, この歩行のために通常作られた人(関係の中で, 一人の親和した人)が発展させた, 発展させることができたであろうよりももっと高い力をあの方向に発展させる」(II/278)。精神は常に肯定する。

孤独。「私」, 「固有性」のところで見たように, ホールの精神は常に孤独である。ホールは「今日まだフランスに生きているというあの<すべてのロシア人の皇帝>と私の間のある種の類似性」に言及している。「われわれ二人ともたいそう孤独に存在している, 人間たちの前で滑稽に存在している, われわれが, 他の人たちが見ない一つの王国を自分の中に持つ

<sup>18)</sup> 「貧困」からホールの「部屋」のイメージははじめて理解される。「リアルなものは, 存在しなければならぬ一つの部屋の中にある。閉ざされており, 照明されており, 小さすぎず, 5時から6時に朝の食事を与えられている, 冬には暖房されており, 飲み物と水が与えられている, 毎日。(テーブル, 小さすぎないそれ, 紙など。自ずと明らかであるが)」(VII/170)。



ているから。相違は(…),彼においては、かつてあった一つの王国が問題となっており、私においては来たるべき王国が問題となっている」(VIII/38)。

しかし精神活動の観点から孤独のナルシズムは批判される。「〈誰もが完全に一人である〉。それはとても賢く響く、だかそれは真理ではない。われわれ - 進歩した者、あるいは閉じ込められた者 - は、他の人たちがおそろしく怠惰であるときにのみ、孤独である」(II/326)。ホールはまた、エドモン・ジャルーを引用する、「人間の孤独について語ることは、一つの常套句である。この孤独は他の多くと同様に、幻想であることを認める必要がある。というのは、人は、まったく他の人から異なっている場合にのみ、真に孤独であろうから。(…)われわれはこの孤独についての幻想を、われわれのエゴイズムに負っている、精神のわれわれの怠惰に、われわれの愚かさに、あるいは他人に対するわれわれの悪意に負っている」(XII/57)。「最も偉大な人たち、孤独な人たちは世界への信頼を持つ人たちである。- 一人の兄弟に対するように」(XII/148)<sup>19)</sup>。

しかし精神にとって最大の危機は内面の危機、「絶対に気が乗らないこと」である。「絶対に気が乗らないこと - それはすでに狂気ではないのか。絶対に気が乗らないことが何であるか、そのようなものを経験しなかった人に説明するのは難しい。／もし人を誘うべきものが次々と魅力のないものとして明らかになり、君が、永遠の鎖の中で … そのように続くだろうことを発見するならば。全体的なメランコリー」(XII/141)<sup>20)</sup>。

それはどう認識され、克服されるのか。ホールは、呻きとともに絞り出されたような文を書いている。「決心 気が乗らないこと。 / それに先立ったひどく恐ろしい夜の後で、つまり、私がついに深く眠り始めたとき、それからしかしすぐに、ナイフで刺すことのように見えるものによってたたき出されたとき - そして今、私にいつも欠けていたもの、決して達成されないように見えたものがすべて次々と、あるいはまた一緒に私のそばを通りすぎて行ったとき、そしてまた、私を毎日苦しめたもの、明らかにその持続と変化の見込みのなさのゆえに、各々の生を抑圧しなければならなかったもの、緩やかな確実な仕方で私を息切れさせなければならなかったすべてが通り過ぎて行ったとき - そして私が、私がまだ

<sup>19)</sup> 注 10) のカフカの言葉は、この「エゴイズム」(孤独に示されるナルシズム)の批判としても解釈される。モンテーニュにとって孤独は自由と重なる概念である。「裏店、あるいは時代遅れの店を保存しておくことが必要である。すべてのわれわれのもの、自由なすべてを。その中にわれわれはわれわれの真の自由を、主要な避難所と孤独を確立するのだ」(第一巻、第三章「孤独について」。『覚書』の IX/20 で引用されている)。

<sup>20)</sup> ホールはそこで「ディングー Dingy のヤギ」という寓話的な物語を語る。家畜小屋の中に長く閉じ込められていたヤギが外に出され、錯乱する。「それはヤギにとっても恐ろしい効果を及ぼし、そのヤギはすべての可能な動物の特性を持つようになった。その外の途方もなさ、信じられない、もっと明るく輝く、多様な世界がヤギをこの上なく驚かしたのだ」(XII/141)。このヤギはホールのパロディである。それについては Sabine Haupt の詳細な解釈がある。Vgl. Haupt: Ebd., (5.3.1 Interpretation der Notiz XII/ 141), S.221ff.

表現できなかつた、そしてそれを表現することが恐らく誰にも成功しないだろう、あの全体的な、気が乗らないことによって襲われたとき。／だから眠り込む瞬間に、人が沈み、滑り落ちるとき、…そしてまさに〈私はもうできない〉とともに、それが、その全体的な気が乗らないことが突発し、窒息するかそれとも溺れる人のそれのような跳び上がるものが起こったとき。つまり、どのように、さらに引き続いて…（今までいつも救ってきたもの、中心的な事柄）書くか、作品をつかみ、運ぶか？ - その時、私は認識した、認識が私の前に浮かんだ、暗く-明るく、天国的に、ほとんど言うこともできない形で - /それらは、快楽から起こらない、ある種の苦痛による促進から起こらないということ／そうではなく。／そしてこの表現されえないもの、あるいはここでは表現されえないものを体現するために、この二つの燃えている（…）思い出が現れた。私がかつて〈同じように喜びと苦悩から離れている、あの創造的な深さ〉について読んだある文の思い出と、もっと不正確に知っているだけだが、誰かがパスカルについて書いた別の文の思い出、つまり、別の誰かが投げ捨てた重荷を彼は自分で背負い、喘ぎながら、めらめらと燃えながら、それとともに山を登って行く、という文。／そして私の観念は、その二つの思い出の中に表現されているそれは、私とその恐ろしい夜の考察と状況の中にもう見出すことができなかつたもの、見出すと思わなかつたものを再び私に与えた。それは、自分の信仰によって再び救われた、信仰者にとって正確に同じようであったに違いない。／それはここで起こっていることの言葉である。一つの新しい感覚性。あるいは、最初は到達するのが困難な場への、より深い - より根本的な、より確定的な - 取り付け *Installation* …」(XII/142)。過去の言葉によって媒介されているが、ホールがここで言おうとしていたことは、どんな状態にせよ、positive（肯定的に・積極的に・実証的に）生きる「決心」、精神の力への信頼であろう。ホールが社会的に承認されたのは晩年であるが、彼は生涯、妥協せずに自らの意志を貫いた。彼の生はこの言葉を実証したのである。

ホールにとって認識 - それは事柄を言語によって十全に表現することと等しい - は克服と等しい。「すべての出来事の主要線の一つ。苦悩の克服、苦悩を外面化することによって」(II/94)。「知性の試験 - 人がどの点に関して知性の強さを測定できるか。人間が一つの極端な（直接的に脅かす）苦境に置かれているならば。どの程度、いま理解力を当てにしているかに関して」(VII/105)。「もしわれわれがそれらを名づけるならば、ものごとは大抵の場合、終わってしまう。 - 苦悩と良きものごともまた」(II/96)。「苦悩の克服のために。一羽の鳥 - が毎朝早く殺人的にぞっとするような厚かましきで屋根の上で叫び始める。つまりできるだけ速く受け入れること、完全に肯定すること。そしてすでに私は感じている。そして同時に私は、人間のすべての外的な事情は、世紀から世紀へと、またそれと

は異なっていることはあり得ないと感じる。私はかつて、人が溺れさせることのできないコルクについて語った、そしてそれは神であると主張した。しかし今私は知っている、それは人間であることを」(II/111)。

ニーチェの運命愛 *amot fati* をホールの言え、[彼は運命を少し軽減しようとし、何かを落とさせ、そしてすべてはますます困難になる。彼は運命をもう軽減しようとし、彼の上に落ちてくる重荷を彼は受け入れる、彼はますます多くものごとを受け入れる、そしてすべてはますます容易になる」(XII/108)。

精神は世界を肯定する。そして世界は精神を肯定する。「しかしこの名状しがたい労苦を誰も測らないと彼は言った。しかし彼らの中で最も偉大な人、世界はそれを測った」(II/177)。その世界は、現在のばかりでなく、過去の世界でもある。そして孤独は、過去の遺産の発見によって克服される。例えばゲートによって。「私が孤独から非孤独の中へととても大きな歩みの一つをした瞬間はそのようであった。／私がつまり、私の 30 歳の時に、私がいとも思い出すであろう部屋の中で、ゲートの『箴言と省察』をはじめて手にしたとき、長い闇の後で、闇の中の中断されなかった労働の後で、何によっても支えられず、いかなる光によっても照明されず、少なくとも精神的な外部世界のいかなる現象によっても肯定されず。／ - その瞬間はそのようであった、そしてそれは他のようであることはできない。／一つの岩の覆いが割れる、光がさらさらと中に落ちてくる、そして人が創造したすべては、本物であることが明らかになる」(XII/144)。ここでホールは『覚書』(その形式)がゲートによって承認されたと考えている。人間が今まで生きてきたことの記録である過去の遺産に自分をつなぎ合わせることによって孤独は克服される。

謙虚は苦悩からしか学ばれないものである。「重く打たれた芸術家は謙虚である、彼がもたらす肯定的なもの、彼が何度も要求しながら、身をささげる圧倒的な、肯定的なものを見て、仕事をする芸術家は。／業績は離反させ、謙虚は結び付ける、そして残るのは、悲しいことの何かである。／〈私は失われた愛を静かに嘆かねばならない、それは私を温和に、譲歩的にした、そして輝かしい時代よりも社会にとってより快くした〉(ゲート、『詩と真実』)」(II/279)<sup>21)</sup>。

<sup>21)</sup> 私はここでロラン・バルトの『恋愛のディスクール』の[夜]の項を思う。バルトは、神秘主義の「影の中にある」と「闇の中にある」の区別を用いて、恋愛における「夜」を描いている。「わたしはひとり、瞑想する者の姿で、(…) あるがままのあの人のことを心静かに考えている。一切の解釈を中断し、無・意味の夜に入り込む。欲望は震え続けている(…)が、なにを占有しようとも思っていない。非・利得の夜、目に見えぬ微妙な消耗の夜。そのときわたしは影の中にいるのだ。わたしはただ、黒々とした愛の内面に、心穏やかに腰を下ろしているのである。(…)そして夜は暗く夜が夜を照らしていた」。(ロラン・バルト(三好郁郎訳): 恋愛のディスクール・断章。(みすず書房)1984年。258p)。内面に深く潜航する身振りは精神に固有のものなのである。ホールは「夜」について書いている。「何に対しても良いものではない夜 - いずれにせ目に見えるような印象を与えない - はしかしその特別な光を持っている。人が後に良き時、肯定的な時にもう見出すことの

苦悩を肯定するとは、苦悩を承認することではない。苦悩を精神活動を促進するために利用することである。精神の活動のためという観点がないと、人は苦悩を克服できない。ゲーテも苦悩した。「彼はゲーテのもとでも労苦を見るところまで至った。そしてその時、はじめて正当に、人はゲーテを理解する、と私は思う」(XII/64)。そしてその苦悩を経て、「喪失が多ければ多いほど、輝くものはいっそう輝くに違いない。すべての中の肯定するものは肯定する。否定するものは一緒に消える」(II/234)。

かつて精神的な意味で苦悩した人の言葉が、また救済をもたらすのである。「広大な荒涼さの中でかつてラムツの一つのカッコに入れられた文が私を慰めた。〈偉大な記号であるところのもの〉、一つのちっぽけなランタン。／フェルナン・シャヴァンヌの一つのポートレートから。〈すべての陰謀や功利的な運動の仕方もできなくて … そして彼がついに死んだということ、多数の未完の作品を残しながら（他に多くの原稿）、彼は常に書くことを続けたので（偉大な記号であるところのもの）、〈企てを持つために希望する必要もなく、頑張り続けるために成功する必要もなく〉」(VII/171)。

精神の力は、人間の生への信頼である。「諸条件。何年も前から私は、そこにおいてとても原始的な条件の一つあるいは幾つかが満たされないままでとどまったであろう3日間を続いで体験したことはなかった。最高の、活気を与えるものごとについて語っているのではない。そうではなく、とても普通の、名づけることのできる、変わることのない、いつでも一枚の紙片の上に組み合わせることが可能なものごとについて - 照明、気温、朝の食事 -」(VII/172)。物理的な生存が維持される条件さえあれば、精神は働くことができるのである。純粋な精神的労働にとって物質的な欲望はない。

## 死

精神は苦悩の相対性を認識し、そこから克服の道を探ることができた。しかし死は人間の絶対的な条件である。精神は死をどう考えるか。最初に、ホールは「死」の現象を描写する。「死はわれわれを驚かす。もし死が偶然に一つの勝利の状態の中のわれわれに出会うならばそれは暴力性の印ではない。死は大抵の人たちを屈する人たちとして襲う、そして彼らのつまらなさの印は、死が、決してと言っているほど、彼らを他の仕方では襲うことができないだろうということである」(XI/23)。

観察はホールの最初の方法である。死をありのままに見ること。「悲しいこと。／私は、以前から生の終わりをいつも素晴らしいものとして想像した、偉大な肯定を可能にすること

---

できない光、人が容易に忘れることかできる光、色の失せた過去の中に容易に見過ごす光を。その過去の無力さを人は今一人で思う。夜の中から光を取り出すこと」(II/14)。「しかし一つの偉大なことはその夜を持っている。人は夜の中で見続ける」(II/39)。

として …。今、私は、それが何でもなくを学ばねばならない、緩慢に死ぬことを学ばねばならない、すべての手段が徐々に減少することを、先取された半分の、それから四分の三の死ぬことを、すべての可能性の限定されることを、また内的な可能性の、また全体的なもの可能性の、勝利の可能性の限定されることを。／それは単純に終わる、それが始まったように、隠されたものの中で終わる、そしてそれを見たものは誰もいない」(XI/21)。

誕生も死も、それが絶対的条件であるにしても、生の他の瞬間たちと同じ価値を持っている。死を日常の一つの出来事と考えれば、「死を迎え入れる際の唯一の至福の感情は、疲れである。／人が死に対して持つことができる、積極的な種類の、唯一正当な感情（快感）は、祝日の優しい疲れの感情。／その他の点で、その問い、大きな問いは、死を迎え入れることができる、全体として死を迎え入れる（耐える）ことができるということである。そこに別のことが付け加わる。死の登場とおそらくは結び付いていることが可能である。善。その際に善なるものが存在しているならば、それはただあの疲れの感情であることが許されるだけだ。骨の折れる一日の後に眠り込む前のように」(XI/29)。そしてホールは夢想する。「もし死がローマ人の場合のように友人との会話の中で来ないとすれば、－ 雷雨の中におけるよりも美しい死が存在するだろうか。上からの火、火と空、二つの精神的なものたち、結び合わされて」(VII/133)。

ホールはロマン派のように死を劇化しない。人生の一コマのように受け入れている。死が問題となるのは「生」との関係においてである。「あれこれの人たちが死んだということ、この事実は私の中にとっても鋭い豊饒さと呼び起こした。それは私の中の実体を強化した。－ それは世界への視線をもっと強力に、差し迫ったものにした。恐ろしい世界への視線、そしてその中であることが問題となっているものへの視線」(VII/156)。

そして死をどう考えるか。「出発点。死という事実を認める。／死と決着をつけなかった人、その人の生はそれほど価値がない。死と決着をつけなかった人はどのように生きることができるのか。正しく生きなかった人、彼はどのように正しく死ぬことができるのだろうか。それは死を完全に自分の中に捉えている言葉である。／そんなに悪く生きた一般的な人たちがそんなに悪く死ぬことは不思議だろうか。（悪く生きる、つまり常に真に働くことなしに）。／人は生を通して以外の方法で死を理解できるか」(XI/1)。

「死」は生の事柄となる。「賢人にとって、－ 現実的な尺度を知っている人にとって、－ 死はいつも現存している。彼は死を否定しない、死から逃げない、死を恐れない。彼は死とともに、死の隣で生のすべてのものごとを見る、そしてその秤は均衡状態にある」(XI/26)。「〈おお主よ、どの人間にも彼自身の死を与えたまえ〉(『時禱集』)とリルケは叫んだ。〈どの人間にも彼自身の労働を与えたまえ〉と私はむしろ聞きたかった。／〈与えよ!〉?。」

今、問いは誰がそれを与えるべきかということである。われわれはいったいなぜ与える人を必要としているのか、それを受け取る人間たちはそれをすでに持っているのか。／自分自身の死。しかし〈汝をして戴冠させよ〉と人に叫ぶことが、何の役に立つだろうか、君はむしろ彼に戴冠に至る道を示すべきではないか。／固有の労働には必然的に固有の死が続くのである」(I/9)。

思考は死から生へと転換され、冒頭の「生は短い」に戻るのである。しかし「死」を経た後の生についての思索は、それ以前とは審級が一つ上にある。「死を始めることを考えること。一つの基礎として - 君がそこにいるという事実のように - 君は死を取るべきだ。死は一つの全体的な事実である。／ただこの最も単純なことが君から要求されている。あらゆる君の行為の中で、死が一つの全体的な事実であることを意識していること。／どのように君の力は高まり、世界の中へ方向を取るか。どのように突然、見ることの光線が君の中から現れ、世界を越えて行くか。／君は作用をする、君は色を見る、君の生は一つの価値を受け取る」(XI/18)。

死について、「われわれにとってそこには何も研究するものはない」(XI/18)。死を考えることは畢竟、生を考えることに他ならない。「しかし幾つかの偉大な真理を、このこの上なく単純な事柄(死の考えはわれわれの思考の始まりでなければならないというような)を何度も瓦礫の中から取り出し、〈披露する〉必然性が私にはますます緊急のこととなる。／それが芸術を決定している。それを〈披露すること〉はただ常に新しい形式によって可能になる。今のリズムに呼応している別の語順、今の言葉、今の関連付け。／ものごとの完全な一致によって克服する」(XI/2)。「死」を考えるとは、死を自分の言葉で、固有の仕方では表現することである。ホールはプルーストの「祖母の死」の描写(「ゲルマント家の方へ」)を引用し(IX/120)、また死の直前に彼の祖母と一緒に歌を歌った夢を描いている(X/7)<sup>22)</sup>。

「死」を表現するとは、自分を死の上位の審級に置くことである。「もし真の知恵の最初で最大の段階がいつでも死の準備をしていることであるならば、それは、死に対して何かをコントロールできることである。／どのような瞬間に人は最も多く準備ができていたのか。最高の生の瞬間に。生がより多く減少すればするほど、死ぬことはいっそう困難になる。そして死の実践的な問題は、人間たちが彼らの生をそんなにも減少させたということである」(XI/17)。

<sup>22)</sup> 「書くこと」は死の克服の試みである。バルトは書く、「或る晩、母の死後、私は、ヴァレリーが母の死に際して心から願ったようにただ自分だけのために、母を偲ぶささやかな本を書こうと思ったのだ」(ロラン・バルト(花輪光訳): 明るい部屋。(みすず書房) 1980年。75p.)。バルトはまた子供の死に際してのマラルメのことを書いている。「息子の死の前にして、マラルメは書かんがための両親の役割分担を甘受している。〈母は泣き／わたしは考える〉」(『恋愛のディスクール・断章』。150p.)。

生の中の死のレッスン（死の準備）についてホールは述べる。「生の中には、死と同じように作用し、小さな死のようである多くの小さな事件が存在している。その小さな死の連鎖を人は減少と名づける、とりわけ外的状況による減少と名づける。最良のことは、それをまた無視すること（わきにおく、否定すること）である、大きな死を、終端にある死を無視するように」(XI/22)<sup>23)</sup>。

ホールは死の克服について考える。「最高のもの。最高の素晴らしさ、最高の幸福とは何か。主観的な思考が突然客観的な思考に転化するとき。それは正確に、その中で人が死を克服した、そのような瞬間である」(I/7)。「鋭い観察者は、彼が最終的に死ぬ前に（個人的な最終死、人がただ通常に死と名づけているものの前で）、正確に死と知りあいになる。どの成し遂げられた業績も彼から分離されること、－それが鋭い角度で彼と別れ、世界の中に入って行き、ますますよそのものとなり、それがあつた瞬間についに客観的にそこにあるまで、一者が他者に対して、創始者と成し遂げられたものがすでに客観的に向かい合つて立っているまで－それはそのすべてのイメージである、同じ経過である。完全に客観的であるという道、物たちの中に入って行くことの道。それは唯一の道である－そこには死はない」(XI/14)<sup>24)</sup>。

精神は人生のすべての局面において働いている。その精神の活動をホールは記述している（精神のクロニクル、精神史）。どの局面におても、認識は克服の道となる。最初の「生は短し」は、「死」と円環を形成し、始まりに戻る。死の克服は、「生」の肯定である。

## 8 生 作品

おそらく生を否定する人間はいないだろう。豊かな生を誰もが望むだろう。ホールは、しかし、言う。「人間は豊かである義務を持っている」(II/25)。ホールは、生が与える、精神活動の豊かな可能性を人間は実現しなければならないと主張するのである。しかし、それを

<sup>23)</sup> それはヴァレリーの考えである。「私は、私が私自身の生の中に、死の数子のモデルを持っていることを忘れる。日常的な無のモデル、驚くべき量の空隙と中断 *suspens*、よくわからない、無知の驚くべき量の空隙を」(XI/14)。

<sup>24)</sup> ホールはもっと平易にも表現している。「死は本来、そもそも理解するのが難しくない、あるいは死には理解されるものがほんのわずかしか存在していない。誰もが、説明されれば、理解する、つまり、人は、謎を解くことなく、死を受け入れなければならないこと、誰も別の条件を持っていなかったこと、この条件とともにわれわれはもっと大きな栄光への接近を持つこと、すべてのわれわれの生はその中で行われること、この境界の内部で向こうの方へ建築すること、最良の仕事をする、個人的なものを越えて行き、常に持続するものと結び付けるだろう最良の仕事をする、そこにおいてわれわれの生が演じられるだろうこと－あるいはものごとの中に入ることに於いて。その際にわれわれは、これがその都度起こる瞬間に、われわれの思考が主観的なものから客観的なものとなる瞬間に、われわれに到達可能な最高の光を知るだろう」(XI/44)。

認識し、実行するのに人間はあまりに怠惰なのである。

世界のあらゆる否定性にもかかわらず（それらすべてにもかかわらず *trotz alledem*）、生を肯定するのは、精神の力が必要である。それをホールはシンプルに言う。「生。最初、人は悪しき瞬間を数える。それから人は嬉しい瞬間を数える。 - そしてもっと嬉しくなる」(II/13)。「完全な生の参加よりもっと高いもの、あるいはもっと集中的なものは存在しない」(II/171)。生を行動として考えれば、年齢の差異は存在しない。「年齢。われわれは、どこをわれわれが見ているかによって、その年齢の問いを決定する。いつも彼自身の時間的な青春を振り返って見る人は、いつも老いている。いつも彼の来たるべき時間的な老年を、一つのより高い完成の（可能化の）担い手として見上げている人は、常に若い、20でも、40でも、80でも」(XII/8)。老いに関しても、「人は、意志しなければ、老いることはない、人が意志すれば、人は何度も生まれるだろう。／黄金の青春時代。その黄金は私がそちらに眼を向けることの中にある、その黄金は古くならない、過ぎ去らない、私はいつもそちらを見ることが出来るから。／そして今、健康が君から遠くにあり、君が健康を見、その健康を楽しんでいるので、君は健康を以前よりも多く所有している。／君が年取るにつれて、君はいずれにせよもっと増加する。君の中で価値あるものが、上昇する、ゲーテの場合のように」(II/103)。そして確かにホールはそのように「老いた」。

私は「忍耐」、「事柄」などにホールが与えた意味は、ホールの固有の創造であると思う。そして「死」からさかのぼって見出された「真剣さ」の価値は、自分が決断し、為してきたことの肯定である。「ホメロスもまた彼の本質的なものの中において、確かに遊ぶことも、楽しませることもしようとしなかった。そうではなく、ホメロスは一つの精神を表現しなければならなかった。／すべては一つの生命力である。贅沢もない、無意味な空想制作もない。われわれには正當にそのようなものとして現れるものは、あつと言う間に、世界史の中で、その生を奪われる。すべては精神的な顔である。すべては理念を表現する試みである。(…)ただ唯一の精神的な職業が存在している、真剣な職業が」(XII/38)。「彼らは彼に言った、〈君は今、頑張る必要はない、あちらに行き、楽しめ、享樂を通して継続が生まれるだろう〉。彼が他の人たちが楽しみと名づけながらしていることをしながら、彼は絶えず、そこから彼がやってきた方を振り返って見ていた。真剣さの中を、そちらの方、再び真剣さの中を、享樂結果が導くことになっていた方を - 彼が苦勞して得ようとしていたこの享樂結果、もちろん無駄に。というのは、人が絶えず真剣さの方を、だから反対物の方を眺めているならば、いかなる楽しみもないからだ。／〈汝、追放された者、／お前の国はどこにある〉。ああ、ファウストの最も困難な旅は、悪魔と一緒に旅ではない、地獄をめぐる旅ではない - 彼は、その際に、今なお少し自分のもとにいる。最も困難な旅は、国の外部にあるだろう -



自分のもとにいることが完全になく。だから旅の容易さを通して、馬鹿げたものを通して。／われわれは死を通して生きる。最も困難なことは、国の外部の旅、自分の外部の旅である、－しかしファウストはただ自分自身によってのみ救済されるだろう、だから真剣さによってのみ。〈瞬間に向かってこう呼びかけてもよからう、留まれ、お前はいかにも美しい …〉(『ファウスト』第二部、第五幕)、これだけがそうである。／だからゲーテも楽しむことはできなかった、－少なくとも問題性なしには。／私は君たちに言う、もし君たちが子供のようになるならば、君たちは生きないだろう。／芸術家の最も困難な義務、軽快さに向かうこと、舞踏(生における)。というのは、ここで彼は彼の王国の境界に接している、死の近くで。／死が素晴らしいということは真ではない、死はただ生を贈る要素としてのみ善である」(XI/28)。「彼の旅の途上のファウストを見た誰が彼を、彼の精神性を信じただろうか。(しかしそれはファウストにとって何でもない、彼は人間によってではなく、天上の軍勢によって正しい存在になったから)」(II/35)<sup>25)</sup>。

ファウストは人間世界の審級ではなく、天の審級によって救済される。彼が何かの業績を為したからではなく、彼が自分の精神の要請に対して真剣であったから。ホールはまた、パスカルを引用している。「もし私の手紙がローマで有罪になるならば、私がその中で有罪としていることは、天上において有罪になる」(VII/139)。「天による救済」は、自分が為したこと(生=精神的な労働)の承認のことである。精神が為したこと(精神的な労働)は、世界の中で否認されようとも、自己の中で承認される。それは、天と同様に絶対的な承認である。

そして「死」は、この承認をもたらす契機である。「これは慈悲深く、素晴らしいことである、つまり誰にでも終わりにそれが与えられる、より正確には与えられたということ、芸術中の表現として、彼の本質の中にあつたもの、彼の最も本来的な能力であつたものが。それは〈自然な〉のではなく、驚くべきことである。というのは、われわれの努力は、われわれに所属しているものの上か下に、外部か内部にあるものに向かっていているから。われわれの作品は、われわれが予感しているよりも常にもっと深い、－それが通常の意味でそうであることができるのとは別の仕方で深い」(XII/58)。

ホールはカフェの隠喩を語る。「(そこで一つのカフェは、今再び、それがかつてあつたように、とても輝かしい。そして二度、私は最後の硬貨を支払うところだった、私は私の最後のグラスの前に座っていた、すぐに出て行かねばならなかった。さもなければ、まだ存在し

<sup>25)</sup> 『ファウスト』をパラフレーズしてホールは書く、「〈不純だ、不純だ〉と中級の天使たちは叫んだ。しかし最高の天の中から、一つの音が響いた、〈純粋な〉」(XII/151)。いずれにせよ、『覚書』全体は『ファウスト』の長大な注釈として読める。

ている手段で、そのカフェは完全に退屈になっていただろう。というのは、それは一つの完全に退屈なカフェであるから)。… 君が間もなく行くということ。／だから、君が間もなく行くということ、それは、全体 *das GANZE* を、生を君にとって – 我慢できるものにするばかりでなく、素晴らしくするメガネ」(XI/20)。

「死」は生を「作品」にする。「だから、生は芸術生産物に等しい、そして芸術生産物は真の生に等しい。他方に一方のように到達することは正しい振る舞いの中にある。証言を与えること、それは外面を通して内面を表現することである。要するに生を肯定することに本質を持っている、それとともに生を増加させることの中に。証言を与えることは、他者とのコミュニケーションである、働くことである」(II/119)。

生が作品であるならば、果てしなく制作することを欲する。「私は一つの作品を完成させると決して言いたくない。すべてが作品である。／〈すべてが〉、私が一人の作家のある個所に下線を引くのであれ、あるいは書き出す、一通の手紙を送る、何かをメモする、何かを考え、ある立場を取るなのであれ。この強制的に終えること、強制的に手紙を終える – この終えることは何かを殺すことである」(VII/150)。制作を続けることは、死の克服の身振りである。パスカルの『パンセ』、リヒテンベルクの『控え帖 *Sudelbücher*』の未完成は、死の克服の身振りとして解釈されるかもしれない。

生が作品であるならば、それは評価の対象となる。「彼らの実りに関して君たちは彼らを認識すべきだ」(XI/31)。「*良きもの*に関して人はものごとを測らなければならない、否定的なものに関してではない」(XI/33)。そのように測られると、「報酬は君の中になければならない、つまり業績の他の目標は存在しない、そして報酬はその中で、君が、〈私はある別の人を喜ばせるために生きた〉とすることができるならば、君の中にあるだろう」(II/24)。私が生を精神の作品にするならば、それは報酬である。そしてその報酬を認定するのは、「私」である。それは主観的な判断ではなく、ファウストの場合の「天」のような絶対的な審級である。「私」が精神の意味で真に承認しなければ、どの世俗的な業績も意味はない<sup>26)</sup>。

この作品の概念から、「生」が改めて／はじめて見られる。それはバルザックの残した作品である。「私は、聖人たちが、もし彼らがバルザックあるいは(後期の)リルケ以上のことをしたならば、いったい何をしたのか、知りたい。バルザックのそのような生でないとしたら、いったい何が神聖だろうか。人はこの生の期間を互いに並べてみてほしい。(それはただ二つだ)。最初の部分の、果てしなく、言葉にされることのできないほど負荷をかけ

<sup>26)</sup> 精神の活動それ自体が、世俗的な生活がどれほど悲惨であれ、喜びであるというホールの考えは、ホールが引用しているスピノザの文のパラフレーズであると私は思う。「至福は徳の報酬ではなくて徳それ自身である。そしてわれわれは快樂を抑制するがゆえに至福を享受するのではなくて、反対に、至福を享受するがゆえに快樂を抑制しうるのである」(『エチカ』第五部定理 42)。

られた状態。その第一部において彼は一人の友人をただ星として持っていた。／第二部の途方もない、持続する、見たところすべての人間的なものを越えて行く創造的な放電と永遠の苦勞（彼の年齢の 30 から 50 歳まで）。それから死が入ってきた、まさに見通しが到達されたときに。そのような眺めの前に泣きわめくこと以外に何かがあるのか」(II/ 165)。「生の意味への問い。／ある人間たちは完全な否定に至ることができない、すべてを無意味とみなすことができない。全体がなおそんなに脆弱で、怠惰であるにしても、今なお、人が助けることができる子供や少年が存在している。( - それどころか、幾人かの人たちが様々な時に、私を助けてくれたのではないか、私に幸福をもたらし、何かを与えたのではないか。どのような経験によって、どのような認識によってこの事実は廃棄されることができるのか、起こらなかったものとされることのできるのか)。それはすでに一つの意味にとって十分である、そして全体は前から始まる。ヘルダーリンはそれを言っている、〈神の力を信ずるのは／おのがうちに神を宿した者のみだ〉(『世の喝采』)。どうしてそこにバルザックがいた (いることができた) 世界において世界が無意味となるだろうか」(II/22)。

生の意味は与えられるのではない、生の意味を作るのは、各々の個人なのである。

生は各々の人間の作品である。ホールの生のイメージはしかしニーチェの「永劫回帰」が示すような激烈なものではない。生は道、流れである。「常にそれは道である (これは段階である)。〈生の意味と愛〉。第一に、人は、誰も助けてくれない、助けに来てくれないことを見る、(人が困っているとき。困窮なしには人はそもそも何も見ない)。／第二に、人は、人自身が逆の場合に異なった (助けに来ないあの子供のすべての人たちとは異なった) 振る舞いをするのかどうかと問いを置く。／第三に、この問いに答えることに、ある別のもっと大きな問いへの答えが依存している。世界は一つの意味を持つことができるか、生は生きるに値するか、という問いに。／そして見よ、第四に、人が他の人たちとそんなにまったく異なっているということは必要ではない。(人が、他の人たちが外から見えるような様子とは異なっているということは)。一つの個所で、向かうことの炎は燃えなければならない。一つの理念に対する愛 (より高い種の中の人間の進歩することへの愛) は確かにそれを支持している」(II/23)。

ヘラクレイトスの「万物は流転する」、ベルグソンの「生の躍動」とは異なり、ホールはメタファーで語っている。ホールの生の流れは、時間はただ前と後ろがあるという、自然科学の即物的なそれに近い。時間の流れは客観的である、それに人間の主観が参加し、客観を残す。それが生である。

死を人間の条件と考え (「生は短し」)、生きる (精神の活動をする)。死から生へのこの転換を可能にするのが精神の力である。だから「死の術」ではなく、「生きる術 Arte Vivende」。

「人はいつ闇を克服するのか。人が闇を受け入れるとき、ただその時にのみ、その時、完全に。生の問いはしかしこれである、つまり人はその際に無為に陥らないということ。／不滅のもの。途方もない、不滅の、真鍮製の用具に等しく。人はそれを少し磨く、その時それは全く少しの間、輝く、それは精神的な活動である。(それはだから、本来の意味で生産することではない、そうではなく、思い出の中に休むことである、一つの元気づけること、一つの示すことである)。一つの断片 *FRAGMENT*、一つの断片は常にわれわれの行為 *Tun* である、われわれすべての行為はそれである。過ぎ去ることのないものに関してほんの少しの行為。過ぎ去ることなく存在しているものに関して、ほんの少しの奉仕。－ 川の流れのようにわれわれのそばを疾走して過ぎていく不滅の存在者のわきで。われわれは岸辺に立っている(また少しばかり一緒に歩く)、そしてわれわれははかない存在である、不滅の存在はそばを疾走して過ぎ、永遠である。－ ただわずかの部分だけ、われわれは一緒に歩く、われわれは立っている、というのは、われわれははかない存在だから。－ というのは、まさにそれが変わることはない永遠の本質なのだ、永遠が行くこと、永遠が変化することが。そしてわれわれは遠くまで行くことができないので、われわれは立ち止まるので、とどまりたいので、それゆえにわれわれはほとんど永遠に所属していないのである、われわれはとどまらないのである。／もし君が、君が決して死なないと感じたことがなかったならば、君はもちろん、加わって意見を述べるものを何も持っていない。／それは、すべての書くことのための、最も極端な、最も内的な、最も厳密で、最も普遍的な規範である。自分が永遠であるということを見なかった者は、語ることを何も持っていない。／われわれははかない。前者、全体的な不滅のもの(流れ)とわれわれの自己との統一の中から、意義が、燃える個所が生まれる。本質的に統一から、本質的に二つのものからわれわれは成立している。… / 死ぬがよい!、だが、一度永遠の中を見よ。死につつある中で永遠の中に入っていくな。だから、生の中で一度、向こう側を眺めた者として、死ね。／(そのように行け。－ その時、君は陽気にサヨナラとすることができる。彼の生の中で一度向こうの方を眺めた人として。陽気に君は、－ というのは、生は無ではないから－、他の人たちに言う、－ ごきげんよう。何という甘美、この行くこと)」(XI/12)。

これは東洋的な円環的時の流れでも、死後に永遠の中に入るキリスト教的なそれでもない。生は時の永遠の流れに東の間だけ参加するのである。それ故に生は一層輝く。「人間は生をただ周囲に向けることができるが、産出することはできない。／生はすでにそこにあり、歩き続ける、すべてのものを通り。君ができることはただ、意識の事柄、意志の事柄、形式を変えることの事柄だけである。人は、人が彼らの方を向く、彼らの手伝いをするなどのときにのみ、子供たちと結び付いている」(XII/50)。

ホールはそれを出産のメタファーで語る。「われわれは常に一つの意識である、一人の遠方の参加者である。われわれは生を持っていない。 - ある人は、驚いて知覚する - 思い出す -、彼が何かを外に置いたままにしたことを。一つの大きな切片、人形、一つのもの、一つの誕生。一人の女に子供が生まれるとき、それはそのようなものであるかもしれない、そしてもっと深い意味で、それは他のようにはあり得ない。女は子供をどこかに投げ、子供は彼女から落ちる、彼女はそれを知らない、そして生の永遠の連鎖が継続される - それは誰か、それは何か。彼女は一瞬、その参加者だった」(XII/9)。

生の一つの表現としての流れよりもむしろ、ホールは運動としての「流れる」のイメージに魅了されているようだ。「われわれは常に、普遍的にそこに存在しているもの、流れて行くものの一つの一時的な統合である。… - 一瞬のあいだ人は果てしない色をまとめてイメージにすることができる、それは最高の人間的な業績、最も個人的な業績である。すでにすべてはふたたび、位置を変える、同じことが他のように作用する、同じイメージが同時に異なった仕方でも作用する、各々の別の照明のもとで異なって作用する」(XII/127)。

あるいは羊の群れの通過のイメージ。「生の本質、われわれの中をものたちが通り過ぎていくこと、あるいは逆に、われわれがものたちの中を通り過ぎていくこと。羊の群れは秋に村の中を通っていく、銀色に、山から来て、平地の中に行きながら。 - この通り抜けていくことは私をこの上なく喜ばせる。そのすべてはたいそう真実である」。「異文。／通過。ものごとの本質。 - われわれ自身が歩く、あるいはいわばわれわれの一つの内的なものがものごとの中を通っていく。この内的なものをわれわれは通り抜けて流させる、通り抜けて行かせる。われわれは決して保持することができない、あるいは所有できない。／美しい川の中で常に新しい貫流が交代する、そのような人は幸いなるかな。／それは時々秋に、白い羊たちの一列が、山から下りてきて村を通り過ぎていく、そのような通過である。羊たちはどこへ行くのか。鳥の群れが空気中から現れながら、空気中を通り遠方に向かうように。すでにその村は秋のようにきらめいている。銀色の群れは通り過ぎていく。／人間が体験することができる、もっとも至福なことは何か。主観的な思考の中から客観的なものへの転化である。私はもう疑うことができない、それはすべての尺度を越えていることである、最高のこと、そこから、今まで人間のもとで現れた、すべての最高の光が現れ出たものである。あるいはもっとよく言えば、そのような光として最高の光は、数千の形式の中で現れた。それはまた死の克服に他ならない」(XI/15)。

「流れ」が意味することは、大いなる肯定である。「もう一度、私は半睡の中で、日中の手段ではほとんど再現されることができない何かを見た。そこでは明晰で至福的であったものが、ここでは不可解なままでとどまっている、それが複雑なものの中へ消えて行くというよ

りもむしろ、それが単純なもの、この上なく単純なものの中に漂い消えていったので。 — 私は見た、そんなに醜く、苦悩に満ちて現れるものが、どんなに公正であるか、どんなに醜くなく、正しいかを。そんなに失われて現れるものがどんなに失われているのではないかを。数千回も苦悩と試みが、緊張が、正しくないものでわれわれの知覚が貫かれることが存在しなければならぬということ、最後に、少なくとも千回の試みの後で、少なくとも千回の意志の表明の後で一人の人が上に向かって登場するまで。これがまったく自然の中にあること、自然法則であること、最も実り豊かな出来事に劣ることなく、まったく生産、肯定であること — 健康的であること、そして、ただ一つのことだけが憂慮すべきで、遺憾であること、つまりその反対のこと、もしある人が意志することを止め、〈不健康な〉非一致 *Un-Ein-sheit* の緊張から退却するとき」(XII/150)。

ホールの思想はシンプルである。生の意味は与えられるのではない、人は自分固有の意味を世界と歴史のそれぞれの所与の条件の中で創らねばならない。人は自分の生の価値を創り出すことを生から要請されている。その創造行為をホールは精神の労働と言う。そして精神的労働者にとって生はあまりに短い。永遠の時の流れへの生の束の間の参加、それが精神の作品である。精神の労働こそ、生の喜びであり、意味である。その意味は完成された作品にあるよりはむしろそれに至る道、個々の歩みの中にある。「すべてが作品である」(VII/150)。

次のテキストを使用した。Hohl, Ludwig: Die Notizen. Erste Auflage (suhrkamp taschenbuch 1000) Frankfurt am Main, 1984. そこからの引用は、本文中に「章」数と項目の番号を記した。『覚書』の前身にあたる『ニュアンスと細部』を東北学院論集 教養学部の第170号と171号に訳出したので、読んでいただければ幸いである。ドイツ語による「要約」は長くなってしまったが、内容に関しては本稿と同じである。主としてドイツ語の原文で構成すると、ホールの言う解釈の「線」が異なった様相を見せ始めている。別バージョンとしても読めるだろう。

## Ludwig Hohls „Die Notizen“ lesen Denken 1)

Zum Nachdenken über „die Notizen“ teile ich sie in zwei Teilen von Denken und von Ausdruck ein. Aber „die Notizen“ bestehen darin, dass Denken und Ausdruck untrennbar miteinander gebunden sind. Das Denken muss so ausgedrückt werden, dass dessen Ausdruck dem Denken gewachsen sein kann. Der Ausdruck des Denkens überprüft das Denken. Es kommt auf den Ausdruck an, weil es nicht Philosophie, sondern Weisheit ist, die Hohl behandelt. Diese Weisheit ist „allgemeiner Ausblick, Ahnungshöhe dem Gesamten gegenüber.“ Sie ist nicht mitteilbar. „Während es sich in der Sache der Weisheit nur darum handelt, ein schon Dagewesenes wieder zu erreichen.“ Und die Weisheit zu beerben heißt, „die höchstmögliche Durchdringung der wissenschaftlichen Erkenntnisse mit deinem Leben, mit dem Leben deines Bewusstseins, einem Leben, das vom Bewusstsein herkommt und zu ihm strebt, das viel von Bewusstsein hat“ (Vom Erreichbaren und vom Unerreichbaren. In : „Nuancen und Details“). Die Weisheit ist die Erbschaft des Wissens der Menschheit, die bisher gelebt hat. „Die Erbschaft. Es ist nur dadurch möglich, dass man ähnlich erlebt, das Unausprechliche in den Sätzen jenes Mannes wiederfindet. Dass man vom Gesamten aus jene Sätze wieder bilden kann und somit, mit gleicher Mühe, entsprechende neue. Wenn man aus eigener Kraft eine große Nähe erreicht hat, dann springt der Funke herüber“ (II/203). Es ist Hohls Methode, vergangene Sätze zu lesen, deren Denken nachzugehen, und weiter fortzusetzen. Hohl versucht, den Prozeß mit der gleichen Intensität, die dem Denken entspricht, auszudrücken.

„Die Notizen“ sind eine Sammlung von vielen Fragmenten. Indessen sagt Hohl, „Wenn durch die Fragmente der Strom geht, sind sie eben nicht mehr Fragmente, dann ist das Gesetz wieder da“ (VII/146). Er deutet die Linie an, die durch das Ganze geht. Hohl selber hat die geschriebenen Notizen zurückführend aufgebaut und fordert den Leser auf, die durch das Ganze gehende Linie zu finden. „Ein Mann schreibt dir, dies ist kein Brief, sondern dies sind einige Notizen und Auszüge, zusammenhanglos aneinander gereiht. Du aber, der Empfänger, fassest es doch als Brief auf“ (XI/16).

In „Die Notizen“ handelt es sich darum, die Tätigkeiten des Geistes zu befördern. Nach dem Hohlschen Begriff des Geistes soll der Geist stark sein. „Jene, die «eine Welt» in sich tragen (schöpferische Menschen), es sind größere Quantitäten“ (XII/21). Der Geist ist positiv. Der

Geist ist autonome Bewegung. Der Geist ist reflexives Wissen. „Die Größe des Menschen liegt im Erkennen seiner Geringheit, der Relativitäten, d.h. Beziehungen in der unermesslichen Nacht um ihn“ (II/104).

### **Attribute des Geistes**

„Die Erkenntnis rettet uns“ (XII/16). Die meisten Sätze Hohls sind nicht Definition, sondern Aufforderung zur Tätigkeit des Geistes. „Worauf es ankommt, ist nicht, kolossal viel wissen. Sondern, zur richtigen Zeit das Richtige wissen“ (II/200). Die Tätigkeit des Geistes heißt Sehen: „alles durch Beobachtung“ (XII/76). Es gibt eine negative Seite des Sehens, d.h. „die vergoldende Ferne“ (XII/11), was bedeutet, dass die Ferne der Zeit Details undeutlich macht. Es ist die Phantasie, die den Übergang der Erkenntnis zur Tat ermöglicht. „Phantasie ist das Vermögen, sich ferne (andere) Verhältnisse richtig vorzustellen“ (XII/57). Und der Geist verbindet. „Denn der Geist führt hinüber, ist also synthetisch wie eine Brücke“ (XII/128). So, wie Hohl viel Zeit brauchte, um die geschriebenen Notizen zu verbinden, verbinde ich sie auf meine Weise, was zugleich ein mich aktivisierendes Lesen ist.

Hohl hält den Geist für diejenige Kraft, die Vernunft, Erkenntnis, Wissen, Phantasie in sich vereinigt. Und der Geist handelt in der Welt, wobei er From durch Widerstände und Reibungen erhält. Das ist ein endloser Prozess. „Dass die Dinge im richtigen Moment übertreten vom Handeln zum Erkennen, vom Erkennen zum Handeln, rettet die Dinge“ (II/264). „Die Rettung besteht nur in der Kommunikation mit Menschen“ (II/50). Dann „identifiziert man sein eigenes Geschehen mit dem Weltgeschehen“ (XII/98). Die Spur, die der Geist in der Welt zeichnet, ist „Geistesgeschichte, Biographie des Menschen“ (XII/52). Ich lese eine Umrisslinie der Geistesgeschichte in „den Notizen“ und zeichne sie nach.

### **Ich**

Der Geist ist kein abstrakter Begriff. Hohl bezeichnet sich als einen geistigen Arbeiter. „Die Notizen“ wurden geschrieben, während der dreißigjährige Hohl mit dem Leben rang. Eine intensive Innerlichkeit durchdringt sie. „Mir war allein wichtig, unter dem mir von Außen Begegnenden, das hervorzuheben, was mit meinem Geist in einer starken Beziehung stand“ (Einleitung zu IX). „Der Ort der Realisierung menschlicher Macht ist beim Einzelnen, nicht beim All“ (II/174). Im Fall von Hohl bedeutet das: „Das wahre Kriterium, dass einer ein Schriftsteller sei, ist, dass einer in sich eine unbesiegleiche Vehemenz habe, auszudrücken“ (IX/61). So hat Hohl angefangen. Zentripetale Kraft zum Ich legte ihm zwar „die schwere Panzerrüstung“ (II/260) gegen die Außenwelt auf, aber er hat im Alter von 18 Jahren zu denken



begonnen, indem er „Versicherungen der anderen völlig übersah“. „Denken ist vor allem Mut“ (VII/166). „Sich selbst sein“ ist für Hohl der größte Wert. „Ein wunderbarer Ausdruck : Ich bin bei mir“ (VII/64).

„Unabhängigwerden : ganz und gar nichts nachfragen Staat und Familie, überhaupt der Meinung der Menschen. ICH BIN lautet die Rede des Lebens“ (VII/143). „Ich“ ist das Subjekt des Geistes. „Jede positive Kraft ist nicht zu besiegen. Positive Kraft heißt eigene Kraft“ (XI/39). „Mein Wort heißt voll verantwortet von mir“ (I/8). Mit meiner eigenen Kraft, mit meinem Wort auszudrücken, was „ich“ denke, das macht „Die Notizen“ aus. Und dann, „Alles, was du bist, wirst du einst sein“ (XII/152). Das „Ich“ wendet aber sich an die Welt. „Ich bin, und weil ich bin, sollst auch du sein“ (II/ 64). „Sind jene, die das Werk empfangen, keine ändern?“ (II/146). „Das gute (richtige) Denken leitet automatisch zu den ändern hinüber“ (II/ 269). „Und zuletzt glaube ich immer noch an eines, an die Welt. Die Welt ist die Größte aller Persönlichkeiten“ (I/38).

### **Praxis**

Für Hohl ist der Wert des Menschen, „dass der Mensch Wert will. Wert wollen ist identisch mit dem Arbeiten“ (I/3). Und für die Arbeit ist das Leben zu kurz. „Eigenes Tun, zu dem dich innere Gewalten nötigen, das einzige, was Leben gibt, was retten kann. Der richtige Weg ist die Entfaltung der vollsten Tätigkeit, die uns möglich ist“ (I/1). Er erwähnt drei Stufen des Arbeitens, „die große Idee. Die der großen Idee entsprechenden Einzelvorstellungen. Die den Einzelvorstellungen entsprechenden Einzelausführungen“ (1/19). Er hält Einzelausführungen für am schwierigsten. „Tue diese einzelnen Dinge langsam im Maße deiner Möglichkeit, deiner Kräfte nur, eins nach dem andern. Dein Leben ist verändert. Die Worte, die einer der gewaltigsten Revolutionäre im entscheidendsten Augenblick gefunden haben soll, hier stehe ich, ich kann nicht anders. O lieber Freund Mensch, das Leben ist nicht so schwer“ (I/20).

Hohl erzählt verschiedene Lehren für den einzelnen Grad der Arbeit. Etwa „Dass wir durch Produzieren wachsen, nicht durch Ruhe“ (VII/20). Oder die Methode : „Es ist nicht Kraft, was den guten Schwimmer macht, sondern das Vertrauen in das Element, das schon körperlich gewordene Vertrauen“ (I/10). Die Idee von Sachen : „Eine Sache, und die Technik des ergebensten Dienstes an dieser Sache haben“ (II/284). Fleiß, Anstrengung, Geduld, die Werte, die seit langem behauptet sind, hält Hohl für die Erbschaft der Menschheit und erzählt davon mit eigenen Worten. „Geduld. Die Welt prüft uns durch lange Zeit hin. Punkt um Punkt“ (V/24). „Das eben ist das Geheimnis der Anstrengung, daß sie das bewirkt, was sich gar nicht berechnen läßt“

(VII/145). Oder durch die Metapher des Bergsteigens : „Unser eigentliches Ziel ist der Weg. Die Größten sind nur die größten Wegkundigen“ (II/36). Zur Einsamkeit bemerkt er : „Wer die Welt nicht souverän ausschalten kann, ist nicht befähigt zur Kunst. Die Kunst will wirklich die erste, die alleinige, höchste Gebieterin sein“ (XII/121). Hohl will sich zum Organon des Geistes machen, und das ist die Aufgabe, die jeden Augenblick des Alltags auferlegt ist.

### **Der Geist im Alltag**

„Wer sich nicht selbst disziplinieren kann, der bringt es niemals zu einer geistigen Leistung“ (II/ 194). Über Alltag und Umgebung, die die Tätigkeit des Geistes am meisten befördern. „Dass unsere gewöhnlichen Alltagserledigungen sollen mechanisch geschehen“ (I/17). Geist und Aussehen, : „Dass eben dieses Klotzige, Irdische das war, was die ganze Figur bewahrte“ (II/322). „Die größten Kräfte gewinnt man durch Abbrechung aus ihrem Ursprungsgebiete - durch Exil“ (II/27). Hohl erzählt die Tätigkeit des Geistes im Sinne des Mythos von Sisyphos. „Der Stein ist das Leben, das geistige Leben, das ewige Leben ,das es zu erhalten gilt“ (VII/23).

Die Abwesenheit der geistigen Tätigkeiten bedeutet Unglück. Das zeigt die Kritik der Moral der modernen bürgerlichen Gesellschaft. Über Faulheit : „Da gehen sie lieber eine Stunde beten, als eine Minute zu denken, so faul sind sie“ (II/128). Über Langweile : Die Leute verbringen umsonst „ihre Zeit, die wenige Zeit, die ihnen, wie allen Menschen gegeben ist. Warum werden ihnen die Sorgen nicht eine Stufe zur Höhe?“ (XII/104). Für Hohl heißt der Ungeist die Sache über den Gott. „Gott ist vor allem ein Produkt des menschlichen Nichthandelns“ (XII/132). „Mir ist es durchaus klar, dass es keinen Gott gibt. Aber es gibt die Welt, das ist schon wunderbar genug“ (XII/35). Über den Geistlichen : „Mißtraue den seit langer Zeit Geretteten!“ (II/ 116). „Die Moral ist dazu, den Menschen seiner Pflichten zu entbinden“ (II/ 324). Die Gesetze „sind lediglich da zur Aufrechterhaltung einer gewissen Ordnung“ (II/324). Anschließend an die Landschaft in den Niederlanden, wo Hohl „Die Notizen“ schrieb : für den Geist ist „das beste Klima nicht das treibende, sondern das neutralisierende. --- Die immer neuen, inneren Notwendigkeiten geben den Zuschuß, es (das geistige Gebilde) immer fester zu fügen, dass es widerstrebt“ (XII/123). „Die Notizen“ wurde „in größter geistiger Einöde“ geschrieben. Hohl suchte nach der Wildnis für den Geist, weshalb etwa sein Zimmer (der Keller) wie eine klosterhafte Einzelzelle aussieht.

### **Leiden**

Hohl zeichnet die Bahnen des Geistes, der verschiedenen Situationen in der Welt beugenet.

Der Geist muß notwendigerweis sich mit den Bedingungen des Menschen, Leiden und Tod auseinandersetzen, was zugleich eine Geistesgeschichte wird, weil der Mensch durch die Welt vermittelt ist. Jede Sache muss konsequent nach ihrer eigenen Logik bedacht und belebt werden. „Das Unglück allein ist noch nicht das ganze Unglück. Frage ist noch, wie man es besteht. Erst wenn man es schlecht besteht, wird es ein ganzes Unglück“ (II/333). „Dass es nicht auf das Leiden ankommt, sondern darauf, was wir daraus machen“ (II/169). „Man darf nicht am Leiden leiden“ (XII/94). Wir können leiden, indem wir „die Schmrzen annehmen“ (II/95). „Die Leiden zu verscheuchen, durch einen stärkeren Gegenstrom zu beheben“ (II/157). „Ein Weg zur Überwindung des Leidens ist Bekanntmachung in erster Linie vor sich selbst. Da nun aber beinahe jedes Leiden sich als eines erweist, das viele andere auch haben“ (II/167).

Hohl läßt alle Negativitäten in Positivität umschlagen. Die Armut ist eine Aura von Hohls Legende, ist aber Normalzustand des geistigen Arbeiters. „Es gehört eine ungemeine Kraft dazu, in der Geldbedrängnis die seelische Würde aufrecht zu erhalten. Der Künstler kann das“ (II/163). Hohl beobachtet die Armut wie eine Naturerscheinung. „Es wird wirklich außerordentlich schwierig, für diejenigen, die nie in dieser Lage waren, sich die Lage der Geldlosigkeit vorzustellen“ (II/ 259). „Ich fasse nun alles, was sinnvoll, mit voller Bejahung seines Wesens, unternommen ist, als Produktivität. --- zwischen Wandern, Sprechen, ähnlichen Dingen und «Arbeiten» besteht für mich keinelei Kluft mehr“ (VII/159). Über den Hunger: „Hunger ist schöpferisch, reizt und baut. Dieser Hunger führt uns Wege zu Dingen, zu denen wir normalerweise nicht hingegangen wären“ (II/278). Einsamkeit: „Die Größten, die Einsamen sind, die Vertrauen zu der Welt haben. - Wie zu einem Bruder“ (XII/148). Aber die größte Gefahr ist für den Geist „die absolute Lustlosigkeit“ (XII/141) und hier ist auch der Satz aus der Vergangenheit rettend: „Erinnerungen an einen Satz, den ich einmal gelesen habe, «von jenen schöpferischen Tiefen, die gleich entfernt sind von Freude wie von Leid» und einen anderen Satz, von jemand über Pascal geschrieben. : Die Last, die jeder andere abgeworfen hätte, nimmt er auf sich und keuchend, flammend steigt er damit den Berg hinan“ (XII/142).

Der Entschluß, trotz Alledem positiv zu leben, heißt das Vertrauen auf die Kraft des Geistes. „Wenn wir sie nennen, sind die Dinge meistens vorbei“ (II/96). Die Sprache setzt das Wesen der Welt voraus. Die Rettung kommt aus der Welt. „Aber der Größte unter ihnen, die Welt, maß sie (diese unsäglichen Anstrengungen)“ (II/177). Die Lektüre von Goethes „Maximen und Reflexionen“ läßt „die Notizen“ und deren Form anerkennen. „Alles, was man

geschaffen hat, zeigt sich als echt“ (XII/144). Sich anzuschließen an das Gedächtnis davon, dass die Menschen gelebt haben, die Erbschaft des Menschen, ermöglicht die Einsamkeit zu überwinden. Die Kraft des Geistes ist Vertrauen auf das Leben des Menschen. „Seit Jahren habe ich nie drei Tage nacheinander erlebt, an denen nicht eine oder mehrere der primitivsten Bedingungen unerfüllt geblieben wären“ (VII/172).

### **Tod**

Wenn ich so ausdrücke, dass die Zitate durch meine Interpretationslinie sich verbinden lassen : In dem Tod „gibt es für uns nichts zu studieren“ (XI/18). “Bewußt zu sein, daß der Tod eine totale Tatsache ist. Wie deine Kraft sich erhöhen und Richtung nehmen in die Welt! Dein Leben erhält einen Wert“ (XI/18). “Auf die eigene Arbeit folgt notwendigerweise der eigene Tod“ (I/9). “Das «an den Mann bringen» ermöglicht sich nur durch eine immer neue Form : andere, dem jetzigen Rhythmus entsprechende Wortstellung, jetzige Worte, jetzige Bezugnehmung“ (XI/2). An den Tod zu denken, heißt, den Tod mit eigenem Wort und auf eigene Weise auszudrücken. Hohl sagt, man sei am meisten bereit zum Tode „in dem Augenblick des höchsten Lebens“ (XI/17). Was die größte Herrlichkeit, das höchste Glück ist : „Wenn das subjektive Denken plötzlich ins objektive umschlägt. Das ist genau ein Augenblick wie der, in dem man den Tod überwunden hat“ (XI/7).

### **Leben und Werk**

„Der Mensch hat die Pflicht, reich zu sein“ (II/25). Reichhaltige Möglichkeiten der geistigen Tätigkeiten werden vom Leben gegeben, um zu erkennen und auszuführen. „Höheres, oder Intensiveres, als volle Lebensteilnahme gibt es nicht“ (II/171). Es kommt auf den Ernst der Sache an. „Erlöst wird Faust doch nur durch sich, durch den Ernst also“ (XI/28). „Faust wurde nicht gerecht durch die Menschen, sondern durch die himmlischen Heerscharen“ (II/35). Die Erlösung durch den Himmel heißt die Anerkennung dessen, was man getan hat, die der geistigen Arbeit. „Der Lohn muß in dir sein“ (II/24). Und der Tod bringt die Anerkennung. „Daß jedem am Ende das wird, genauer, geworden ist, als Ausdruck in der Kunst, was in seinem Wesen gelegen hat, was sein eigentliches Vermögen war“ (XII/58). Der Tod macht das Leben zum Werk. „Leben ist gleich Kunstprodukt ... Zeugnis geben, das ist Darstellen eines Innen durch ein Außen“ (II/ 119). Hohl drückt die große Bejahung des Lebens aus. „Die Frage nach dem Sinn des Lebens. Wäre das Ganze noch so morsch und faul, so gibt es immer noch Kinder, Junge, denen man helfen kann. Ja, haben mir nicht doch auch mehrere geholfen, zu verschiedenen Zeiten, Glück gebracht und etwas gegeben ? Das genügt schon wieder für einen

Sinn und das ganze fängt von vorn an. Wie sollte eine Welt je sinnlos werden, in der ein Balzac gewesen ist?“ (II/22).

Hohl erzählt bildhaft das Leben. Das Leben ist, „ein winzig kleines Stück Dienst am unvergänglich Seienden. Ein Fragment“ (XI/12). Oder „Durchgang. Das Wesen der Dinge. Wir selber gehen oder ein Inneres von uns geht durch die Dinge hindurch. Das sind Durchgänge, wie manchmal herbstlich ein Zug weißer Schafe durch Dorf ziehen, von den Bergen kommend, — Schon erglänzt das Dorf herbstlich. Die silbrigen Scharen ziehen hindurch“ (XI/15). Flüchtige Teilnahme an dem ewig Fließenden. „Alles ist Werk“ (VII/15).

## 【論 文】

# 生成文法？認知文法？それとも…？<sup>(1)</sup>

高 橋 直 彦

### 0. 摘 要

タイトルは大上段に構えたものの、本論考は文法理論についてささやかなコメントを加えるという趣旨のものである。具体的には、とかく対立的な2大陣営と捉えられがちな生成文法と認知文法とが、(i) 実は双方の主張が——「流儀の違い」といったレベルを超えて——齟齬をきたしたままそもそも議論がかみ合っていない（し、かつそのことを双方が自覚していないのではないかと疑われる）部分があること、(ii) そうした齟齬を解消する枠組の候補としてひな形方式が有力であること、の2点を中心に論ずる。

### 1. モジュール性に関する見解の相違

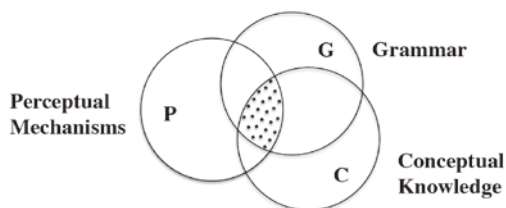
まず、言語がモジュール性によって規定されるか否かに関する見解について検討する。この点に関して生成文法（Chomsky（1975）等）対（生成意味論（Lakoff（1971）等）や）認知文法（Langacker（2008）等）は際立った対照を示す。概略的に言うなら、生成文法は文法内外のモジュール性を前提とした理論構築を行うのに対して、（生成意味論や）認知文法はモジュール性に関しては否定的な立場に立脚する。

しかし、結論から言うなら、この点に関する両陣営の立論には共に不備があると言わざるを得ない。例えば、生成文法の概説書である Lightfoot（1976：42ff）は以下のような図式を用いてモジュール性の説明を行っている。（1）—（2）を参照されたい。

---

<sup>(1)</sup> 本論考の内容は、一部、教養学部サロン（2014年5月29日、於東北学院大学教養学部）で行った口頭発表「ひな形方式ってな～に？——先入観を捨てよう——」に基づいている。発表当日ご質問や貴重なコメントをくださった皆様に感謝申し上げます。また、本論考で使用した図のスキャン絡みで、東北学院大学教養学部言語文化事務室の木村久美子さんにお手数をお掛けしました。併せて謝意を表します。

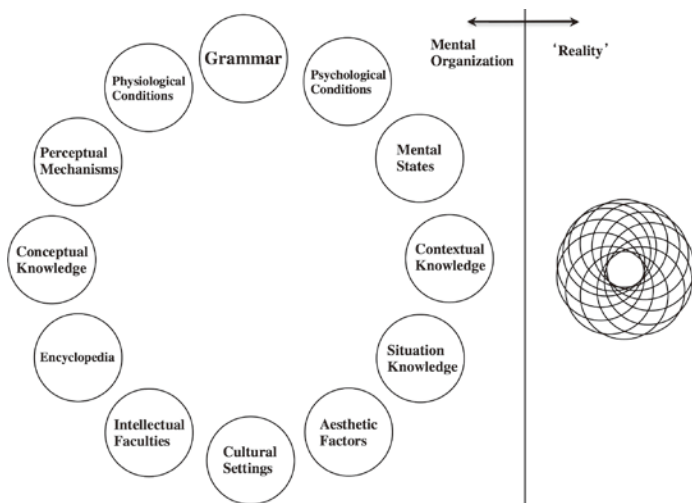
(1)



- (2) a. [[that [that [that [the moon is bright]] is obvious] disturbs me] surprised Harry]  
 b. Colorless green ideas sleep furiously.

(2a) に類する文は、文法および認知知識の領域では適正とされるけれども知覚処理機構の点で基本的に処理不能とされる埋め込み構造の例である。(2b) は有名な Chomsky (1957) の例であり、文法および知覚処理機構の点では適正とされるけれども認知知識の領域で基本的に不適格とされる例である。また、(1) で 3 モジュールが交差する領域は、文法・知覚処理機構・認知知識の 3 領域で適格とされる例（無数にある）である。モジュール間のこうした関係を表す図として (1) は一見分かりやすく明快ではあるのだが、しかし、(1) のような図式化は生成文法の陣営の考え方を示す図としては厳密に言うなら誤解を招くものである。なぜならば、個々のモジュールの自律性を真に謳う図式化は以下の図の左側のように表される筈のものだからである。

(3)



(3) の図式化はあくまで模式図であることを前提の上で話を進めることにするが、賢明な読者なら既にお気付きであろう。然り。「モジュール性」を強調する生成文法の陣営は図の左側の（良くも悪くも）抽象的な「Mental Organization」レベルを云々しているのに対して、

認知文法の陣営は図の右側の（良くも悪くも）実現形に近い「Reality」レベルを云々しているのである。そしてここで重要な点は、「Reality」ということと言うなら、実は左側も右側も共に「Reality」を有しているのであって、ただ「Reality」という言葉の適用されるレベルが異なる——つまり、左側は抽象的なレベルの「Reality」を有し、右側は実現形に近いレベルの「Reality」を有している——ということに他ならないという点である。即ち、この点に関して言えば、両陣営は軸足を異にしている水掛け論だということになる。例えば、吉村（編）（2003：81）は生成文法を評して、「言語運用のレベルでの理論やモデルを無視して言語能力レベルでの理論やモデルを構築しようとするのは、2階のない建物に3階を建てつけようとするようなものである。」と述べているが、この批判は、生成文法の陣営からは「言語能力のレベルでの理論やモデルを無視して言語運用レベルでの理論やモデルを構築しようとするのは、2階のない建物に3階を建てつけようとするようなものである。」という反論を受けること必定である。どっちもどっちである。

因みに、くどいが、(3)の図式化はあくまで模式図である。筆者は、左側のモジュールに関してこれで必要十分だなどと主張するつもりは毛頭ないし、右側に関しても、個々のモジュールの「重なり方」は実際には文法ごとに区々であろうと考える。例えば、モジュールの「重なり方」の違いに関して以下を参照されたい。

- (2) a'. [[[[[月が明るい] ということ] は明らかであるということ] が僕にとってはイライラの種だということ] がハリーにとっては驚きであった]

(2a)に対応する（Lightfootでは挙げられていない）この日本語文は(2a)と異なり(1)の3モジュールが交差する領域で適格である。この違いは日英の「知覚処理方向の同一性」対「文法の語順の違い」に起因するものである。

本節の結論を述べよう。「モジュール性」の有無に関する議論は、適用のレベルと切り離して論ずる限り、基本的に不毛である。それでも仮にこの問題が依然としてくすぶり続けるとしたなら、それはもう「趣味の問題」や「流儀の問題」や「時代の流行り廃り」の問題なのであって、実質的な対立にはなり得ず、純粹に学問的なレベルにとっては周遍的な問題に他ならない。なお、ここでは「文法対文法外」のモジュールを中心に論じたが、「文法内モジュール」に関して、基本的な議論は同様である。また、「モジュール性」そのものに関して言えば、Fodor (1983)は基本文献となろう。



## 2. 生成文法と認知文法の得失

他の学問領域同様、文法理論に関しても（実に）多くの枠組が提案されてきた。歴史的に見れば、例えば伝統文法対構造主義言語学、構造主義言語学対生成文法<sup>(2)</sup> という対立図式が指摘されることがあったし、歴史は繰り返すで、生成文法（解釈意味論）対生成意味論や生成文法対機能文法や生成文法対認知文法や生成文法対最適性理論<sup>(3)</sup>、さらには認知文法対関連性理論<sup>(4)</sup> という対立図式も指摘されている、等々等々といった具合である（しかも、それぞれの枠組には種々様々の分派が存在する）。このうち、本論考では生成文法と認知文法（および一部関係文法）を組上にあげる。

関係文法の一発展形である Metagraph Grammar (MG) を奉ずる Postal (2010) によれば、生成文法は、それ自身の内部に様々の分派としての枠組を擁するものの、いわゆる「主流派」に限って言えば以下の道具立てを共有するという。<sup>(5)</sup>

### (4) *Elements of the Chomskyan generative syntactic barrel* (Postal (2010 : (1.1)))

{abstract case, atomic node labels, atomic traces, binding principles based on c-command (Principles A, B, C), c-command, complex node labels composed of sets of feature specifications, configurational definitions of grammatical relations [...], constituent structure trees, copy traces, derivations, economy principles, empty nodes, feature checking, Greed, Last Resort, lexical entries, lexical rules, phrase structure rules, Procrastinate, reanalysis, Relativized Minimality, Subjacency,  $\theta$ -roles, the A-over-A Principle, the Case Filter, the Chain Condition, the Cyclic Principle, the Doubly Filled Comp Filter, the Empty Category Principle, the Extension Condition, the Head Movement Constraint, the Least Effort Principle, the Minimal Distance Principle, the Minimal Link Condition, the Minimality Condition, the Opacity Condition, the principle of full interpretation, the principle of recovery of deletion, the Projection Principle, the Specified Subject Condition, the structure-preserving hypothesis, the Superiority Condition, the  $\theta$ -Criterion, the Tensed-S Condition, the Visibility Condition, the *Wh*-Island Constraint, transformations, X-bar theory}

Postal は 道具立て (4) を共有する枠組のもつ難点を以下のように指摘する。

<sup>(2)</sup> 高橋 (1995) 及びそこで言及されている文献参照。

<sup>(3)</sup> 生成文法対最適性理論については、高橋 (1995) 参照。

<sup>(4)</sup> 認知文法対関連性理論については、今井 (2015) を参照。

<sup>(5)</sup> 「主流派」は、基底と表層とを変換という道具立てを仲介にして結びつける「多層アプローチ (multi-stratal approach)」を特色とする。これに対して変換という概念を援用しない「単層アプローチ (mono-stratal approach)」もある。本論考で論駁の対象とするのは、「多層アプローチ」の方である。

- (5) 「インプット→アウトプット」関係に基づく派生列（派生の履歴）を1文を構成する形式間に想定した上で、基底構造に対して理論的に必要とされる変換操作を順次適用してゆき最終的に表層構造を派生する、といった生成文法主流派に見られる「多層アプローチ」は、実は必要以上に無駄な操作を含むものであり、かつ、そのことを分析者自身が（変換操作の確認作業を実際に「逐一」「明示的に」行っていないケースが往々にしてあるという事情も手伝って、）明確に自覚してはいない。<sup>(6)</sup>

この論点は一理ある（cf. (9), (10)）のだが、しかし以下に述べる意味で、Postal 自身の枠組も「中途半端」な枠組に留まっている。

第一点。Postal が想定する枠組は「Metagraph」という「構造表示」を想定すれば変換操作は不要となると主張するものの、(1) の「原理群」の代わりに想定すべしとされる「原理群」が以下に示すように辟易する程の数に上る。

(6) *Principles of Postal (2010)*

the 2 Quace Lexical Assignment Schema, the 2 Quace Marking of 1 Arcs Condition, the 3 Object/2 Arc Local SuccessorI Condition, the 3 Object-Induced 2-to-4 Demension Condition, the 3 Object Lightness Condition, 4 Arc Forcing by 3-Object-to-2 Advancement Condition, 4 Object 2 Quace Condition, 7, 8, 9 Arc Condition, 9 Arc Clausal Condition, Basic English Periphrastic Passive Condition, Basic English Pseudopassive Condition, *Born* Lexical Condition, Clause-Internal Intersecting Denotation Condition, Comlement Clause Condition, Comlement Clause Demotion to 3 Qualification Condition, Congruent Local Successor<sub>III</sub> Uniqueness Condition, Control Antecedence Condition, Coordinate Structure Constraint, Ctrl Arc Condition, Dangling Arc Erase Condition, English 2 Quace Condition, English 3 Object Demotion Condition, English 3-Object-to-2 Advancement Condition, English Adjectival Clause Relationa Poverty Condition, English Final 3 Object Lexical Ban Condition, English Final 5 Object Lexical Ban Condition, English Periphrastic Non-2 Object Passive Condition, English Prepositional Phase Control Condition, English Pure Adjectival Clause Viable 1 Arc Condition, English Synthetic Passive (Middle) Condition, etc, etc, etc.

第二点。それ以上の問題点として、「多層アプローチ」を否定している筈の MG が、依然

---

<sup>(6)</sup> この点を「実感」していただくには、例えば佐藤・小林 (2013: § 1.2.2) で論じられている、生成文法流の具体的な「派生」法に対する批判的検討の件りを参照されたい。

として「削除」という「書き換え操作」を温存しており、その結果「R-graph (M)」というレベルの他に「S-graph (M)」というレベルも必要となってしまうという点が挙げられる。この点に関しては後述する (4 節)。

## 2.1. 受動文

### 2.1.1. 生成文法

データを説明する際の生成文法と認知文法の異同を概観するために、ここではまず受動文にまつわるデータに対する生成文法流の説明を採上げ、考察する。

客観性を可能な限り担保するために、まず初めに生成文法主流派という枠組の含意する得失、即ちその「利点」と「難点」と目される特徴を大雑把な形で洗い出してみる、という作業に着手することから議論を始めることにしよう。

生成文法のもつ最大の利点は、おそらくは、

- (7) 反証可能性を高めるという目標の下、明示的定式化に依拠する理論構築を行っている。

という点にあるかと思われる。生成文法出現以降この特徴が起爆剤となって、言語研究が生成文法の枠内でも枠外でも隆盛を極める状況が形成されるに至った、という点は基本的な点として認めてよいと思われる。

次に、生成文法（主流派）のもつ最大の難点は、おそらくは、

- (8) 言語の有する共通項に（のみ）着目し、共通項あり、説明を求むというテーゼを基本路線としてきた。

という点にあるかと思われる。このテーゼのお陰で（せいでは？）、生成文法主流派は、まず個別言語「内」のレベルでは、例えば「能動文～受動文」に見られる関係の解明に際し「知的意味の共有」という関係（のみ）を盾に両者の相違点に関してはこれをほとんど無視（ないし過小評価）してきた、という経緯がある。この点には後ほど具体例と共に立ち戻る。

また、個別言語「間」のレベルでは、言語間に見られる関係の解明に際し「普遍的特徴の解明」という一点に注力した上で多様な相違点に関してはこれを過小評価してきた、という経緯がある。むろん、パラメターという概念との抱き合わせで相違点＝多様性を把捉しよう

としてはいるのであるが、元々は英語圏発の枠組ということもあり、英語中心主義的発想法が色濃く残っている（例えば、語順の多様性に関する Kayne (1994) の分析等はその典型である）。

生成文法主流派は実はさらに根本的な難点も抱え込んでいる。それは「多層アプローチ」であるという点にまさに関わるものであり、(9) に示すように共時態に書き換え規則を想定しているという点である。（つまり、生成文法主流派はソシュールの立てた区別「共時態」対「通時態」を未だに真には理解していないという致命的な誤謬を抱え込んでいる、ということである。）<sup>(7)</sup> この方式に対峙する「ひな形方式」に基づくテーゼを(10) に示す。

(9) 「共時態に通時態を混入させてしまう」枠組の誤謬（高橋 (1995)）

- i. 言語は常に変化するから通時態は変更規則を含まざるを得ないが、共時態に変更規則を認めてしまうと、「言語 L の文法 G の話者は、L の史的变化に伴い、時代が下るにつれて変更規則が増減し、G 獲得の困難度が増減する」という受容れ難い結論を回避し得ない。
- ii. また、「派生がある限度を越えて複雑になったり簡易になったりしたら、ある段階でしかるべき再編成が行われ、派生の簡素化や充実化が行われる」という救済策を考えても、今度は、適度の複雑度/簡易度の規則体系とはどんな内容の規則を何個含む場合かという間に答えねばならず、また「再編成過程」なるものの中身に関する具体的な理論（さらには規則の順序付けに関する理論）を打ち立てねばならぬという非現実的な課題を背負い込む。

(10) 「ひな形方式」に基づくテーゼ（抜粋）<sup>(8)</sup>

共時態（正式には文法内規則）のレベルでは「変更規則＝書き換え規則」という概念を援用して定式化を行ってはならない。

テーゼ (10) に基づく具体的な分析は 3 節で提示することにして、ここではまず生成文法主流派の分析法を提示しよう。以下の能動文と受動文とを考える。

- (11) a. He kicks the ball.  
b. The ball is kicked by him.

<sup>(7)</sup> 主流派にはさらに「破格な構造の想定」という誤謬も見られる (§ 2.2.1.)。

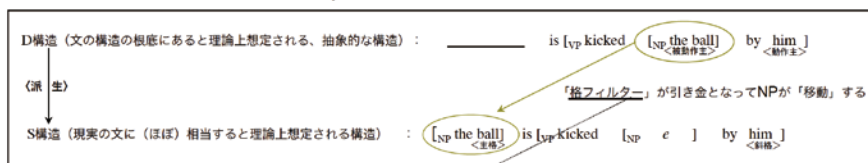
<sup>(8)</sup> 詳細な作業原則は、<http://raspberrys.jp/TMwh.pdf> を参照されたい。

受動文 (11b) の生成文法主流派による分析は以下になる。(ここでは CB 理論 (Chomsky (1981)) の分析を中心に示すが、ミニマリストの分析でも「変換」という概念に依拠するという点では基本的に変わらない。)

まず、そもそも、GB 以前の古典的な枠組では上記「共通項」はまさしく「能動文から受動文を導く」という形で説明されたことがある (Chomsky (1957))。上述の「知的意味の共有」を盾に、能動文 (11a) と受動文 (11b) との「共通項」を把握すべく「(11b) は (11a) から派生される」と想定されたのである。ここにはまた、「能動文」の方が「受動文」よりも基本的で無標であるという想定事項も根底にあった。

しかし、さすがにこうした分析はやがて退けられた。(11a) — (11b) は確かに知的意味 (動作主が誰で被動作主が何か、等) は共有しているものの、そもそも「事態の把握の仕方」が全く異なっているからである。例えば、「まずいずれに視点を置いて事態を捉えているか」というレベルでの「意味」を異にしている。(この点に関しては実は認知文法他の陣営からの批判があり、生成文法の陣営も意識し出したという経緯がある。)そこで GB の段階では「共通項」の把握は「受動文をもう少し受動文寄りの基底形から導出する」という形に改められた。(12) の如くである。ここでは、高橋 (2008) に従い、GB 理論の抱える問題点と共に示す。(また、ひな形方式に基づく代案も一部先取りして示しておくが、ひな形の具体的な図式は 3 節で提示する。)

(12) a. 生成文法の GB 理論では、「受動文」The ball is kicked by him. の派生は概略以下のようなものとなる。



上の派生では、以下の点が仮定されている。

- GB 理論における仮定 :
- a.  $\theta$  役割 (名詞句や前置詞句が持つ「動作主」「被動作主」等の意味役割) の関係は D 構造で表される。
  - b. 抽象格 (名詞句が持つ「主格」「対格 (=目的格)」「斜格」等の格) の関係は S 構造で表される。
  - c. 受動態の形をした動詞 (上例の is kicked) は後接の名詞句 (上例の the ball) に格を付与することができない。
  - d. 「格フィルター」: 音形のある名詞句 (=発音される名詞句) には抽象格が付与されていないといけない。

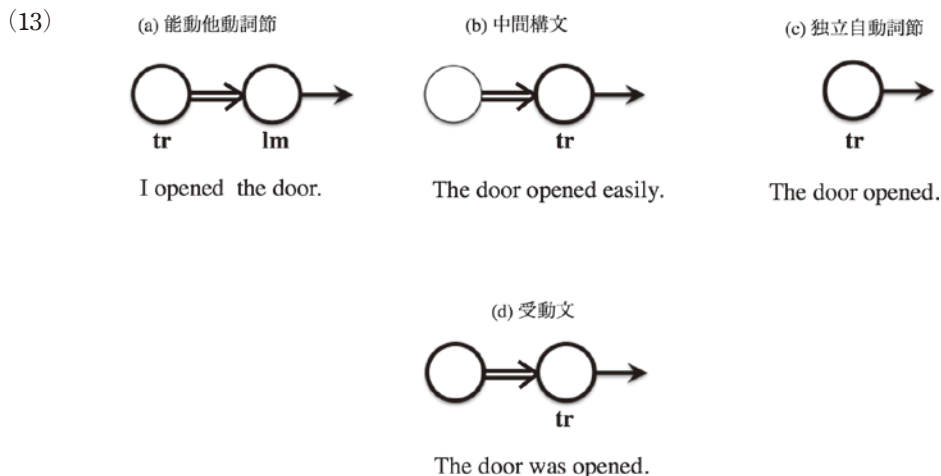
(12) b. 生成文法の GB 理論流の「受動文」The ball is kicked by him. の派生の問題点 :

「受動態の形をした動詞 (is kicked) は後接の名詞句 (the ball) に格を付与することができない」(仮定 c) というのであれば、  
 そもそも一休何故、当該名詞句は D 構造の段階で当該位置に入り込むことが許されていたのか?  
 「格フィルター」が引き金となって NP が「移動」する (仮定 d) というが、同じく、  
 そもそも一休何故、当該名詞句は D 構造の段階で当該位置に入り込むことが許されていたのか?  
 「 $\theta$  役割」は D 構造で付与され、抽象格は S 構造で付与される (仮定 a, b) というが、  
 そもそも一休何故、S 構造では  $\theta$  役割を持たなくてよいと想定し、D 構造では抽象格を持たなくてよいと想定するのか?  
 この 3 つの運動した疑問点に対する GB 理論の側の答は、「だからこそ仮定 a と b を想定し、それを前提に c と d を想定しているのである」というものである。  
 しかしながら、こうした想定事項が必要となってしまっているのは、そもそも名詞句を「それ以上分解できない塊」と見做した上で、  
 「その塊をそちらへと移動する」しかないと思えてしまっているからではないのか? しかし、そうした「移動」は二休手組であろう。名詞句をせつかく「 $\theta$  役割」という面と「抽象格」という面とに因子分解したのであれば、その因子分解をそのまま素面に活用すればいいだけではないのか?  
 3 節で、この線に沿った代案 (ひな形方式に則った代案) を示す。この代案では、名詞句を「それ以上分解できない塊」とは見做さない。  
 名詞句は「 $\theta$  役割」という面と「抽象格」という面とに因子分解され、各面が、統語上のしかるべき位置と連結される (ひな形との照合) と想定する。  
 この枠組では各面が統語上のしかるべき位置と連結されるだけであるので、当然のことながら「移動」という操作は不要 (書き換え規則不要) となる。そして、  
 音声実現のレベルでは、当該名詞句 (の  $\theta$  役割の面) が連結されている \(\backslash\) の時点で名詞句全体が音声的に実現され、\(\backslash\) の時点でほぼは実現されない、  
 というだけのことである。同時に、対応する能動文の場合は、\(\backslash\) (格付可能な位置) と \(\backslash\) ( $\theta$  役割付可能な位置) が構造的に重なっているわけである。

また、「能動文の方が受動文よりも基本的で無標」という把握の仕方も実は一面的である。というのも、能動文と受動文を純粹に比較した場合はなるほど「能動文の方が無標」と言えるかもしれないが、「事態の把握の仕方」を考慮に入れた現実の場面では、「能動文の使用が適切とされる場面で能動文を使用するのは適切で無標と言えるが、受動文の使用が適切とされる場面で能動文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」し、同様に「受動文の使用が適切とされる場面で受動文を使用するのは適切で無標と言えるが、能動文の使用が適切とされる場面で受動文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」からである。つまり、「有標性」という概念には適用のレベルが少なくとも2つあり、純粹に理論レベルで云々すべきものと、現実の場面での使用というレベルで云々すべきものがある、ということである。この点を斟酌しない「有標性理論」は、現実には使い物にならないどころか、仇にさえなりかねないのである。

### 2.1.2. 認知文法

さて、生成文法主流派の受動文の分析に対して認知文法が異を唱えたのは、まさしく上述のような「事態の把握の仕方」を考慮に入れない非現実的な分析法に対してであった。例えば、Langacker (2008) は (13) に示すように、能動文と受動文を中間構文（これについては §2.2. で触れる）も含めたさらに広い視野の中に位置づけている。



つまり、中間構文は他動詞能動文（「動作主による力の行使+主題的プロセス」のプロファイル）と自動詞文（「主題的プロセス」のプロファイル）との中間に位置づけられ（「因果関係」を喚起はするがプロファイルはしない）、受動文は「動作主-主題的という相互作用全体」

をプロフィールしている，とするのである。<sup>(9)</sup>

さて，以上の点のみに鑑みた場合，(かつての)生成文法主流派流の受動文の分析に対する認知文法による批判は，文に対する現実的な見方という点では一応当を得ているとすることができる。しかしながら，ことはそう単純ではない。文に対する現実的な見方という点で，認知文法は依然として「中途半端」なままであり，全面的に現実的な見方とはなっていないからである。それは，以下のような類の間に対して認知文法が基本的に「黙して語らず」だからである。(14)を参照されたい。

- (14) a. He kicks the ball.  
 a'. Does he kick the ball?  
 b. The ball is kicked by him.  
 b'. Is the ball kicked by him?

(14a)と(14b)とが「知的意味を共有」しつつも「異なった事態を表す」別個の文であるとする認知文法の主張が，生成文法主流派の(かつての)主張と異なり射ているとするのであれば(現に的を射ているのであるが)，では(14a)対(14a')，(14b)対(14b')の対立はどう説明するのであろうか。

よもや，(14a')は(14a)を基に派生されるのであり，(14b')は(14b)を基に派生されるのである，などと生成文法流に言い出すのではあるまい。(14a')(平叙文)対(14a)(疑問文)の対立は，能動文対受動文の対立とはベクトルの違いがありつつも，やはりお互いが別個の文として対立すると見做すのが筋であろう。さもないと，(14a')(平叙文)から(14a)(疑問文)を派生すると見做すなどとなれば，結局は「話者が何かを尋ねる気などなかった筈の形式から始まって途中で気が変わって何かを尋ねる形式に変換した」というようなことを理論的に主張することになってしまうからである。これはまさしく筋違いである。さらには，上で有標性に関して述べた点を応用した言い方をするなら，「平叙文の使用が適切とされる場面で平叙文を使用するのは適切で無標と言えるが，疑問文の使用が適切とされる場面で平叙文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」し，同様に「疑問文の使用が適切とされる場面で疑問文を使用するのは適切で無標と言えるが，平叙文の使用が適切とされる場面で疑問文を使用するのは適切ではないし無標とは言えない」のである。

このように認知文法は大局的な説明は得意であっても，いざ細かな形式上の操作となると

<sup>(9)</sup> 大堀(2002)は受動文と周辺の機能領域についてさらに大局的な視野から論述している。

緻密さを欠くことが多い。さりとて、こうした問題の解決に際し、生成文法流に例えば「SAI」（ないしはそれに類する操作）で平叙文と疑問文を関連付けるといった手立てでお茶を濁すといった選択肢も賢明とは言えない。なんとなれば、この種の「書き換え操作」は、(7)に述べた意味で明示的ではあっても、(9)―(10)に述べた意味で「共時態に通時態を混入させてしまう誤謬」に他ならないという点で致命的だからである。<sup>(10)</sup>

以上本節（§2.1.）では、受動文の分析をトピックとし、生成文法の採るスタンスにも認知文法の採るスタンスにも共に瑕疵がある、という点を概観した。次節（§2.2.）では、同様の論点を、いわゆる中間構文をトピックにして概述したい。それを受けて、3節でひな形方式に基づく代案を提示することになる。

## 2.2. 中間構文

本節では、中間構文に対する生成文法と認知文法の説明法をトピックとし、双方の難点を指摘する。

### 2.2.1. 生成文法

中間構文（とりわけ、能動受動動詞である自動詞）の有する特徴は、概略以下の点にまとめられる（Fagan (1988), Keyser and Roeper (1984), Roberts (1987), Stroik (1992), 等）。

(15) 能格動詞（や非能格動詞）と異なり：

a. 命令法・進行相が不可である。

The floor waxes easily. vs. \*Wax, floor !

\*The floor is waxing easily.

b. 知覚構文に生起しない。

Bureaucrats bribe easily. vs. \*I saw bureaucrats bribe easily.

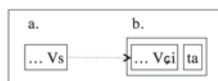
<sup>(10)</sup> 吉村（編）（2003）は以下の図式を示し、生成文法は存在の不確かで抽象的な「規則」で活用現象を説明し、認知文法は現実のデータからプロトタイプとプロトタイプの拡張形より構成されるスキーマを抽出する形で活用現象を説明するとしている。しかし筆者に言わせれば、いずれも結局は「i」を「挿入」させる説明であり、同工異曲である（(3)の左からアプローチか右からアプローチかの違い）。因みに、高橋（1995）では、「書き換え規則」を想定することなく活用現象を説明している。

活用「貸した」等 [s] で終わる語幹：

生成文法：

vs. 認知文法：

i-挿入規則





- c. (基本的に) 様態副詞が義務的に生起する。<sup>(11)</sup>

The floor waxes \*(easily).

- d. 含意された動作主は非特定の行為者である (総称読み)。

Books about oneself never read poorly.

vs. \*Books about himself/herself/etc. never read poorly.

他動詞文や受動文と異なり：

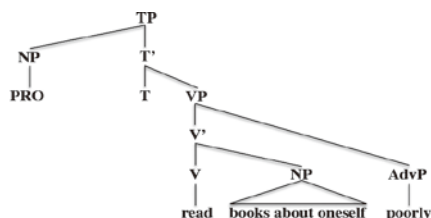
- e. 非特定の総称的行為者を含意する様態の副詞のみ可能である。

The light plugs into any household outlet.

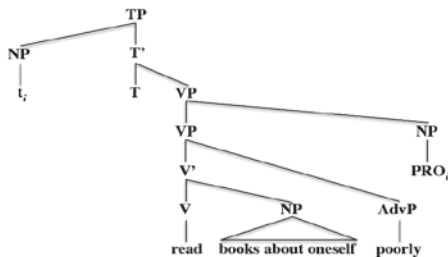
vs. \*The light plugs in expertly.

さて、かかる特徴を説明する試みとして、生成文法の枠組に基づく Stroik (1992) は変換規則を援用した以下のような分析を提案している。

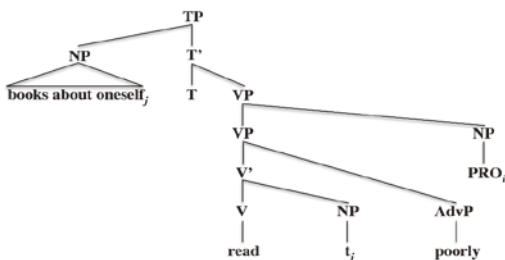
(16)



↓ 変換：総称読みの動作主「PRO」が主語位置から降格 (demote) し、VPに付加 ↓



↓ 変換：目的語の「books about oneself」が空の主語位置に移動 ↓



<sup>(11)</sup> ただし、後程補説で指摘するように、様態の副詞でなく再帰代名詞の目的語が来るケースもある。

ここで(16)に関して理論的な問題点を指摘しよう。まず、「PRO」は(15d)の「非特定の行為者（総称読み）である含意された動作主」を理論的に明示したものである。こうした要素を仮定すること自体は問題ないものの、問題は基底でTPのSPECの位置に置かれた後すぐさまVPに付加される形で「移動」とする点である。この移動規則という「書き換え規則」は、そもそもテーゼ(10)に抵触するものであるし、また動機付けとしては「PRO」に「oneself」の先行詞としての役割を担わせたいだけ（しかも基底でのみ）という（姑息な）手段を援用するものに他ならない。（そもそも、生成文法では「XP付加」ということを安易に言い過ぎる。）次に、その空いた主語位置に目的語の「books about oneself」が待ってましたとばかりにやはり「移動」する。これもまたテーゼ(10)違反である。とにかく生成文法は「書き換え規則」とりわけ「移動」が大好きである、というのがここでも窺える。<sup>(12)</sup>

いまひとつの問題点は、図(16)の真ん中の段階である。この段階では主語位置が空になっているが、英語は主語位置が空であってはならない言語の筈である。途中段階が破格な構造であっても「終わりよければ全てよし」と見做されるのが現行の生成文法なのであろうか。変ではないか。なお、生成文法で破格な構造が平気で許されるのはなにも途中段階に限ったことではない。§2.1.1.の(12a)で見た受動文ではそもそも初っ端（基底）から破格な構造が想定されている。始めや途中で破格であっても「終わりよければ全てよし」というのはどう考えてもご都合主義的な（暗黙の）前提である。破格な構造が始めや途中で紛れ込んでいてもいいという理論では詰まるところ「何でもあり」の強力すぎる枠組であることを意味することになってしまう。因みに、例えばunreliableが\*[[un-reli]-able]ではなく[un-[reliable]]であると分析されるとするの、\*unrelyという動詞が存在しないから（松本他(1997: 12)）という論法ではなかったのか。それとも語レベルと文レベルとでは事情が違うとでも言うのであろうか。それも変な話であるし、仮に事情が違うとした場合、その事情とはいったい何なのだろう。

3節では、以上述べたような難点を一切含まない、ひな形方式に基づく分析を提示する。

### 2.2.2. 認知文法

認知文法の枠組での中間構文の分析には、Kemmer (1993) 等があるが、基本は§2.1.2.で述べた点と同様である。即ち、能動文、受動文、自動詞文、使役文等関連機能領域全体の中の位置付けという大局的な観点から卓見を述べているという利点はあるものの、疑問文や否定文との関連等細かな「操作」に関する詳細に関しては緻密な明示性を欠くという点が難

<sup>(12)</sup> 補説に挙げた「Such problems solve themselves.」のような例も勘案するなら、「books about oneself」の「移動」はさらに怪しくなる。

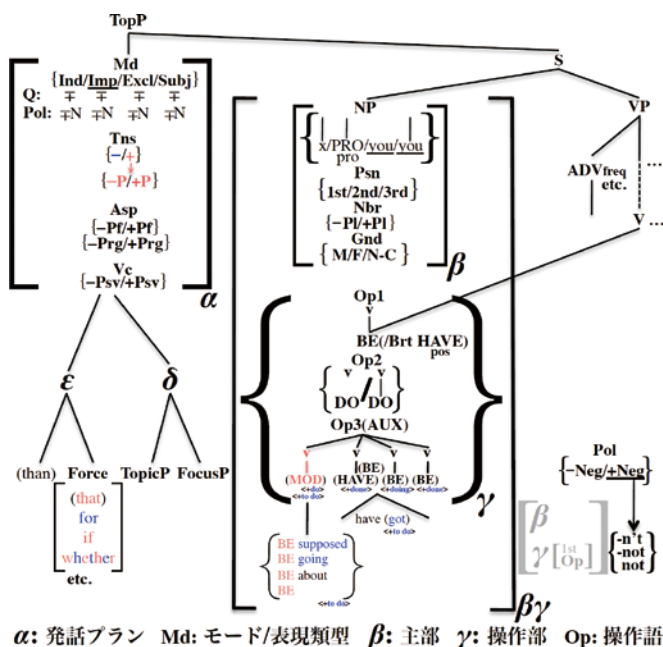
点となっている。即ち、生成文法流の (16) に見るような明示性は (良くも悪くも) 見られない。これでは反証可能性が低い理論構築 (cf. (7)) ということになってしまい、結局は理論的に歓迎されない枠組ということになる。

### 3. 代案：ひな形方式

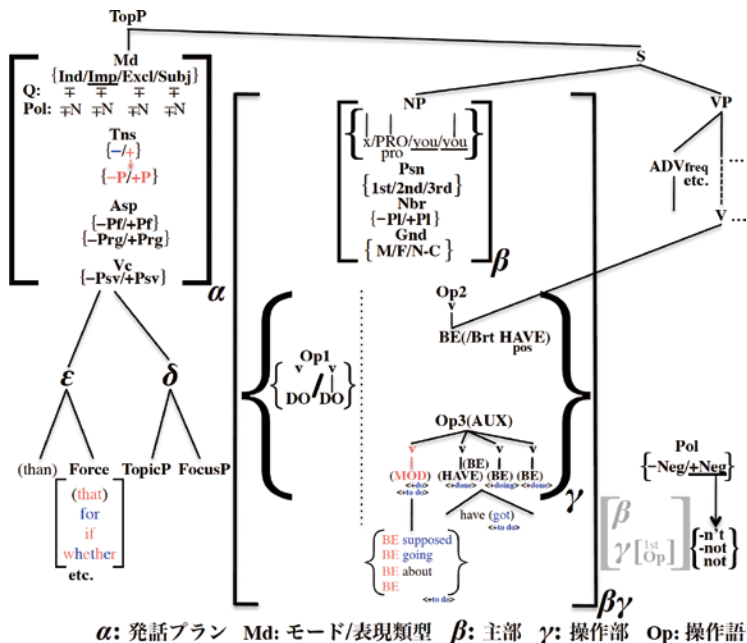
本節では、2 節で提示した生成文法・認知文法の枠組での受動文・中間構文の分析に対して、ひな形方式に基づく代案を提示する。

ひな形方式という枠組自体は筆者が 1988 より提唱している枠組であるが、本論考では統語部門にひな形方式を適用して論じた佐藤・小林 (2013) を基本的ひな形として想定することにする。ただし、佐藤・小林 (2013) では、改定すべきであるにもかかわらず論文提出日時に間に合わずに改定されないまま残された部分がある (<<http://raspberrys.jp/TMcomment.pdf>> に指導教員を務めた筆者からの「コメント」という形で問題点の指摘と代案とがアップしてある)。本論考ではその点も含めて彫琢した改訂版を以下援用する。(17a) が佐藤・小林 (2013) の版、(17b) が本論考での改訂版である。

(17) a.



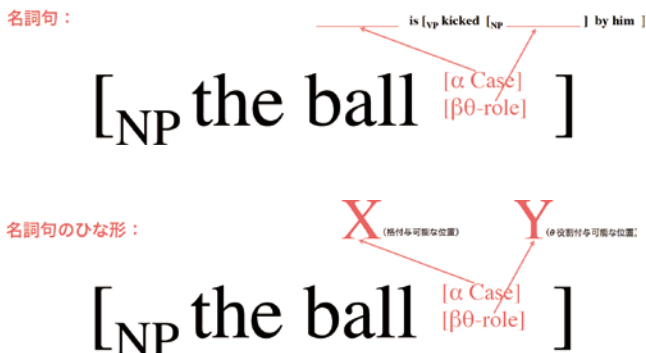
(17) b.



### 3.1. 受動文

ひな形方式での受動態の分析は、以下の通りである。受動文の場合、(17b)の「Md: モード/表現類型」(α)の中の「Vc: [+Psv]」が選択され、「操作部」(γ)中の「操作語」としては「Op3 (AUX)」中の右端の「BE」が選択されることになる。「移動」という「書き換え規則」は一切想定されない。あとはこの「文レベルのひな形」と以下の(18)に示す「NPのひな形」に則り、ひな形照合の操作が行われるのみである。(直感的に把握しやすいように、簡易的な動画を<<http://raspberrys.jp/np.html>>に上げておいたので参照されたい。)

(18)



さらに, (14a) (平叙文) 対 (14a') (疑問文) の対立もひな形方式では「書き換え規則」に一切依拠せずに説明が可能である。ひな形方式では, 疑問文は, (17b) 「Md: モード/表現類型」(α) の中の「Q: [+】 (=有標) と見做され, このとき「βγ」中の要素の拾い方が「γ→β」と「下から上へ」拾うことになるを考える。このことにより, 生成文法流「SAI」式の「書き換え規則」は不要となるのである。

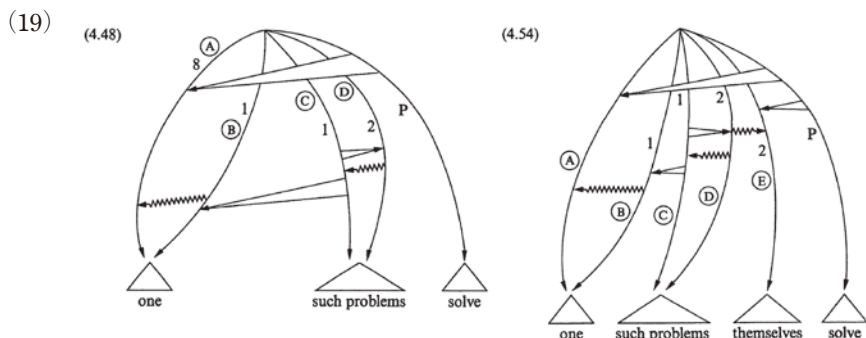
### 3.2. 中間構文

ひな形方式での中間構文の分析は, 以下の通りである。中間構文 (15d) の場合, 「PRO」は最初から最後まで (17b) の「δ」の「TopicP」に留まり移動しない。また, NP「books about oneself」は, 「格」に関する側面である「主格」が「β」中の「NP」の「x」と連結線で結ばれ, 同時に「V」の目的語の位置 ((17b) では便宜上「...」で表記) に「θ役割」に関する側面である「被動作主」が連結されていると見做し, やはり移動はしない。因みに, 音声実現の段階では「x」の位置で一度発音されたら, 当然あとは目的語の位置では発音されないことになる。(なお, 目的語の位置でもだめ押し的に発音してしまった場合, それは「言い間違い」に対応する現象ということになる。こうした「言い間違い」現象は「移動」規則想定の根拠となる, とする生成文法でお定まりの論法はこれで「唯一の理論的帰結とする論拠」としては崩れ去ることになる。)

以上, 本節では, ひな形方式に基づく受動文・中間構文の分析を提示した。2 節で指摘した生成文法の難点(「書き換え規則」や「破格な構造」の想定)も認知文法の難点(「中途半端で非明示的な」定式化)も一切持ち込んでいない, という点に特に留意されたい。

## 4. 補 説

2 節では, Postal (2010) の MG が「削除」操作という「書き換え規則」を援用しているために「単層アプローチ」とは言えない, という点を指摘した。具体的には, Postal は以下の (19) のように表示している。それぞれ, 「Such problems don't solve easily.」「Such problems solve themselves.」に対応する(「one」は Stroik の「PRO」に相当)。図中の「尾部が 2 又に分かれた矢印」が削除操作を表している。これに対して, 本論考が則るひな形方式では「削除」という「書き換え規則」が不要なことは既に指摘した通りである。



事のついでに触れておくと、Saeed (2009: 314–315) は (17a) が (17b, c) のように多義であるとしている。

- (20) a. Everyone loves someone.  
 b. Everyone has someone that they love. ( $\forall x \exists y (L(x, y))$ )  
 c. There is some person who is loved by everyone. ( $\exists x \forall y (L(x, y))$ )

しかし、(20a) を多義文とするのは、実は間違いである。なぜなら、(20b) と (20c) とではイントネーションが異なるからである。(20b) の場合、「無標」の下げ調子となり、先行する「every」の方が「some」よりも広い作用域と解釈されて「誰でも（それぞれ）好きな人がいる」となるし、(20c) の場合、「有標」の上げ調子となり、後続する「some」の方が「every」よりも広い作用域と解釈されて「誰からも好かれている誰かさんがいる」となるのである。さらに問題となるのは、(20b) と (20c) を「多義文」と見做した上で、(20c) のケースを「LFでの移動」という形で説明しようとする試みである。再度言おう。(20b) と (20c) はイントネーションの違いで作用域が合図されるのであって、その意味でそもそも多義文ではないし、また (20c) には「移動」も関与していない。

最後に老婆心ながら、苦言を一言。大庭 (2011: 22) は Stroik (1992: 133) の中間構文「Some poems read better aloud to oneself than others do.」を「いくつかの詩は他の詩より自分自身に大声で読まれる」と訳しているが、遺憾ながら誤訳である。「詩の中には他の詩と違って声に出して読まれた方がよい詩がある」とでもすべきであろう。研究書であると同時に啓蒙書でもある書籍の中の訳としてはもう少し意を配った方がよいのではないかと考える（筆者もあまり他人のことを言えた口ではないが）。

翻訳の問題が出たついでに、もう一言。(21) の 3 文はどのように訳し分けたらよいか (cf. Jackendoff (1972: 332))。

- (21) a. Tom doesn't go to town very often.  
 b. Not very often does Tom go to town.  
 c. Very often Tom doesn't go to town.

ひな形方式に則った解答例は以下の通りである。

- (21') a. Tom doesn't go to town very often. 「文末焦点の原則」+「not'の方が広い作用域」  
↓  
トムはそれほど頻繁には街に出ないよ。
- 
- b. Not very often does Tom go to town. 「文頭に焦点」+「not'の方が広い作用域」+「文末焦点の原則」  
↓  
それほど頻繁ではないんだよね、トムが街に出るのは。
- 
- c. Very often Tom doesn't go to town. 「文頭に話題」+「very'の方が広い作用域」+「文末焦点の原則」  
↓  
これはけっこう言えることだけど、トムって街に出ないんだよね。
- 

因みに、(21'b) の「Not very often」は (17b) の「 $\delta$ 」の「FocusP」に入っており、(21'c) の「Very often」は (17b) の「 $\delta$ 」の「TopicP」に入っているといた具合で、そのように意識をし、またそのように発話・聴取・翻訳するということになる。

さて、少々話題が逸れてきたので、この辺で筆を措くことにする。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*, The Hague: Mouton.  
 ——— (1975) *Reflections on Language*, New York: Pantheon.  
 ——— (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht: Foris.  
 Fagan, Sarah, M. B. 'The English Middle,' *Linguistic Inquiry* 19, 181—203.  
 Fodor, Jerry A. (1983) *The Modularity of Mind*, MIT Press.  
 今井邦彦 (2015) 『言語理論としての語用論——入門から総論まで——』, 開拓社.  
 Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press.  
 Kayne, Richard S. (1994) *The Asymmetry of Syntax*, MIT Press.  
 Kemmer, Suzanne (1993) *The Middle Voice*, Typological Studies in Language 23, Amsterdam: John Benjamins.  
 Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper, (1984) 'On the Middle and Ergative Constructions in English,' *Linguistic Inquiry* 15, 381—416.

- Lakoff, George. (1971) 'On Generative Semantics', in D. D. Steinberg & L. A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, 232—296, Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford University Press.
- Lightfoot, David (1976) *Language Lottery: Toward a Biology of Grammars*, MIT Press.
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』, 東京大学出版会.
- Postal, Paul M. (2010) *Edge-Based Clausal Syntax: A Study of (Mostly) English Object Structure*, MIT Press.
- Roberts, Ian G. (1987) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Dordrecht: Foris.
- Saeed, John I. (2009<sup>3</sup>) *Semantics*, London: Blackwell.
- 佐藤怜美・小林維奈 (2013) 「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」, 東北学院大学教養学部総合研究. <<http://raspberrys.jp/sgkk.html>>
- Stroik, Thomas. (1990) 'Middles and Movement,' *Linguistic Inquiry* 23, 127—137.
- 高橋直彦 (1995) 「現代日本語の動詞の活用」, 『東北学院大学論集 (人間・言語・情報)』第 110 号, 東北学院大学 107—78.
- (2008) 「ひな形方式の適用可能性」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第 63 回大会 英語学・英語教育部門シンポジウム「言語理論の進展とその応用—言語教育・自然言語処理を手がかりに—」(2008 年 11 月 24 日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿.
- 松本裕治・影山太郎・永田昌明・齋藤洋典・徳永健伸 (1997) 『単語と辞書』, 岩波講座言語の科学 3, 岩波書店.
- 吉村公宏 (編) (2003) 『認知音韻・形態論』, 大修館書店.



高橋直彦「生成文法？ 認知文法？ それとも…?」, 『東北学院大学教養学部論集』 第 172 号の  
正誤表：

	誤	正
p. 79, l. 10 :	(1) の原理群	(4) の原理群
p. 84, l. 17 :	(14a') (平叙文) 対 (14a)	(14a) (平叙文) 対 (14a')
p. 84, l. 19 :	(14') (平叙文) から (14a)	(14a) (平叙文) から (14')
p. 89, 頁半ほど :	「Md: モード/表現類型」 ( $\alpha$ )	「発話プラン」 ( $\alpha$ )
p. 90, l. 11 :	「被動作主」	「主題」
p. 91, 図 (19) の下 :	(17a) が <sup>s</sup> (17b, c)	(20a) が <sup>s</sup> (20b, c)
p. 91, (20) の c :	( $\exists x \forall y (L(x,y))$ )	( $\exists y \forall x (L(x,y))$ )
p. 93, l. 5 と l. 6 の間に以下を追加 :		
	大庭幸男 (2011) 『英語構文を探究する』, 開拓社言語・文化選書 23, 開拓社.	
p. 93, l. 12 :	< <a href="http://raspberrries.jp/sgkk.html">http://raspberrries.jp/sgkk.html</a> >	< <a href="http://raspberrries.jp/sgkk.html">http://raspberrries.jp/sgkk.html</a> >

## 【研究ノート】

# どうすれば英語が身につくのか

—— 英語を学習する高校生向けの話 ——

渡 部 友 子

### 0. はじめに

本稿は、筆者が県内外の高校の依頼を受けて行っている出張講義の内容をまとめたものである。講義では、効果が期待できる学習法を具体的に提案することを目的とするが、それに至る過程で、脳科学や言語習得に関する研究知見を紹介する。それは、なぜその方法がよいのかを理解してもらうためである。例えば、音読は伝統的に教室で行われている活動であるが、軽んじられがちな活動でもある。それは、なぜ音読をすべきかを教員自身が理解しておらず、生徒に説明することができないからであろう。「なぜ」の理解は取り組む意欲を左右する。本講義では、「なぜ」を理解することで、生徒の英語学習への意欲を高めることを主眼とする。

筆者が高校生向けの出張講義の内容を文章化することにした背景には、大学人としての危機意識がある。それは、日本の研究者が一般読者向けの入門書や概説書を書くのがあまり上手ではない、つまり専門的な内容を、「普通の」言葉でわかりやすく説明することができていない、ということである。

筆者が本学の言語文化学科で開講している「英文法」や「言語習得論」では、日本語で書かれた読みやすい概説書が未だ見つからず、いずれの講義も英語の教科書をベースに行っている。本稿の題材について言えば、昨年刊行された門田（2014）は、表紙に「外国語学習の成功に導く秘訣を最新の科学的理論に基づいてわかりやすく解説」と唱っているが、中身は決してわかりやすく書かれていない。例えば、第2章の「私たちの記憶システムの概要」を説明した箇所は、以下のような記述になっている（門田2014：40-41からの引用）。

学習システムでは、下記の図1における符号化(coding)、貯蔵(storage)、検索(retrieval)という3つの情報処理機能を備えた仕組みが稼働していると考えられます。

<図1省略>

まず、符号化とは、言語などのインプット刺激を、心内で処理可能な形式に変換する

ことです。これには、インプットの様式に応じて、次の3つがあります。

(1) 視覚符号化 (visual coding) : 視覚提示語などの刺激を処理し、視覚表象を形成すること

これは例えば、'right' 'night' など語を見て、それがどのような文字からできているかを頭の中に表示することです。この結果得られるのが文字列から成る「視覚表象 (graphic representation)」です。特に英単語の視覚表象は、「正書法表象 (orthographic representation)」と呼ばれることもあります。

<(2) 以下省略>

この記述は、私たちが本に書かれた英語を読む時に、頭の中で何が起こるかを説明している。知っている者からすれば、それほど難しいことは言っていないのだが、上の説明は専門用語を多く使用しているため、この分野の研究知識がない者には理解できないだろう。まず冒頭の「符号化」は明らかに専門用語で、門田はその意味を説明しようとしているが、それ以外の「刺激」「心内」「視覚提示語」「文字列」「表象」なども、この分野の準専門用語である。これらが説明なしに使用され、これらを用いて「符号化」の意味が説明されているため、上記の説明は難解なものになっている。

門田氏は実は、この分野の研究で多くの実績を上げており、筆者自身も氏の研究を出張講義や学内講義で引用している (門田 2002 など)。しかし一般読者を想定しているはずの門田 (2014) の著書は、残念ながら一般読者にわかる説明になっているとは言いがたい。上記引用では、難しい内容を、難しいまま読者に渡してしまっているのである<sup>1</sup>。

専門分野での研究で高い評価を受け、かつその成果をわかりやすく伝えることができる研究者は、日本では少ないように思われる。研究者と一般人の間の橋渡しをする第三者が必要である。筆者は「言語習得論」の講義において、受講生から「扱う内容は難しいが、先生の説明はわかる」というコメントをもらうことがある。種々の研究成果の意味を理解し、それを生徒・学生に伝えることが、大学人としての筆者の役割ではないかと最近考え始めている。本稿の執筆は、その第一歩である。

執筆に当たっては、言語習得に関して一般向け良書を書いた白井 (2004) にならい、わかりやすさを最も重視する。具体的には、専門用語をなるべく使わないことを心がけ、「身近な具体例を多用し、細部にわたっては、複雑な問題を多少単純化」する (白井 2004, p. 116)。単純化の方針は、知識すべてを正確に伝えたいと考えがちな専門家には受け入れがたいかもしれない。しかしすべてを伝えようとする、結果的に読者の理解できる範囲を超え

<sup>1</sup> 本書全体が例示した調子で書かれているわけではない。例えば、序章は比較的わかりやすく書かれている。氏が精力的に研究している分野の方がわかりにくい説明になっていることは、皮肉でもある。

てしまいやすいことは、門田（2014）の例にも見られる。食事の比喩を使えば、固いもの、大きいものをそのまま与えて喉に詰まらせたり、吐き出したりしないように、小さく噛み砕いて与え、飲み込んでもらうことを意識したい。

## 1. ことばを使う時、私たちは体を使っている

学校で習う科目のなかで、英語は「文系科目」にくくられることが多いですね。確かに、座って英語を勉強している時、体を使っているイメージはないかも知れません。しかしそれは、意識をしていないだけです。

私たちが日常使うことばは、話し言葉と書き言葉に分かれます。話し言葉は、音声を介してやりとりされます。相手の言っていることを理解しようとする時には耳を使い、自分が言いたいことは口を動かして伝えられます。一方書き言葉は、文字を介してやりとりされます。書かれたものを理解しようとする時、私たちは目から情報を取り込みます。書いて相手に何かを伝える時には、手を動かして文字を書きます。さらに、ことばによる情報伝達すべてに関わるのが脳です。私たちは、脳に蓄積された単語や文法、そして世の中についての様々な知識を使って、ことばを組み立てたり理解したりしているのです。

このように考えると、ことばでのやりとりはかなり身体的な作業だとわかります。普段ことばを使っている時に、体を使っているという意識が強くないのは、すでにこれらの作業が楽にできるようになっているからです。（これは、後から述べる「自動化」という現象です。）

## 2. 脳とことばの関係

さて、少し脳の話をしてみたい。人間の脳は高機能です。効率的にいろいろなことができるように、様々な領域に分かれていて、それぞれの領域が分業と連携をしています。ことばを専門に扱う領域は、ブローカ野とウェルニッケ野（どちらも発見者の名前）です。ブローカ野はことばを発する時、ウェルニッケ野はことばを理解する時に使います。人間がことばを話し始めたのは約20万年前だとされています。長い年月をかけて脳が進化し、専門領域ができたおかげで、私たちは楽に話し言葉を操ることができるのです。

一方、書き言葉はどうでしょうか。人間は言葉を記録して残すために文字を発明しました。メソポタミア文明など、古代文明で文字が使用されていたことがわかっています。しかし古代文明といえども数千年前で、話し言葉の歴史と比べると数段に浅いと言えます。加えて、古代から中世に至るまで、文字を使うことができた人はごく少数の特権階級でした。文字が

一般に広く使われるようになったのは産業革命以降(18世紀以降)だと言われています(NHKスペシャル 2008年10月放送「病の起源4: 読字障害」より)。つまり、私たちが文字の読み書きをするようになってから、まだ数百年しか経っていないということです。

日本の話をしましょう。時代劇では、街角で瓦版(今の新聞に相当)を買って長屋に戻り、字が読める人の所へ言って読み聞かせてもらう、というような場面が出てきます。江戸時代に読み書きができた庶民は少なかったと思われます。その状態が明治時代に入ってもしばらく続いたであろうことは、次の新聞記事を見ても想像できます。

歳々年々同じからぬ亡魂祭る鼠尾花の、露と消えにし産婦が思ひは、送り火の雉子蠟燭立ての夜の露。跡に残りし最愛児に、ひかれて迷う箒木の、有るか無きかに躰われて、さめざめと泣きて云えるよう。汝等二人が薄命なる、佇しき爺子の手一つに育てらるれば、萬の事に不自由がちにぞあらぬべし。乳呑の妹は吾儒が伴い育てあげんと抱きしめし姿は佛壇の土器の香の煙と消失ぬ。

(明治時代初期『東京日々新聞』第101号より)

この記事を見てわかることは、当時の書き言葉は話し言葉とは大きく違っていた、つまり、これを声に出して読んでもらったとしても、聞いて理解することができなかったかも知れない、ということです。中央政府が言文一致政策、つまり書き言葉を話し言葉に近づけようという方針を取るまでは、書き言葉は一般庶民にとっては遠い存在だったと思われます。

今でこそ日本は識字率が高く、ほとんどの人が文字の読み書きをしますが、書き言葉が普及し始めてからまだ300年経っていないのです。ですから、私たちの脳は書き言葉を専門に扱う領域をまだ作っていません。文字を目にした時、脳はまず視覚領域(これはブローカ野やウェルニッケ野とは別の場所にあります)を作動させます。そこで文字の形を視覚的に認識し、それを音声に変換してブローカ野やウェルニッケ野に送る、というような、効率の悪い作業をしているのです。

### 3. 脳はどのようにことばを処理するのか

もう少し脳の話の続けます。話し言葉は耳から、書き言葉は目から最初に入ってきます。私たちはその言葉を次々に記憶と照らし合わせて意味を理解しています。

記憶には、すぐに消えてしまうものと、長期間消えない記憶があります。半永久的に消えない記憶は長期記憶と呼ばれます。私たちが知っている膨大な数の単語の意味は、長期記憶として保持されています。一方、耳や目から入ってきたものの記憶は、長く続きません。音

の記憶は4秒、見たものの記憶は1秒で消えてしまいます（門田2002）。つまり、聞いた音をそのまま覚えておけるのは4秒、見たものの形状を写真のように記憶しておけるのは1秒だけだということです。視覚記憶が一瞬で消えることに特に注目してください<sup>2</sup>。

さて、話し言葉や書き言葉の意味を理解するには、記憶との照らし合わせが必要だと先ほど言いました。しかし、目や耳から入ってくる情報がすぐに消えてしまうとしたら、どうやって照らし合わせているのでしょうか。

それにはまず、入って来た情報をつかまえる必要があります。見たものの形状記憶は1秒で消えますから、文字はまず音に変換する必要があります。音に変換すれば4秒記憶が持続するからです。しかし4秒でも「この言葉の意味は？」と長期記憶に探しに行くには時間が足りません。

この時に使われるのが短期記憶です。記憶を保持しつつ、照らし合わせなどの作業をするので、作業記憶、あるいはワーキングメモリとも呼ばれます<sup>3</sup>。短期記憶は15秒程度保持されますが、その後は消えてしまいます（門田2002、門田2014）。それより長く覚えておくためには、繰り返しが必要です。

短期記憶が具体的にどう働くかは、次の例でわかります。皆さんは「はじめてのおつかい」というテレビ番組を見たことがあるでしょうか。小さな子が近所のお店まで行って、言われた通りの商品を買って来る、という設定です。まだ読み書きができない子はメモを使うことができないので、買うものを忘れないように、例えば「のしぶくろ」と繰り返し言いながら店に歩いて行きます。これが、短期記憶を長く維持するための繰り返しです。しかし店に行く途中で、例えば怖い犬に出会って動揺し、繰り返しが途切れると、何をかうのだったかを忘れてしまうことがあります。短期記憶が消えるのです。「にんじん」など、その子が意味（オレンジ色の野菜）を知っている語であれば、意味記憶から言葉を思い出すことができます。しかし「のしぶくろ」が何なのかを知らなければ、音だけで短期記憶に保持しなければなりません。この場合、繰り返しが途切れると記憶から消えてしまうのです。

短期記憶のもう一つの特徴は、容量が限られていることです。つまり一度に書き込める量は決まっていて、耳や目から入る単語を大量にここに溜めることはできないのです。一度に保持できる情報量は7項目±2（多少個人差がある）と言われていています（門田2002）。先ほどの子どものおつかいの例で言えば、買うものが「のしぶくろ」だけなら大丈夫ですが、その他に「かんでんち」も「ごみぶくろ」も買ってくるよう言われた場合、短期記憶に入りき

---

<sup>2</sup> 見たもの（景色など）を長く記憶していることはありうるが、その場合は全体像のみが記憶されている。細部の正確な記憶は持続しない。

<sup>3</sup> もっとわかりやすい「脳のメモ帳」という言い方もある（荻原2002）。

らなくなり、店に行くまでに全部は覚えておけないかも知れません。もしこの3つの物品が何か知っていれば、情報量として3項目扱いなので問題ありません。しかし、何か知らない場合は、意味がわからないまま音の連鎖を記憶しなければなりません。「のしぶくろ」「かんでんち」だけで10音なので、短期記憶の容量を超えるのです。

ちなみに、現在日本を含む多くの国で使用されている電話番号は、市外番号を除いて7～8桁に設定されていますが、このことは偶然ではないと思われます。短期記憶の容量の上限が7であることは、電話番号の桁数と関係していると言われます。電話番号は無意味な数字の羅列です。ですから、誰かの電話番号を覚えてもらう時、耳で聞いて書き取るまでの間、短期記憶に数字を音の通り保持しなければなりません（例えば「ゼロニーニー、ナナナナサンノ…」）。桁数が多くなると、短期記憶に一度に収まらなくなり不便なのです。また、電話番号を長く記憶に残すために、語呂合わせをすることがよくあります（例えば、117-117を「イイナイイナ」とか）が、これは無意味な数字列に意味を与える行為です。意味のない言葉を長く記憶するのはそれだけ難しい、ということなのです。

#### 4. 文章を読む時の音声の役割

さて、文章を読む時に脳で何が起こるかの話に移ります。まず、単語レベルの話からスタートします。先に述べた「目で見たものの記憶は一瞬で消えるが、音声の記憶は数秒持続する」ということを思い出してください。

例えば教科書に psychology という初めて見る単語が出てきたとします。この語の意味を辞書で調べるために、つづりを短期記憶に保持しなければなりません。この時私たちは、一文字ずつ「ピー、エス、ワイ、シー…」と読むか、あるいは単語全体に「プシチョロジー」と仮の音（正しい発音は「サイコロジー」ですが）をつけるか、いずれかの方法で音声に変換します。それが短期記憶に保持される間に辞書を引いて、その単語を見つけるのです。音に変換せずに、10文字の単語を丸ごと視覚だけで記憶するのは困難ですから、その場合は、最初の数文字を見て辞書に行き、次の数文字を見てまた辞書へ、という具合に、教科書と辞書の間を何度も往復することになるでしょう。（実はこれをやっている学生を時々見かけます。）音声を介在させないことは、とても効率の悪いことなのです。

音声は、実は長期記憶にも深く関わっています。私たちが単語を思い出そうとする時、音で記憶を検索する方が、文字で検索するよりも早く、しかも正確だと言われます。経験的にも、漢字の記憶があやふやになることはよくありますが、音の記憶が薄れることは少ない

でしょう<sup>4</sup>。

音での検索の方が文字での検索よりも速いことは、門田の実験で示されています（1998年の実験：門田 2002 に収録）。英語を学ぶ日本人学生 36 人に対し、単語をペアでいくつも提示し、3 種類の判断をしてもらいました。品詞が同じか（例えば read と forget は両方動詞なので「同じ」）、意味が同じか（例えば author と writer は「同じ」）、発音が同じか（例えば wait と weight は「同じ」）の 3 種類です。被験者は画面に提示される単語のペアを見て、同じか違うかを左右のボタンを押して解答します。

ただし、単語を見た時に音声に変換できないようにするため、半数の被験者には、無意味な数字列（例えば 3294265）を記憶しておくように指示します。数字を忘れないようにするためには、その数字を頭の中で言い続けて短期記憶に保持しなければなりません。そうすると、実験で英単語を見た時に音声変換できなくなります。短期記憶が数字の情報で満杯になっているからです。この場合、英単語を文字だけで長期記憶から探し出し、上の 3 種類の判断をしなければなりません。これが数字を記憶させるねらいです。

実験では、単語が提示されてからボタンを押すまでの反応時間が測定されました。数字を記憶させられた群とそうでない群の間に、大きな反応時間の差が出たのは、発音の判断でした。単語を頭の中で音声変換できる「通常の」状態では、反応時間が短い順、つまり判断が速い順に並べると、発音、意味、品詞の順になります。（ちなみに音の平均反応時間は 2 秒、意味は 2.3 秒、品詞は 2.6 秒です。）ところが数字を記憶させられた人たちは、音の判断が遅れ、むしろ意味の判断よりも時間がかかるくらい後退しました。一方、意味の判断の速度は、数字なしの群と同じ程度の速度を維持し、品詞の判断は数字なしの群よりやや遅れたものの、大きな差にはなりませんでした。

この実験が意味することは、記憶検索における音声の重要性です。判断速度の順序からは、「この単語の意味は何だっけ？」という時に、私たちはまず発音で検索し、それから意味を検索する、ということがわかります。品詞にたどり着くのはさらにその後です。そして、もし検索の際の音声入力封じられた場合、文字から意味を検索し、そこから発音の記憶を引き出すことになるので、判断が遅くなるのです。

しかし、ここで疑問が生まれます。音声変換できないと発音の判断が遅れましたが、意味の判断は遅れませんでした。ということは、音声変換しなくても意味だけは理解できる、と

---

<sup>4</sup> 例外はもちろんある。例えば医療機関の診療科目に「泌尿器科」というのがあるが、筆者は先日この語を思い出す際に、「りにょうひか？ ひにょうりか？」と混乱し、漢字を思い出すことで「ひにょうきか」にたどり着いた。「泌尿」と「利尿」は発音と意味が近いので、検索時に混線しやすいのだと思われる。同じく「航空」と「空港」も筆者がよく言い間違える語で、漢字による混線解除を要する。



いうことではないでしょうか。

この疑問の答えとなる実験を、門田は行っています（1984年の実験：門田 2002 に収録）。英語を学ぶ日本人 138 人を 2 群に分け、約 160 語の英文テキストを黙読してもらう実験です。一方の群は普通に黙読しましたが、もう一方の群は、数字の 1~5 を日本語で繰り返し小声で言いながら、英文を黙読しました。数字を言わせるのは、英文を頭の中で音声化しにくいようにするためです。

黙読終了後、読んだ内容を理解できたかを確認するテストを行ったところ、数字を言わされた群の英文理解度が低下していました。このことから、読んでいる文を音声化できないと意味をうまく理解できない、ということが言えます。

ここでまた、別の疑問をもつかも知れません。英語ではそうだとしても、日本語では違う結果になるのではないかと。なぜなら、英語のアルファベットは表音文字ですが、日本語には表音文字の他に表意文字もあるからです。ひらがなとカタカナは、英語のアルファベットと同じく、音しか表していません。しかし漢字は、どういう発音になるかとは別に、それ自体が意味をもつ表意文字です。よって漢字は、音声変換しなくても、見ただけで意味が理解できるのではないかと、とも考えられるわけです。

この疑問の答えとなる実験も、門田は行っています（1987年の実験：門田 2002 に収録）。短大 1 年生 142 名に、今度は日本語文を黙読してもらう実験です。日本語文は、漢字とかなを混ぜて普通に書かれたものと、かなだけで書かれた特殊なものを準備しました。そしてそのどちらかを、普通に黙読する群と、数字を言いながら黙読する群に分かれて読んでもらい、最後に理解度テストを実施しました。

理解度を比較したところ、普通の黙読群は、かなだけの文章の理解度が下がりました。漢字がない文章はそもそも読みにくいため、これは当然の結果です。しかし興味深いのは数字を言いながら黙読した群の結果です。漢字が混じっていてもいなくても、理解度が同程度だったのです。このことから、私たちは漢字を読む時にも、音声化して理解している、ということが言えます。つまり、漢字は見ただけで意味がわかると考えるのは間違いなのです。

以上のことから、私たちが文字を読んで理解し、記憶し、その記憶を思い出すには、音声の助けが必要だと言えます。

## 5. 英語が「自動化」すれば、楽に処理できるようになる

皆さんの中は、英語の聞き取りや読解が楽にできる、という状態の人は少ないと思います。それは、皆さんの脳のコンピュータが、まだ英語をサクサクと処理できていないからです。

これには短期記憶が関係しています。

先ほど述べたように、短期記憶は、入力情報を保持しながら長期記憶と照らし合わせを行う作業場です。この作業場の容量は限られていて、一度に7項目程度しか入れられません。もしこの容量を超える情報が入ってきた時には、処理速度の低下、古い情報の破棄、入力の一時的遮断などの障害が出ます。これは、メモリ容量の小さいコンピュータで、重いアプリケーションを走らせた時に起こることと類似しています。コンピュータならメモリを増設して動作を改善することが可能ですが、残念なことに、人間の短期記憶容量は訓練で大きくすることができないようです。

しかし容量を大きくしなくても、動作効率を上げることは可能です。なぜなら、1項目のサイズは大きくできるからです。例えば、以下の英文を聞いたとします。

I don't know what you are talking about.

これを一語ごと切ってつかまえた場合8語、つまり8項目になります。その場合「I = 私、don't は否定、know = 知ってる、…」という具合になって、この一文の意味を考えるだけで短期記憶は満杯になり、次の文が聞こえて来ても対応できません。しかし「I don't know = 知らない、what = 何、you are talking about = 話している (のか)」という具合に、数語をまとめて理解できれば、3項目で済みますから、次の文を聞き取る余裕ができます。このように、まとめて処理できる量を増やすことができれば、短期記憶の動作効率を上げることができるのです。このようなまとめ処理には、語と語の関係性（つまり文法）を、あまり考えずに理解できることが必要です。このことを、文法解析の自動化と言います。

自動化は語学に限定した現象ではなく、何かしらの動作を覚える時によく起こります。例えば、携帯電話やスマートフォンを初めて手にした時、あるいは機種変更した時を思い出してください。最初は手順を一つ一つ思い出しながら操作したはずですが、しかし毎日使う人は、同じ動作を繰り返し行なうため、そのうち特に意識することなく、かなりのスピードで指を動かせるようになります。これが、動作が自動化した状態です。英語が「身につく」とは、英語という言語の処理が自動化すること、つまり、あまり頑張らなくても理解できる、あるいは言葉が出てくることなのです。

## 6. どのような学習が英語の自動化を助けるのか

英語の自動化の鍵を握るのは、音声とスピードです。皆さんは英語で書かれた文を読む時、まず黙読することが多いのではないかと思います。黙読とは、音声を聞かず、声も出さずに読むことです。先に述べたように、黙読でも頭の中で声が出ていますが、それはあくまで自

己流です。英語が苦手な人は、まず一語一語を読むスピードが遅いし、目にした語の発音がわからなければ飛ばすでしょうし、発音が間違っても気づきません。この状態では、いくら黙読を続けても自動化は進みません。

このような学習者に対しては、音声支援のあるリーディングが有効だと言われています。つまり、先生の音読や CD を聞きながら、その英文を目で追って行くのです。単語の発音は音声で与えられますから、頭の中で文字と音声結びやすくなります。そして音声のスピードにつられて、処理速度が上がるのです<sup>5</sup>。

音声支援の効果は、鈴木（1991：河野ほか編 2007 に収録）が日本人英語学習者で実験的に検証しています。鈴木は高校 3 年生の 3 クラスに対し、異なる方法で 9 ヶ月間の速読指導を行いました。英文を速く読めるようになることを目標にしたのは同じですが、クラス 1 は黙読のみ、クラス 2 は音声を聞きながら黙読、クラス 3 は、音声を聞きながら黙読し、さらに聞き取り練習も行ないました。9 ヶ月後、3 クラスの読解力（読む速度と理解度を総合的に評価したスコア）を比較したところ、音声支援がなかったクラスの得点が、あった 2 クラスを大きく下回りました。このことから、音声支援があった方が、読解力が伸びると言えそうです。なぜそうなるのでしょうか。鈴木は、音声を聞きながら読むことで戻り読みをしなくなり、意味のまとまりごとに理解できるようになるからではないか、と推測しています。

聞きながら読むだけでなく、自分でも声を出すとさらに効果が上がることが、倉本・松本（2001：河野ほか編 2007 に収録）で示されています。この実験では大学生を 3 群に分け、異なる方法で 4 ヶ月指導しました。聞きながら読んだことは 3 群とも共通ですが、このうち 2 群は自分でも声を出して読みました。すると興味深いことに、実験終了後の TOEIC リスニングテストの点数が、声を出さなかった 1 群よりも高くなりました。つまり、ただ聞くだけでなく音読もすることは、読解力だけでなくリスニング力も伸ばすことが判明したのです。

また、多読の効果も報告されています（門田ほか 2010, 第 5 章）。多読とは、やさしいテキストを速く楽しんで読むことです。通常の英語授業では、難しいテキストを苦しみながらじっくり読むことが多いようです。この読み方は精読と呼ばれます。精読は文法や単語を学ぶ目的では有効かも知れませんが、精読だけをやっていても、自動化はあまり促進されません。しかし、簡単なものを読んでも英語力は上がらないのではないか。そう考えがちですが、実は逆に上がるのです。その理由を以下に説明します。

簡単な英語で書かれた本は、知っている単語と文法しか出て来ないので、自分で音声化でき、まとめ処理もできます。つまり学習済みの英語を自動化することができるのです。加え

<sup>5</sup> ただし、聞かせる音声のスピードが速くなりすぎないように、学習者に合わせて調整すべきだと鈴木（本文参照）は注意を促す。文の切れ目などでポーズ（無音）を挿入し、学習者が追いつきやすいようにするのがよいかも知れない。

て、内容がわかるので読むのが楽しくなり、もっと読みます。読む量が増えることで練習効果が上がり、どんどん楽になります。やがてもう少し難しい本に挑戦したくなり、これが続くことで徐々にレベルが上がっていくわけです。このように、「読めば読むほど読めるようになる」(門田ほか 2010, 同上) のが多読です。

多読は授業外の活動として行なわれることが多く、なかなか続かないことが最大の難点です。しかし授業中に週 1 回 10 分間の多読を続けるだけでも効果がある、と野呂(2008: 門田ほか 2010 に収録) が報告しています。進学校 1 年生の 2 クラスで、多読用の簡単な本を週 1 回 10 分だけ黙読させ、これを 10 週間だけ続けたところ、読むスピードも理解度も上昇したのです。この実験では合計 100 分間しか多読をしていませんが、累積語数(100 分で読んだ語の合計)の平均は 8,856 語でした。この実験当時に使用していた教科書は述べ語数が 6,916 語だったということですから、被験者の高校生はたった 100 分で、教科書 1 年分の語数を越える量を読んだことになります。

多読の効果は日本の英語教育界でも注目され始めています。文教大学の千葉先生は学会で、多読で驚異的に英語力を伸ばした 2 人の学生の事例を報告しています(千葉 2014)。千葉先生は自主的課外活動として多読をスタートさせ、10 万語達成するごとに褒美を与える、という形で支援しました。運動部に所属するこの 2 人は英語が得意だったわけではなく、開始前の TOEIC スコアは 400 点前後でした。しかし英語は好きで多読を素直に継続し、だんだん読むのが楽しくなった結果、半年で 50 万語、1 年で 100 万語を読破し、副次的に TOEIC スコアも高得点に達しました。私が注目するのは、2 人が「リスニング問題のスピードを速いと感じなくなった」と語っていることです。これは、多読を通して英語の音声化、自動化が促進されたということだと思われます。

## 7. 英語を身につけるためにやるべきこと

皆さんも、英語の試験で高得点を取りたいと日々頑張っていることでしょう。私は職業柄、学生から「どうしたら TOEIC で高得点を取れるのか」「問題集はどれがおすすめか」などと聞かれることがありますが、「出題の傾向を知るために問題集を見るのはよいが、問題集は英語力をつける近道ではない」と私は答えます。難しい問題集をやっても、必ずしも自動化にはつながらないからです。

先ほどの多読の学生 2 人の事例が示しているように、普段の学習を楽しんで続けることで英語力は向上します。それは多読でもよいし、他のやり方でもよいでしょう。私自身は高校生の頃、教科書の音読は必ずしていました。上手に読めると単純に気持ちよかったからです。

入試対策本が夏休みの課題として出された時は、声に出しながら例文をタイプする、という方法をとりました。親にせがんで買ってもらったタイプライターを叩くのが純粋に楽しかったことを覚えています。また英語の歌が好きだったので、アルバムを買って歌詞カードを見ながら、何度もマネして歌いました。(結果的に英語表現が多く記憶され、意外に試験で役立ちました。) 英語関連のラジオ番組も、内容に興味を持てるものを聴きました。大学に入ってから、多読の他に多聴(たくさん聴くこと)も自分でやっていました。当時の私に英語学習の専門的知識はなく、楽しいと思うことに取り組んだだけだったのですが、その多くが音声化と自動化を助ける方法だったことに、自分でも驚きます。

英語力を伸ばすには、自分のレベルと興味に合った教材で、学習を続けることが重要です。難しすぎる教材やつまらない教材に取り組むのは苦しく、苦しいだけでは学習が続きません。もし学校の教科書が難しすぎる、あるいは面白くない場合、生徒に教材を替える権利はありませんから、我慢するしかありません。皆さんにできることは、まず学習を少しでも楽しい形にできないか考えることです(私がタイプすることで暗記の苦しさを軽減したように)。次にできることは、授業外で自分が楽しめる教材を探すことです。昔と違って今は、英語が聞けるテレビ番組も多いし、インターネット上には、英語で書かれた様々な情報や、英語を話す人が登場する動画など、教材になり得るものがあふれています。手を伸ばせば、自分に合うものは必ず見つかると思います。

## 8. おわりに

以上が、筆者が高校生向けに行なっている出張講義の内容を文章化したものである。講義で使用するスライドを見ながら、話し言葉に近い形で書き出した。図があった方がわかりやすいと思われる箇所がいくつかあるが、本稿では紙面の都合で図を挿入しなかった。また文章化する過程で、説明が不適切な部分や不十分な部分が見つかった。本稿の中で可能な範囲で修正・加筆したが、今後、出張講義の内容にそれらを反映させたいと考える。

## 引用文献

- 苧阪満里子(2002)『脳のメモ帳 ワーキングメモリ』新曜社  
 門田修平(2002)『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか』くろしお出版  
 門田修平(2014)『英語上達 12 のポイント』コスモピア  
 門田修平・野呂忠司・氏木道人編著(2010)『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店  
 河野守夫ほか編(2007)『ことばと認知のしくみ』三省堂

- 白井恭弘（2004）『外国語学習に成功する人，しない人：第二言語習得論への招待』岩波書店  
千葉克裕（2014）「多読学習の成功者から考える多読指導のあり方：なぜ彼らは読み続けられたのか？」大学英語教育学会第53回大会での事例報告

## 【研究ノート】

# 熱作用によるナイロンロープの切断機構について

高 橋 光 一\*

ナイロンロープにストレスを生む外的影響下でのナイロンロープ切断の機構を、NITEにおけるナイロンロープ切断実験（NITE 2014）の実験状況を踏まえ、熱作用に焦点を当てて推測する。

1955年1月に北アルプ스에서起きた墜死事故が発端となった「ナイロンロープが自然の岩角で切断するのかしないのか」という問題は既に決着されたということになっている。しかし、この問題を解明する努力の中で明示された切断時の特異現象に関連する二つの問題－本稿では石岡の第1問題（石岡・笠井 1972）および第2問題（石岡 1990）と呼ぶことにする－は、これまで意識的に取り上げられることが無く、したがって系統的に総括されることも無かったように見える。本稿では、これらの問題に対する答を得るための試論を提示する。

切断への外的影響としては、力学的のものと熱的のものを考える。力学的に生成されるストレスは、引っ張り応力と圧力である。熱的影響は、ロープ切断のために用意された物体（以後、切断台）の角部分（以後、切断角）とロープとの相互作用で発生する熱のナイロン繊維への作用である。力学的ストレスが熱にどの程度転化するかを知ることがこの考察の最終的な目標である。

引っ張り応力は、重力と合成されて錘に作用し、錘の落下運動を決定する最も重要な要素である。議論を簡単にするために、引っ張り応力に対しては弾性体近似を用いる。そのほか、切断台との間の摩擦力とロープ内のエネルギー散逸も錘の運動に影響を与えるが、その割合は小さいとして無視する。まず、錘が自由落下を終えた直後から、切断角との摩擦で発生する熱に着目する。第二に、切断角がロープに強く圧着したときに作用する圧力とナイロンの破壊応力とを比較する。第三に、上記の圧力によりロープが塑性変形するときなされる仕事の熱への変化量を見積もり、ナイロンの熱的物性と比較する。

ナイロンロープ切断においては第三の効果が大きいこと、1956年に確認されたナイロンロープ切断の特異現象に関わる問題－石岡の第1問題－がこの効果によって解決できる可能性があることが示される。最後に、1975年以降に行われた通産省における研究で確認された新たな特異現象に関わる問題－石岡の第2問題－は、非ニュートン流体に特有の現象によるものであることを示唆する。

Keywords : Nylon Rope Rupture, Ishioka's First Problem, Ishioka's Second Problem, Heat, Melting, Non-Newtonian Fluid

---

\*東北学院大学名誉教授

## I. 問題と取り組みの経緯および石岡の第 1 問題

ロープは外力の作用によって切断することがある。この当然の事実が特に日本の社会で注目されるようになったのは、1955 年に北アルプスで起きたある遭難事故からであろう。この年の 1 月 2 日、前穂高岳東壁に登攀中の三人のグループの一人が滑落時のロープの切断によって墜死した。この時に彼等が使用していたのが当時商品化されて間もないナイロンロープであって、従来の麻ロープに比べ数倍の強度を持つとされていたものであった。その後になされたナイロンロープの強度に関する調査実験は、表向きでは製造者側と使用者側で相反する結果をもたらして論争の原因となり<sup>1</sup>、さらに、井上靖による小説『氷壁』（1956～57）とその映画化がこの問題－ナイロンザイル事件－についての社会的な関心を引き起こすことになったのはよく知られている。

「ナイロンザイル事件」は、登攀用ロープがどのような物理的負荷の下で切断するのかを解明し、後に日本社会に製造物責任の概念を定着させることになる上で重要なきっかけを提供した。その「事件」を解明する中で、最も重要な事実とデータを提供したのが石岡繁雄とその共同者の研究であった。時を同じくして、篠田らも実験調査を行っている（Shinoda et al. 1956。以下 SKK 1956）が、「経験・論理・公開」という科学の 3 原則の観点からは、石岡・笠井のもの（石岡・笠井 1972）が勝るようである。その理由は後に述べる。

「ナイロンザイル事件」直後、当事者達が当面することになったのは主に次の 4 つの問題である：

- (1) 登攀用ナイロンロープ = ナイロンザイルの一般的性能はどのようなものか。
- (2) 事故が起きた登攀中に使用されたナイロンロープに欠陥はあったか。
- (3) 事故が起きた登攀で、ナイロンロープの操作に誤りはなかったか。
- (4) ナイロンロープの適切な操作法はどのようなべきか。安全を確保する方法はあるか。

(2)～(4) は、製造と登攀に詳しい知識を持つ人たちによって取り組まれるべき技術的問題であり、本稿での議論の対象にはしない。本稿では、(1) に関連する問題だけを検討する。

<sup>1</sup> 一連の実験が、製造者側（蒲郡実験）と通称されることになる公開実験を行った篠田（大阪大学工学部）とロープ製造企業）と使用者側（遭難死した登山者の親族である石岡とその共同者）という、利益が相反する当事者によってそれぞれ独立に行われたというのが、この出来事の特異的な面である。さらに、第三者の職業研究者による冷静な調査検討よりもマスメディアの報道が先行して社会的関心の誘導がなされたことも、特異性を際立たせることに寄与している。なお、実験結果が一見相反したのは、鍵となる実験条件（切断角の面取り）の秘匿という行為が製造者側にあったためであることが明らかになっている。この間の経緯は、例えば石岡・相田（2004）の総括報告に詳しい。論争は既に決着しているが、本稿では、歴史的経緯と本稿の目的を明確にするために、必要に応じて両者の論述に言及する。



もちろん、上記の問題のいずれも、切断の物理的機構の本質的理解に基づいて考察されることがより望ましい。

石岡らが明らかにした事実の一つに‘三つ撚り（または、三つ打ち）ロープの縦傷’がある（岩稜会 1956；石岡・笠井 1972）。三つ撚りロープは、三本のストランド-小綱-を螺旋状に撚り合わせて作られるロープである。ストランドは数本から数十本のヤーン-繊維束-から、また各ヤーン数百本から千本程度のファイバー-ナイロン繊維-からなる。石岡が調査したロープでは、ストランドは、内側の2本のヤーンが10本のヤーンで取り巻かれるような構造をしていた。

捻れのない三つ撚りナイロンロープでは、横から見たときに、同一のストランドが二つおきに現れる。このときの、現れた同一のストランド上の手前の2点をストランドに沿って結ぶ線の長さで最短のものを1Lピッチと呼ぶことにすると、石岡らが解明した切断の機構は以下の通りである。三つ撚りロープを岩角のような硬い角-切断角-に圧着させながらロープ長方向に移動させると、表面の擦過傷は1Lピッチに相当する距離 $a$ において各ストランドに繰り返し作られる。圧着力が強いつき、結果的に、ストランドの外周囲にあるヤーンで切断角に接触しているもの全てが長さ $a$ に断片化される。1Lピッチ内で断片化されたヤーンの数十分多いとき、ストランド従ってロープは荷重に対抗しうる張力を発生させる性能を失う。切断と同時に、1Lピッチ長の繊維断片の束が作られる。

また、石岡らは、ヤーンが切断する直接の原因は剪断力と繊維間摩擦による発熱溶融で、おそらく後者の役割が大きいだらうと推測した（岩稜会 1956）。この点については、実験調査を製造者側の立場で行った篠田ら（SKK 1956）も同様の結論に達している。また彼らは、ロープの長さ方向の運動で作用する剪断力の作用は認めず、水平移動するロープと切断角の間に作用する摩擦が重要であろうと推測した。

ロープ切断実験に関する研究報告の中で歴史的に重要かつ筆者が入手できたものは、石岡ら（1956；1972）によるものと篠田ら（SKK 1956）によるものの二つがある。共に、錘を付けたロープの一端を固定し他端に錘を付けて自由落下させ、切断角で切断されるかどうかを、落下の高さやロープの太さ等を変えながら見るという実験を行っている。ロープの切断が起きる部分での力の作用状況を図1に示す。

石岡と篠田らの実験では、主要な結論は相反している。すなわち、前者は、切断角が‘鋭い’ときロープは長さ方向の運動で切断するという結果を得たが、後者では、製造者工場がある愛知県蒲郡で行われた実験に基づき、長さ方向の運動はロープが運動エネルギーを吸収する結果切断に至らず、水平方向の運動が切断を引き起こし、同時に切り口に熱を発生させる、としている。

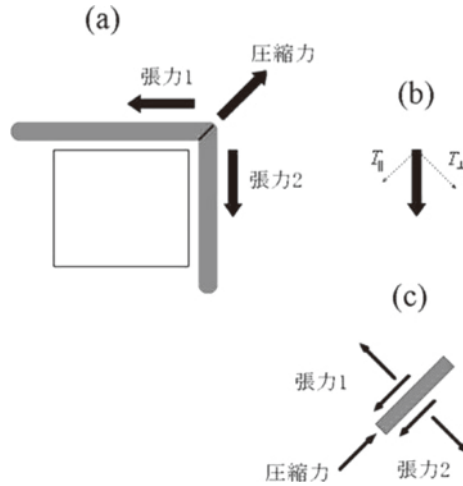


図 1. (a) 切断角で曲げられたロープには、屈曲箇所にて 3 種の力が作用している。(b) 張力 2 は、屈曲箇所にて、圧縮力に平行な成分  $T_{\parallel}$  と垂直な成分  $T_{\perp}$  に分解できる。張力 1 も同様である。(c) 屈曲箇所 - (a) でロープの黒く塗った部分 - の両側の面に、圧縮力と平行逆向きに  $T_{\parallel}$  が作用している。この圧縮力と  $T_{\parallel}$  の組がここでの剪断力を構成している。

両者とも、ナイロンロープの物性を理解する上で必要な項目について、多くの数値データを報告している。しかし、SKK 1956 にはいささかの問題が認められるようである。理由は次の通りである。SKK 1956 は

1. 最終結論の根拠を蒲郡での実験においている。切断角の丸みの程度(通常 R 値で表す。1R は曲率半径が 1 mm の角を意味する。)が結果に大きく影響するのであるが、それについてのデータの提示が無いので彼らの結論の評価ができない。
2. 直径 11 mm のナイロンロープは直径 24 mm の麻ロープの 4 倍強いと結論付けている。他方、同一の高さからの落下試験で、11 mm ナイロンロープは破断するが、24 mm 麻ロープは破断しないという結果を得ている (SKK 1956, Fig. 4)。この食い違いに対する説明が無い。
3. 上記 2 の結論を導くに際して描いたと思われる、12 mm 麻ロープの安全-危険境界線の位置に必然性が無く、むしろ恣意的であるように見える (SKK 1956, Fig. 4)。破断点 (2 点しか与えられていない) を単純に結べば、描かれた境界線よりも傾きの大きい線が得られる。
4. ロープが切断角の上で水平に動く運動が熱を発生させロープを溶かすと述べている。それを支持するものとして、ある登攀事故で切断したロープの切断面は溶けているという事実、8 mm ナイロンロープを 40 kg の負荷をかけながら鋭い岩角で横に滑らせると切断するという実験、を挙げている。しかし、初めの事例では水平移動の程度が

その有無を含めて不明で、後の事例では熱と熔融の因果関係の検証について述べられていず、共に主張を支持するための例証となっていない。

このように、SKK 1956 には、実験条件とデータの提示、処理、解釈、論理展開について学術的に難点があるように見える<sup>2</sup>。用いられたすべてのデータや論理が無意味というわけではない（むしろ、石岡・笠井 1972 の仕事と比較すると注目すべき点もある。後の記述を参照のこと。）が、本稿では、研究の信頼性の観点から、石岡らが得た諸結論を念頭に置いて考察を進める。

上に略述したようなナイロンロープ切断の機構に関する仮説は、20 年以上に渡って第三者による立証や反証－科学の第 4 の原則は「検証」である－はなされないままであったようである。ナイロンロープの性能の問題が、実用性・安全性・経済性の観点から企業内で、あるいは企業との結びつきの中で取り上げられる傾向が強かったことの表れであるとも推測される。充実した研究環境が、そのような場合に得られる機会が増えるということもあるだろう。

2014 年に独立行政法人製品評価技術基盤機構（NITE）は、加重落下によるナイロンロープ切断実験を実施し、その内容を報告している（NITE 2014）。実験は、1955 年の事故品（三つ撚りロープ）と現在市販されているナイロンロープ（編み被覆ロープ）について 1. 構造、2. 材質、3. 融点、4. 動的粘弾性、5. 落下切断試験、6. 落下切断後の破壊形態、の比較を行ったものである。明らかになった主なものは、(a) 事故ロープの材質はナイロン 6 であるが、現在市販のものよりは発熱しやすく弾性性能が劣る、(b) 切断では、剪断破壊（すべりによる小さな塑性変形が累積する。図 2 を参照のこと）・延性破壊（大きい塑性変形を伴う）・脆性破壊（塑性変形が無いまま破壊する）が同時に進行する、ということである。

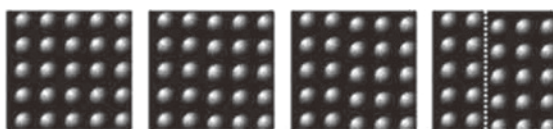


図 2. 剪断破壊の概念図。左端の、規則的に並んだ分子配列が、右に行くに従って位置の小さなずれが累積していく様子が描かれている。ずれが大きくなって分子間結合が切れると、点線で示した剪断面に沿って破壊が起きる。剪断面の両側に向きが反対の力が面に平行に作用することが、剪断破壊が起きるための条件である。

<sup>2</sup> 論文を含む著述は通常読者の範囲を想定してなされる。SKK1956 は工学者向けに書かれたが、本稿では、公表された入手可能なデータをもとに諸事を理学の面から検討する。いずれにせよ、論理に整合性が求められるのは当然のことである。

(b) のような複数の破壊形態があるとして、それが起きる順序や条件についての実態がすべて明らかになっているわけではない。例をあげると、錘を付けた三つ撚りナイロンロープを錘の落下時に鋭い切断角で切断する実験では、落下距離が (0.5 m~2 m の範囲で) 長くなると衝撃力が小さくなるという興味深い事実がある (石岡・笠井 1972)。石岡らの極めて重要な発見である。しかし、ロープ切断における縦傷の役割について既に知っていたにもかかわらず、石岡・笠井は、切断原因を縦傷と関連づけることをせず、この事実の由来を不明とするという態度をとっている。そのことについては、少なくとも二つの理由が考えられる。一つは、縦傷の広がり (とくに深さと横巾) がロープと切断角の相対速度とどのような関係にあるかが不明であったことである。極端な場合として、縦傷の広がり相対速度と無関係であるとする、傷ついたロープの強度は 1L ピッチ相当のヤーンまたは繊維の破断でほぼ決定されてしまうはずで、上記の事実は全くの謎となる。実際は、速度と破壊の範囲の間に何らかの関係があるのだろうが、その詳細は調査できなかった。根気のいる顕微鏡検査が必要だが、これが障害になったと思われる。二つ目に、発熱の状況が知られていなかったことがある。経験的にも論理的にも、熱が一つの鍵となることは容易に想像されるのであるが、石岡・笠井の実験環境では定量的な測定が難しく、石岡らは即断を避けたと思われる。

ただし、篠田ら (SKK 1956) はすでに、発熱に関する初期段階の調査は行っていた。その中で、11 mm ナイロンロープで高さの違う落下実験をしたとき、切断に至った高い位置からの落下の方が温度上昇 (4°C 程度) が小さいという報告をしている (SKK 1956 Table II)<sup>3</sup>。これは、まさに上記の石岡・笠井の結果と対応している。しかし、篠田らはこの結果について何の見解も述べていない。

破壊の一般論に依れば、この現象は実は当然期待されるべきものである。図 3 に示すように、外力が作用したとき、物体内に、変形に抵抗する応力が生じる。外力が小さいうちは応力は Hooke の法則に従う。外力が除かれれば変形は元に戻る (弾性領域)。外力が増えると、変形が線形的に進むが応力が 0 でも変形が元に戻らなくなる (弾性-塑性領域)。さらに外力が増すと、応力が 0 のときの変形が著しくなる。応力は内部構造の変化のために減少することもある (塑性領域)。ある外力値で応力は最大に達し、その後応力は減少し物体はやがて破壊に至る (破壊点)。ナイロンロープの切断実験では、'衝撃力' は応力に対応すると考えられるので、最大応力値を越えて破壊点に至るまでの間に衝撃力は減少することが期待される。例えば、Benenson 等 (2006) の第 5 章を参照されたい。

問題は、ナイロンロープの切断において、どのような機構が塑性変形と破壊をもたらすか

<sup>3</sup> 測定方法と測定箇所を SKK1956 から正確に読みとることはできない。

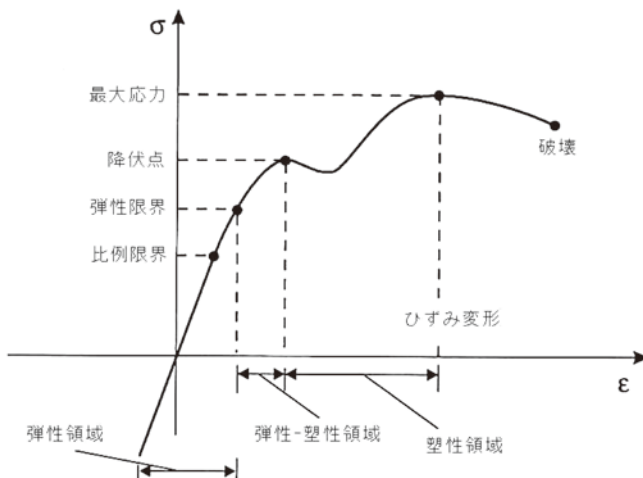


図3. 応力とひずみの間の一般的関係 (Benenson 等 2006 の図を描き直した。)

ということである。著者の知る限り、この問題は提起から今日に至るまで未だ答を提示されぬままに残されている。ここで、これを石岡の第1問題と呼ぶことにする。すなわち

石岡の第1問題：いわゆる OR 切断角によるナイロンロープ切断時の衝撃力は、錘の落下距離が増えると小さくなる。そのメカニズムはどのようなものか<sup>4</sup>。

既に述べたように、石岡ら (岩稜会 1956) と篠田ら (SKK 1956) は、共に破壊に於ける発熱の役割を指摘しているが、NITE 実験において上記3種の破壊形式が発熱とどのように関係しているかという問題は依然未解明である<sup>5</sup>。特に、剪断破壊とされている破壊形状では水玉状の固まりが切断された繊維の先端に作られるが、これは鋏による切断のような緩やかな剪断破壊では見られない、落下衝撃破壊に特徴的な現象のようである。緩やかな破壊と衝撃破壊の違いは、後者が熱の発生と蓄積を伴うということであり、水玉状の固まりの形成がその結果である可能性が高い。以下で、この熱発生に注意を払いつつ、NITE 実験その他の状況に於けるナイロンロープ切断の機構を再考し、石岡の第1問題に答を与えることを試みる。石岡の第2問題については第IV節で述べる。

<sup>4</sup> 切断角の R 値の重要性を意識した実験は石岡・笠井 (1972) によって行われた。そこでは、直角の切断角の R 値として OR (曲率半径 0 mm), 1R (同 1 mm), 5R (同 5 mm) を用いた場合のデータが公表されている。ただし、幾何学的直角-厳密な OR-は現実にはあり得ないが、どの程度の OR なのかの記述はない。現在では、通産省安全基準に従って所定の方法で作成された角を指す。もちろん NITE2014 ではこの基準に従って実験を行っている (<http://www.sg-mark.org/KIJUN/S0026-05.pdf> を参照)。なお、石岡自身は、1972 年以降この第1問題には言及していないようである。理由は分からない。

<sup>5</sup> NITE 実験でも温度の測定はしていない。ただ、切断ロープは‘素手で持てないくらい熱くなる’ (NITE 菊池久氏からの私信による)。

## II. NITE 実験

2014 年の NITE 実験の概要を説明する。

試料となるロープの一端（自然長  $L_0=2.8$  m）を固定し、水平約 50 cm 横たえた先に切断角を置く。ロープを切断角の上から垂直に  $h/2 \equiv 2.5$  m 立ち上げ、他端にカラビナを介して錘を付ける。錘の質量  $M$  は 55 kg, または 80 kg である。ロープに生じる力を衝撃力測定器で測定し、その最大値を求める。

切断角としては、ステンレス鋼（一定の規格あり）で面取りのないものすなわちいわゆる 0R のものを用いる。試料は、1955 年の事故品（三つ撚りロープ）と現在市販されている編み被覆ロープを用いる。

前節に記した項目の調査の他に高速度撮影を行う。詳細は石岡（2014）参照されたい。

結果として、繊維の切断端に熔融痕が形成されたものが認められた。その他、延性破壊、脆性破壊と見られる形状の破壊があった。NITE は、第一のものを剪断破壊としている（NITE 2014）。

## III. 落下・切断過程の物理的詳細

錘が自由落下を初めてから完全に切断するまでの間に、ロープの表面と内部は次に挙げたさまざまな状態を経過する。

- (a) 自由落下…錘の自由落下の間、ロープに応力が殆ど生じない状態
- (b) 弾性伸張…落下距離がロープの自然長 = 切断角から錘までの長さの 2 倍に達したときからロープが Hooke の法則に従って伸張している状態
- (c) 塑性伸張…ロープの弾性係数が減少し、Hooke の法則が成り立たないまま伸張している、破壊以前の状態
- (d) 破壊
  - (d1) 表面（外皮）擦過破壊…ロープ表面（外皮）の一部が切断角との摩擦で破れる状態
  - (d2) 剪断破壊…切断角からのロープ断面半径方向の力によっておきる変形と切断
  - (d3) 塑性破壊
    - (d31) 延性破壊…ナイロン分子構造の、長さ方向の切断
    - (d32) 脆性破壊…ナイロン分子間の横結合（または不純物分子による架橋）の切断

自由落下中は、ロープには殆どストレスは生じない。以下では、弾性伸張が始まってから

以後の変化を考える。観測量は原則として MKS 単位系で測るものとする。本文中で物理量の単位は、明記されていない場合は MKS 単位系での数値である。

### 3.1 摩擦による発熱

錘の質量は  $M=55$  kg とする。錘の自由落下が終了した直後に、ロープに荷重が掛かり、ロープは切断角に圧着されながら下方に伸び始める。このとき発生する、ロープ一切断角間の摩擦熱について考える。以下で【見積もり】とあるのは、およその数値を見積もった（有効数字高々 1 桁。）もので、数値の大体の把握のために提示している。数値の見積もりのために必要な基礎データは Benenson 等 (Benenson et al. 2000) のものを採用した。

- (1) 自由落下が終了した時刻  $t = 0$  での錘の落下速度は

$$v_0 = \sqrt{2gh_0}$$

【見積もり】  $\sqrt{2gh_0} \sim \sqrt{2 \cdot 9.8 \cdot 5} \sim 10$  (m s<sup>-1</sup>)

$g$  は重力加速度,  $h_0=5$  m は自由落下距離である。

- (2) 時刻  $t > 0$  におけるロープの長さを  $L(t)$  とすると、フックの法則によれば

$$\frac{L(t)}{L_0} - 1 \equiv \delta(t) = \frac{1}{E} \frac{F_s(t)}{S}$$

である。ここで  $E$  は Young 率,  $S$  はロープの断面積,  $F_s(t)$  は時刻  $t$  でのロープの張力である。ロープの半径は 4 mm とする。

【見積もり】 ロープが 2 割伸びたときの張力:  $\delta ES \sim 0.2 \cdot 1000 \cdot 10^6 \cdot 3.1 \cdot (4 \cdot 10^{-3})^2 = 10^4$  (N)

- (3) 錘の運動方程式 (錘の速度を  $v$ , 鉛直座標は下向きを正とする。)

$$\begin{aligned} \frac{d^2L}{dt^2} &= \frac{dv}{dt} = g - \frac{F_s}{M} = g - \frac{ES}{M} \left( \frac{L}{L_0} - 1 \right) \\ &= \frac{ES}{ML_0} \left( \frac{ML_0}{ES} \tilde{g} - L \right), \\ \tilde{g} &\equiv g + \frac{ES}{M} \end{aligned}$$

【見積もり】  $\tilde{g} = g + \frac{ES}{M} \sim 9.8 + \frac{1000 \cdot 10^6 \cdot 3.1 \cdot (4 \cdot 10^{-3})^2}{55} \sim 9.8 + 900 \sim 910$  (ms<sup>-2</sup>)

\* 荷重がかかると  $S$  も変化するが、ここでは定数として扱う。

\* 錘の運動への影響では、摩擦力は重力に比べ小さいのでここでは無視する。

$s \equiv \frac{L}{L_0} - \frac{M}{ES} \tilde{g}$  という変数について、調和振動子運動方程式

$$\frac{d^2s}{dt^2} = -\frac{ES}{ML_0}s \equiv -\frac{s}{\tau_c^2}$$

を得る。これは簡単に解くことができ、解は

$$s = s_0 \cos(t/\tau_c) + s_1 \sin(t/\tau_c)$$

となる。ここで特性時間

$$\tau_c \equiv \sqrt{\frac{ML_0}{ES}} = \frac{1}{\omega}$$

を定義した。

$$\text{【見積もり】 } \tau_c \sim \sqrt{\frac{55 \cdot 2.8}{1000 \cdot 10^6 \cdot 3.1 \cdot (4 \cdot 10^{-3})^2}} \sim \sqrt{0.0031} \sim 0.056 \text{ (s)}$$

$$\text{【見積もり】 } \frac{L_0}{\tau_c} \sim \frac{2.8}{0.056} \sim (\text{m s}^{-1})$$

錘の鉛直位置と速度はそれぞれ以下で与えられる：

$$L = \frac{\bar{g}ML_0}{ES} + L_0s$$

$$v = \frac{dL}{dt} = L_0 \frac{ds}{dt} = \frac{L_0}{\tau_c} (-s_0 \sin(t/\tau_c) + s_1 \cos(t/\tau_c))$$

初期条件は  $t = 0$  で  $L = L_0, v = v_0, s = s_0$  であるから次式が成り立つ：

$$L_0 = \frac{\bar{g}ML_0}{ES} + L_0s_0, v_0 = L_0 \frac{s_1}{\tau_c}$$

$$\text{【見積もり】 } s_0 = 1 - \frac{M\bar{g}}{ES} = -\frac{Mg}{ES} \sim -\frac{55 \cdot 9.8}{1000 \cdot 10^6 \cdot 3.1 \cdot (4 \cdot 10^{-3})^2} \sim -\frac{55 \cdot 9.8}{5 \cdot 10^5} \sim -1.1 \cdot 10^{-2}$$

$$\text{【見積もり】 } s_1 = \frac{\tau_c v_0}{L_0} \sim \frac{0.056 \cdot 10}{2.8} \sim 0.2$$

この  $s_0, s_1$  を用いて、時刻  $t$  における  $L$  は次のように表される：

$$\begin{aligned} \frac{L}{L_0} &= \frac{\bar{g}M}{ES} + s_0 \cos(t/\tau_c) + s_1 \sin(t/\tau_c) \\ &= 1 - s_0 + s_0 \cos(t/\tau_c) + s_1 \sin(t/\tau_c) \end{aligned}$$

(4) 時刻  $t$  での張力は

$$\begin{aligned} F_s &= M \left( g - \frac{d^2L}{dt^2} \right) \\ &= M \left( g + \frac{L_0}{\tau_c^2} (s_0 \cos(t/\tau_c) + s_1 \sin(t/\tau_c)) \right) \end{aligned}$$

$$\text{【見積もり】 } \frac{L_0}{\tau_c^2} \sim \frac{2.8}{0.056^2} \sim 890 \text{ (ms}^{-2}\text{)}^6$$

---

<sup>6</sup> この値を使うと、張力の最大値は  $10^4 \text{ N}$  程度となる。ちなみに石岡・笠井 (1972) によれば、市販されているザイルの‘荷重’は  $1,400 \sim 2,700 \text{ kg}$  で、これは  $1.4 \times 10^4 \sim 2.6 \times 10^4 \text{ N}$  に相当する。



【注意】

$$\begin{aligned} \frac{dF_s}{dt} &= M \frac{L_0}{\tau_c^3} (-s_0 \sin(t/\tau_c) + s_1 \cos(t/\tau_c)) \\ &= \frac{M}{\tau_c^2} v \end{aligned}$$

が成り立つ。(Mg - F<sub>s</sub>)dt = Mdv を t=0 (速度 v<sub>0</sub>) から τ<sub>f</sub> (速度 v<sub>1</sub>) まで積分して

$$\begin{aligned} &M(v_1 - v_0) \\ &= -\frac{ML_0}{\tau_c} (s_0 \sin(t/\tau_c) - s_1 \cos(t/\tau_c)) \Big|_0^{\tau_f} \\ &= -\frac{ML_0}{\tau_c} (s_0 \sin(\tau_f/\tau_c) - s_1 \cos(\tau_f/\tau_c) + s_1) \end{aligned}$$

より

$$v_1 - v_0 = -\frac{L_0}{\tau_c} (s_0 \sin(\tau_f/\tau_c) - s_1 \cos(\tau_f/\tau_c) + s_1)$$

を得る。

(5) 切断までの錘の移動距離は

$$\begin{aligned} \Delta L_f &= L(\tau_f) - L(0) \\ &= L_0 (s_0 \cos(\tau_f/\tau_c) + s_1 \sin(\tau_f/\tau_c) - s_0) \end{aligned}$$

τ<sub>f</sub> として張力発生から切断までの時間 0.07s をとる<sup>7</sup>。すると τ<sub>f</sub>/τ<sub>c</sub> = 0.07/0.056 ~ 1.25 であるから次の見積もりが可能になる。

$$\begin{aligned} \text{【見積もり】 } \Delta L_f &\sim 2.8(-1.1 \cdot 10^{-2} \cos(1.25) + 0.2 \sin(1.25) + 1.1 \cdot 10^{-2}) \\ &\sim 2.8(-1.1 \cdot 10^{-2} + 0.2 \cdot 0.95 + 1.1 \cdot 10^{-2}) \sim 0.53 \text{ (m)} \end{aligned}$$

切断角での接触距離 Δl (ロープが切断角に接した長さ) は、ロープが一様であれば静止しているときの長さに比例する。すなわち Δl : ΔL<sub>f</sub> ~ l : L<sub>0</sub>。従って

$$\text{【見積もり】 } \Delta l \sim \frac{l}{L_0} \Delta L_f \sim \frac{0.5}{2.8} \cdot 0.53 \sim 0.095$$

切断角とロープ間の圧縮力 F<sub>c</sub> は F<sub>s</sub> のオーダーであろう。ここでは

$$F_c \sim \sqrt{2} F_s$$

と近似する。静的釣り合いの場合には正しいが、実際にはロープは動いているのでこれより小さいはずである。

切断角での摩擦力は、運動摩擦係数を μ とすると

<sup>7</sup> 菊池久氏からの私信。

$$F_f = \mu F_e \sim \sqrt{2} \mu F_s$$

である。従って、時間  $\tau$  の間に摩擦力がする仕事  $W_f$  は

$$\begin{aligned} W_f &= \int_0^{\Delta l} F_f dl = \int_0^{\tau} F_f \frac{dl}{dt} dt \sim \int_0^{\tau} \sqrt{2} \mu F_s \frac{dL}{dt} \frac{l}{L_0} dt \\ &= \sqrt{2} \mu \frac{l}{L_0} \int_0^{\tau} F_s \frac{\tau_c^2}{M} \frac{dF_s}{dt} dt = \frac{\mu l \tau_c^2}{\sqrt{2} L_0 M} F_s(\tau)^2 \\ &= \sqrt{2} \mu \frac{l}{L_0} \int_0^{\tau} F_s v dt \end{aligned}$$

ここで、上の【注意】の関係式を使った。

【見積もり】  $\mu = 0.5$ ,  $\tau = \tau_f = 0.07$  として

$$\begin{aligned} \frac{\mu l \tau_c^2}{\sqrt{2} L_0 M} F_s(\tau)^2 &\sim \frac{0.5 \cdot 0.5 \cdot 0.056^2}{\sqrt{2} \cdot 2.8 \cdot 55} \times 55^2 (9.8 + 890(-1.1 \cdot 10^{-2} \cdot 1 + 0.2 \cdot 0.95))^2 \\ &\sim 314 \text{ (j)} \end{aligned}$$

こうして、切断角との摩擦力がロープに対してする仕事量の見積もりができた。これをもとに接触面を通してロープに与えられる熱量  $Q_f$  を見積もることができる。次の仮定を採用する。

仮定 仕事  $W_f$  のある割合が熱になる。すなわち

$$Q_f = \varepsilon W_f, \quad 0 < \varepsilon < 1$$

NITE 実験では切断角は金属で、その熱伝導率はナイロンの数百倍である。このことを考慮すると、ナイロンロープ内に流入する熱量は高々上記  $Q_f$  の 1/100 程度であろう。

$Q_f$  によって、温度の上昇分は次のように見積もられる：

$$\Delta T_f \sim \frac{Q_f}{c_p m} = \varepsilon \frac{W_f}{c_p m} = \varepsilon \frac{W_f}{c_p \rho S_p \Delta l}$$

$c_p$  は圧着時に於ける単位質量当たりのロープの比熱、 $m$  と  $\Delta l$  はロープが切断角と圧着接触した質量と長さ、 $S_p$  は圧着時のロープの断面積である。

$$\begin{aligned} \text{【見積もり】} \quad \Delta T_f &\sim \varepsilon \frac{W_f}{c_p \rho S_p \Delta l} \sim \varepsilon \frac{314}{1.3 \cdot 10^3 \cdot 1.1 \cdot 10^3 \cdot 3.1 \cdot (4 \cdot 10^{-3})^2 \cdot 0.095} \\ &\sim 47\varepsilon \text{ (}^\circ\text{C)} \end{aligned}$$

【参考】 ナイロン 6 のガラス転移温度  $\sim 50^\circ\text{C}$ 、融解温度  $225^\circ\text{C}$ 。低温で分子間結合が弱くなり始めることは注意しなければならない。 $\Delta T_f$  に対する上記の見積もりは、接触面においてはナイロン分子間の結合の分断が熱作用によって起こりうることを示している。

### 3.2 圧縮による発熱〔切断直前〕

ロープは切断角に圧着されることでロープ面にほぼ垂直方向に圧縮変形する。すなわち、切断角から仕事をされることになる。このとき発生する圧縮力は張力すなわちロープの弾性と塑性に関係するが、Hookeの法則が成立しなくなった時点－弾性限界－以降の応力の見積もりができない。他方、石岡・笠井(1972)によれば、鋭い切断角での落下切断実験(直径12 mm, 加重75 kg)では、0.5～2 mの落下で錘の重量の最大2.5倍程度の衝撃力が生じている。対応する破壊応力はおよそ $180 \times 9.8 / (3.1 \times 0.006^2) \sim 16$  (MPa)である。データ表(Benenson et al. 2000)によればナイロンの静的破壊応力は大体500 MPaなので、石岡・笠井の結果はおよそこの30分の1となる。鋭い切断角を用いたときのナイロンの動的特性は静的特性と大幅に異なるのである。

ここでは、石岡・笠井の得た結果に沿って切断直前の圧縮力を見積もることにする。すなわち、切断直前の衝撃力となる破壊応力を $2.5 Mg$ とする。 $M=55$  kgである。圧縮力は少なくともその $1/\sqrt{2}$ はあるだろう。この圧縮力がする仕事を次の手順で見積もる。

1. 切断角における圧縮力  $F_c \sim 2.5 Mg/\sqrt{2}$

【見積もり】  $2.5 \cdot 55 \cdot 9.8/1.4 \sim 960$  (N)

2. 圧縮の厚さ  $d \sim r$

【見積もり】 0.004 (m)

3. 圧縮力がする仕事  $W_c = F_c d \sim F_c r$

【見積もり】  $960 \cdot 0.004 \sim 4$  (Ws)

4. 圧縮領域の体積  $V_c \sim S_c(2r-d) \sim S_c r$

$S_c$ は切断角での接触面積である。ただし、次の2点に注意しておく(NITE 2014)。

\* 接触面を長方形と見なしたとき、縦の辺は $r$ に比べ非常に短い。

\* 横の辺はロープの直径程度である。

従って

【見積もり】  $S_c = \text{横長} \times \text{縦長} \sim \frac{r}{10} \cdot 2r = 3.2 \cdot 10^{-6} \text{ (m}^2\text{)}$ として  $S_c r \sim 1.3 \cdot 10^{-8} \text{ (m}^3\text{)}$

\* NITE 実験では切断角は鋭い(いわゆる‘ $R$ ’値が0)ので、 $S_c$ の見積もり値をさらに小さく取るとは妥当だろう。半分にすれば、次に述べる温度上昇は2倍になる。

ついでに切断直前の圧力 $p_c$ を見積もっておく。

$$p_c \sim F_c/S_c$$

【見積もり】  $\frac{960}{3.2 \cdot 10^{-6}} \sim 300 \text{ (MPa)}$

【参考】 ナイロンの静的破壊応力は Benenson et al. (2000) によれば約 500 MPa である。ここでの  $p_c$  の見積もり値が静的破壊応力とオーダーで一致しているのは、切断角とロープの接触面積の狭さによる。

以上で、ロープ内で発生する熱量  $Q_C$  を見積もる準備が整った。最後に次の仮定をおく。

仮定 仕事  $W_C$  のある割合が熱になる。

$$Q_C = \varepsilon_C W_C, \quad 0 < \varepsilon_C < 1$$

熱はロープ内で発生し、かつ逃げ場がないので  $\varepsilon_C$  は 1 のオーダーとしてよいだろう。 $Q_C$  による温度上昇は

$$\Delta T_C \sim \frac{Q_C}{c_p \rho V_C} = \varepsilon_C \frac{W_C}{c_p \rho V_C}$$

【見積もり】  $\Delta T_C \sim \varepsilon_C \frac{W_C}{c_p \rho V_C} \sim \varepsilon_C \frac{4}{1.3 \cdot 10^3 \cdot 1.1 \cdot 10^3 \cdot 1.3 \cdot 10^{-8}} \sim 220 \varepsilon_C \text{ (}^\circ\text{C)}$

$\Delta T_f$  と  $\Delta T_C$  の式と概略値がこの節での結論である。

\* 上記の見積もり値は、不確定度が大きい  $V_C$  の値に敏感に依存する。例えば、 $V_C$  を半分を取れば  $440 \varepsilon_C$  になる。

#### IV. 結論または推測

##### 石岡の第 1 問題

3.1 の  $\Delta T_f$  と 3.2 の  $\Delta T_C$  が本稿の主要な結果である。55 kg 錘の落下切断実験 (NITE2014) を参照すると以下のような推測が可能になる。

- ① ロープと切断角との接触による発熱量を弾性体近似で見積もると、ロープの温度上昇は  $50 \varepsilon \text{ }^\circ\text{C}$  程度である。切断角が金属の場合、 $\varepsilon < 0.01$  とと思われるのでこれは小さい<sup>8</sup>。
- ② 切断直前の、錘の落下が一旦急減速した瞬間の圧縮応力は 300 MPa 程度になる。これは、ナイロンの破壊応力に匹敵する。
- ③ 切断直前、圧縮応力による発熱に起因する温度上昇を見積もると最大  $200 \varepsilon \text{ }^\circ\text{C}$  程度

<sup>8</sup> 既に述べたように、NITE 実験では切断角としてステンレス鋼によるものを用いる。ステンレス鋼の熱伝導率は花崗岩・大理石の 10~20 倍程度である。したがって、ナイロン・接触面間の発熱がナイロンに及ぼす熱作用を詳細に見積もり、自然の岩角による切断状況を推測しようとする場合、NITE 実験の条件下では発熱効果を過小評価することになる。本稿ではこの点には踏み込まない。

となる。力学変形ないし化学変性に使われるエネルギー損失を考慮すれば  $\varepsilon_c$  は 1/2 程度、すなわち温度上昇は少なくとも 100°C 程度となると思われる。

得られた数値は桁見積もりによるものに近い。1/2~2 倍程度の変動を見込むのが妥当である。

ロープが伸びきった直後から錘が落下している間の温度上昇は、NITE 実験に関しては無視してよい。なお、コンクリートや石英ガラスの熱伝導率はナイロンの 5 倍程度である。切断角がこれらの素材で作られた場合でも、ロープ内温度上昇への摩擦力の寄与はたかだか 10°C 程度であろう。

錘の落下が一旦ほぼ停止してからロープが切断する直前までのロープ内温度上昇は、2 倍程度の誤差（誤差の原因については下記を参照のこと。）を見込んでおよそ 100°C 前後に達しうる。この温度上昇がナイロン融解に直結するかは、この瞬間の時間間隔（切断時間）が非常に短いことを考えると厳密には不明である。しかし、ナイロンの融点が 220°C 程度、軟化点が 50°C 前後であることを考慮すると、i) 熱運動による固体原子の振動周期が 1 兆分の 1 秒程度である。仮に切断時間が 0.01 秒であったとしても、それは限られた数のナイロン分子が熱平衡に達するには十分な時間であり、融解に達する可能性がある、ii) 部分的なガラス変性をもたらす可能性は高い、であろう。この変性が起きるとすると、この時点でナイロンの破壊応力はほとんど 0 となり、破壊は容易に進行するだろう。

切断時の温度上昇は  $W_c/\rho V_c$  に比例する。より高い場所から落下すれば、ロープの圧縮変形の増大による  $W_c$  の増加によってこの値はより大きくなることが期待される。さらに、繊維の伸びによる  $\rho V_c$  の実質的な減少も起きるだろう。こうして、より大きい落下距離はロープ内部でのより高い温度上昇と繊維のより速い軟化・溶融をもたらす。このことが、石岡・笠井 (1972) が見出した、石岡の第 1 問題の現象を引き起こす原因となっていると考えられる。

ここで、これまで用いた「軟化」「溶融」という語について補足しておく。これは、ナイロンのような結晶質の部分と非晶質の部分が混在する物質を考える場合に必要となる概念である。単純結晶は、固体から液体への相転移が紛れなく観察され、従って融点も明確に定義できる。一般の高分子では、ある特定の測定法によってある物理量（熱移送量や比体積など）の急激な変化を見て、公称される「融点」を定義するが、実は非晶質の存在によってそれよりも低い温度で既に分子の流動化は起きている。すなわち「溶融」は融点以前に連続的に起きているのである。結晶質・非晶質の割合によって、流動化の様態はさまざまであろう。これまでの我々の考察は、ナイロンの衝撃切断ではこの熱的メカニズムが重要となる場合が

あることを示している。

データ表 (Benenson et al. 2000) によれば、ナイロンの最大応力は 490~635 MPa である。ここでの見積もりによれば、ロープ切断直前の圧縮応力は~300 MPa であったが、実際はこれを超えている可能性もある。この場合、ナイロン融解が起きていなくとも、力学的切断は起きる。

上記の事情を総合すると、ロープの切断に至る過程は、一般には、切断角からの圧力がもたらすロープ表面及びロープ内温度上昇によるナイロン繊維の変性と破壊応力発生との同時的進行によるものである可能性がある。このとき、もしもロープ表面及び内部温度上昇が(室温での)破壊応力発生よりもわずかでも早ければ、温度上昇がロープ切断の主原因となる。この結論は、切断角の熱的性質によらない。

この結論(仮説)の妥当性を検証する一つの方法は、温度上昇と応力破壊の順序を制御できるさまざまな組み合わせで落下切断実験を行うことである。上記の考察によれば、ロープが細い(あるいは、薄い)ほど発生熱量は少なく、したがって時間的には剪断応力破壊が優先する。具体的には、同じ断面積ならロープよりもベルトの方が切断しにくいということである。このときはナイロンの融解の程度は小さいだろう。太いロープでは、応力破壊と融解は同時的に進行する可能性があり、落下切断実験で融解を応力破壊に優先させるのは難しいかもしれない。これを実現するためには、融解点が低い異なる素材のロープを使用することが考えられる。

仮説が正しいとすれば、ロープが切断する直前の応力分布は編み被覆の有る無しにほとんど依存しない。石岡の第 1 問題は三つ撚りロープで見出されたが、編み被覆ロープでも同じ現象が起きれば、この仮説を支持するものとなる。反対に、もしもこの現象が編み被覆ロープでは起きないとすると、三つ撚りロープ特有の縦傷が主原因である可能性が高くなる<sup>9</sup>。

登山用ロープ=ザイルは寒冷の環境で使用されることが多い。仮にナイロンザイルの温度がマイナス 20°C であったとしても、NITE 実験を想定した上記の見積もり 100°C 程度の温度上昇値が妥当とすれば(すなわち、ナイロンの物性に大きな変化がないとすれば)、荷重の数メートルの落下で局部がナイロンの軟化点に達することは可能であろう。

---

<sup>9</sup> 編み被覆は縦傷の防止には有効であろう。それ以外にも、編み被覆の生む特有の効果があるかもしれない。その効果および切断の瞬間の芯繊維の破断状況を高速度撮影で直接見るために、被覆を剥がしたロープについて同様の実験を行う意味はあると思われる。

## 石岡の第2問題

弾性体近似が正しいとすると、落下距離  $H$  が 0 m - ロープを自然にだらりと垂らした状態で錘を離す - の極限で最大張力  $T$  は錘の重量  $W$  の 2 倍である (SKK1956)。その根拠は

$$T = W \left( 1 + \sqrt{1 + \frac{2kH}{WL}} \right)$$

にある。ここで、 $k (= ES)$  はロープの弾性係数、 $L$  はロープの長さである。この式は、ロープが  $k$  を定数とする Hooke の法則に従って伸び縮みし、かつ力学的エネルギーが保存するとして導かれる。 $H$  が 0 のとき、 $T$  は  $W$  の 2 倍である。

1975 年以降、石岡は通産省所管の施設での研究を行うようになった。その中で、10 mm 前後径のナイロンロープで 80 kg の錘を 5 m 落下させたとき、0R 切断角での切断荷重が最大 350 kgW にまで達することを見出した。これは、0 m での理論的最大切断加重 160 kg の 2 倍以上である。この実験条件で  $kH/WL \sim 1$  となるので、上式から  $T \sim 3W = 240$  kg で、やはり実験値に及ばない。石岡はこの原因を未解明であるとした (石岡 1990)。すなわち

石岡の第2問題：切断加重は、落下距離 0 m のときよりも落下距離が有限の場合が明らかに大きくなるのはなぜか。

他方、第1問題を単純に外挿すれば、落下距離 0 m では切断加重すなわち切断時の衝撃力は 350 kgW よりさらに大きくなるのが期待される。

この見かけ上の矛盾は弾性体近似を無制限に適用することに由来すると思われる。これまでに論じたように、落下距離がある程度大きいときは、ナイロンは融解する。ナイロン分子の相互の拘束が緩んでくるということである。この状態で、二つの極端な状況が考えられる。すなわち、ナイロンは

- i) Hooke の法則に従う弾性を示すと同時に Newton の法則に従う流体として振る舞う。
- ii) Hooke の法則から外れた塑性を示すと共に Newton の法則に従わない流体として振る舞う。

実際にはこの中間の性質を持つのであろうが、話を単純にするためにこの二つの状況だけを考える。

i) の場合、ナイロンは粘弾性を示す。(粘弾性については、例えば、西川 (1992) を参照のこと。) このとき、外部から周期的ストレスを与えてその応答を線形近似で解析することで、弾性と粘性双方が共存するとしたときの全体的性質を知ることができる。例えば、NITE (2014) による動的粘弾性測定では、ナイロンのいわゆる  $\tan \delta$  - 損失正接 - の測定値を求めている。これはひずみと応力の位相差の目安となるもので、この値が小さいほど位相差は小さい、言い換えると、粘性は大きく、全体として固体の弾性体に近い振る舞いをする。

NITE (2014) では温度が $-40^{\circ}\text{C}\sim+20^{\circ}\text{C}$ の範囲で $0.02 < \tan \delta < 0.07$ としていて、小さいと見てよさそうである。溶融状態でも粘性が大きい粘弾性を持てば、衝撃力は大きくなるだろう。

ii) の場合、ナイロン内の応力は外力に単純に比例しなくなる。特に、ずり応力が大きくなると粘性が増加する現象—ダイラタント流動—が知られていて、そのような現象を起こす物質をダイラタント流体と呼ぶ。その最も顕著な特徴は、外力が大きいほど変形しにくくなることである。これは多くの高分子流体に見られる性質である。融解したナイロンもダイラタント流体として振る舞うことになるだろう。落下距離が十分小さいときは融解が起きないので、相対的に小さい剪断応力が発生するだけであるが、融解してダイラタント流体化するとともに剪断応力が増すと衝撃力は大きくなるだろう。

ここに述べた可能性のいずれかが実現しているとすれば、第2問題を、さらには第1問題の意味をも理解できそうである。多くの高分子同様、ナイロンもダイラタント流体となることが石岡の第2問題を引き起こす原因であるという見方は魅力的である。この解釈の当否は、分子構造も視野に入れた物性論的な研究によって判断されるだろう。

## V. 結論

これまでの考察で我々が得た、鋭い切断角によるナイロンロープ切断の機構に関する描像は以下のようなものである。落下距離が短いとき、ロープは機械的剪断力で破壊する。落下距離が増加すると共に圧縮力による(広義の)溶融がロープ内で起き始め、溶融領域が増大するようになる。ここでの溶融とは、分子間引力の減少による可動域の増加のことである。未溶融領域が減少するため弾性係数(上式の $k$ )は減少し、それに伴い切断時の衝撃力も減少する。落下距離がさらに長くなると、短時間内にさらに大きい溶融領域が形成され、切断角に近いロープ内の一部が高粘性の粘弾性流体化またはダイラタント流体化する。これは衝撃力を一旦増加させる効果を生む。落下距離がさらに伸び溶融領域が十分に大きくなると、弾性係数の減少効果が高粘性流体化の効果を上回り切断時の衝撃力は再び減少する。この推論の当否は実験によって判定することができる。溶融への圧縮効果はとりわけ容易に取り出すことができる。たとえば、張力が生じている状態のロープを横たえて、そこにさまざまなR値の角をもつ錘を落下させ、温度も含めた繊維の変化を見ればよい。

上記の推測をするにあたっては、ナイロン繊維の力学的特性を詳細には考慮しなかった。考慮されなかったもっとも重要な特性として、繊維の伸びと剪断応力との関係がある。繊維が伸びれば単位長さ当たりの原子間ないし分子間結合の数は減るはずだから、剪断応力は小



さくなることはありうる。この効果は、それが大きければ石岡の第1問題を解くもう一つの鍵となるだろう。

石岡の第1および第2問題は、提示されてから既にそれぞれ43年と25年を経た。これらはナイロンロープに端を発しているが、化学合成物質一般に通じる普遍的内容を包含している。ナイロンロープの力学特性の解明へ向けた石岡の努力と寄与の大きさを考えると、この二つの問題に対する学術的総括が専門家グループによって為されるのは十分に意味のあることである。ロープの危険・安全性に、本稿で取り上げた石岡の問題を迂回して実用性の観点から社会的に対応することは可能である。これに加えて、素材の開発を含む取り組みにおいては、現象の因果関係に踏み込んだ研究に基づく総括は、われわれに問題への本質的・普遍的視点を提供してくれることが期待できるのである。

ザイルの破壊応力を高める、または融解温度を高めることで、落下切断に対する抵抗性を増すことができる。そのためには、ザイルの局所加圧による温度上昇は瞬時に応力集中部全体で起きることを考慮すると、素材全体を融解温度の高いものにする必要がある。同時に、人体の保護のためには衝撃を吸収しうる十分な弾力性も持たなければならない。この点で、化学合成繊維でナイロンを大きく超えるものは今のところ存在しないようである。

## 後記

筆者がナイロンロープ切断の問題に関心を持ったのは、2014年7月に松本市安曇上高地で開かれていた展示会『「氷壁」を越えて』で、石岡繁雄の業績とNITE実験の報告に触れてからである。1955年の「事件」以後、当事者間の利害と名誉が絡んだ対立によって煽られた社会のジャーナリスティックな関心は「ナイロンザイルは岩角で切れるのか、切れないのか」の一点に向けられた感がある。切れるための条件が明らかにされるまでほぼ20年の歳月を要して当事者達の所期の目的が達成されるのであるが、管見を顧みずに敢えて一言を加えれば、このことが「切断の機構は何か」という、第二段階のより本質的な問題から関係者の注意を逸らす要因になったのではないだろうか。石岡は、石岡の第1問題と第2問題を鋭く指摘することで、科学の本質論へと一步を踏み出していたが、恐らくは時代の制約によってそれを深めることができなかった。2014年の上高地での展示会がナイロンロープ切断へと著者の関心を向かわせたのであるが、調査と考察を重ねる中で上記の印象を強く持つようになったのである。

石岡の第1および第2問題は、本来は一般化された高分子物性論の観点から取り扱われるべきものであり、本文で提示した試論もこの枠組みの中での評価が可能であると思う。この

方面からの批判・情報を頂ければ幸いである。

「ナイロンザイル事件」は、科学上の問題のみならず、安全工学や失敗工学における規範例をも提供してくれるもので、他にもそのような多くの事例がある。土木環境工学者のペトロスキーによれば、その全てに精通するよりも、少数の典型的事例で人間が犯す失敗の型をよく知っておくことがはるかに効果的である（ペトロスキー 2001）。ペトロスキーは、ガリレオが片持ち梁の強度の幾何学的考察でいかに間違い、なぜその誤りが正されるまでに 100 年以上もかかったのかを詳しく分析したあと、次のように述べている（ペトロスキー 2001）：

どんなに無数の成功した設計がそこから導き出されたとしても、いかなる仮説も決して議論の余地なく証明されたことにはならない。しかし、仮説の反例はたった一つの失敗（解析上でも現実でも）で足りるのであり、このことを認識するのは技術者の責任である。あらゆる破壊が最新技術に基本的欠陥があることの決定的な証明ではないが、技術の方法に対する責務を認識して、設計と解析の最も基本的な仮定を含めて、失敗した人工物を作ることになった設計・製造のプロセスの全側面を批判的に見つめるのは、技術者の職業的責任と見なされるべきである。欠陥があるのにそれが欠陥として認識されない仮定なら、どんな設計の「訂正」や洗練も無意味になりかねないのである。

この記述は、明らかに技術のみならず科学にも当てはまるのであり、科学・技術の倫理教育がいかになされるべきかという古くからの問いの答を探す上で示唆に富んでいる。この観点からの考察は価値のあるものであるが、これは本稿の目的を越える。ただ、安全の達成には、技術の開発・法的な規制・広範囲の教育・不断の検証が必要であること（高橋 2003）、ナイロンロープに関する‘技術’と‘教育’については石岡繁雄がその半生を掛けて取り組んできたこと、その遺志の後継者（石岡 2014；石岡・相田 2007）と後継組織（NITE 2014）があることは知っておきたい。

## 謝辞

本稿をまとめるに当たり、石岡あづみ氏からは多くの資料と諸情報のご提供を頂き深く感謝申し上げます。また、鈴木久氏からは NITE 実験に関する資料を頂いた。合わせて感謝申し上げます。

### 参考文献・資料

- 石岡あづみ 2014 NITE (独立行政法人製品評価技術基盤機構) でのナイロンザイル検証試験について <http://www.geocities.jp/shigeoishioka/new32.html>.
- 石岡繁雄・笠井幸郎 1972 登山綱の動的特性と安全装置の研究 鈴鹿高専紀要 記念号 139
- 石岡繁雄・相田武男 2007 『氷壁・ナイロンザイル事件の真実』(あるむ).
- 岩稜会 1956 前穂高東壁事件について (岩稜会報告, 石岡・相田 2007 所収).
- 石岡繁雄 1990 ナイロンザイル事件 登山研修(文部省登山研修所), 5 pp 123-153.
- 西川哲治(編) 1992 『改訂版 物理学辞典』(培風館).
- NITE 2014『製品事故の原因を探索サイエンス「氷壁」～ザイル切断事故から最前線情報まで～』.  
<http://www.geocities.jp/shigeoishioka/new39.html>. last retrieved in July 30, 2015.
- 高橋光一 2003 意志決定と安全 (『安全—その幻想と現実—』(丸善) 日本化学研究会, 第3章).
- ペトロスキー H 2001『橋はなぜ落ちたのか—設計の失敗学—』(中島・綾野訳 朝日選書) 第5章.
- Benenson W, Harris J W, Stocker H and Lutz H (ed.) 2000 *Handbook of physics* (Springer).
- Shinoda G, Kajiwara N and Kawabe H 1956 Dynamical behaviour of a nylon climbing rope *Technology Reports of the Osaka University*, 6 43.

### Abstract

The mechanism of nylon-rope rupture under the circumstances that give rise to stress in the rope is considered by taking the experiment conducted by NITE (2014) into account.

The climbing accident happened in the northern Japan Alps in January 1955 raised the issue of whether nylon rope is cut by the natural rock edge has been considered to be solved. In the endeavour to resolve the problem, Ishioka addressed two problems concerning the anomalous phenomena in rupture events, which are called Ishioka's first and second problems in this note. These problems seem neither to have been solely reconsidered in successive works so far nor to have been systematically reviewed. In this note, an idea that sheds a light on these two Ishioka's problems is proposed.

Dynamical and thermal influences are considered which lead to the rope-rupture. The dynamically generated stresses are tension and pressure. Their thermal influence emerges as the action to nylon fibres of heats that are generated between the rope and the edge of a plate prepared to cut the nylon rope in the NITE experiment. We aim at quantifying how much dynamical stress is converted to heat.

The tension of the rope combined with the gravity is the most important factor that determines the falling motion of the weight at the end of the rope. Elastic approximation to the tension will be employed in order to simplify the arguments. Frictional force between the rope and the surface of the cutting plate together with the diffusion of heat within the rope are small and are neglected.

First, we consider the heat generated at the edge of the cutting plate just after the weight ceases free fall. Second, the pressure to the nylon rope from the edge and the rupture stress is compared. Third, the conversion of the work done by the above pressure to heat is evaluated and is compared with the known thermal property of nylon.

It is shown that the third factor mentioned above is significant and that Ishioka's first problem will be solved by taking account of this effect. Finally, it is noted that Ishioka's second problem can be closely associated to the property of the non-Newtonian fluid.

## ラザースフェルドと一緒に仕事をして

ロバート・マートン 著  
久慈利武 訳

二十数年前、ポール・ラザースフェルドは彼が私に編集を求めなかった3分の1世紀前に書いた若干の論文のひとつを完結しつつあった。実は、私はその論文を彼が書いているのを知らなかった。非常にグッドな理由から、それはルイス・コーザーによってまとめられつつあった私の仕事に捧げられた祝賀のための論文集に載せられることになった。「マートンと一緒に仕事をして」と題したので、その論文は実は本稿のタイトルを決めることになった<sup>1</sup>。しかしながら、私は数十年の彼との交友とコラボレーションを思い返すので、彼を「ラザースフェルド」と呼称するのは私の中に見いださない。その代わりにうち解けた間柄に浸り、明らかにヨーロッパ・スタイルでない「ポール」と呼称することにする。

テキスト解明という由緒あるフランスの伝統へのポールの生涯の関心は、彼に私の公開されたテキストの解析に焦点を置かせた。その代わりに私は、我々の思考スタイル、社会的・認知的ネットワーク、対人的緊張と解消、学生との交流パタンにおける目につく差異、潜在的類似性のような事柄に関わる35年に及ぶコラボレーションの二人だけが知るテキスト、コンテキスト、サブテキストにこだわるつもりである。ようするに、ラザースフェルドの公開された作品は注釈と分析の豊富なライブラリーの主題であるが<sup>2</sup>、ポール自身の論文を別とすれば、我々のコラボレーションの性質に注目した印刷物はほとんどない<sup>3</sup>。ポールが私の仕事を、彼のライフワークを支配した方法論的視点から追求したように、私は我々のコラボレーションを、私自身のライフワークを支配した科学社会学の視点から追求するつもりである。科学とスカラシップにおけるコラボレーションの社会・文化的なものとの心理的なもの入

<sup>1</sup> 我々のコラボレーションについてのこの補完的考察はラザースフェルドの分析的で身近でドキュメントされた考察(Lazarsfeld 1975: 35-66.)と合わせて読むなら、拡張された意味を持つであろう。ポールがその考察を書いていたとき、コロンビア大学時代の彼の弟子(コールマンとピーター・ロッシ)と私が彼自身の学者生活を祝賀する論文集を編んでいたことを彼は知らなかった。私はその論文集に「ラザースフェルドと一緒に仕事をして」という対の一片(the companion piece)を執筆しようと思ったが、健康状態が思わしくなかったため短い追悼文「ポール・ラザースフェルドの思い出」(Merton 1979: 19-22.)で甘んじなければならなかった。

<sup>2</sup> 最も最近の洞察に富んだそれは、社会学の遺産シリーズのラザースフェルドを編集したブードンの編者序論である(Boudon 1993: 1-29.)。

<sup>3</sup> しかし我々は周知のように、沢山の弟子達がコロンビア大学社会学のミクロな環境を考察する際に二人のコラボレーションについて鋭い観察を出版していることを知っている。

り組んだ力学についてはほとんど知られていないので、私はこの営みのタイトルを文字通りに受け取るつもりである。これまで公にされてこなかった記録ならびに公開された記録の双方を引き合いに出しながら、我々のコラボレーションのブラック・ボックスを開け、光で照らし解読に努めるつもりである。その際私がパンドラの箱を開けないことを祈っている。

## 1. あり得ないコラボレーション An improbable collaboration

### 1.1 正反対の者達の任命 An appointment of contraries

ポールと私のコラボレーションは、設計された事柄であるよりもむしろ 1930 年代後半と 1940 年代前半に登場したコロンビア大学社会学の深い亀裂の全く予想されなかった、引き延ばされた帰結であった。当時のシニア教授ロバート・マッキーバー（政治理論家兼社会学理論家）とロバート・リンド（有名なミドルタウン研究の共著者）は数年にわたり知的にも人格的にもそりが合わないできた。結果として彼らは新しいシニアの任命で合意することができず、学科を事実上の休止に追い込んできた。事態は余りに深刻だったので、長期に大学学長の座にあり創意に富んだニコラス・ムレイ・バトラー（組織内ではニコラス・ミラキュラス（= 奇跡を起こす人物）として知られていた）が最終的に介入を決断した。聡明にも彼は争う当事者の各々に新たな lesser appointment が与えられるべきと命じた。リンドは、数年前に大半が失業したオーストリアの村落の先駆的研究『マリエンタール』を指図した経験的研究者ポールを選んだ。マッキーバーは社会学理論家として私を選んだ。ポールと私は、当時のこの論争的コンテキストについて、つまり我々が敵対的役割で、そして補完的よりも釣り合いのために学科に招かれたことについては思いも寄らなかった。我々はこのちになって事の次第のすべてを知った。もちろんそれはしばらくして私が関心を寄せる社会的パターン「意図的社会行為の予期せざる結果」のもう一つの事例として、裁定者バトラーの命令の帰結を私に引き合いに出させることになった。バトラーは学科の知れ渡った停止を終わらせることにだけ関心があったから、そしてマッキーバーとリンドは各々が知的に親しみを覚える同僚を獲得することにだけ関心があったから、それはそれぞれにとって予期せざる結果であった。

ポールも私もこれまで出会ったことがなかった。我々が同僚になることを聞かされるまでお互いについて耳にしたことすらなかった。これは少しも奇妙なことではない。ようするに、我々は全くかけ離れた分野で仕事をしてきており、同じ雑誌に掲載したことすらなかった<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> ポールは心理学系雑誌とマーケティング系雑誌、世論系雑誌に掲載し、私は社会学系、科学史系雑誌に掲載してきた。1941 年以降になってようやく、ポールは社会学系、科学史系雑誌に掲載し、私は世論系雑誌に掲載するようになった。

1924年から1940年までで、ポールの60数本の出版物は社会調査の方法論と手続き、失業、マス・コミ、市場リサーチ、のちに行為の経験的研究と呼称されるものに充てられていた。1934年から1940年までで、私の20数本の出版物は予期せざる結果、社会的時間、逸脱行動、官僚制構造のような社会理論とのちに科学社会学と呼称されるものに充てられていた。上記の一致しない主題、問題領域から予想されるように、我々はまた全く異なった社会、心理学的思考の系譜を継いでいる。かくして我々のコロンビア大学就任以前の出版物で引用された520数人の著者の中で両者によって引用されたのは7人の著者と2組の共著者だけであった(1.3%)<sup>5</sup>。我々のコロンビア大学就任以前の出版物で引用された頻度の高い上位10人は一人も重ならない<sup>6</sup>。Ludwick Fleck (生物学から科学社会学に転じたポーランドの学者)は、我々が全く異なった「思考集団」から出自し、明らかに全く異なった「思考スタイル」を使用していると結論を下した(Fleck 1979 [1935])<sup>7</sup>。事後的よりも事前的に考察すると、二人の明らかに異なったマインドが持続的なコラボレーションに入ることになる想定する理由は明らかに乏しかった。以前に我々が会うことがなかったことは、我々のいずれにもコラボレーションに入る理由を与えなかったと言える。

## 1.2 距離を置いた最初の出会い

ニューオリンズ市のチューレーン大学(1年ほど前にハーヴァードからここに移っていた)からニューヨーク市のコロンビア大学に移籍の招聘を受諾して、ポール・ラザースフェルドも同時にコロンビア大学に任命されたことを知った。アーカイブ記録から判断して、私はこれまで未知の同僚の著述を探し始めたことは確かであった<sup>8</sup>。私がこつこつと掲載しつつある一連のものを彼が読んでいないものと確信して、かなり最近の論文の若干の抜き刷りを彼に送り、当時彼が掲載した唯一の社会学雑誌『社会研究年誌』に見つけた論文のコピーときわめて馴染みのない雑誌(応用心理学)に載った事例研究に関係したもう一編のコピーを依頼した。私はその研究ノートのコピーを一切持っていなかった。カーボンコピーはなくさない

<sup>5</sup> Garner, Lois B. Murphy, Theodore Newcomb の社会心理学者, Robert S. & Helen M. Lynd, Ray F. Bletto の社会学者, John R. Hicks の経済学者, Harold D. Laswell の政治学者, L.L. Thurstone の統計心理学者。

<sup>6</sup> PFL にとっては、上位10人は、Hans Zeisel, E.A. Rundquist, Ray Sletto, Marie Jahoda, E.W. Bakke, Hadley Cantril, M. Elderton, Samuel A. Stouffer, O.M. Hall, B. Zawadski. RKM にとっては、Emile Durkheim, Max Weber, Karl Mannheim, P.A. Sorokin, Adam Anderson, Vilfredo Pareto, Marcel Mauss, L.L. Thurstone, William F. Ogburn であった。我々が同僚になってから10年ごとにそれぞれのリファレンスが収斂しているかどうかの検討は行わなかった。

<sup>7</sup> 「思考集団 (Denkkollektiven)」「思考スタイル (Denkstil)」はカール・マンハイムによって導入された概念だが、フレックによって独自に有効活用されている。

Ludwick Fleck 1979 [1935] *Genesis and Development of a Scientific Fact*. Chicago: Univ. of Chicago press.

<sup>8</sup> 乏しいエピソード風の記憶と日記と雑誌の源泉の欠如による人生に苦しめられて、私は掲載された素材のコンテキストとして未刊のノートと通信(手紙)に依拠しなければならない。私はまた、私の他の著述のなかのポールに関する記憶している文章を自由に引かせてもらう。

一方法であり、ゼロックスはほんの 3 年前に発明されたばかりであった。しかし私は彼の秘書差出しの覚え書き形式のポールの返事をまだ持っている。

親愛なるマートン博士

ラザースフェルド博士宛のあなたの手紙がオフィスに届きました。しかしながらラザースフェルド博士の論文「社会調査における類型手続きに関する若干の意見」のコピーを入手するまで返事が遅れました。あなたが要求した「事例研究の計量化」のリプリントと一緒にあなたのもとにお届けします<sup>9</sup>。

敬具

ローズ・コーン（秘書）2月20日，1941 付

私がポールから受け取った最初の言葉は彼の秘書を通じてであった<sup>10</sup>。これは、彼が新しく開発したアイデアに基づいて論文を完成させることに一生懸命であるとか、新設のラジオ・リサーチ・オフィスが活発で影響力を持つことに忙しいときに、ポールの通信の典型であった。しかしながら、2ヶ月後に、私はポールから直接の返事を聴いた。

丁重、礼儀正しいでは決してなく、彼は自分の思考法と私の思考法の形式的なつながりを素早く見つけつつあった。

親愛なる マートン教授

今日まであなたのリプリントのお礼を述べるのを待たせたことをお詫びしなければならない。私はそれらを真っ先に読みたかったのだが、あなたのご承知のように学事歴の間は研究の時間がほとんどとれない<sup>11</sup>。

私はあなたの論文が非常に興味深いことに気づいた。私のクラスで複雑な主題の概念化の成功例として社会構造の解剖に関するあなたの論文を使用しようと思う。あなたがそこで使用しているスキームはあなたが私に依頼したペーパーで私が取り上げた類型的

<sup>9</sup> typological procedure に関する論文は *Zeitschrift für Sozialforschung* 1937, 6, 119-139

quantification of case study に関する論文は *Journal of Applied Psychology* 1940, 24, 817-825. 著者は(ラザースフェルドでなく)統計学者で社会学者の William S. Robinson.

<sup>10</sup> 彼女は並みの秘書ではなかった。当然大学院に進む決心をし、結婚後 Rose Kohn Goldsen となり、コーネル大学で最初の女性教授を許可された。

<sup>11</sup> ポールが「マートンと一緒に仕事をして (Lazarsfeld 1975: 35)」で触れているように、1939年にラジオ・リサーチ・オフィスをプリンストン大学からコロンビア大学に移すにあたって、彼は教員の地位のない名目的な講師の肩書きを与えられていた。我々の抱き合わせの任命がやってきて、ポールは終身の准教授、わたしは終身でない助教授になった。我々が初めて出会った時に、「私がチューレン大学社会学科教授で主任の地位を棒に振る降格人事の著名な離れ業の受益者になった」とポールは述べた。

分類に関するアイデアと近い。後略

それは同僚の作品に対するポール流の典型的な反応であった。彼は永遠に他者との科学的つながりを求めて手を伸ばし続けた。彼は論文「社会構造とアノミー」の内容と理論的側面に関心がないことを表明せず、「個人の適応様式の類型」の方法的側面（それは同調行動と逸脱行動のパタンに多様性が構造的に収斂する）にだけ注目する。その類型は社会調査では珍しい一種の4重分類である。それは、彼の距離のある仲の良い同僚サムエル・スタウファーが彼にその分析的潜在可能性を印象づけて以来、定性的・定量的4重相関表を器用に使用してきているポールにとって親和的であった。今振り返ると、それは我々が実際に異なった思考スタイルの可能な結びつきに出会う前の最初の交流であった。それは35年にわたる関心の共有と補完の数多くの発見の前身であったことがわかる。

### 1.3 準備なしの最初のコラボレーション

我々の抱き合わせの任命が我々自身の意図した事柄でなかったように、大学に私が到着して二ヶ月も経たないで起こった我々のコラボレーションも我々自身の意図した事柄でなかった。年長でランクが上であったのでポールはディナーにマートンを招待した。典型的ポール流のしつこさで彼は次の趣旨の言葉でドアのところで挨拶をした。「私は悲しいニュースと素敵なニュースを持っている。私は「事実と図のオフィス」(the Voice of Americaの前身、戦時情報局(OWI)の前身であったワシントンの一機関)からたった今電話をもらったばかりだ。彼らは私にラジオ番組の緊急テストをしてほしいと望んでいる。コロンビア放送システム(CBS)に私と一緒に行って、これらのテストをどのように行うのかを見にいかないか」。

我々は別々に向かって、ラジオスタジオに初めている自分を見つけた。そこには2列か3列に腰掛けた20人ほどの男女がいた。かれらは自分が聴いたラジオ番組が好きだった時には椅子に付いている緑のボタンを、好きでなかった時には赤のボタンを押すように指示されていた。ポールが何にも知らない私に説明したところでは、これらの反応はラザースフェルド-スタントン番組アナライザーとして知られる万年筆の手書きポリグラフに記録された<sup>12</sup>。ひとりのアシスタントが聴衆のメンバーに彼らのポリグラフに記録された反応の理由をインタビューし始めた。ラザースフェルド-スタントン番組アナライザーは私にとって全く初め

<sup>12</sup> 3年前ポールはロックフェラー財団によって創設されたラジオ・リサーチ・プロジェクトのディレクターになっていて、そこでオハイオ州立大学心理学博士課程を修了して、CBSの初代のリサーチ・ディレクター、10年のちに会長になっていたフランク・スタントンと知り合った。ポールはのちにスタントンをコロンビア大学応用社会調査研究所の前身のディレクター会議の議長にリクルートした。



てのものであったが、インタビューは初めてではなかった<sup>13</sup>。何も知らずに、私はインタビューの適切さに疑問を提起する走り書きのノートを端に座る我々の隣のポールに手渡した。「誘導尋問が余りに多すぎる。あなたが私に語ったことへの注目の不十分さが反応のポリグラフ上の頂点にあった」。それは典型的なポール流の懐柔の仕方であった。新しいパネルのリスナーがまもなく到着する、私に彼らにインタビューを試みてみないか、と意見を述べた。私は餌に飛びついた。ポールは見たもの聞いたものを気に入った。

それから、ディナーがとっくに終わってしまったことをそれぞれの配偶者からはっきり伝えられていたので、我々は見たことがない豪華なキャビアとシャンパンで親しい仲間の出現を祝福する最寄りのロシア風ティ・ルームに寄って、そこでお互いの発見の雰囲気の中で数時間を過ごした。ポールは翌朝ポリグラフとインタビューの分析に取りかかるつもりであると言った。私も加わっても良いか尋ねた。一週間かそこらのレポート義務でもって、週末とそれに続く数日は我々をハードに働かせた。これが最初の思いがけないコラボレーションであった。ディナーにやってきた人物がほぼ1世紀の3分の1も滞在することになった。最初は ORR (ラジオ・リサーチ・オフィス)、それからその後継 the BASR (応用社会調査研究所) に。

それはポールの実業家的自己と仲間的自己と一緒に活躍しているのであった。彼は我々のコラボレーションについて彼の回顧談の中で次のように告白した。「ロシア風ティ・ルームでの祝福すべき悪戯の私の目的は、マートンのコラボレーションを調達することにあった。このひとつのプロジェクトだけでなく、研究所の共同ディレクターとしても (Lazarsfeld 1975: 36, 37)」。

コールマンが彼の院生時代を振り返って述べているように、ポールは彼が興味を抱いた同僚、教え子が彼が重要と考えた問題に少なくとも時間の一部を割かないのを見るのに堪えきれず、彼らにそれをさせるために利用できたあらゆる餌を使用した。彼の周りの一部の者はこれに飛びつき、順調に育った。他の者は独裁的なやり方を嫌ったが、それでもアンビバレントに感じながら、順調に育った。もちろんさらに他の者は彼のもとから離れていった<sup>14</sup>。

ポールが回顧談で指摘しているように、最初の準備なしの、限定された、そして言わせて

<sup>13</sup> 私はハーバード大学学生時代インタビューを行うのをかなりの量体験していた。但し社会学科の公式のトレーニングの一環としてではない。そこは理論に大部分が充てられていたのでそのようリサーチ手続きは教わらなかった。経験の一部はフランクリン・ルーズベルトの連邦政府の WPA (Works Progress Administration) によって後援されたプロジェクトで得られたものであった。それは当時フーバービルと鉄道地区の住民として描かれた人びとのセンスと理解を獲得することが意図されたものであった。後者は仕事を求めて旅行する出稼ぎ労働者と働かず旅行する放浪者にとって格好の停留地となった。

<sup>14</sup> [訳注] 原文にはコールマンの出典が示されていないが、記者の調べによると、Coleman 1990b: 87, 88, 1980: 168.

もらえばアンビバレントなコラボレーションは、the focussed interview と呼ばれる新しい技法を生み出した第二次世界大戦中のあるリサーチ・プログラムに私に関わるほんの助走に過ぎなかった (Lazarsfeld 1975: 49)<sup>15</sup>。私がこの新しいタイプの focussed group interview の詳細を編纂するように導かれたのは、ポールによる執着と嘆願の入り交じった強い催促においてであった。それはサムエル・スタウファー、カール・ホブランド・グループとの私の共同作業の中で生まれたものであった。彼らは『第二次世界大戦における社会心理学研究』全4巻に報告される広汎な戦時研究に従事していた<sup>16</sup>。個人の仕事よりむしろチームの仕事に典型的にコミットする中で、彼はこれはまずパトリシア・ケンダール、次にマジョリー・フィスケの援助を受けて進むべきことを見ていた。うたがいもなく focussed group interview はかなり正確な意味でポールと私のコラボレーションの初期の成果を代表する。ポールとの出会いがなかったなら、応用社会調査研究所となるものの前身に彼とともに私に加わらなかったなら、私は確かにこの方法論的問題に取り組むことはなかったし、その技法の編纂に向かうこともなかったろう。

このエピソードは35年の長きにわたるコラボレーションの性質に最初の一瞥を与える。ポールが文字通り社会科学のなかの自分が選んだ領域の基本問題を同定し、それが解かれるのを見ることに取り憑かれていたことが、私に次第に明白になった。彼はその問題を誰が解くかに対して頓着しなかった。彼にとって興味のある科学的問題は多数で多様であったので、彼は自分だけでそれらのすべてを取り扱うことはできないことを認めざるを得なかった。ポールは彼のアイデア、コミットメント、情熱、ビジョンの渦の中に他者を巻き込む術を心得ていた。生涯彼は彼自身の作ったりサーチ組織の中であらゆる種類の仕事仲間（院生だけでなく様々な編模様の同僚——社会学者、論理学者、数学者、統計学者、哲学者、若いも若きも、身近も遠くも——）を懐柔した<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> 特にリサーチ・ツールの巧妙なキットに興味を持ちながら、ポールは20年前の回顧談の中で、市場で focussed group interview で頻繁に使用されてきていることに気づきながら、その派生物である focussed group が政治と政治キャンペーン大規模にかすがいのような源泉となるだろうということを見しなかった。マーケティング・リサーチの会長 Leo Borgart は focussed group リサーチに年間2億5千万ドル費やされているものと見積もっている。その領域の他のエキスパートは数字を10億ドルと見積もっている。

<sup>16</sup> Robert K. Merton/Patricia L. Kendall 1946 "The Focussed Interview." *American Journal of Sociology* 51: 541-557.

Robert K. Merton/Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall 1956 *The Focussed Interview: A Manual of Problems and Procedures*. New York: The Free Press..

ポールが指摘しているように、マスコミの効果に関する実験リサーチの一環であった the Focussed Interview の戦時中の発展は、『第二次世界大戦における社会心理学研究』第3巻 Carl I. Hovland/Arthur A. Lumsdaine/Fred D. Schffield 1949 *Experiment in Mass Communication* Princeton, N.J.: Princeton Univ. Press. 4 で報告されている。

<sup>17</sup> わがままなしかし究極的には無私無欲の懐柔は、1940年代と1950年代のコロンビア大学の教え子であったジェームズ・コールマンとデーヴィッド・シルズによって活字で捉えられている。

James S. Coleman 1980 "Paul F. Lazarsfeld: The Substance and Style of His Work." in Robert K. Merton/

#### 1.4 びっくりするほどちぐはぐなカップル

我々をあり得ないコラボレーションとして描く際に、仲違いしている同僚達であったロバート・マッキーバーとロバート・リンドによって我々がコロンビア大学に招聘されたことに私はあまり言及しなかった。その表向きにおいては、ポールと私は、明らかに「ちぐはぐなカップル」と言わなければ「不協和なペア」であるように思われた。

ひとつには、我々は全く異なった教育背景を持っていた。ポールは数学と心理学を専攻し、私は社会学と科学史という全く異なった流儀の中で生育してきた。

我々の研究スタイルもまた大いに異なっていた。30歳で、彼の最初のリサーチ組織(ウィーンのエconomic心理学研究所)を設立した時から、ポールはずっと組織を通じてでなければリサーチをすることを想像できなかったのに対して、私は教え子とたまたまのアドホックなコラボレーションをすることを除いてリサーチ組織で仕事をするという考えを催したことの無い頑固な孤独者であった。

我々の研究スタイルは他の次元でもまた対照的であった。ポールはパネル法、潜在構造分析家という方法論者で、有力なリサーチ技法の発明者であったのに対して、私はいくらか経験的傾きを持つものの、実質的な社会学的パラダイムを重視する正真正銘の社会理論家であった<sup>18</sup>。

我々の顕在的、潜在的理論嗜好もまた材料的にも大いに異なる。ポールは実務的な方法的にはわがままな実証主義者であるのに対して、私は実証主義に関して疑念を持つトマスに近い。私の最初の掲載論文で、実証主義には目が覚めたブージャムを採用するよりもむしろ敢えて風刺してきた<sup>19</sup>。

我々が知っての通り、我々がコロンビア大学に就任する前に仕事をしてきた実質的分野は全く共有するものがなかった。わたしがまだテンブル・カレッジに21歳の在学時に、ポールは19歳ですでに『若者と職業』というモノグラフを出版していたし、職業選択に関するこの統合的な著作の後、まずウィーンで、それからニューヨークで、失業を研究し、市場調査で雑多な問題を研究し、ラジオと新聞に対するオーディエンスの反応という独特の洞察力に富む研究を進めていた。決定的に違うのは、私の前半のリサーチにおける注目の実質的焦

Matilda White Riley (eds.) *Sociological Traditions from Generation to Generation: Glimpse of the American Experience*. Norwood, N.J.: Ablex Publishing Corpe. pp. 153-174. esp. 167-168.

David L. Sills 1987 "Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976: A Biographical Memoir." in National Academy of Science, *Biographical Memoirs*. Washington: The National Academy Press. pp. 251-282.

David L. Sills 1996 "Stanton, Lazarsfeld, and Merton - Pioneers in Communication Research." in Everette E. Dennis/Ellen Wartella (eds) *American Communication Research- The Remembered History*. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 105-116.

<sup>18</sup> ここでのパラダイムはクーン以前の用語の意味である。

<sup>19</sup> ルイス・キャロルの英雄詩体の詩『スナーク狩り』の読者は、ブージャムは特に危険な種類のスナーク(最も捕らえにくい架空の動物)であることを思い出すであろう。

点は、近代科学の登場という歴史社会学、社会制度としての科学概念、知識社会学、意図的  
社会行為の思いがけない結果、官僚制の構造と働き、逸脱行動の構造的源泉のような理論的  
問題のような事柄にあった。

スタートからそしてある期間続いたことから明白なように、我々の知的スタイルと関心の  
対照性は（純粹ないしアカデミックリサーチと区別された）応用社会調査に対するそれぞれの  
態度にも頭をもたげた。もちろんポールは彼の生涯を通じて応用社会調査の不屈の提唱者  
であった。それに対して私は応用社会調査をやや腐った社会探究様式とみなし、精々科学と  
技術の社会学の見地から考察されるべき主題とみなしていた<sup>20</sup>。ポールに出会う前に、私は  
応用社会調査で実際に仕事をする自分を考えることができなかつた<sup>21</sup>。

この事柄をこれ以上追求しないためにポールと私は初めて出会った時にはちぐはぐなアカ  
デミック・ペアであった。ローカルな人びとのイメージは、きっと我々二人は公然と敵対す  
るように宿命づけられないなら、頑固な（手のつけられない）正反対者であつただろう。き  
つと当時の知り合いの観察者で、生涯にわたるコラボレーションのあり得ない予測をした者は  
ほとんどいなかったであろう。それでは明白だった不調和がどうやって調和に転じたのか。  
ローカルな派閥論争に巻き込まれることを避けたとして、いかにして我々はそれぞれの別々  
の道を進まなかつたのだろうか。さらに長く続いたコラボレーションの基礎、性格、進展は  
何であつたか。これらは答えられるよりもはるかに尋ねられる方が容易い質問であるが、コ  
ラボレーションに中心をおく回顧談では避けられない質問である。

## 2. 選択的親和力<sup>22</sup> elective affinity

イソップ以前におそらく、イソップ以後には確実に、見せかけはしばしば欺くことが観察  
されてきている。見せかけは様々な仕方であつた。時には注意があまり明  
白でないものを犠牲にしてもっとも明白なものが限定されているという理由だけで。ポール  
と私がじきに気づいたように、我々両者の明白な対照性は様々な選択的親和力、はるかに共  
通な地盤を覆い隠している。その上、あまり目立たない認知的親和力、社会文化的親和力は

<sup>20</sup> 彼のコラボレーターの好みと気まぐれにびっくりしながら、ポールは彼自身が強く好んだりサーチに  
対する私の距離を置いた態度に気づいていた。「研究所の以後の拡大はマートンの管理者と「政治的」  
貢献がなければ不可能であつたろう。しかし彼は決して組織人ではなかつた [この含蓄のある言明  
にのちで触れる]。しかし応用社会調査の問題は常に彼の知識社会学の最重要な関心の一部であつた。  
両者が連結される様々な道を進むことは難しくはない (Lazarsfeld 1975 : 37)」。

<sup>21</sup> 応用社会調査の私の以前の経験はホームレスの WPA 研究に限られていた。その仕事は愛情に発する  
労働、共産主義の公共精神から行われたものでなく、1930 年代初めのハーバードの奨学金（フェロー  
バック）によって提供された乏しい給費を補う夏期の補助を提供するので行つたことを私は告白する。

<sup>22</sup> 化学用語「elective affinity」を一定の諸人間の牽引、持続的人格的紐帯の基礎という普遍的な心理・  
社会的メタファーに変換したのはゲーテの心理小説『親和力』であつた。

我々が会う以前か我々が互いの作品を読み合う以前のポールの仕事のスタイルと私のその一部であったから、それらは平たく言えばのちの相互の影響か一方的影響の結果ではない。

## 2.1 概念の明確化

外見でポールは方法論者で私は理論家というしばしば指摘される対比が通用しているが、それはミスリーディングである。我々双方は基本的には概念の明確化に関心があった。それ自身の明確な哲学のためではなく、それらを社会的、心理的実在に関する理論に先導された経験的リサーチに取り込むための通過点として。我々が異なったのは概念の明確化を求めて進むために選んだ道であった。ポールはリサーチ方法と手続き<sup>23</sup>を考案することによってそれを行ったのに対して<sup>24</sup>、私はさもなければわかりにくい社会的実在の選択された側面に照射することが意図された内容分析によって「社会的行為の予期せざる結果」「アノミー」「役割集合と地位集合」「顕在的機能と潜在的機能」概念を明確化することに従事した。概念の明確化への主要な関心の選択的類似性は、観察可能な指標、観察できない概念のインデックスを考案する問題に我々が独立に注目を払ってきたことに現れている<sup>25</sup>。しかしながら、広く知られているように、方法的戒律を引くことによって指標形成の技法と科学を大いに前進させたのは、ポールであって私ではない。

概念明確化への基本的関心の共有は研究のための個別主題の選択の類似パターンに導いた。一部例外があるが、我々のどちらも繰り返しの研究のために選んだ社会現象、社会心理現象に主要な永続的関心を持たなかった。外見にも拘わらず、ポールが私同様、内容のスペシャリストでなかったことはほぼ当初から私には明白であった。確かに、彼はラジオリサーチ事務所を主宰したが、労働経済学者が持続的にそして限定的に労働市場の動きに関心を払ったのと同じ意味でラジオという主題、もっと広くマスコミに限定的持続的に関心を払うことは

<sup>23</sup> 例えば、個人特性（ウィリアム・ジェームズの「分別のある人」）のような概念や「社会的凝集」のような社会学的概念の意味を明確化しようとする「なぜを尋ねる方式」「コンテクスト分析と多変量解析」「潜在的構造分析」。

<sup>24</sup> ポールの概念明確化の手続きの主要であるのに長く無視されてきた事例は、“Methodological Problems in Empirical Social Research”である。長く無視されてきた理由はその初出がかなり入手が難しい Transactions of the Fourth World Congress of Sociology (1959) であったことであろう。今日では Raymond Boudon (ed.) 1993 *Paul Lazarsfeld: On Social Research and Its Language*. Chicago: Univ. of Chicago Press. に収録されているのでアクセス可能である。

<sup>25</sup> 私はポールが概念・指標問題にそもそも関心を払った源泉についてポールが私に語った記憶もなければ、書かれた記録も持っていない。20世紀初めのウィーンの注目すべき知的環境についての彼らの共有する初期の彼の思い出の中で、Hans Zeisel は Otto Neurath が社会指標のアイデアのパイオニアであったことを語っている。しかしもちろんこれは概念と指標形成の論理に明確に言及する必要はない。ポールに捧げる論文集 (1979) 所収 Zeisel “The Vienna Years” の注 (p. 13) を見よ。私の初めての二本の掲載論文 (1934) が明確にしているように、概念と指標問題への私の関心は第一にデュルケム、第二にタルドに由来する。see Merton 1994 “Durkheim’s Division of Labor in Society: A Sexagenarian Postscript” *Sociological Forum* 9: 27-35.

なかった。もちろんマスコミ研究を広く公認された下位学問として築くのに力があつたことは否定しない。また市場調査が社会学者によって大体忌避されていた商業企業に浸透する以前に、主要な下位学問として彼が実質的に築いた消費行動のパイオニア的リサーチをずっと続けたが、彼は研究されるべきこの主題に永続的関心を持ち続けはしなかった。投票行動に対する彼の先駆的仕事は下位学問として築くのに大いに寄与したものの、彼はその主題に実質的な関心は持たなかった。もちろん他の社会現象よりも一部の社会現象に多くの注目を払った。それは彼の青年時代の価値に彼を連れ戻した例として、大学教員に対するヨゼフ・マッカーシーのイデオロギー糾弾の研究に強い関心を抱いた。しかし大体において、ポールはエミール・デュルケムが自殺という主題を発明的研究のために選んだのと同様、主題に内在的関心を持ったわけではなかった。

我々がたつた今見てきたように、1941年の我々の最初のコラボレーションまでは全く同様に、わたしもまた様々の主題を考察してきた。工業的発明のフロー、科学と技術と社会の交錯、官僚制構造、人種間の通婚、知識社会学、逸脱行動。しかし一時ポールの方法論的関心を触発した論文「社会構造とアノミー」は犯罪、非行、薬物依存のような逸脱行動に焦点を置いたものの、わたしは長年にわたって「アノミー理論と機会構造」に関する仕事に不定期に戻ったりしたもの、ポールがマスコミ、投票行動、消費行動に持続的関心を持たなかったように、私も内在的関心を持っているわけではない。上記の多様な主題の中で、唯一科学社会学だけが依然として内容的関心を残している。

## 2.2 狐か？ハリネズミか？それとも両方か？

他者達は、(私が述べてきたように我々は典型的にはそれらを様々なやり方で研究してきているのだが)多様な社会行動と社会構造をその社会的コンテクストの中で研究するポールと私のパタンを観察し様々に論じている。ポールの多様な主題の選択パタンに関するマリー・ヤホダ (Jahoda 1975: 3-9.) の観察は、彼女をして多くのことを知っている狐とひとつの大きなことを知っているハリネズミという古代ギリシアのメタファーによる対比を採択することへと導いたし、主題選択の私のパタンについての類似の観察はそれぞれ独自にルイス・コーザー (Coser/Nisber 1975: 88-89.) とロバート・ピアステッド (Bierstedt 1981: 444) を全く同じメタファーに導いた<sup>26</sup>。

<sup>26</sup> たまたまピアステッドは予測した。著者がルイス・コーザーのマーティンに適用された図の使用を読む以前に上記の線が引かれたことを知ることは類似した、そして独自の生起によってマーティンに魅せられた者達を喜ばすであろう。「距離を置いた長い期間にわたる同僚を持つことは喜びをもたらした」は、多数の独自のアイデア、発見、観察の原則としての近似的遍在性のもう一つの的をついた事例を提供する。

ギリシアの詩人アルキロクスによって引かれたメタファーの対比を我々の今日の注目への連れ出

メタファーを当てはめるにあたって、ヤホダは、狐であるかハリネズミであるかの基準は、多くのトピックの枚挙に自分の仕事を捧げるか、ひとつのトピックに集中するかである。続けて PFL は次のようであると主張する。

才覚と興味によって狐は彼の生涯を通じてそうであり続け、狐であることで尊敬される可能性を決して否定しなかった。しかし歴史的偶然はハリネズミを装うことを強いた。心では狐でありながら、ハリネズミであるかのように振る舞うことは彼に集合的に捉えられた社会科学の本質的な狐性に持続的に寄与することを可能にした (Jahoda *ibid.* p. 3)。

ポールのライフワークを上記のタームで特徴づけることによって、ヤホダは、ポールのライフワークを方法論に甚大な貢献をしたと見るブードンによるかつての特徴づけ (Boudon 1970) と袂を分かたす。それ故、ヤホダは PFL を厳密にはハリネズミに分類する。人はヤホダの読みよりもブードンにより近いにも拘わらず、それは第三の読みに余地を残す。私の気持ちでは、ポールはハリネズミでありかつ狐である。彼の仕事の側面で異なる。バーリンがメタファーによる対比ではっきり説明しているように、上記のカテゴリーは同じ複雑な個人に様々に適用可能であるという意味で相互に排他的であるものとして厳密に適用される必要はない<sup>27</sup>。

ハリネズミとしてポールは、彼の生涯をとりわけ社会科学の方法論を開発する (結果として経験的社会調査の系統的な手続き) という使命にコミットした。経験的社会調査を通じて行為の集計現象を理解することに実質的な関心を寄せた点で、彼はほぼハリネズミであった。彼の非常に多彩な研究のほとんどすべてを貫くのはこの二つの持続的関心である。ある職業を選択する、別の製品でなくある製品を購入する、別のラジオ番組 (雑誌記事) でなくあるラジオ番組 (雑誌記事) を選択する、別の候補者でなくある候補者に投票する、別のイデオロギーでなくあるイデオロギーを採用する。無限に多様なのはトピックスだけである<sup>28</sup>。マリー・ヤホダをしてポールを本質的には狐と描写させたのはこれであった。しかしそれらの概念の中核では、様々なトピックの大半はある重要なタイプの行為の事例であった。選択すること、あるいは幾分拡張された意味で、意思決定に到達する。かくして我々のコラボレー

したのは、アイザック・バーリンのエッセーであった (Berlin 1953)。

<sup>27</sup> バーリンの「ハリネズミと狐」の最近の版 (1986) の序論で、マイケル・ワルツァーは多くの者は彼のエッセーのある箇所を見落としていることを指摘する。たったひとつのハリネズミと複数の狐の区別は諸個人の間のみならず諸個人の内部にも貫通している (M. Walzar 1986: p i)。これはもちろんほとんど内在的関心を持たず、方法論か理論的原理の的をついた事例を例示するだけの大いに多様な主題、現象の選択を語るかなり緩やかな狐の像に特に当てはまる。

<sup>28</sup> ニュー百科事典ブリタニカ第 15 版 (1992) のポール・ラザースフェルドの無署名記事に、「ラザースフェルドは彼のリサーチで非常に多様なトピックに取り組んだ」とある (vol. 7, p. 211)。

ションに関する彼の原型的省察「マートンと一緒に仕事をして」でポールが通常力点が置かれるコロンビア就任以前のペーパー「意図的社会的行為の予期せざる結果」よりも「行為」に長く焦点を当てることを選んでいることは示唆的である。そうする際に、彼は我々が出会う以前に共有していたもう一つの共通基盤を同定することに従事した。ポールの行為の経験的分析という永続的関心は、社会調査のために有効な組織を作り出し維持するという永続的関心と相まって、研究関心の所在の恣意的シフトと思しきものを説明することに向けてずいぶん進んできた。コメンテーター達は、彼が自ら創出してきたマス・コミ・リサーチや選挙投票リサーチを放棄したことに当惑を隠せないでいる。ポールがこれらの主題にほとんど内在的関心を持たず、対照的に歴史家によってしばしば証拠立てられる個別社会への持続的累積的関心を気づくなら謎は解ける。マーケットリサーチ、マス・コミ、選挙行動は説明解釈される現象を提示し、これまで刃が立たなかった問題の実りある探求を可能にし、今後探求すべき新しい問題の発見を可能にすることによって豊富な戦略的リサーチの場を彼に提供した (Merton 1987: 18ff)。

### 2.3 同時に起こった社会的・認知的親和

そのように全くの認知的親和と並んで、我々各々がコロンビア大学に来る前に行った決心、偶然、選好の副産物であった社会的・認知的種類の親和も存在した。これらの親和は我々双方にとって共振した独自の因果連鎖の偶然の交叉を伴ったので、同時発生として特徴づけられる。我々はそれらについて気づくようになるにつれて、上記の些細に思えるがシンボリックには重要に見える体験の重なりは更なる共通基盤を作った。

#### 2.3.1 ポールのフランス鼻根と私のデュルケムへの傾倒

ポールは根深いフランス鼻根であった。ポールにとってパリ、特にソルボンヌが彼の私的世界の実質的中心であったことに気づくのに時間はかからなかった。ソルボンヌの訪問教授となるあらゆる招聘を受け入れるために他の仕事をアレンジし直すことができることを繰り返し夢見た。それは彼にはソルボンヌで名誉学位を授与されることを意味した。パリで過ごした彼にとって貴重な年月は、社会主義者青年のひとりの若きリーダーとして、そして経済心理研究所（社会現象、経済現象に心理学（社会学でない！）を適用することに捧げられた施設）として知られる研究施設の創設者としてウィーンで過ごした時期に継ぐものであった。

私の最初の二本の公刊された論文がフランス社会学、特にフランスの学者、デュルケムに充てられたことを彼が知った時、自分は救済される希望を失っていないと彼に結論を下させた。彼の飽く事なき好奇心が彼に実際にわたしの1934年の論文読ませた時にその意見は強



化された。というのは観察できない概念のための観察可能な指標を発明するという問題への私の初期の関心を彼は初めて知った。今度はそれが当時彼には未知であったデュルケムの遺産をのぞき見るように導いた。数年にわたってデュルケム独自の視点の価値と限界について我々は長年論じてきているので、ポールは次第に彼自身のごく初期から無言の社会学者であって来た可能性を思案し始めた。「この 1931 年の『若者と職業』, 1933 年の『マリエンタール』という初期の作品には、私は当時彼の存在を知らなかったことを断言するが、我々が今日デュルケムに帰属させるもう一つの強調が存在していた」と 1969 年に出た回顧録の中で語っている (Lazarsfeld 1969 : 278)<sup>29</sup>。『マリエンタール』の序論で、我々が研究したいのは失業者ではなく、失業した村であることを強調した。しかしもちろんデュルケムへのこの回顧的言及は、ポールが科学的学問としてデュルケム流の社会学の自律性に気づくようになったバンテージ・グラウンドから書かれている。

まだポールのフランス最良も、のちのデュルケムの作品についての彼の詳しい知識も、彼を近代の経験的に傾斜した社会学の主要な創設者とみなす我々の仲間の一員にまでは導かなかったであろう。彼にとっては、そのターニングポイントを完成させたのはベルギーの統計学者で天文学者であったアドルフ・ケトレであった。その判定は「社会学における計量化の歴史に関するノート」<sup>30</sup>に表現を見いだせるし、『社会科学国際百科事典』の項目「アドルフ・ケトレ」(ランダウとラザースフェルドの共同執筆)にはっきりと見いだされる。「ごく最近になってケトレの社会学の仕事がしかるべく承認を受け始めた、そしてケトレの貢献をまとめた後で、上記の理由だけでも、サートンがケトレの『人類について』を 19 世紀の偉大な著作の一冊、社会学の創設者としてコントよりもケトレを選ぶことに異論を挟むことは難しい」と結論している (Landau/Lazarsfeld 1968 Vol. 13 : 256)<sup>31</sup>。

### 2.3.2 偶然に重なる社会的・認知的ネットワーク：ウィーンとのつながり

ポールの科学史家ジョージ・サートンへの傾倒、ケトレに対するポールの尊敬は我々が

<sup>29</sup> Paul F. Lazarsfeld 1969 “An Episode in the History of Social Research : A Memoir.” in Donald Fleming/ Bernard Bailyn (eds.) *The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960*. pp. 270-337.

<sup>30</sup> 初出 *Isis* 1961, 52 : 277-333. Patricia L. Kendall (ed.) 1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* pp. 97-167.

ケンダールはその編著で次のように語っている。「ポールをコロンビア大学の社会科学ケトレ冠教授第 1 号と名乗らせたのは、ケトレが経験的社会調査の創設者であったという彼の得心であった。独立した学問としての社会学に対するポールのアンビバレンスを所与とすれば、それが社会学でなく社会科学であったことは符合する (Kendall 1982 : 349)」。

<sup>31</sup> ポールの目には、デュルケムは同定された期間にある社会現象に繰り返し現れる識別できる規則性に唯一の体系的説明であるケトレの平均人の理論にクレジットを与えたことで、大きなクレジットを獲得した。これはデュルケムが平均人の理論を厳しい批判にかける以前のことであった。Emile Durkheim [1897] 1951 : 300-306.

出会う前の彼と私の社会的・認知的ネットワークのいくつかが重複することを反映している。それはたまたま私がサートンの徒弟であったためであった。サートンが彼の国際雑誌 *Isis* のある巻の序文として「ケトレー」に関する長い論文を書いていた 1934 年のハーヴァードの科学史ワークショップに遡る<sup>32</sup>。ポールがケトレーに同じ注目をしていることを知って、私は彼にサートンの論文を教えた。たとえ我々が詳細に関しては一致しなくても同じ波長の上にいた感覚を与えた。ポールはサートンが論文を書いたほぼ同じ時期に、ポールのコラボレーターであるハンス・ツァイツェルが『マリエンタール』の付録「社会史に向けて」にケトレーの計量研究に対する素晴らしいできばえの批判的分析を掲載したことを指摘した<sup>33</sup>。今度は私がジョージ・イーストン・シンプソン<sup>34</sup>の手になる 3 頁のリサーチ・レポートからのひとつの表をリプロデュースするために選び出したことを指摘した時に、共有された偶然の一致がさらに重なったことにポールは即座に同意した。

ポールは同じ種類の他の偶然の一致を指摘した。彼が『メモワール』でたまたま報じているように、「若者と職業」に関する彼の 1931 年のモノグラフと 17 世紀英国の科学と技術と社会の錯綜に関する私のモノグラフに、他はおよそかけ離れているように見える我々の作品に「宗教と職業選択」に関する似た表が存在した<sup>35</sup>。上記の間欠的に発見された偶然の一致は当初全くかけ離れていた一組の協力者の関心と体験の重なり象徴的しるしであった。

そのような象徴的な符合は他にもあった。か細いものであったが私がウィーンとのつながりを持つことを知って驚きの喜びを示した。ナチスドイツによるオーストリア併合の 1 年前の 1937 年夏に、私は地方人のベターな感覚を持って私のアカデミックなドイツ人に関する狭い知識を増やすためにウィーンに行く決心をした。おそらく私の師匠ジョージ・サートンか彼の娘で詩人のメイ・サートン（その夏に彼女はウィーンにいた）から、ウィーンの教師

<sup>32</sup> George Sarton 1935 "Preface to Volume 22 (Quetelet)" *Isis* vol. 23 : 4-24.

cf. R.K. Merton 1985 "George Sarton: Episodic Recollections by an Unruly Apprentice." *Isis* 76 : 470-486.

<sup>33</sup> Hans Zeisel [1933] 1960 "Zur Feschichte der Soziographie." in Marie Jahoda/Paul F. Lazarsfeld/ Hans Zeisel. *Die Arbeitslosen von Marienthal*. S.101-138. esp. S.108-111. American edition, 1971 *Marienthal: The Sociography of an Unemployed Community* pp. 99-125. esp. pp. 106-109.

<sup>34</sup> 彼はテンプル・カレッジの若い講師で、たまたま彼はそこに在学していた私をまだかなりエキゾチックであった社会学分野に招き入れ、ハンス・ツァイツェルが遠く離れたウィーンで引用したりサーチ・助手に私を使ってくれたのであった。ツァイツェルの表を引いたシンプソンの論文は下記の通り。

G.E. Simpson 1931 "Negro News in the White Newspapers of Philadelphia." *Publication of the American Sociological Society*. 25 (2) : 157-159.

『マリエンタール』オリジナル版 p.129, アメリカ版 p.123 はこのペーパーの年を 1900 年と誤記、それだとシンプソンが生まれる数年前になってしまう。

シンプソンの博士論文に進化した完全なモノグラフは、*The Negro in the Philadelphia Press* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press 1936) として出版されている。

<sup>35</sup> Paul F. Lazarsfeld 1931 *Jugend und Beruf: Kritik und Material*.

Robert K. Merton 1938 *Science, Technology and Society Seventeenth-Century England*. ch.6.

で慈善家の、女医ユージェニー・シュワルツバルトによって管轄されていたグルンドジーのザルツカンメルグート村の避暑地「ジープリック」のことを耳にしていた。そこは作家、芸術家、詩人、作曲家、音楽家、(興行を提供するためにたまたま滞在していた)俳優が頻繁に訪れるところであった。

その単なるエピソードの記憶が私に女医とジープリックについてのポール自身の思いでの詳細を思い出させただけではない。幸運なことにマリー・ヤホダ嬢がポールと結婚する前の彼女自身の若かりし幸せな思い出を私が引き合いに出すことを可能にした<sup>36</sup>。

女医シュワルツバルトは彼女の周りの若い男性全員を魅了する特に目立つ女性であった。彼女はラルフ・ネーダー、マイケル・ヤングのような社会制度の偉大な発明家であった。彼女はウィーンに少女のための最初のギムナジウムを設立した。彼女はウィーンに文化の中心を結成し、ポールは彼女のサークルに所属していた。ポールがそこで彼の初期のガール・フレンドと出会ったものと思っている。1919年に、彼女はイシュルのウィーンの子供達のためにサマー・キャンプを組織した。私はそこの雇われたヘルパーのひとりであったポールと出会った。わたしは12歳、彼は18歳であった。そこで彼は彼の最初の質問紙であったものを組み立てた。毎晩我々200名の児童は我々が最も好きな若いヘルパーを数え、なぜかをチェックしなければならなかった。翌朝、掲示板に人気リストが載った。ジープリックは18歳以上の者のためのものであった。私は噂からそれを知った。

女医のジープリックでのあり得ない滞在をポールが知った時、それは我々の間の共通地盤感を広げた。というのは話っぷりから、そこはポールが社会調査の彼のライフワークを開始した彼女の地球慈善事業のひとつであったから。私はおそらく彼とウィーン、ジープリックでは会うことはできなかつたろう。というのはロックフェラーのトラベル奨学金は私がオーストリアを訪れる数年前にポールを合衆国に連れて行ったから。

ポールと私はマーク・グラノベッターが言う「弱い紐帯の強さ」の更なる証拠に驚かされた<sup>37</sup>。ポールがウィーンに住んでいた時によく知っていた幾人かのオーストリアとドイツの科学者と私が弱い紐帯を築いていたことが判明した。これらの科学者は経験科学の哲学に共

<sup>36</sup> これはマリー・ヤホダからの手紙(1996.5.16日付)彼らの初期の年月を過ごした女医シュワルツバルトでのポールと彼女の体験について少ない言葉で語ってほしいという私の要請に応えたものであった。

<sup>37</sup> Mark S. Granovetter 1971 "The Strength of Weak Ties." *American Journal of Sociology* 78: 1360-1380.  
Mark S. Granovetter 1974 *Getting a Job: A Study of Contracts and Careers*.

通の関心を表明した1920年代に登場したウィーン・サークルと様々に結びついていた。

彼のメモワールでポールは、ウィーン時代、自分はウィーン・サークルと実質的には一切接触がなかったことを思い起こしている。彼らの教えと私の初期の仕事の明らかな類似性は、直接の影響を受けたというよりむしろ共通の背景（マッハ、ポアンカレ、アインシュタイン）に由来するであろう<sup>38</sup>。にもかかわらず、マリー・ヤホダが記憶していたように、科学哲学者と論理実証主義創設者としてウィーン・サークルの主要人物となったポールとルドルフ・カルナップが大学の若き知識人によって設立された学際セミナーに導きの光であったというのは正しい（Jahoda 1969: 431）<sup>39</sup>。Hans Zeiselがウィーン時代のリコレクションの中で「当時カルナップはポールにとっても、ポールの教え子達にとっても、偉大な出来事であった」と証明している（Zeisel 1979: 11）。

ポールは彼のアメリカの新しい同僚が彼自身のカルナップとの接触を証明する文書を提供した時びっくりした。私はカルナップが1936年にハーヴァード・ターセンテナリー祝賀会を訪れた時に彼とちょっとだけ会った。そしてカルナップの講義「Logic」を含むターセンテナリーシンポ全2巻を書評し、その作品を私の博士論文で引き合いに出し、「彼の最近の論文、“Testability and Meaning”はウィーン・サークルの他のどの陳述よりも社会的データの分析に容易に適用可能であると思う」という生意気な手紙をカルナップ宛に送った<sup>40</sup>。私は通常講義でウィーン・サークルの大立て者、ポールその他の同時代人によっても絶賛されているオットー・ノイラート<sup>41</sup>の社会科学哲学に関する彼の基本的仕事をしばらく学ぼうと思った。しかしながら、ポールはカルナップ論文についての私の抜き刷りに詳しく注釈付けたと、但し書きをつけた贅沢な意見の許しを私に送って寄こした。ポール自身その有名な論

<sup>38</sup> 「政治的出来事に積極的に参加した者にとって自然な分野は国家科学（経済学、政治理論と強く融合した法学の学位）であった。しかし私にとっては、数学が2番目に惹きつけられた自分（ポール）であった。私が応用数学の博士号で終了したのはほとんど偶然なことであった（Lazarsfeld 1968: 273-274.）」。David L. Sills は彼のメモワールの中で「ポールの博士論文は「火星の運動へのアインシュタインの引力の法則の一適用」であったと語っている（Sills 1987: 255）」。

<sup>39</sup> Marie Jahoda 1969 “The Migration of Psychoanalysis: Its Impact on American Psychology.” in Donald Fleming/Bernard Bailyn (eds.) *The Intellectual Migration: Europe and America, 1930-1960*.

<sup>40</sup> Rudolf Carnap 1937 “Logic” in *Factors Determining Human Behavior* pp. 107-118. それは確かにジョージ・サートンの雑誌 *Isis*, 1938, 28: 151-154 で2巻のシンポジウムについての私の非常に走り書き風の書評のほんのひとつのかなり情報不足の文章が与えられたものであったが、私の著書『17世紀英国における科学と技術と社会』にも引かれている。p.110n.

Rudolf Carnap 1936, 1937 “Testability and Meaning” *Philosophy of Science*, 3: 420-471, 4: 2-40.

私のカルナップ宛の手紙は1938年10月31日付。

<sup>41</sup> 私は博識なオットー・ノイラートにはお目にかかったことはないが、彼の息子ポール・ノイラートには度々あった。彼はコロンビア大学博士課程に在籍し、研究所にもいたことがあった。

Paul Neurath 1995 “Otto Neurath: Leben und Werk.” *Enzyklopadie und Utopie*, vol. 30

Paul Neurath/Elisabeth Neurath (eds.) 1994 *Otto Neurath oder Die Einheit mit Wissenschaft und Gesellschaft*.

Marie Neurath/Robert S. Cohen (ed.) 1973 *Empiricism and Sociology: With a Selection of Biographical and Autobiographical Sketches*, esp. 1-83.

文を「disposition 概念」の形成の詳しい分析の中で引き合いに出している<sup>42</sup>。

一例を言えば、彼らの成熟まで存続したウィーン時代の同輩との（敵対的とまでは言わないが）素っ気ない関係は、わたしが社会的・認知的ネットワークに入っていくのを妨げた。科学哲学（特にカルナップ）への私の関心を知りながら、ポールは若いカール・ポッパーをかなりいやな若者として思い出し、彼の『探求の論理（1935）』に、わたしが短いオーストリア滞在中に出会った世界的名声の成熟した哲学者カール・ポッパー卿に、疑問を表明し続けた。彼らはそりが合わなかったことは明白であった。疎遠であった時代を振り返って、マリー・ヤホダは書いている。「PFL とカール・ポッパーとの反目は女医シュバルツバルト・サークルで生じた」と。私（ヤホダ）は KP のやや清教徒風の容貌が PFL のライフ・スタイルと衝突したのだと思っている。私（ヤホダ）は KP をよく知っている。我々は 2 年間ウィーンのエデュケーション（我々はそこで初等学校教師の訓練を受けていた）で同僚であったから<sup>43</sup>。

数十年のちに英国人ノーベル医学賞受賞者 Peter Medawar（ポッパーの親友で私の良き友人）は私が頻繁に英国を訪れている期間のある機会に、私がポッパーと会うための斡旋をしてくれた。しかし彼は決まって失敗した。この繰り返しの失敗の謎は最近になって解けた。ポッパーから Michael Cavanaugh（ポッパーの科学社会学批判を批判する論文を書いた人物）宛の手紙のなかで。型にはまらない優しさ、自己批判的スタイルで、ポッパーはポールとポールの同僚と彼自身を三角測量した。

私は彼を十分に研究しなかったことではなく、あらゆるものを読むことができなかったことで、マートンに不実でアンフェアであったことを詫げる。私がマートンに関して知っていたのは、マートンがラザースフェルドの友人で、ある種の生徒でもあることを、ラザースフェルドによってだけでなく、他の人びとからも告げられていたからだ。科学方法論について語る時にはいつでもラザースフェルドは私について耳障りなことしか言わなかった。そこで私はマートンの仕事に深くのぞき見る誘因をほとんど持たないできた。深くそれを後悔している。私はできることならこれを修復したいと望むのだが、私の年では容易でないだろう。マートンと接触するチャンスがあったら、私の後悔を彼に伝えて、この手紙のコピーを彼に渡してくれたらどんなに嬉しかろう<sup>44</sup>。

<sup>42</sup> Paul F. Lazarsfeld 1966 “Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences: Some Historical Observations.” in Gordon J. Dizenzo (ed.) *Concepts, Theory and Explanation in the Behavioral Sciences*, pp. 144-202, esp. at 175-181.

<sup>43</sup> Marie Jahoda の手紙（1996 年 5 月 16 日付）より。

<sup>44</sup> Karl Popper から Michael A. Cavanaugh 宛の手紙（1988 年 9 月 15 日付）コロンビア大学・マートン・アーカイブ  
「弱い紐帯」が広い社会的ネットワークに役立った。今になってようやく私は医師ユージェニア・シュバルツバルトに対するポッパー自身の言及、自伝での言及を指摘する。彼女は飢えに苦しむ戦

この彼らしくないポッパーの詫びの言葉は、ポールを驚きと狼狽と喜びの入り組んだ気持ちで満たしたことであろう<sup>45</sup>。

ポールのウィーンの友人、知人の他者との引きずる関係はよりベターな運命と出会った。ウィーン・サークルで最も周辺にいたポッパーと違って、サークルの中心にいた人物 Philipp Frank（プラハ・ドイツ系大学でアインシュタインの後継者）と科学哲学者 Herbert Feigl は科学の社会学に強い関心を示した。合衆国に彼らが移住した後、その新興分野の会議にたまたま出席した私はポールと私のウィーンの社会的・認知的ネットワークの偶然の重なりを感じた<sup>46</sup>。

## 2.4 選択的親和力の重要性：パーソンズスタウファーの幻のコラボレーション

今日まで、私は上記の選択的親和力はポールと私のすぐのコラボレーション、それからずっと続いたコラボレーションにとっても、親和的でおそらく肝要なものであったと得心している。我々が早々に我々の基底にある共鳴に気づかなかったなら、認知的好み、価値的好みの違いがおそらくコラボレーションを早々と停止に追い込んだであろう。この選択的親和力の重要性を私が信じたことが、この回顧談で我々のコラボレーションに思いをはせるほどに virtual conviction にまで成長してきた。それはまた私に、そのような親和力の欠如がタルコット・パーソンズとサムエル・スタウファーがハーヴァード大学で我々のようなコラボレーションを達成する努力を閉ざさせたという思いに駆らせる。

まったくうまく意図されながら失敗に終わった努力のストーリーがすぐに語られる。1940年代前半、私のかつての師で同僚であったパーソンズは、当初はふとした偶然の、それからずっと続いたポールとのつながりの価値についての私の考察によって次第に印象深いものになった。私は経験的社会調査の達人（ポール）から多くを学んだだけでなく、我々の院生は我々のコラボレーションから生じた社会理論と経験的社会調査の混合にはっきりと乗り出し

---

後（1920年代初頭）のウィーンの子供、学生、芸術家、知識人への援助を組織した最も注目すべき博愛主義者であった。「彼女はポッパーがオットー・ノイラートと出会ったことを記憶している非営利の食堂のひとつ the Akazienhof を設立した（Karl R. Popper 1973 “Memories of Otto Neurath” in *Neurath, Empiricism and Sociology*, p. 52）。もちろん、その人物は15年のちに、彼女のソルマールハイム・ジューブリックでウィーンの子供と交わることを親切にも許可してくれた女医シュバルツバルトその人である。

<sup>45</sup> ポッパーのポールに対する引き続き変わらない態度は彼が『限りなき探求：ある知的自叙伝（1976）』で一言も触れることができなかったことを説明するだろう。ポッパーはフレミング、ベイリン共編 *The Intellectual Immigration* に掲載されている Herbert Feigl “The Wiener Kreis in America” (pp. 630-673) の論文には多くを語っているのに、同じ書物に掲載されているポールの “An Episode in the History of Social Research” (pp. 270-337) には一言も触れていないのである。

<sup>46</sup> この社会的・認知的ネットワークの偶然の重なりは Gerald Holton によって巧みに捉えられている。Gerald Holton 1995 “On the Vienna Circle in Exile: An Eyewitness Report” in W. Depauli-Schimanowitch et al. (eds.) *The Foundational Debate*, pp. 269-292, esp. p. 274, p. 278.

た。その上、理論に導かれた社会調査の技法と職人技における我々の院生の教育は、院生にリサーチプログラムにおいて積極的役割を引き受けさせるそのようなトレーニングを与える、社会科学実験室というポールの発明から大いに恩恵を受けていた。ずっと以前、パーソンズはハーヴァード大学での同じようなコラボレーションと同じようなりサーチ実験室の可能性に関心を表明していた<sup>47</sup>。

社会的・認知的ネットワークはひとりの有望なコラボレーターをパーソンズが選抜するのに決定的な役割を果たした。数年前、独創的で実務的なサムエル・スタウファーとのコラボレーション<sup>48</sup>から解放されたポールが、彼（スタウファー）は現代の最高の社会調査者だと得心していた。その意見は、第二次世界大戦中軍隊の社会心理学と社会学で未曾有のフィールド研究を行った戦争省社会調査ブランチを設け、統括したスタウファーののちの業績によって裏付けられた<sup>49</sup>。ポールは「潜在的構造分析」モデルを導入することによって、リサーチブランチの方法論的仕事の実質的役割を担った。私は「焦点づけられたインタビュー」の形でリストに載った人物とのインタビューの手続きを編纂することによってポールに比べて慎ましい役割を担った<sup>50</sup>。ポールが主で私が従で、「サム・スタウファーがパーソンズとコラボレートする経験的調査の達人候補として素晴らしい選択であろう」という認証を認め

<sup>47</sup> ポールの私的なアーカイブズからの引用が証明するように、「社会科学実験室」というタームは、応用社会研究所が社会科学の大学院教員の研究単位となることを目指した、1944年のコロンビア大学管理当局と我々の交渉においてスタンダードになった。see Lazarsfeld 《Memoir》 333-334.

<sup>48</sup> Samuel A. Stouffer/Paul F. Lazarsfeld 1937 “Research Memorandum on the Family in the Depression.” *Social Science Council Bulletin* 29.

Paul の彼の友人、少し距離を置いた同僚についての査定に関して、Samuel Stouffer 1962 *Social Research to Test Ideas* の Paul の手になる Introduction 参照。我々の会話で、ポールは「サムは社会調査の分野で最も重要な人物である」としばしば口にした。

<sup>49</sup> Samuel A. Stouffer et al. 1949-50. *Studies in Social Psychology in World War II*. 4 vols. *The American Soldier* は第 1, 2 巻を構成する。

その大量の仕事の理論的、方法論的意義は次で早々と考察された。

Robert K. Merton/Paul F. Lazarsfeld (eds.) 1950 *Continuities in Social Research: Studies in the Scope and Method of “The American Soldier”*.

<sup>50</sup> Paul F. Lazarsfeld 1950 “The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis. (ch.10)” and “The Interpretation and Computation of Some Latent Structure. (ch.11)” in Samuel Stouffer et al. (eds.) *Measurement and Prediction vol. 4 of Studies in Social Psychology in World War II*.

第 4 巻序文でスタウファーは「焦点づけられたグループ・インタビュー」の技法はそこでは論じられないと述べている。彼とリサーチブランチでスタウファーのアソシエートとして働いている実験心理学者 Carl I. Hovland の同意を得てコア技法は数年前に発表された次の論文に掲載されたので。Parricia L. Kendall/Robert K. Merton 1946 “The Focussed Interview.” *American Journal of Sociology* 51: 541-557. ポールの勧めによって、その論文は一冊の本に増補された。R.K. Merton/Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall 1956 *The Focussed Interview*.

ホブランドへのかつての手紙で、ポールは彼のたぐいまれな管理者能力を発揮している。「親愛なるカール。ひとつの大きな管理者問題を取り上げさせてもらいたい。あなたがおそらく知っているだろう、マートンという人物が 8 月のいつからか草稿に取りかかった。彼はあなたのために彼が行った仕事を知識の有用な貢献にする形にすることに熱心である。それ故、彼はあなたのために週 4 日の大半を彼がいう焦点づけられた集団インタビューの編集に割きたがっている」。PFL to CIH, June 2, 1943 Merton Archive, Columbia University.

た<sup>51</sup>。

パーソンズとスタウファーはともにそれは素晴らしいアイデアだと考え、1946年にハーバード大学社会学科にスタウファーは加わった。両者の間に友好が交わされることはもはやなかった。彼らのパートナーシップの初年度、彼らのそれぞれの才能を確かめる共同の努力に割かれたが、ほとんどないか全くないことがすぐに明白になった。彼らはお互いを理解することができなかつた。少なくとも、合同の研究・プロジェクトで一緒に働くことも、彼らの双方が加わる理論とデータによって導かれた合成的な社会調査のための訓練実験室の設計と一緒に働くことも続かなかつた。自暴自棄に思われた行為の中で、彼らは1948年春に一学期だけ合同で持つことを提案した。それは不可能なことが判明したが、我々は彼らのお互いに曖昧な視点のバーチャルな翻訳者の役割に同意して、週に一日わたしが出向くことを約束した。しかしその仲介されたコラボレーションの試みもまた失敗した。その一つの研究・プロジェクトはパーソンズが「S.A. スタウファー／フローレンス・クラックホーン／タルコット・パーソンズによるボストン地区高校生の社会移動の研究（未刊）」と呼ぶものであつた（Talcott Parsons 1951 *The Social System* p. 235）。彼らの中に影響の相互性はほとんど発生しなかつたし、それ以前に、パーソンズは、コロンビア大学応用社会調査研究所のように、研究と指導の両方を与えるスタウファーが主宰する社会関係実験室にもはや加わらなくなつた。善意と意思の共有は無傷のままであつたが、選択的親和力と相互理解の欠如がタルコット・パーソンズとサムエル・スタウファーをそれぞれ別の道を進ませた<sup>52</sup>。

偉大な才能とコラボレーションの深いモチベーションという格好の条件と思えたものの下でさえ、一緒に仕事をするのは容易に到来しないのである。

### 3. 緊張 そして解決

選択的親和関係が我々の進行中のもつれたコラボレーションに影響をもたらしたように、我々の中の人格的緊張、認知的緊張にも影響をもたらした。この親和関係は我々の異なる認

<sup>51</sup> スタウファーの採用にあたって、社会的・認知的ネットワークの参加者としてポールと私は、またパーソンズに『アメリカのジレンマ』にまとめられる進行中の研究でスタウファーがベーシックな役割を果たしているほとんど知られざる事実について語る事ができた。主査のグンナー・ミュルダールがドイツ軍がデンマーク、ノルウェーに侵攻したときスウェーデンに帰国するのが自分の義務と感じて帰国した。のちにその著作の序文でミュルダールが語っている。「私の不在時にプロジェクトを采配する重責を引き受けることにスタウファーは同意した。留保なく、彼は無私的に彼の才能と全エネルギーを1940年9月1日まで調査を完了する任務に傾注し、それに成功した」。Myrdal 1944 *An American Dilemma* vol. 1: xii.

<sup>52</sup> 日記と雑誌が欠如しているため、パーソンズとスタウファーのコラボレーション失敗に関するこの紋切り型の説明は通信（手紙）に基づいている。RKM to TP (11/11/1947), TP to RKM (5/1/1957)。それは創立20周年を迎えた応用社会調査研究所の特別の性質に関する回顧的注釈を与えている。



知的関心と好みを超越するための基盤を提供した。その一方で緊張は我々にそれぞれの認知的関心と好みを維持するための基盤を再検討し擁護し、もっと自覚することを余儀なくさせた。それは我々の間の認知的緊張を単なる友好的顔なじみ以上の何かを通じて減じようとした場合に重要であった。この緊張の解消は長年にわたって続いた批判と修正の応酬を通じてもたらされた。認知的発達に導いたプロセスでなければ、認知的発達は公開された記録の事柄であった。しかし私は我々の間の人目に触れない対人的緊張について語るべきだ。それは主として仕事生活の送り方の好みの基本的違いに由来した。この緊張が脇に置かれる限り、様々のコストを払いながらも、我々のそれぞれが、時には気が進まなかったが、それにもかかわらず長く続いた協力者となるように導いたのは明確な調整と適応を通じてであった。

### 3.1 応用社会調査研究所

我々のワークスタイルの深い違いはまもなく我々双方にとって明白となった。かくして、我々のコラボレーションに関する彼自身の回顧の中で、ポールは私が長年の友人キングスレイ・デーヴィスに充てた随分昔の手紙を取り上げている。その手紙はラジオリサーチ・オフィス ORR（応用社会調査研究所 BASR の前身）に私が渋々加入したことを語っていた。

その手紙はいくつかの興味深い特徴を持っていた。組織されたりサーチ・プロジェクトという発想はマートンにとって新しいものであったので、彼はそれに引用のしるしを付している。「一方で罨にはまったと感じるが他方で興味もあったというアンビバレンスのトーンがあった」。彼はその仕組みに印象を受けたが、その愛国の含意に言及することによって、軍事省内のサムエル・スタウファールのリサーチ・ブランチと密接なつながりのある ORR で仕事を継続する自分の決定を弁明しなければならないと感じた。しかしながら、彼の関心の主要な源泉に関しては何の疑問もなかった。彼はプラクテカルな問題と自分の中心的理論的関心の相関を見つめる機会を欲した（Lazarsfeld 1975: 36-37）。

ポールは続けていっている。「研究所の以後の拡張はマートンの管理者と「政治的」貢献がなければ不可能であったろう。だが彼は決して組織人ではなかった（Lazarsfeld 1975: 37.）」。最後のイタリック体の部分はサブテキストを持つ。その研究所はポールが早々に気づき、途切れ途切れに関心を払ってきたものの究極的凝縮であった。30 数年にわたる副所長として研究所での生活に関する私のアンビバレンス。一方で、すぐに私は、リサーチとトレーニングの複合施設というポールの発明品はコロンビア大学独自の社会学の伝統として勃

興しているものにとってきわめて重要であることを納得した。しかし他方で、研究所への深い関与は「孤独な学者」としてよく描かれる者に特有の強く好まれるワークスタイルの多くを譲歩することを要求した。私の内部の緊張は不可避免的に我々二人の間の緊張を誘導した。決して完全に解消されることはなかったが、それは定期的な相互の調整を必要とし受け入れた（私の側は大部分で、ポールの側では時たま）。かくして彼は研究所の所長として成功するためには私は招集されないことに次第に同意するようになった。この適応は、その責任を「若い腕白達」<sup>53</sup>への相続に転換するはるかに幸福な合同決定に導いた。つまりかつての弟子達はポールを「管理に長けた学者」として描写するものになった<sup>54</sup>。しかし研究所に関わる事柄に関して、ポールは彼が所長としてサーバティカルとか訪問教授として不在の時には、私が臨時所長として働き、遠回りで何とか職務をこなした。

新たに見つかった半世紀前の覚え書きが、研究所の臨時所長のある日のアジェンダを記録している。それは狭いスペースにポールが彼の代わりに臨時所長を務める期間に私が直面する管理者の活動の類型について沢山のことが書かれていた。

たまたま同時になされるべき事柄のリストをこなした2日後、私はコロンビア大学博士課程の学生の口頭試問中に急に胸の痛みによって倒れ、軽い心臓発作のために3週間過ごすことになるセント・リューク病院に緊急搬送された。

にもかかわらず、振り返るとすべて楽天的な後知恵を別として、わたしは研究所は当時としては珍しい社会科学資源の集合を設置したものだと思っている。今日の社会学のメタファーの語彙では、長年にわたって重要な形式の社会関係資本、認知資本を提供してきたし、その複合的で進化した生命に参加した者に人的資本を大いに拡張させた。

### 3.2 行動科学上級研究センター The Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences

順調に成長する研究所が私の側に持続的で時として苦痛な譲歩を要求したように、十分に皮肉なことに、研究所の派生物がポールにはるかに大きな苦痛をもたらし、彼の側に一切の譲歩を引き起こさなかった。研究所の派生物とは行動科学上級研究センター（CASBS）で、それは新たに活動を開始したフォード財団からのグラントの下で1954年に創設された。その発足にポールが中心的役割を果たしたことを詳しく述べた、センターに関する本格的な歴史はまだ書かれていないが、幸いなことに、科学史家アーノルド・タックレイは役に立つ初歩的なスケッチを提供している（Thackrey 1984, 1987）。それはセンターが大体において上

<sup>53</sup> Charles Glock, David Sills, Allen Barton の三人は当時二人からそう呼ばれていた。

<sup>54</sup> 研究所のかつての若かりし時の所長経験者は、研究所での、そしてそのような大学に基礎をおく、リサーチ組織の位置に関して振り返っている。Charles Y. Glock (1979: 23-36), Allen H. Barton (1982: 17-83), David L. Sills (1979: 411-427, 1996: 105-116)

級トレーニングのための a professional school (専門的大学院) というポールの構想に由来することを明らかにしている。

そこにはパラドックスとアイロニーが存在する。というのは、スタート時から社会科学界の装いを新たにした制度的成功と広く定義されるようになったものは、その鍵を握る創始者にとって引きずる個人的敗北感であった。我々の間に決して完全に解消されることのない緊張を作り出した。

1940年代半ばに戻ると、社会学、社会科学における上級トレーニング法によってもっと多くのものを与えたいという必要に気づいていたのはポールひとりではなかった。復員兵に教育支援を与える復員兵援護法 G.I. Bill<sup>55</sup> から主に生じた大幅に増加した第二次世界大戦後の学部生に奉仕するにはファカルティ (教員) の数が理論的、経験的、社会的リサーチの近年の進歩に応えるには余りに少なすぎることが全国規模で明白となった<sup>56</sup>。

私は組織人ではなかったにも拘わらず、ポールはゼネラルな考えに対する私のアンビバレントな支持を安易に賛同者に含め、1950年までに、その年以前にできあがっていた彼のもともとの10頁の覚え書きを私と共著の長い「社会調査のトレーニングのための施設設置提案」に膨らました。(上級研究センター設立における私の役割に予測しがたい影響を及ぼすことが判明した) 私のアンビバレンスは、ポールのプランの二つの要素に由来した。ひとつは、応用社会調査の実務家を養成することに過度の力点がおかれていること。もう一つは、目下の知識の上級センターでのトレーニングが「管理者的学者」を所長とする経験を積んだ序列化されたスタッフによって新興のリサーチモードで教えられた多数の学生と徒弟を抱えたプロフェッショナル・スクールで行われるという前提である。要するに、フォーマットが彼の息のかかった社会的発明(研究所)に似たその拡張であること。私の感じたのは、必要なのは、社会学者が自分の大学に戻ったときに乗数効果を通じてその数を増殖するように、有望で成熟した社会学者の相互教育である。しかしオリジナルなプランはまったくポールのものであったので、組織的でない私にとってよりも彼にとってはるかに多くの意味を持ったが故に、彼の力点と彼の前提は最終文書まで残った。

私が思うには、ポールは最適な序列的フォーマットの前提を物理科学、生物科学におけるヨーロッパのリサーチ実験室という馴染みの原型よりも、ウィーン大学の心理学施設で彼自

<sup>55</sup> 当時気づかれており、回顧でますます認識されたとおり、G.I. Bill は高等教育へのアクセスの機会構造を根底から変えた。他の大学のように、我々の院生の比率の増加はまずカレッジに、それから大学院に通学する彼らの家族においてであった。G.I. Bill のジェネリックな意義に関しては、Harold M. Hyman 1986: 69ff 参照。

<sup>56</sup> パロキアルであるがめばしい例。1940年代後半まで、コロンビア大学の社会学科の教員10人前後は(連続するコホートを合計すると)80~100人の院生の教育指導に従事していた。ポールは大学院の範囲を超える上級トレーニングのためのひとつのプラン(社会科学のための大学院およびポストドクのためのプロフェッショナル・スクール)を考案した。

身の好みと体験から引き出している<sup>57</sup>。十分に物語るように、ポールは彼の師心理学者カール・ビューラーを施設の長として描写するだろう (Lazarsfeld 1975: 46)。彼の友人はポールが持つ終生変わらない序列感に十分気づいていた。Helen M. Lynd は彼女の夫 Robert S. Lynd とポールの複雑な関係を思い出したときに、「ポールは強い序列意識を持っていた。彼は初めての人物と会うときに、彼が最初に思うことは「彼は私より上か」、「彼より私が上か」であった、と語っていた<sup>58</sup>。

前記のスケッチの中で、アーノルド・タックレイは上級トレーニングのための拡張されたプランが様々の予想外のルートを通じて、新たに活動し始めたフォード財団の注目を惹き、上級研究センターにこぎ着けたことを思い返している (Thackray 1984: 67)。さらに込み入った詳細は、本質的に正しい考察は我々をここに留めておかないことをはっきりさせる。もっと肝心なのは、シニアの学者のコア・スタッフと学生、インターン、エクスターンの役割のポストドク生のフローをもつある種のプロフェッショナル・スクールというポールのイメージから、センターは遠くかけ離れたことである。ポールは序列組織の施設という彼のコンセプトに対する私の反対に不快感をあらわにし、センターが世代の異なる学問の異なる階層的でない交流するフェローのカンパニーとなるべきという企画委員会の全員一致の決定に私が賛成したこと激しい怒りを示した。抗議の後で彼はシニア・フェローの継続スタッフに関して敗北を認めた後で、ジュニア・フェローに彼らの上級の知識を伝えるために客員シニア・フェローを設ける構造変革を引き起こすことができるだろうと考えて、第一コホート・フェローズの入替りに同意した。彼の仲間のフェロー達や大学の理事達の間、序列のこの修正されたアイデアに対する何ら肯定的な反応を見いだせず、年次休暇の滞在から戻ってきたポールは、センターは平たく言えば私のアイデアのまやかしものだと自分に言い聞かせた<sup>59</sup>。数年たっても、彼にとっては、センターが社会科学のひとつの中心的施設として遠く、広く歓迎されることは大事でないことはなかった。

ついでに述べるなら、ポールは 1950 年の提案を 1972 年の論文集に再録するまで公表することはなかった<sup>60</sup>。彼は再録にあたって、目立つ紹介的注釈を付している。

ロバート・マートンとの共著で書かれた 1950 年に執筆されたこの覚え書きは複写の形

<sup>57</sup> 彼はそこで社会心理学と統計学の講義の助手として経歴を開始している。

<sup>58</sup> Helen M. Lynd から Dr. Ann Pasanella への手紙 (日付 1977 クリスマス)。

<sup>59</sup> 第一コホートにいたハーバート・サイモンはシニアフェロー、ジュニアフェローの計画の拒絶はポール・ラザースフェルドの夢を壊した、我々は終生の友人であったものの、彼は決して破壊に私が荷担したことを許さなかったと回想している。Herbert Simon 1991 *Models of My Life*. New York: Basic Books, p. 171.

<sup>60</sup> Lazarsfeld 1972: 361-391. 「社会リサーチにおけるトレーニングのためのプロフェッショナル・スクール」

で広く出回った。コロンビア大学の教授会はその事柄を議論したが、プランを実行に移すために入手できる基金がひとつもなかった。その覚え書きはその後フォード財団に申請され、委員会が任命された。議論の過程で最終的に CASBS の創設に導いた大体の考えが検討された。その構造はこの覚え書きに提案されたものとは全く異なった形のものである (Lazarsfeld 1972 : 361)。

ここにイタリック体になった文章のサブテキストは、彼が「私のアイデアのまやかしの」と彼が描写したものが、CASBS の中に制度化されたほぼ 20 年のちにも依然として怒りと不満が残っていたこと明らかに表している。我々はセンターの序列構造の性質に関して意見が一致していないことに最終的に同意したが、我々の間の緊張はそこで終焉した。彼が自分の中心的アイデア「上級トレーニングのための一種のプロフェッショナル・スクール」から我慢ならないほど逸脱したものとして感じたものが、国内と海外の人文学、社会科学のいずれかに実質的に張り合う先端科学のためのメジャーな新しい制度形態に進化してきたことを私は彼に納得させられなかった。ジャーナリストックに「シンクタンク」と呼称されるようになったものは、明らかにプロフェッショナル・スクールではなかった。

### 3.3 社会的に評判を落とす理由を使う達人

私はポールの de-rationalization と描写されるものへの永続的な（他人には喜ばれない）嗜好を何とか中和しようとしたができなかった。ウィーン人であることに由来するターム rationalization がある行為、信念をおそらく、いや実際に社会的に評判を高める理由に帰属させることを指すなら、de-rationalization はある行為、信念をおそらく、いや実際に社会的に評判を下げる理由に帰属させることを指す。いや卑俗な言い方では、rationalization が「悪しき」行動に「良き」理由をつけることを指すとすれば、de-rationalization は「良き」行動に「悪しき」理由をつけることを指す。ポールが de-rationalization の技法を作り出さなかったとしても、彼は確かにその達人であった。

その疑わしい技法をポールが演じた主要な例が容易に思い浮かぶ。私は長年にわたる我々の数え切れない雑談についての彼の de-rationalizing な描写を真っ先に思い浮かべる。これらは、大体のところアイデアの交換と論争、学科での我々の合同セミナー、院生やアシスタントの賞賛、研究所のためのリサーチプラン、研究所のための大学の乏しい財政支援を増やすためのポールの企画に割かれた。しかしながら、彼の de-rationalizing なモードでは、彼は上記のワークセッションを他者にはたぐらみのセッションとして描いた。我々のコラボレーションに関して彼の回顧において、次のように書いている。

私は当日の出来事、翌日の計画をマートンと議論したいと思ったが、5時過ぎになってようやくその時間を持った。そこで私は特別の戦略を発明した。ここでポールは巧みなマキアベリアンという時折みせる自画像を楽しんでいる。4:45頃に私は彼が興味を抱きそうな問題を持って彼のオフィスを訪れる。延々と続く議論は次第に長くなって長いときには8時まで続くことになった (Lazarsfeld 1975: 37)。

これはポールの単なる言葉の失策ではなかったし、度肝を抜こうとしているのでもなかった。彼の de-rationalizing な耳は scheming, plotting 陰謀というワードの不快な含意に耳を貸そうとしないだろうし、アウトサイダーとしての自分を de-rationalizing することは上記の自分を非難する定式化のしばしば招く厄介な帰結に配慮していないだろう。

またポールは研究所が商業的クライアントに応用調査をオーバーチャージしてきたことを時々公言した。「オーバーチャージ」というやや遠回しのタームは寡占、独占という利潤最大化価格政策を指す経済学のタームでは決してなく、かわりに不道德の意味合いを持つ不快な民衆タームである。その de-rationalizing なタームを使用する際に、ポールは実は研究所がアカデミックな目的に奉仕するという応用研究の企画部分とアカデミックな研究の費用と研究所アシスタントの訓練費用のかなりの部分を商業予算 (commercial budgets) に負わせていることに実は言及しているのである。しかしながら、「オーバーチャージ」という遠回しのタームを耳にした者で、社会学者 Buxton/Turner の周知のやり方で解釈する者はほとんどいない。

ラザースフェルドのモデルはひとつのサーベイプロジェクトを二通りに使用するものであった。リサーチの代金を支払う企業や機関のために固有の記録を生産することと、同じ材料を使用してアカデミックな研究を執筆すること。その際に、企業、機関の支払うオーバーチャージがアカデミックな目的のサーベイを可能にしたことを付記する (Buxton/Turner 1992: 382: n9)。

ポールが必要に駆られて彼の財政が貧弱な研究所に導入した「オーバーチャージ」という不道德に思える慣行は、大学の研究所に対する乏しい資金給付とまだ到来が始まっていなかった政府や財団の支援の彼による機能的代用であった。しかし de-rationalizing な言葉によって鼓舞されて、研究所の金庫に個人的コンサルタント料を絶え間なく注ぎ込んでいたのに、ポール自身が「オーバーチャージ」から金銭的利益を得ているという噂が飛び交った。そこではポールは大学が財政を賄う社会調査とトレーニングの施設でなく、大学に拠点を置

く社会調査とトレーニングの施設というパターンを実質的に発明し、この制度的達成を「オーバーチャージ」という不快な慣行に基づくものとして何とか描写しようとしたのであった<sup>61</sup>。

ポールを de-rationalization に戻らせた別な人格問題が存在した。彼は自分の寛大な行為を広く承認させたことによって困らされた。彼は他者が愛他心と見なすものに捕らえられるとそれを rational self-interest にすぐに帰属させた。研究所スタッフが以前に彼とつながりのあった手頃な数の有能だが亡命を求めている学者を含めることが明白になったとき、自分が善をなしていることを彼は即座に否定し、自分は依怙蠱賈をしたと告白した。人びとが一般的に依怙蠱賈を係累と友人の不当な優遇を行うことという見解を抱くと、彼は説明しようとした。「見なさい、そのナンセンス者よ。依怙蠱賈はわかりやすいものだ。私は係累、友人、友人の配偶者を最善の理由のために雇っている。私は見ず知らずの者に支払わねばならない金額の半額で彼らを雇っているのだ。彼らから二倍の仕事をしてもらっているのだ」。かくして、ポールは自己提示を de-rationalizing している。研究所で亡命社会学者の一群にリサーチのための臨時の機会を提供した持続的試みは、彼らの不安定な状況を利用する彼の搾取する自己の事例に他ならなかった。彼らの多くは係累——彼のかつての妻 Marie Jahoda, Herta Herzog を見よ——あるいはウィーン人の仲間とその係累——研究所で働いた Hans Zeisel とその妹 Ilse Zeisel を見よ——あるいはウィーンからの亡命科学者の係累——有名なウィーンサークルの創設者で経済史家で独学の社会学者 Otto Neurath、息子である若き Paul Neurath を見よ——この実践は依怙蠱賈として描写されうる。研究所での仕事のおかげで Hans Zeisel がシカゴ大学の法社会学教授になり、フランクフルト学派の一員であった Leo Lowental が紆余曲折の末バークレー校社会学科にアカデミックなポストを得たことを彼は目にした。要するにそして後世の分析概念で見れば、ポールは彼の社会的ネットワークの移住者に社会関係資本、つまりさもなければ容易に手に入らない機会構造へのアクセスを提供することに甲斐甲斐しかった。しかしこれらの行為を愛他的行為、あるいはウェーバーの概念、価値合理性の例とみなすよりも、ポールは善行をしていることが判明することに対する強い当惑をカムフラージュするために、ウェーバーの目的合理性という自己に利する用具主義者の流儀に従事するものとして自己を提示する de-rationalizing なスタイルを選んだ。

コロンビア大学管理当局のメンバーがこの大体において自己維持的社会学実験室にあまり

<sup>61</sup> 要するに、Henry Etzkowitz の用語でいう、実業的科学 entrepreneurial science (いわば大学実験室と生物工学企業の合併) として登場したものの昔日の機能的等価物である。  
Henry Etzkowitz 1993 “Redesigning ‘Solomon’s House’: The University, and the Internationalization of Science and Business.” Elizabeth Crawford/Terry Shinn/Sverker Sorin (eds.) 書名不記載 Dordrecht : Kluwer. pp. 263-288.

理解がなかったために、かれらがしばしば研究所の位置と活動に疑義を呈した時に、私は全く賞賛すべき行動にあるいは組織ルールを創造的に曲げる行動に、社会的に疑わしい理由を与える実践をポールに負わせようとした。疑いもなく悩ましい仕方、これは彼自身の卑下する自己のためだけでなく、研究所のため、果ては社会学科のためでもあったことを彼に思い出させようとした。それに対して彼は典型的には、それは細心の注意を払った実践であると応じた。彼の行為彼の傷付きやすい自我をステグマタイズすることは、他者がそれをするのを予防した。「私がそれを最初に言ったら、彼らはそれについて何にもできなくなる」。「陰謀スキーム」「オーバーチャージ」「依怙最眞」のような自己卑下のタームは計算された社会防衛メカニズムの営みに他ならなかったと述べながら、それは彼の考えるマキアベリのフレーズあったろう。ひとりの多元的アウトサイダーとして、「外国人、移住者、ユダヤ人」という彼のマージナルな属性と信じる豊富な理由を持つものに注意を向けさせることによって、彼はこの種の先制戦略を用いた<sup>62</sup>。

あなたが長年知っているように、私は私のアクセントに関して公衆の前で即座に使えるジョークを収集してきた。というのは私はコロンビア大学の何らかの公式の代表として私が語る時、人びとがショックを受けることを知っているから。最初の1秒は私がメイフラワーかそれに近いものでは私が出会わなかったジョークをするだろう<sup>63</sup>。

ポールは自分の頻繁の de-rationalizing moments において、計算高い行為であることが分かり切っているのに、自分が計算高い操縦者では全くないと認識していた。彼がコロンビア大学に来る数年前にロバート・リンド宛に書いた手紙に関して彼のメモワールの中で告白している。「今日4頁シングルスペースの手紙を読んでいて、少なくとも私が自分に帰属させたマキアベリズムによって楽しませてもらった (Lazarsfeld *Memoir* op.cit.307.)」。だが、マキアベリについていわれてきていることは、ポールについてもほとんど当てはまる。

彼は良き品性を持ちながら、良くないことを行う。彼は自分の対等者にショックを与え

<sup>62</sup> (大いに成功を取めたわけではないが、少なくとも中クラスに属したであろう) ウィーンの法律家の息子、ポールが自分を永遠に抜けられないアウトサイダーと定義し、彼は私を永遠に抜けられないインサイダーと定義しているのは私には皮肉に思える。35年ほど前『ニューヨーカー』プロフィールが述べたように、私は労働者階級で、東ヨーロッパ出身のユダヤ人移民の子として南フィラデルフィアのスラムに生まれたのに。ポールは我々のコラボレーションに関する彼自身の回顧談を我々二人に対するインタビューに部分的に依拠したよく記録されたドキュメントを引くことによって始めている。Morton Hunt 1961 "Profile: How Does It Come To Be So?" *The New Yorker*; 1月28日, 1961年 pp. 39-63.

<sup>63</sup> David Morrison 1988 "The Transference of Experience and the Impact of Idea: Paul Lazarsfeld and Mass Communication Research." *Communication* 10: 192



るために、自分が実際にそうであるよりももっと悪いと思われたがる。[中略] 彼は自分の場所がかなりいいものを持っているのに、悪い場所に所属しているとみなされることを好んだ (Ridolfi 1963 [1954] 12-13.)。

彼が研究所を単なる調査組織よりも独自の研究共同体として維持するのに重要と考えたポールのマキアベリ的行為、忠誠の持続的強調、de-rationalizationの性向は厄介な個人的帰結と組織的帰結を組織が共有することをもたらした。ポールとの生活は常に興味深くめったに退屈することはなかった。

デーヴィット・シルズが国立科学アカデミーのポールに関するメモワールでそれを要約したように、ラザースフェルドを大学、彼の同僚、彼の教え子、彼のスポンサーとの数多くのトラブルから免れさせるために外交のスキルが呼び出された (Sills 1987 op.cit 271.)。当時もそれから遠く振り返る今でも、それはすべて少しの十分な代価であるように思われる。我々の35年にわたるコラボレーションの間に発生した対人的緊張の源泉で次の3つとほぼ同程度の強さのものは他にはない。研究所でジョイント・ワークに向かう前の早朝時間、私の好みの理論的ワークを制限しなければならなかった永続的感觉。社会調査のプロフェッショナル・スクールのためのグランドプランをねじ曲げた施設の最初の20年間に積極的役割を果たすことによって私が彼を失敗に追いやったというポールの永続的感觉。彼の頻発する困難がここでde-rationalizationとして描写された形式、彼の社会的交流の個人的スタイルに少なからざる部分由来するという我々が否が応でも共有する感觉。

まだ、まだシビアで決して完全に解決されることがなかった緊張も我々の友好関係を壊すことはできなかった。

#### 4. 究極的産物：教え子達

この長い回顧は、ポールと私のコラボレーションのもっとも甚大な産物は活字になった少数の共著を超えていること、我々の互いに対する認知的影響を超えていることをますます納得させることになった。むしろそれは全く別の種類のものである。一世紀以上前にフランスの鉱山技師で独学の社会学者フレデリック・ル・プレイによって巧みに要約されている。私のものに由来する最も重要なことは坑夫である。全く同じ精神で、コロンビア大学の社会学に由来する最も重要なことは弟子達であった。私が述べてきたように、学生の連続的な大きなコホートは第二次世界大戦の終結とそれに続くG.I.Bill(復員兵援護法)のおかげで、1940年代、1950年代のコロンビア社会学の景観を輝かしいものにした。彼らは1960年代、

1970年代の新しい才能の連続的フローを我々にもたらした知的な興奮を生み出すのに多大な貢献をした。学生自身がコロンビア大学を選んだことは、計画されなかった社会的ネットワークを通じて働きながら、社会的・認知的マイクロ環境と第一級の学生下位文化を形成するのを助けた。ジンメルがずっと昔に語ったように、社会的インタラクションは、その参加者はランク、権力、権威の面で決して等しくないが何らかの程度の相互の影響を伴う。これはコロンビア大学でも当てはまった。才能に富む元気に満ちた院生は彼らの各々にそして彼らの教師にも記憶を呼び覚まさせる環境（冷静な観察者はアイデアのバーチャルな騒乱と呼ぶ）を提供した。各コホートは彼らの仲間の学生と教師の双方によって対等な者の間でまず承認された、特に思い出に残る学生の伴走者を持った。学生のこの思い出させる役割に照射するのは、そのマイクロな環境が我々教師がそこにいなかったなら同じではなかったらと語るほど、自覚的に自己否定的で歴史的に無意味だというのではない。

我々のコラボレーションに集中するポール自身の回顧と同様、これは社会学科、応用社会調査研究所の他のメンバーと我々のコラボレーションのを再追跡する努力を一切払わないことを断っておく。しかしながら、年代マップは1941-1970年のある時点の社会学科のシニアフェローを構成する集まりのいくつかの考えを伝える。

#### 4.1 交流、役割モデル、アンビバレンス

長年にわたる数え切れない会話の中で、ポールと私は学生との交流とコラボレーションが彼らと我々との交流に明らかに影響してきたその方法に注目してきた。そしてまた、かつての教え子で卓越した社会学者になったものによる省察に富んだ自伝的考察は、「我々自身の」補完的なコラボレーションという我々自身のモードが時として彼らの社会学観の進化的影響を与えていることに気づかせてくれる。

私が大学院を離れたとき私が社会学に関して抱いていたビジョン。社会学は分水嶺を構成した二つの次元に分裂すべきだ。社会学は分析単位として個人よりもむしろ社会システム（小さなシステムであろうと大きなシステムであろうと）を持つべきだ。しかし社会学は研究者のバイアスに自らを委ね、レプリカに荷担できない、説明への注目、因果性への注目を欠く系統的でない技法の背後に残る計量的方法を使用すべきである。私や当時のコロンビア大学の他の学生達はなぜこのビジョンを持ったのか。それは同じ学科にいただけでなく、共同したり一緒に教えたロバート・マートンとポール・ラザースフェルドのユニークな結びつきがあったからと私は思っている。ラザースフェルドは新しい計量方法によって提供された機会を我々に示した。マートンは我々の目を社会学に

とって中心的な理論的問題に釘付けにした。[そのコラボレーションの意味は他のかつての弟子によって活字で回顧的に様々に表現されている<sup>64</sup>]。彼らのうちの二人がコラボレートできたならきっと我々はこの組み合わせを前進させ、社会学を変貌させることができたことであろう (Coleman 1996 : 345, 1994 : 30-31.)。

コールマンが実際にポールと私のコラボレーションを「対の役割モデル paired role model」らしきものとして体験したのは、おそらくシンボリックに適切であろう。というのは、オクスフォード英語辞書が我々に教えるところでは、役割モデルの用語と概念はコロンビア大学の社会学の伝統に範を取っているから。

しかし学界、学者に適用されたアンビバレンスの社会学理論から我々が予想するように、役割モデルはしばしば混合した感情の対象となる。これは疑いもなくかなりの数の教え子達に当てはまる。そのことはコールマンの別の回顧で把握されている。私が指摘してきたように、コールマンは、ラザースフェルドが重要とみなした広汎な問題に関するポール自身の不屈の取組みとこれらの問題の下位集合に関して彼が様々に他者達を巻き込んだことにアンビバレントな感情を表明している。

これは彼の個人的なスタイルであった。彼は自分が尊敬する聡明な人物（同僚であれ、

<sup>64</sup> コールマンの他のそのような回顧に関して次を参照。

“Paul F. Lazarsfeld : The Substance and Style of His Work.” in R.K. Merton/Matilda White Riley (eds.) 1980 *Sociological Traditions from Generation to Generation*. pp. 153-174.

“Paul F. Lazarsfeld’s Work in Survey Research and Mathematical Sociology.” in Lazarsfeld, 1972 *Qualitative Analysis*. pp. 395-409.

“Robert K. Merton as Teacher” in John Clark et al. 1990 *Robert K. Merton : Consensus and Controversy*. pp. 25-32.

Peter Blau, Seymour Martin Lipset, Philip E. Hammond, Charles Wright と並んで、コールマンはコロンビア大学社会学のミクロな環境についての言葉の肖像を彩った者のひとりに属する。Philip E. Hammond (ed.) 1964 *Sociologists at Work*.

また彼は Dennis Wrong, Nathan Glaser, Alice S. Rossi, Cynthia Fuchs Epstein とともに自伝的考察を提示している。“Columbia at 1950s” in Bennet M. Berger (ed.) 1990 *Authors of Their Own Lives*.

コールマン以外では、Matilda White Riley (ed.) 1988 *Sociological Lives* 所収 Alice S. Rossi, Lewis A. Coser の論考, Hannan C. Selvin 1975 “On Formalizing Theory.” in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. pp. 339-354. 同じ書物所収 Charles R. Wright 1975 “Social Structure and Mass Communications Behavior” の冒頭部分 pp. 379-380.

? (ed.) 1983 *Realizing Social Science Knowledge*. 所収 Paul Neurath “Paul F. Lazarsfeld and the Institutionalization of Empirical Social Research.” pp. 13-26.

Ann K. Pasanella 1994 *The Mind Traveller : A Guide to Paul F. Lazarsfeld’s Communication Research Papers in the Columbia University Library*.

David L. Sills 1987 “Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976 : A Biographical Memoir.” pp. 251-282. in *National Academy of Sciences. Biographical Memoirs*.

David L. Sills 1996 “Stanton, Lazarsfeld, and Merton-Pionner in Communication Research.” in Everette E. Dennis/Ellen Wartella (eds.) *American Communication Research-The Remembered History*. pp. 105-116.

David L. Sills 1968 “Paul F. Lazarsfeld” in David L. Sills (ed.) *International Encyclopedia of the Social Sciences* Vol. 18

教え子であれ)が近くにいることに、そして自分が重要とみなした問題に取り組んでいることに堪えられなかった。彼は自分自身の時間、おべっか、注目を使い、お金を使い、ニューハンプシャー州ハノーバーでの夏を使った。彼はこれをもたらすために彼の利用できるあらゆる誘因を使った。彼の周りの一部のものはこれを嫌ったし、他の者はこれを利用した。彼らはポールの術中にはまったと感じたが、ポールのリーチから離れた途端、喪失感に苛まれたり、途方に暮れた (Coleman 1988 : 167-168)。

コールマンが気づいたように、ポール自身新たに同定した問題を解くことにいつ尽きるとも知れない努力を払うときには学生のものであった。ポールは彼らから学ぶことができると思ったときにはいつでも、彼の教え子の誰にでも (Lee Wiggins, Allen Barton, Elihu Katz, Hanan Selvin, William McPhee) 執拗に質問した。コールマンは続けて彼や仲間の教え子達が体験した不満を描写している。「ポールは自分以外の他者が重要とみなした問題を教え子や同僚が解くのを見ることに満足せず、自分が重要とみなした問題が解かれ、それも彼にわかるような仕方では解かれて初めて満足した (Coleman 1988 : 170)」。

別の回顧談で、コールマンは私に関しても明確なアンビバレントな感情を露わにした。理論的な仕事や系統的な経験的研究とどのように交流するかを明らかにすることによって、彼や彼の仲間の教え子のために私が社会学を「天職 (calling)」に変換してくれたと最大級の賛辞を送っている。しかしまた、真にアンビバレントなスタイルで、私が彼らの渾身の努力を木っ端みじんに批判し、彼らが私の全く不可能な要求に応えられなかったという感覚を持たせ絶望の淵に立たせたと、彼らの体験を語る (Coleman 1990a : 32)。

ポールと私の全く異なったティーチングスタイルは多様な学習好みを持つ教え子達を戸惑わせたことだろう。物理科学、生物科学の実験室の長や研究を組織する一般の長のあいだによく見かける実践のように、ポールは彼らに固有の能力と関心に依じて問題を同定し教え子に割り当てることを好み、リサーチプロジェクトを組織しながら彼らを指導した。上記のすべては彼の開発したリサーチ・プログラムに従っている。彼にとっては、ティーチングの主要モードは一義的には進行中のプロジェクトを進める中でのワークセッションであり、手を取りながら指導するセミナーはその次であった。彼は講義をすることにはハッピーでなかったため、その準備にほとんど時間を割かなかった。対照的に、私は教え子とワークする基本的手段としてのリサーチ・プロジェクトに熱心ではなかった。私のティーチングの好みの順位はまず講義で、次にセミナーで、とりわけ彼らの草稿を彼らとともにワークすることであった。内容と形式のエディティングは一部の院生には明らかに不満を抱かせたが他の院生には好まれたやり方であった。

コラボレーションの年月に姿をとって現れた我々の他の違いに関しては、ポールと私は我々が異なった教え方をそれぞれが好むことを確認しようと努めた。これを基本的には我々是不定期に開かれた合同セミナーで確認した。そのセミナーは「社会学理論とリサーチ方法の関係における精選された問題」と題した。その内容的よりは形式的なタイトルは、我々が相手方が目下行っているリサーチを独自の視点から批判的に考察し、時に拡張するための豊かな余地を与えた。この合同の「口頭発表」は一度だけ活字に載る術を見いだしたことがあったが、それは教え子達ののちの回顧から判断すると、一部の院生にとって、別々の講義、学生リサーチの個別指導と並んで、その意図した機能を果たしていた (Lazarsfeld/ Merton 1954: 18-66.)。リップセットのコロンビア大学の学科の歴史についての初期の断章は「ラザースフェルドとマートンは彼らの異なる力点 (一方は経験的リサーチの方向, 他方はシステムテックな社会学理論の開発の方向) は実際には沢山の方法論と理論の合意を隠していたことを観察している。つまり両者はシステムテックな社会学理論に由来する仮説をテストし、増やすことに使用しうるツールの開発に関心があった (Lipset 1955: 297-298.)」。ブラウもまた回想している。「当時のコロンビア大学の雰囲気は我々院生の大半が共有していた思いこみ (社会理論家というものはシステムテックな経験的考察に関心がない) を破壊する傾向があった。理論とリサーチを統合したいという私の新しい関心は、私をラザースフェルドが提供する講義とリサーチ方法に関するセミナーのすべてを受講させ、官僚制についての経験的考察を行う決心するように動機づけた (Blau 1964: 17-18.)」。

#### 4.2 才能あふれた教え子のフロー

様々な交流モードにも拘わらず、教え子達はポールと私の長年の会話が彼らを中心にしていたことが大きな範囲を占めていたことを知るよしもない。教え子の資質、関心、可能性を診断しようとして我々は彼らのかなりの数が社会学のスカラシップに消えない痕跡を残したことをほとんど疑わなかった。もちろん彼らの多くはそれを残した。

これが紙面に限られたペーパーでなく詳細なモノグラフであったなら、私はこの 30 年間の卒業生の完全な名簿をリストすることによって、才能あふれた教え子の連続の流れの感覚を伝えることができよう。代わりにせいぜい認知的貢献の不完全な指標を提供する *peer esteem* を検証する二つの非常に制約のあるリストに限定する。ひとつはアメリカ社会学会によって提供されたリスト (会長に選出された者のリスト) である。彼らの最初の者が選出された 1973 年から現在 (1996)<sup>65</sup> まで 7 名で、それは 23 名の約 3 分 1 にあたる (Peter Blau,

<sup>65</sup> 本稿は 1941 年に始まるコラボレーションに焦点を置き、50 歳以前に ASA の会長に選出された者はほとんどいないので、最初のコロンビア大学卒業生がその象徴的ポストに選出されたこの年から数

James S. Coleman, Lewis A. Coser, Mirra Komarovsky, Seymour Martin Lipset, Peter H. Rossi, Alice S. Rossi)。これは peer esteem をかなりよく表すものである。

記念論文集として知られる名誉な書物は卒業生に peer が与えた承認のもう一つの指標である。記念論文集は比較的まれにかつての師と年配の peer に敬意を込めて、かつての教え子と成熟した peer によって捧げられることがある。だが次第に生き延びた教師がかつての教え子に敬意を表して寄稿することが増えている。私は Peter M. Blau, Lewis A. Coser, Rose Laub Coser, Seymour Martin Lipset, Franco Ferrarotti の記念論文集に寄稿し、James S. Coleman, Alvin W. Gouldner, Louis Schneider の追悼論文集に寄稿している。最近数十年に到来し続けることになる贈られる教え子が膨大なることを鑑みれば、今後の記念論文集は私はあの世にいることだろう。

しかしもちろん上記の二つの正確な指標はポールと私がコロンビア大学で教えたほぼ3分の1世紀の間に通過した教え子のなかの前もって定められた有名人の豊富さを示す端緒に過ぎない。詳細な研究はチャールズ・クロザーズによって集められたデータベースの分析を待たねばならない。しかしながら、彼の試験的データ分析は人が想像したとおり、我々の長期の滞在がこの間に完成されたほぼ300本の博士論文のかなりの比率を合同か個別で指導したことを検証している<sup>66</sup>。

これらの博士論文に立ち戻ると、私はどうしてもバーナード・ベレルソンによって実施された学生とアメリカ博士論文スポンサーの関係の研究（それは応用社会調査研究所の所長となる直前のもの）を思い出さないわけにはいかない<sup>67</sup>。大学院教員の全国サンプルと最近の博士号取得者を引きながら、ベレルソンは a collective Rashomon effect 集団の羅生門効果に類似したものを発見した。「あなたの経験では、大半の博士論文のトピックは実際はどのようにして選択されているのか」の質問の回答。約2,300名の新しい Ph.D のなかで、約2,000名の教員のたった8%と対照的に、46%強は、院生がトピックを選択し、Ph.D の39%と教員の68%は院生とスポンサーが合同でトピックを選択し、スポンサーがトピックを選択したのは、Ph.D の21%、教員の15%であった。博士論文のトピック選択の社会的知覚のはっきりとした違いと対照的に、教員と近年の Ph.D は博士論文の実際の作業におけるスポンサーの役割に関する質問への回答で、「密接で継続的な監督指導」と答えた者が Ph.D の32%、教員の27%、「監督指導はほどほどで、ねらいは十分」と答えた者が Ph.D の50%、教員の58%、「監督指導はほとんどないか不十分」と答えた者が Ph.D の5%、教員の13%であった

---

え始めることにする。

<sup>66</sup> Charles Crothers *The Columbia Sociological Tradition*, Unpublished data-set.

<sup>67</sup> Bernard Berelson 1960 *Graduate Education in the United States*.

彼が研究所所長であったのは1961-62の2年間であった。

(Berelson 1960: 178-179.)。

私が今ベレルソンタイプのサーベイに含まれるなら、私は幾分自信を持って、我々の全く共通点のないスタイルと合致して、ポールは彼がスポンサーする博士論文の大半に主題と問題を割り当て、私がスポンサーする博士論文のトピックと問題はスポンサーと院生の合同で選択するか院生自身に選択させると回答するだろう。それから徹底的に自分に独りよがりなスタイルで、選択的な記憶の通常の気まぐれに従って、私は主張するだろう。我々は二人とも我々が別々に監督指導した、ならびに合同で監督指導した博士論文の大半に細密で密接なあるいは少なくとも十分な指導を与えたと。疑いもなく時折過剰な指導をしたと。しかしベレルソンの研究が私に思い出させるように、すべてはかつての教え子自身によって独自に確認されることを必要とする主張に過ぎないことを。

いずれにしても、ポールと私は院生が中心であったことに疑いを持たない。彼らの後年において社会学という学問自体を前進させたことを指摘するのは我々にとって幸せなことである。そのすべては我々に30年の感謝で古い手をさしのべてくれた。隣接社会科学のもう一つの古い手はそれを次のように語っている。「アカデミックな生活における最大の喜びのひとつは、自分より年下の大物が成長し我々の仲間に進化するのを見ることである。それから、何より良いのは、あなたが自身の転換期にしえたように、あなたを飛び越えていく掌中の仲間をまれに見ることである」。以前にも何度か語ったかも知れないが、私のそんなに親しくはない同僚である Paul A. Samuelson は我々以外の者達のためにもう一度語っている。確かにポールと私は、我々二人の間のおよそあり得ないと思われたコラボレーションが教え子と同僚とのコラボレーションの広がり発展し始めたのを見て無上の喜びを感じている。

## 5. 結び

ポールと私の間の感情的、認知的緊張についての上記の再収集の中で私は多くのことを行ってきた。これらは他の豊富な公開記録の一部でなかっただけに途方もなくそうであった。その力点がミスリードにおかれなければならぬ、私はもう一度述べなければならない。対人危機として我々が体験したことはすぐに適応的和解が後続した。私はひとつのエピソードを思い出す。ポールがレイモン・ブードンと共著の一冊、『社会科学の語彙（仏版）』<sup>68</sup>の初版の一冊を私に献本した時にリルケのメッセージを添え書きしていた<sup>69</sup>。ポールの判読しにくいペン

<sup>68</sup> Paul F. Lazarsfeld/Raymond Boudon (eds.) 1966 *Le Vocabulaire des Sciences Sociales: Concepts et Indics*. Paris: Mouton.

<sup>69</sup> Rilke *Die Sonette an Orpheus*.

Hans Zeisel 1979 "The Vienna Years" p. 15 でリルケはポールと我々のお気に入りの詩であると語って

字よりむしろすぐに判読できるタイプ字で示すと

私の知らないあなたに、あなたの知らない私から捧げる  
ポールからボブへ

いくらか躊躇してから、私は長年にわたる我々のコラボレーションの基底にある友好関係を伝えるポールによるリルケの引用に私の即座の応答をしたためた。もちろんオリジナルは手書きであったが、判読のためにタイプ字で記す。

親愛なる ポール

ちょうど届いたばかりの『社会調査の言語の仏版』は仏版の表現をはるかにしのぐものである。それは実際は新しい書物だ。新しい論文のいくつか (Maucorps 論文と Moscovici 論文) は想像力に富み、説得力がある。素人の本制作者としてわたしはこの書物の美しさを賞賛できる。3巻が出版されるとその内容形式の面でああなたの永遠の記憶に残るものとなる。あなたは自分が幸せでない振りをしてはいけない。私がドイツ語でリルケを味わうことができず貧弱な英訳に頼らざるを得ないものの、献辞は多くを語っているので、私も献辞を付け加えることができる。

それまでお互いを全く知らなかったのに、今ではお互いを頼りにしている

ボブ

ポールの献辞を受け取った時に、私は詩人ハンス・エゴン・ホルシューセンが『オルフェスへの恋詩 (ソネット)』の一節を読んだ次の文章が心に浮かんだ。「かくしてリルケは我々の状況を描写した。それは秘密のコミュニケーションモードがコミュニオンの源泉となる状況である。リルケが言おうとしたように、関係が形成されるのはそのような秘密のコミュニケーションにおいてである」<sup>70</sup>。

## 文献一覧

Barton, Allen H. 1982 “Paul F. Lazarsfeld and the Invention of the University Institute for Applied

---

いる。

<sup>70</sup> Hans Egon Holthusen 1952 *Rainer Maria Rilke : A Study of His Later Poetry*. Cambridge : Bowes & Bowes. p. 8



- Social Research.” in B. Holzner/ J. Nehnevajsa (eds.) *Organizing for Social Research*. Cambridge, M : Schenkman pp. 17-83.
- Berelson, Bernard** 1960 *Graduate Education in the United States*. New York : McGraw-Hill.
- Berlin, Isaiah** 1953 *The Hedgehog and the Fox : An essay on Tolstoy's view of history*. London
- Blau, Peter M.** 1964 “The Research Process in the Study of *The Dynamics of Bureaucracy*.” in P.E. Hammond (ed.) *Sociologists at Work* : New York : Basic Books. pp. 6-49.
- Boudon, Raymond** 1970 “A propos d'un livre imaginaire : Preface to Paul F.Lazarsfeld, *Philosophie des Sciences Sociales*” Paris : Gallimard.
- (ed.) 1993 *Paul F. Lazarsfeld on Social Research and its Language*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Buxton, William/Stephen Turner** 1992 “From Education to Expertise : Sociology as a Profession.” in T.C. Halliday/M. Janowitz (eds.) *Sociology and Its Publics*. Chicago : Univ. of Chicago Press. pp. 373-403.
- Carnap, Rudolf** 1937 “Logic” in R. Carnap *Factors Determining Human Behavior* Factors Determining Human Behavior pp. 107-118. Cambridge : Harvard Univ. Press.
- 1936, 1937 “Testability and Meaning” *Philosophy of Science*. 3 : 420-471, 4 : 2-40.
- Coleman, James S.** 1972 “Paul F. Lazarsfeld's Work in Survey Research and Mathematical Sociology.” in Lazarsfeld, *Qualitative Analysis*. Boston : Allyn & Bacon. pp. 395-409.
- 1980 “Paul F.Lazarsfeld : The Substance and Style of His Work.” in Robert K. Merton/ Matilda White Riley (eds.) *Sociological Traditions from Generation to Generation : Glimpse of the American Experience*. Norwood, N.J. : Ablex Publishing Corpe. pp. 153-174.
- 1990a “Robert K. Merton as Teacher” in John Clark et al. *Robert K. Merton : Consensus and Controversy*. London : Farmer Press. pp. 25-32.
- 1990b “Columbia at 50's” in B.M. Berger (ed.) *Authors of Their Own Lives*. Berkley : Univ. of California Press. pp. 75-103.
- 1994 “A Vision for Sociology” *Society* 32 : 29-34.reprinted in Jon Clark (ed.) 1996 *James Coleman*. London : Falmer Press. pp. 343-349.
- Coser, Lewis A./Robert Nisbet** 1975 “Merton and the Contemporary Mind.” in L.A. Coser (ed.) *The Idea of Social Structure : Paper in Honor of Robert K. Merton*. New York : Harcourt Brace. pp. 3-10.
- Crothers, Charles** 1994 *The Columbia Sociological Tradition*, Unpublished data-set.
- Durkheim, Emile** [1897] 1951 *Suicide*. New York : The Free Press.
- Etzkowitz, Henry** 1993 “Redesigning ‘Solomon's House’ : The University, and the Internationalization of Science and Business.” in E. Crawford/T. Shinn/S. Sörin (eds.) *Denationalizing Science : the Contexts of International Scientific Practice*. Dordrecht : Kluwer. pp. 263-288.
- Glock, Charles Y.** 1978 : “Organizational Innovation for Social Science Research” R.K. Merton/ James S. Coleman/Peter Rossi (eds.) *Qualitative and Quantitative Social Research : Paper in Honor of Paul F. Lazarsfeld*. New York : The Free Press. pp. 23-36.
- Granovetter, Mark S.** 1971 “The Strength of Weak Ties.” *American Journal of Sociology* 78 : 1360-1380.
- 1974 *Getting a Job : A Study of Contracts and Careers*. Cambridge : Harvard Univ. Press.
- Holton, Gerald** 1995 “On the Vienna Circle in Exile : An Eyewitness Report” in W. Depauli-Schimanowitch et al. (eds.) *The Foundational Debate*. pp. 269-292.
- Hyman, Harold M.** 1986 *American Singularity : The 1787 Northwest Ordinance, the 1862 Homestead and Morrill Acts.and the 1944 G.I. Bill* Athens. Ga : The Univ. of Georgia Pess. pp. 420-445.
- Jahoda, Marie** 1969 “The Migration of Psychoanalysis : Its Inpact on American Psychology.” in Donald Fleming/Bernard Bailyn (eds.) *The Intellectual Migration : Europe and America*,

- 1930-1960. Cambridge : Harvard Univ. Press. pp. 420-45.
- 1979 “PFL : Hedgehog or Fox ?” in R.K. Merton/James S. Coleman/ Peter Rossi (eds.) *Qualitative and Quantitative Social Research : Paper in Honor of Paul F. Lazarsfeld*. New York : The Free Press. pp. 3-9.
- Kendall, Parricia L.** (ed.) 1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* New York : Columbia Univ. Press.
- Kendall, Parricia L./Robert K. Merton** 1946 “The Focussed Interview.” *American Journal of Sociology* 51 : 541-557.
- Landau, David/Paul F. Lazarsfeld** 1980 “Adolphe Quetlet.” *International Encyclopedia of Social Sciences*. Vol. 13 pp. 247-257.
- Lazarsfeld, Paul F.** 1931 *Jugend und Beruf : Kritik und Material*. Jena : Gustav Fischer.
- 1950 “The Logical and Mathematical Foundation of Latent Structure Analysis. (ch.10)”
- 1950 “The Interpretation and Computation of Some Latent Structure. (ch.11)” in Samuel Stouffer et al. (eds.) *Measurement and Prediction vol.4 of Studies in Social Psychology in World War II*. Princeton Univ. Press.
- 1959 “Methodological Problems in Empirical Social Research.” in *Transactions of the Fourth World Congress of Sociology*. reprinted in Boudon (ed.) 1993. pp. 235-254.
- 1959 “Problems in Methodology.” in R.K. Merton/Leonard Broom//Leonard S. Cottrell (eds.) *Sociology Today : Problems and Prospects*. New York : Basic Books. pp. 218-254.
- 1961 “Notes on the History of Quantification in Sociology.” *Isis* 52 : 277-333. reprinted in Patricia L. Kendall (ed.) 1982 *The Varied Sociology of Paul F. Lazarsfeld* New York : Columbia Univ. Press. pp. 97-167.
- 1962 “The Sociology of Empirical Social Research.” *American Sociological Review* 27 : 757-767.
- 1962 Introduction to Samuel Stouffer *Social Research to Test Ideas* New York : The Free Press. pp. xv-xxi.
- 1966 “Concept Formation and Measurement in the Behavioral Sciences : Some Historical Observations.” in Gordon J. Drenzo (ed.) *Concepts, Theory and Explanation in the Behavioral Sciences*. New York : Random House. pp. 144-202.
- 1968 “An Episode in the History of Social Research : A Memoir.” in *Perspectives in American History*. pp. 270-337. → 1969 “An Episode in the History of Social Research : A Memoir.” in Donald Fleming/Bernard Bailyn (eds.) *The Intellectual Migration : Europe and America, 1930-1960*. Cambridge : Harvard Univ. Press. pp. 270-337.
- 1972 “Professional School for Training in Social Research” reprinted in *Qualitative Analysis*. Boston : Allyn & Bacon. pp.361-391.
- 1975 “Working with Merton” in L.A. Coser (ed.) *The Idea of Social Structure : Paper in Honor of Robert K.Merton*. New York : Harcourt Brace. pp. 35-66.
- Lazarsfeld, Paul F/ Robert K. Merton** 1954 “Friendship as a Social Process : A Substantive and Methodological Analysis.” in M. Berger/ T. Abell (eds.) *Freedom and Control in Modern Society*. NY. Van Nostrand pp. 8-66.
- Lipset, Seymour M.** 1955 “The Department of Sociology.” in R. Gordon Hoxie et al. *A History of the Faculty of Political Science. Columbia University*. pp. 284-303.
- Merton, Robert K.** 1938 *Science, Technology and Society Seventeenth-Century England*. St. Catherine Press.
- 1945 “Sociological Theory.” *American Journal of Sociology* 50 : 462-473.
- 1979 “Remembering Paul Lazarsfeld” in R.K. Merton/J.S. Coleman/P.H. Rossi (eds) *Qualitative and Quantative Social Research : Papers in Honor of Paul F. Lazarsfeld*. New York : The Free Press. pp. 19-22.

- 1985 “George Sarton : Episodic Recollections by an Unruly Apprentice.” *Isis* 76 : 470-486.
- 1987 “Three Fragments From a Sociologist’s Notebooks” *Annual Review of Sociology*. 13 : 1-28.
- 1994 “Durkheim’s *Division of Labor in Society* : A Sexagenarian Postscript.” *Sociological Forum* 9 : 27-35.
- Merton, Robert K./Marjorie Fiske/Patricia L. Kendall** 1956 *The Focussed Interview : A Manual of Problems and Procedures*. New York : The Free Press.
- Merton, Robert K./Paul F. Lazarsfeld** (eds.) 1950 *Continuities in Social Research : Studies in the Scope and Method of “The American Soldier”*. New York : The Free Press.
- Morrison, David** 1988 “The Transference of Experience and the Impact of Idea : Paul Lazarsfeld and Mass Communication Research.” *Communication* 10 : 185-209.
- Myrdal, Gunnar** 1944 *An American Dilemma* vol. 1 New York : Harper & Brothers.
- Neurath, Marie/Robert S. Cohen** (eds.) 1973 *Empiricism and Sociology : With a Selection of Biographical Sketches*. D. Reidel Publishing Company.
- Neurath, Paul** 1983 “Paul F. Lazarsfeld and the Institutionalization of Empirical Social Research.” in B. Holzner/K.D. Knorr/H. Strasser (ed.) *Realizing Social Science Knowledge*. pp. 13-26. Wien : Physica-Verlag.
- 1995 “Otto Neurath : Leben und Werk.” *Enzyklopadie und Utopie*. vol. 30
- Neurath, Paul /Elisabeth Neurath** (eds.) 1994 *Otto Neurath oder Die Einheit mit Wissenschaft und Gesellschaft*.
- Pasanella, Ann K.** 1994 *The Mind Traveller : A Guide to Paul F. Lazarsfeld’s Communication Research Papers in the Columbia University Library*.
- Popper, Karl** 1976 *Unended Quest : An Intellectual Autobiography*. La Salle, IL : Open Court Publishing.
- Ridolfi, Roberto** 1963 [1954] *The Life of Niccolo Machiavelli*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Sarton, George** 1935 “Preface to Volume 22 (Quetelet)” *Isis* vol. 23 : 4-24.
- Selvin, Hannan** C1975 “On Formalizing Theory.” in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 339-354.
- Sills, David L** 1980 “Paul F. Lazarsfeld” in David L.Sills (ed.) *International Encyclopedia of the Social Sciences* Vol. 18 pp. 411-427.
- 1987 “Paul F. Lazarsfeld, 1901-1976 : A Biographical Memoir.” in National Academy of Science, *Biographical Memoirs*. Washington : The National Academy Press. pp. 251-282.
- 1996 “Stanton, Lazarsfeld, and Merton-Pioneers in Communication Research.” in Everette E. Dennis/Ellen Wartella (eds) *American Communication Research-The Remembered History*. Mahwah, N.J. : Lawrence Erlbaum Associates. pp. 105-116.
- Simon, Herbert** 1991 *Models of My Life*. New York : Basic Books.
- Simpson, G.E.** 1931 “Negro News in the White Newspapers of Philadelphia.” *Publication of the American Sociological Society*. 25 (2) : 157-159.
- 1936 *The Negro in the Philadelphia* Philadelphia : Univ. of Pennsylvania Press
- Stouffer, Samuel A./Paul F. Lazarsfeld** 1937 “Research Memorandum on the Family in the Depression.” *Social Science Council Bulletin* 29.
- Stouffer, Samuel A. et al.** 1949-50. *Studies in Social Psychology in World War II*. 4 vols.
- Thackray, Arnold** 1984 “CASBS : Notes Toward a History.” *Annual Report* Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences. pp. 59-71.
- 1987 “A Site for CASBS : East or West ?” *Annual Report* pp. 63-71.
- Walzar, Michael** 1986 “Introduction” in Berlin *The Hedgehog and the Fox*. New York : Simon & Schuster.

- Wright, Charles R. 1975 “Social Structure and Mass Communications Behavior” in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 379-413.
- Zeisel, Hans [1933] 1960 “Zur Feschichte der Soziographie.” in Marie Jahoda/Paul F. Lazarsfeld/Zeisel, Hans. *Die Arbeitslosen von Marienthal*. S.101-138. American edition, 1971 *Marienthal : The Sociography of an Unemployed Community* pp. 99-125.
- 1979 “The Vienna Years” in Lewis Coser (ed.) *The Idea of Social Structure*. New York : Harcourt Brace. pp. 10-15.

### 【訳者あとがき】

訳出したのは、Jacques Lautman/ Bernard-Pierre Lécuyer (eds.) 1998 *Paul Lazarsfeld (1901-1976)*. *La sociologie de Vienne à New York*. L'Harmattan pp. 163-253 所収 Robert K. Merton 著 *Working with Lazarsfeld : Notes and Contexts*. である。訳出論文が含まれる著書は 1994 年 12 月 15-17 日にパリ・ソルボンヌ大学 GEMAS(社会的分析方法研究集団)とレイモン・ブードン共催の「ポール・ラザースフェルド・コロキウム」で報告された発表原稿を編んだものである。

本論文の存在を知ったのは、Christian Fleck/Nico Stehr (eds.) 2011 *Paul Lazarsfeld : An Empirical Theory of Action* The Bardwell Press. 所収 編者序論 注 40 を通じてである。

マートンがこの報告をしたときは、85 歳である。そのため調べ物について、妻の Harriet Zuckerman, 息子のノーベル経済学賞受賞者 Robert C. Merton, ラザースフェルドの伝記執筆者 David L. Sills, それと Stephen M. Stigler の助けを借りたこと、最も困難な執筆は Dianna Trilling の協力を得たことを論文の最初の脚注で断り書きしている。マートンはこの論文の刊行を眼にして亡くなっている (2003 年 93 歳)。

コロンビア大学社会学科はマートンとラザースフェルドの共同指導によって、1950 年代、60 年代ハーヴァード大学社会関係学科と並んで、後世に名を残す傑出した社会学者を多数輩出した。第二次大戦後から絶頂期にかけての時期のアメリカ社会学会会長の大半をマートン、ラザースフェルドの弟子とパーソンズの弟子が寡占したのであった。

ところで、マートンがこのテーマで書こうとしたのは、長年の懸案を解決したいという意図が働いていたのである。ラザースフェルドは、コーザー編集のマートンに捧げる論文集 (1975 年) に、35 年にわたってコラボレートしてコロンビア学派を形成した相棒に「マートンとともに仕事をして」という長文 (32 頁) を寄稿している。ラザースフェルドが死去する 1 年前である。それに対して 1979 年に出版されたラザースフェルドの弟子コールマンとピーター・ロッシが編集した、ラザースフェルド追悼論文集 (1979 年) には、わずか 4 頁のマートンの寄稿文「ラザースフェルドの思い出」が載っているだけである。訳出論文の中

で、当時マートンは体調を崩して入院していて、調べたり執筆に十分な時間をとれなかったことを、心残りにしていたこと、その引き延ばされた宿題を果たすべく取りかかったことを告白している。

ラザースフェルドのマートン評はマートンが存命の時に執筆していたものだけに、外交辞令的で、マートンをほめ、内面をあまり吐露していない印象が否めない。それに対して、訳出したマートンのラザースフェルド評は、ラザースフェルドが死去して 20 年経過しているので、ラザースフェルドが耳にすれば怒り出しかねないようなことも率直に語っている。しかし訳者の感想は、思いの外両者は仲が良く、マートンにとってラザースフェルドはいろいろ押しつける迷惑な人ではあったが、自分にないものを持ち、彼と出会わなかったら自分が発揮できなかった才能を引き出してくれた恩人として感謝していることが読み取れる好印象のものである。ハーヴァード大学社会関係学科が、せっかく社会調査のエキスパート、サムエル・スタウファーを採用しながら、コロンビア大学のように理論と調査の統合がうまくいかず、理論のパーソンズが優勢になってしまった経緯を、マートンは自分たちのようにどうしていかなかったのかという点から触れている。

弟子によるラザースフェルド評の箇所、50 年代にラザースフェルドとマートンの両方に師事したジェームズ・コールマンの論文を利用し、弟子の視線からみたラザースフェルド評を盛り込んでいる。院生の眼には、ラザースフェルドは人目もはばからず、自分たちに質問する師、研究費を取ってきて仕事に協力させるブローカー、院生に慕われるよりも、共同執筆と研究費という餌で弟子をつなぎ止める人と受け取られていたこと、ラザースフェルドと喧嘩別れして去っていった弟子が少なくなかったことなど、ラザースフェルドの実像が知れる。

ところで話題が変わるが、最近ラザースフェルド・ルネサンスの観があるが、その舞台回しをしているのは実はレイモン・ブードンである\*。彼はシカゴ大学社会学遺産シリーズの一卷に『ラザースフェルド：社会調査とその言語 (1993)』を編集し、その出版の翌年にパリ・ソルボンヌ大学で「ラザースフェルド・コロキウム (1994)」を開催している。そのコロキアムの報告が編集されて出版されたのが訳出論文を含む本書である。ブードンがフランス社会学者の中では、フランス的でなくアメリカ的といわれるのは、50 年代にコロンビア大学

---

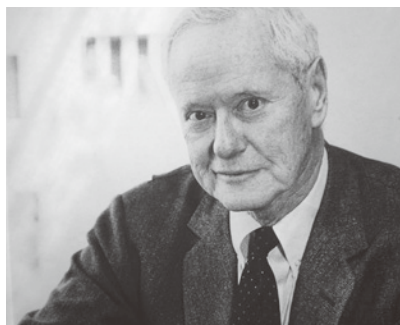
\* ブードン編のリーディングスと並んで、前記のフレック、ステール共編のリーディングスもラザースフェルド・ルネサンスに寄与している。最近のラザースフェルドへの熱い注目を受けて、北田暁大がラザースフェルドを再評価する論文「社会学にとってアメリカ化とは何か：ポール・ラザースフェルドとアメリカ社会学」を発表している（『現代思想』青土社 2014：12 月号）。彼の言によれば、ラザースフェルドのアメリカ社会学史における位置づけを知りたいと思ったが、そのような先行研究がないので、自分で調べてまとめたとのことである（対談「社会学はどこから来て、どこへ行くのか？」『書齋の窓』有斐閣 2015：7 月号）。

に留学したことが大きい。留学当時コロンビアにいたコールマンとも親しくなった。ブードンは2006年にチェルカウイとハミルトンが編集したブードンに捧げる論文集の寄稿「自分はどうして社会学者になったか」のなかで、『教育機会の不平等』の著者としてしか自分が評価されないことに不満を述べている。20世紀後半の仏社会学の代表者にピエール・ブルデューの名は上がるのに自分はどうして上がらないのか、不満を漏らしている。そういえば、その時期の代表的社会学者に、マートンの名は上がるのに、ラザースフェルドの名もあがらない。そのような状況に一矢を報いたいという気持ちがラザースフェルド・ルネサンスにブードンを駆り立てたのであろうか。

それにしても、パーソンズは同じハーヴァードの社会関係学科の同僚、ソローキン、ホームズ、スタウファーと犬猿の仲であった。いずれも癖のある人物だけにパーソンズひとりを責められない。マートンは極貧の東欧移民の子の出自ながら、たぐいまれな彼の才能を見抜く人びととの数々の幸運な出会いに恵まれ、行く先々でかわいがられる人付き合いのうまさや身を付けていた。変わり者のラザースフェルドとも、マートンだったからこそうまくやれたという感想を訳者は抱いている。

なお、原文は注が番号を付して100までであるが、訳文では、出典表示は本文中に移したため、原文と訳文の番号が一致しないこと、文献一覧は、注に記載されているものを基に訳者が作成したもので、原文には載っていないこと、原文脚注に示された文献表示に編者名、書名、出版社、掲載頁の記載が不備なものがあつたが、注では不備をそのままにし、文献一覧で補足しておいたことを断っておく。応用社会調査研究所歴代所長と在任期間、コロンビア大学社会学科1941-1970の大学院担当教員の名前と在任期間、ラザースフェルドからマートン宛の直筆メモと、献本添え書きの複写も省略した。

情報満載なのに、意外と存在が知られていないこの論文が、論集に掲載を機に日本の社会学者の注目を浴びることは必至であると確信していることを述べて擲筆することとしたい。



ロバート・マートン



ポール・ラザースフェルド

平成 27 年度 東北学院大学学術研究会評議員名簿

会 長	松本 宣郎
評 議 員 長	小宮 友根
編 集 委 員 長	小宮 友根
評 議 員	
文 学 部	[英] 植松 靖夫 (編集)
	[総] 佐々木勝彦 (編集)
	[歴] 熊谷 公男 (会計)
経 済 学 部	[経] 舟島 義人 (編集)
	[経] 白鳥 圭志 (編集)
	[共] 小宮 友根 (評議員長・編集委員長)
経 営 学 部	矢口 義教 (編集)
	小池 和彰 (会計)
	折橋 伸哉 (編集)
法 学 部	岡田 康夫 (庶務)
	白井 培嗣 (編集)
	大窪 誠 (編集)
教 養 学 部	[人] 前田 明伸 (編集)
	[言] 伊藤 春樹 (庶務)
	[情] 上之郷高志 (編集)
	[地] 柳井 雅也 (編集)

東北学院大学教養学部論集 第 172 号

2015 年 12 月 4 日 印刷  
2015 年 12 月 9 日 発行 (非売品)

編集兼発行人 小 宮 友 根  
印 刷 者 笹 氣 義 幸  
印 刷 所 笹氣出版印刷株式会社  
発 行 所 東北学院大学学術研究会  
〒980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
(東北学院大学内)

---

---

# FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 172

December, 2015

---

---

## CONTENTS

### Articles

- The Impact of High-Involvement HRM Systems on Firm Performance  
..... KOBAYASHI Yutaka..... 1
- Ludwig Hohl „Die Notizen“ lesen 1) Denken ..... YOSHIMUCHI Senji..... 25
- Generative, Cognitive or Some Other Model? ..... TAKAHASHI Naohiko..... 75

### Study Notes

- How Should English Be Learned, and Why?  
—— A Lecture for English Learners —— ..... WATANABE Tomoko..... 95
- On the Rupture Mechanism of Nylon Rope by Thermal Effects  
..... TAKAHASHI Koichi..... 109

### Translation

- Robert K. Merton. Working with Lazarsfeld. Notes and Contexts  
..... KUJI Toshitake..... 131